

[1] ノーゲーム・ノー
ライフの世界にチート
転生者がきたようです

型破 優位

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ある日、神様の手違いで死んでしまった少年

中田 佑馬（なかた ゆうま）は

チート特典とともに、

ノーゲーム・ノーライフの世界へと転生した。

これは、新たなる神話のお話。

出来るだけ多くの人から意見や感想が欲しいので、どなたでも感想が書けるよう設定してあります。

是非ともお願いします

最初の書き方も分からなかった新人時代と、現在のある程度書き方が決まってきたり、
るもののギャップをお楽しみ頂ければ幸いです。

恐らく30話後半あたりだと思えますが……

目次

プロローグ	1
次期国王選出編	
チート転生者がきたようです	9
集いの酒場	18
出会いと試合(ゲーム)	31
王族の血筋	52
二人の王とその親友	62
天翼種編	
ステフの1日 前編	81
ステフの1日 後編	91
神殺しとは	104

具象化しりとり	115
我がマスター	134
楽園の誓い	144
獣耳っ子	160
獣人種編	
空間転移	172
愚王と理解者と異端者	189
宣戦布告	202
勝利への1ピース	219
「」	228
味方と敵と	256
二人の時間	268
開戦、vs 獣人種	279

ラブ・オア・ラベツド2 前編

301

ラブ・オア・ラベツド2 中編

315

ラブ・オア・ラベツド2 後編

333

静かな一時

351

神霊種連合成編

神になりし者

362

アヴァント・ Heim 攻略 前編

373

アヴァント・ Heim 攻略 中編

384

アヴァント・ Heim 攻略 後編

393

エルヴン・ガルド攻略

408

久しぶりの再開

422

オーシエンド攻略 前編

434

オーシエンド攻略 中編

443

オーシエンド攻略 後編

453

神霊種編

迫る決戦

462

佑馬の作戦

472

ゲーム参加

482

記憶

490

再開の強者達

502

大戦の英雄たち	512
嵌められた「」	523
加速する策略	531
吸血種の脅威	541
動き出す策略	548
想い	558
過去の最強と今の最強	569
激闘の末に	578
天変地異	589
交わる策略	598

プロローグ

「……何処だ？」

俺は気がついたら辺りが真つ白な空間となっていた。

「なんだ、夢か？」

そう思つて辺りを見回してみる。

………

そこには、土下座している爺さんがいた……

「本っ当に申し訳ない!!!」

はあ……？

「まず、わしは神じゃ。そなたはわしの手違いにより、死んでしまったのじゃ。」

いや、ちよつとまで、

この爺さんは今なんて言った？

俺が死んだだと？

今現在こうやって生きてるではないか。

あー、変な夢見てしまった。

早くさめな「夢じゃないぞ」いかなあ。

「何ナチュラルに人の心読んでるのさ。」

「そりゃ、神じゃからのお。」

ふむ。一回冷静になつてみるか。

「爺さんは神（笑）なんだよな？」

「自称ではなく、間違ひなく神じゃ。」

「どうでもいい。いくつか質問させて貰うぞ。」

「う、うむ。」

「俺は死んだのか？」

「こちらの手違いでな。」

「ここは何処だ？」

「所謂、転生の間じゃな。」

転生の間……？

つまりこれは2次小説とかで出てくる例のあれかな？

「その通りじゃ。」

「んじゃあ、なんで俺は死んだんだ？」

「実は……」

神説明中

「つまり、爺さんが本を読んでたら寝落ちして、その本が頭に落ちてきてペツシャンコ、ということか?」

「本当に申し訳ない!!!」

「少し時間をください。」

さて、頭の中を確認しよう。

ここは、転生の間

目の前には土下座している自称 神

俺は死んだ

死因 本による圧死

いくらなんでも死因がネタじゃね???

「いや、その、本当に……」

「もういいから、頭上げてください。転生の間ということは、転生ができるんですよ？」

そう、冷静に考えたら、ここは転生の間。

つまり、転生できるということになる！

あ、やべ、楽しくなってきたかも

「すまぬ。そうじゃ、そなたには悪いことをしたからの。転生させようという結論に至ったのじゃ。」

おお！キタコレエ！

「転生先とかは決まっていますか？」

「そなたが決めて良いぞ、特典も特別に3つまで付けよう。」

おお、これは面白いことになってきたぞ！

「そう思ってくれているならこちらも少しは楽になるのお。」

「じゃあ、転生先は「ノーゲーム・ノーライフ」の世界で」

「ゲームで全てが決まるあのアニメじゃな？」

「そうです。爺さんも知っているんですね。」

「そうじゃが、爺さんはやめい。わしは少なくとも神じゃぞ。」

「俺、殺されたんですけどね。」

「痛いところついてくるのお…。」

「冗談です。特典言ってもいいですか？」

「よし、ドンとくるがよい」

「1つ目 身体能力を限界まで強化してください。」

「限界どころか、限界突破させるぞい。」

「ありがとうございます。2つ目に、とあるシリーズの一方通行（アクセラレータ）をく

ださい。レベルは妹達編の一方通行で。」

「了解じゃ、あと1つはなにかの？」

「最後に、NARUTOの写輪眼をください。」

「ふむ、中々のチートになったのお。」

チート上等、楽しいじゃねえか！

「まあ、よいか、今すぐ転生するかの？」

「そうだな、すぐ転生させて貰うよ。」

やばい、楽しみだ！

死んで良かったのかもしれない！

あれ、そういうえば、この爺さん何の神なんだろ。

「ところで、爺さんは何の神なんだ？」

「ん？わしか？わしは全知全能神「ゼウス」じゃ。」

な．．．ん．．．だ．．．と．．．

「ビックリしたかの？」

ああ、声も出ねえよ。

こんなに楽しいのは初めてだ。

「楽しんでるとこ悪いが、そろそろ転生しようかの。」

「OK。」

「時間は」「が異世界に呼ばれた約3時間後じゃからな。唯一神にマークされるかもしれないが、そのときにゲームで勝つたれ。」

「おう！いろいろありがとな！」「ゼウス」様！

「こちらのせいでもあるしな、存分に楽しんでこい。一応わしとは念話ができるようにしといたからの。何かききたいことがあったらいつでも聞くが良い。」

「分かった。それでは転生させてくれ！」

「了解じゃ、それではいくぞい。」

ん、なんか嫌な予感。

あれ、そういえばこういうのって・・・

キュウイン

足元に大きな穴が現れた。

「やっぱりこれかあああああああああああ……！！」
こうして、一人の少年が転生した。
このとき、叫びながらも佐馬の口は吊り上がっていた。

次期国王選出編

チート転生者がきたようです

昔々の、更に大昔。

神霊種（オールドデウス）は、唯一神の覇権をかけ、永遠に等しい時間を争っていたらしい。

その戦争に勝った神、「遊戯の神」が全てゲームで決まる世界、「盤上の世界」（デイスボード）と十の盟約というものを作った

十の盟約

- 一つ この世界におけるあらゆる殺傷、戦争、略奪を禁ずる
- 二つ 争いは全てゲームによる勝敗で解決するものとする
- 三つ ゲームには、相互が対等と判断したものを賭けて行われる
- 四つ ”三”に反しない限り、ゲーム内容、賭けるものは一切を問わない
- 五つ ゲーム内容は、挑まれたほうが決定権を有する
- 六つ ”盟約に誓って”行われた賭けは、絶対遵守される
- 七つ 集団における争いは、全権代理者をたてるものとする

八つ ゲーム中の不正発覚は、敗北と見なす

九つ 以上をもって神の名のもと絶対不変のルールとする。

十 みんななかよくプレイしましょう

というものだ。

ところで、佑馬はというと…

「うわあああああああああああああああああああああ
絶賛紐無しバンジー中だった・・・
!!!」

「あああああ！地面が近づいてるううううううううううう！
あ、これ詰んだかも♪」

と、感じた佑馬はきたるだろう衝撃をその身に託して、目を閉じた。

あれ・・・

「つて、盟約によつて守られてるんじゃないやねえええかあああああああ!!」
原作知識をすっかりと忘れていたのである。

まあ、だつて、しょうがないじゃん？

いきなり紐無しバンジーさせられたら、

そりゃ転生する前は普通の高校生だったんだから、

パニツクになつたりするよ！

あ、そういえば。

「特典の確認をしてみるか。」

「そうだな、まずは・・・」

「身体能力かな」

「軽く跳んでみる・・・」

あれー、木が下に見えるぞー☆

「やべえ・・・ここまでは思ってた」「やあ」君は・・・まさか!」

「おや? 僕のことを知っているのかい?」

「ああ、当たり前だろ、「唯一神」テト。」

「本当に知っているとは思わなかったよー。」

「やばい! いきなり来たぞ原作キャラ!」

興奮してきたああああ!

「なんか楽しそうだね、ところで、僕から一つ質問してもいいかなあ? ☆」

「ああ、いいぜ?」

その瞬間……

「君は……何者だい？」

比喩でもなんでもなく、空気が重くなった。

普通の人間なら耐えられないほどの圧力、

いや、この世界の大半の生物は何かしらの反応を起こしてしまうほどの圧倒的質量。

それが目の前の少年から放たれていた。

しかし、それは大半の生物の話である。

いくら神とはいえ、それは「遊戯の神」

「全知全能神」と話していたばかりの佑馬からしてみれば

「んー、唯の人間？」

そよ風以下である。

「何故に疑問系？」

「まあ、いいじゃねえか、「遊戯の神」様。俺もこの世界で遊びたいんだよ！勿論、あん

たを倒すためにね?」

「ふふふ。面白い人だね♪いいよ、僕はあそこで待つてる☆君を歓迎するよ♪」

「おう、楽しみにしてろ!」

その言葉を聞いたテトは満足そうに消えた。

「やっぱり、面白れえ!この世界は最高だよ!」

佑馬は口元を吊り上げてそう言った。

唯一神 side

「いやあ、面白い子がきたねえ。」クスクス

あの子も「」に負けない素質の持ち主、

早くゲームがしたいなあ。

そう考えながら、テトは一冊の本を取り出した。

「そうだねえ、まずは・・・」

そう言いながらペンを走らせた

異世界からある二人のゲーマーと「二人の少年」が降り立った
全てはこの時はじまった。

集いの酒場

さて、こんな噂を聞いたことはあるだろうか。

280を越えるゲームのオンラインランキングで、

不倒の記録を打ち立て、

世界ランクの頂点を総ナメにしているプレイヤー名が

”空欄”のゲーマーがいる、と。

曰く、無敵。

曰く、グランドマスターすら破ったチェスのプログラムを完封した。

曰く、ツールアシスト、チートコードを使っても負かされた。

最強のゲーマー「」の話。

三人称 s i d e

ルーシア大陸、エルキア王国

首都 エルキア

人類種（イマニテイ）最後の国。

そんな都市の少し外れた郊外。

酒場を兼ねている宿屋という場所で

二人の少女がテーブルを挟みゲームをしている。

一人は赤い髪の毛の仕草や服装から裕福な家庭で育つたと感じられる少女

もう一人は、赤い少女と同一年ほどの、だが大人の雰囲気ただよう黒髪の少女

行われているのは

ポーカーだ。

その勝負が行われている酒場の外。

テラス席のテーブルに座り、窓から中を覗きこむ

フード姿の人影があった。

そのフードの人影の口が開いて……

「 side

「白がなにか言うと思った？ 思った？ 残念空でしたあ！」

「にい……メタイ……」

「おっとすまんよ妹よ、にしても、なんか盛り上がってるなあ」

「あ？ 知らないのか。あんたら異国人……ってわけないか。人間の異国なんてもうねえし。」

対面して現在ゲームをしている中年の男が言ってきた。

異国はないのか、なるほど。。。

「あー。田舎から出てきたところだな、都会の事情に詳しくはないんだわ。」

そう答えた青年の言葉に、訝しげに中年の男が答える。

「人類種に残されてる領土で田舎って・・・それはもう世捨人じゃねーか。」

「はは、そうだな。で、こりや何の騒ぎ？」

「今、エルキアでは「次期国王選出」の大ギャンブル大会が行われてんだよ。」

「次期国王・・・選出？」

「おうよ。前国王の遺言でな」

曰く、この国王選出というのは、人類最強のゲーマーをみつけるものらしい。

立候補は人類種なら誰でもよく、最後まで勝ち残った奴が国王ってことらしい。

ん、一人おかしな奴がいるな。

パシヤリ

「で、兄ちゃん、そんな余所見しててもいいのかい？」

そう言つて、サツとオープンするカードは

フルハウス

勝ちを確信した中年の男は、にやりと笑う。

「え？あー、うん、すまん、そうだったな。」

そういつて無造作に出した、

その瞬間、男が目を見開いた。

「ロ、ロイヤルストレートフラッシュだあ!!?」

そう、最強の手札、ロイヤルストレートフラッシュ。

男が立ち上がり、吠える

「て、てめえ、イカサマじゃねえかつ!？」

その様子を見て、空はヘラヘラと笑いながら、

「おいおい、失敬な…。何を根拠に?」

と言い、立ち上がる。

そしてそのまま「賭けた」ものを頂いた。

「にい．．．ズルい」

突如妹の白が言ってきた。

「あんな、わかりやすいイカサマ．．．わざと、使った」
そう、男の言ったとおり、イカサマは使った。
しかし、

十の盟約

八つ ゲーム中の不正発覚は、敗北とみなす。

つまり、ゲーム中に発覚しなければいいと。

「発覚させしなきゃ使ってもいいわけだ。確認出来たのはいいことだろ」
「ところで、にい．．．こつちのお金、わかる？」

妹の質問も当然だ、俺もわからん。

でも、なんの問題もない。

「いや、わからんけど、まあ、任せろ、こういうのは兄ちゃんの領分だ。」
そう言って、酒場の中へ入っていった。

盛り上がっているテーブルを余所目に、カウンターへ向かった。

「なあ。これで二人一部屋、ベッドは一つでいい。何泊できるよ?」

俺がそう言うと、マスターらしき人はチラリと一瞥

こいつ……何か探したな……?

「……一泊食事付きだな。」

ビンゴ。声のトーンや視線もおかしい。

ここが出るか。

「あはは、あのさあ、五徹して死ぬほど歩いて疲れてんだよね。『本当は何泊』かさつ

さと教えてくれない？貨幣の価値もわからない田舎者と勝手に思うのはいいけど、声のトーンと視線には気を付けなよ？」

そう言うと、マスター？は舌打ちをしながら

「ちつ。二泊だよ」

と言った。

かかった。。。ニヤリ

「ほらまた嘘つくー、じゃあ、間とって十泊三食付きで手を打とうぜ」

「なつ、なんの間をとった!？わ、わかった、三泊食z」

結局

「ほれ、四泊取り付けてやったぞ。お兄様を崇め奉り・・・」

四泊も付けたのだった。

それよりも、

「白、どうした？」

そうきくと、

「あの人・・・負ける」

と、赤毛の人を指しながら言った。

そりやそうだろうと思ってみていたが、

黒い髪の少女の手札に違和感を感じた。

「うわあ、マジか。この世界のイカサマこえー」

そう、魔法の使用である。

そんなこんなで、三階へ向かう途中、

すれ違いざまに、気まぐれで呟いてみた。

「おたく、イカサマされてるよ?」

「・・・・・・へ?」

そのまま階段をあがっていく。

後ろから視線を感じるのは気のせいではないだろう。

そのまま三階へと歩いていく途中、
一人の男が立っていた。

無視して通りすぎようとしたとき、
思わず振り返ってしまった。
彼のボソツとした一言

「盟約の確認はできたかい？空白さん」
この言葉に。

出会いと試合（ゲーム）

佑馬 side

「盟約の確認は終わったかい？空白さん」

そう言ってみた、

つまりは原作介入というやつである。

このドキドキ感がたまらんねえ！やばい！

楽しいな！オイ！

え、なんで俺がここにいるかって、

そりゃ

未来予知（原作知識） さ！

場所はだいたいわかってたし、写輪眼発動させて、人がたくさんいる酒場にきたらここについた！

いやあ、原作知識様だねえ。

と、そんなことより、

「イカサマは使えて安心したかな？あの技術は素晴らしいものがあるねえ。」

とりあえず、煽ってみる。

実際みてないし、原作知識にもどうやったのか書いてないから、技術と誤魔化すしかない。

当然、向こうが見逃すはずもなく…:

「技術？なんのことだ？俺らはただ運がよかつただけだ。」

当然の返し、

先手を打っておくか。

「これ以上用がないのなら」「先に言っとくが、俺は君らが異世界人でどういう人間かを知っている。」……」

その言葉にピクリと反応する二人、楽しいね。

そんなこんながあり、

現在空白の宿。

とりあえずそこで、空白の元の世界の戦績を言ってみたら、同じ世界からきたことに納得してくれた。

本当は転生したんだけどね。

そのときにその世界への愚痴も忘れずに言っておいたぞ。
そうすることにより、より馴染めるのだ！

はっはー、原作知識様様だなほんと！

でも、やっぱりこの二人と対峙したらさ……

「どうした？ 佑馬」

「……ゆうま？」

ちやつかり名前を覚えてたりする

「俺と、
ゲームしない？」

やはり、これである。

そこからの話は早かった、

ゲームはポーカー

勝っても負けてもノーリスクノーリターン

ルールの抜け道を作らないように、徹底した。

ディーラーは俺。

試したいことがあるからだ。

本気で勝ちに行きますか…

写輪眼!!!

その瞬間、空気が変わったのに気づいた空白。
その眼をみた二人は、驚愕に染まっていた。

当然である、

某忍者アニメの魔眼を持っているのだから。

そして、

「なるほど、面白い。」 「」として、相手しよう。」

「絶対に・・・勝つ！」

そう言いながら不敵に笑う空と白。

やっぱり、いいねえ。

思わず口が吊り上がってしまう。

「それじゃあ、いくぜっ」

シャツフルをする。

できるだけ細かく、とにかくきる。

ここからさらに”イザナギ”を使って、場所を交換。

少し眼が痙攣気味に動く。

失明とかの心配はないが、初めて使ったのが仇となったようだ。
そして配る。

自分にはストレートフラッシュユが

「 」にはフルハウスがいくように。

そして、手札をみて白の眼が見開いた瞬間、

「ダウト」

不意に声をあげる空。

「どうした?」

気丈を保つが、バレたか内心汗だらだらなの佑馬。
そこで空が口を開いた。

「イカサマしただろ?」

そう、ばれた。

しかし、根拠も証拠もない。

ならば当然、

「なんのことだ?俺はただシャツフルしただけだ。」

と言うだけである。

空は少し考えるようなしぐさをしたあと、
勝ち誇ったような顔をしながら、こう言った。

「佑馬、イザナギ使っただろ？」

何故バレた！

おかしい、恐らく眼のことはバレている。

そこは誤魔化せない。

いやしかし、何故イザナギに行き着く。

失明もしてないし、変わったところも何も・・・

そこで1つの答えにたどり着いた。

ここまでに約1，5秒

そう、彼にはアクセラレータの演算能力がある。

故に、この答えにたどり着く時間もこんなに早かった。

それを知る由もないにも関わらず、待ってたかのように、

「そう、眼の痙攣に近い現象だ。」

と、目だけは笑わずにそう言ってきた。

やっぱり、敵わねえな。

そう思いながらも、口は吊り上がってしまふ。

目の前でみると、やっぱりすごい。

固定概念、常識を即座に捨て、考えられる柔軟な思考。

心を読まれていると錯覚されるようなほどの

完璧なまでのタイミング。

もはや清々しいほどの負けである。

だが……

「ああ、ここらまで当てたんだ。敗けを認めるよ。でも、なんでわかったんだ？」

そう、なんでわかったのかが、わからないのである。

「ああ、それなら簡単だよ。」

と、今度はしつかりと笑いながら言った。

簡単……？それはどういうことだろう……

アクセラレータの演算能力を駆使しても思い付かない。

それをまた待ってたかのように空は言う

「わからないなら言おう。まず、その眼、写輪眼だろ？」

「ああ。」

「さすがはファンタジーと言いたいところだが、お前は俺らと同じ世界から来たんだよな。その話はまた後で聞きたいのだが、俺らと同じ世界から来たのなら、その眼がどういうものか知ってるよな？」

この眼がどういうものかって？

そりや、うちはが使う魔眼ですべての力を見極める……

いや、違う。もつと根本的なものだ。

「アニメのものか。なるほどな。」

「そう、そういうこと。そして、白は一度覚えたら忘れない。その白が把握していたカー

ドと配られたカードが違った。そうしてそのような幻を見せるのは幻術。普通の幻術なら眼は異常はないはず。しかし、佑馬の眼は痙攣に近い症状が起きていた。それくらい力を持つもの、それは「イザナギ」以外考えられなかった。」なるほど。

白はそういえば完全記憶能力に近いものを持っていたなあつと原作知識から引つ張り出す。

それにしても、

素晴らしいまでの観察眼と、推察力、信頼感系だ。

これが「」

これが主人公。

これが 最強

面白い！これは本当に面白い！

佑馬は内心そう叫び、口を吊り上げながら、

「まあ、これからもよろしくな。そして、次は絶対勝つ！」
そう意気込んだ。

「ところで、なんで写輪眼もってるんだ？」

あ…

そのあと質問攻めにされたのは言うまでもない。

数時間後

二人はいつの間にか寝ていた。
ついさきほどまで続いた質問をなんとかかわしきり、
そろそろ寝ようかとしたとき、

コンコン

そのノックの音を聞いて、再び口が吊り上がる佐馬だった。

王族の血筋

佑馬 side

コンコン

控えめなノック音がなった。

そう、ついにきたのである、

(リアルステフとのご対面！キタアアアアア！)

「んー、誰か来たのかあ？佑馬、悪いが出てくれー。」

眠そうに空が呟いてる。

「わかったよ」

少し嫌そうに言ってしまったが、内心喜んでいたりしたのはまた別の話。

再び、ノック音が鳴る。

「はーい、どちらさまでしょうか？」

side out

———
少し遡って
———

ステフ side

今私はある理由で昼の青年の部屋の前にいる。

そう、昼にイカサマされていると言ってきたことについてだ。

店のマスターにきいたところ、落ち込みながら

「一番奥、左の部屋だ」

と教えてくれた。

なんで落ち込んでいるのか気になったが、

人の心配をするほど自分にも余裕はなかった。

とりあえず、ノックしてみる。

コンコン

・・・・・・・・・・・・・・・・？

出ない：：？

もう一回

コンコン

ガチャ

やっと出てきた。

「はい、どちらさままででしょうか？」

「ステファニー・ドーラというm・・・」

出てきたのは見知らぬイケメンだった。

「ごめんなさい、間違えましたわ。」

そう言って、部屋を後にした。

あのマスターめ。

あんなイケメンの部屋に案内してくれるのは嬉しいし、
本来なら少しお話するくらいの余裕はあっただろう。

そう、本来なら・・・

「昼の件で話があるのかな？」

不意にかけられた言葉にビックリしてしまった。

しかも、話しかけてきたのが

昼の青年ではなく、先ほど会ったばかりのイケメンだった。

s i d e o u t

佑馬 s i d e

あ、なんかナチュラルに戻っていった。

当たり前か、全く面識のない人が出てきたのだから。

こちらも本来ならそのまま夢の中へ直行するのだが、

その”本来なら”というのがそもそも違う。

つまりは、

「昼の件で話しがあるのかな？」

未来予知（原作知識）であつた。

「そうですが、何故そのことを知っているんですの？」

そりや当然、

「本人から話きいてたからね。」

未来予知（原作知識）と言えるわけない。

「立ち話もなんだし、中に入りなよ。」

「失礼します。」

そして、空を起こす。

ここは原作通り行って貰おう。

というわけで。

「空、昼の件で客だ。俺は寝る。後は頼んだ。」
「あ、ああ、貴女か。」

「んじゃあ、おやすみい。」

そういつて、その後起きることを考えながら、眠りについた。

途中変な音や声が聞こえたが、気にしないことにしよう。

翌日

朝日が差し込み、目が覚めた。

今は何時ぐらいだろうか、と思い見てみる。

5時30分

ん、まて、何かがおかしい。

．．．．．
なんで太陽が西から出てるんだ？

(なあ、爺さん)

(なんじゃ?)

これは念話、好意でつけてもらったものだ。

(この世界太陽は西から出てくるのか?)

(何言つとんじゃ? 太陽はどここの世界も東からじゃぞ。)

なるほど、つまり今は

「夕方じゃねええええかあああああああああ！」

それが意味すること即ち、

次期国王選出終了と、二人のゲーマーが王様になった
ということだ。

二人の王とその親友

次期国王選出は終了した

そして、王を巡って最強のゲーマー二人がゲームを始めて2日数時間が経過したとき、

ある一人の青年が、エルキア城に歩みを向けていた。

その男は、中田 佑馬。

しかし、彼はこの世界の住人ではない。

つまり、転生者なのだ。

そんな彼は今、

「あ、
ちよーちよー」

「しつこいぞ、白……いい加減……負けを認めろ……」

「……にい、こそ、負けを、認める、の……」

「ふふふふふふふふふふふ。ハッ！私がこのようなことではいk」

幻覚を見ている少女

ステファニー・ドーラ

二日前からゲームを始めて現在の戦績

500戦158勝158敗184分

空と白

いきなり笑いだしたと思ったら正気を戻し、

またいきなり笑いだすという奇行を繰り返す高官。

つまりは、カオスだった。

「なあ、おまえらなにやってんの？」

「何って、王を決めるゲームだよ……」

「……に、早く、敗けるの……」

「おまえこそ、早く諦めろ。」

それでもまだゲームを続ける二人。

あと少ししたら空が気づくとは思うが、

あえて爆弾を落としてみよう！

「なんで王が一人じゃないとダメなんだ？ 盟約には何も書いてないぞ」

その瞬間

エルキアの時間が止まった……

かくして、後に
悪魔の三日
と呼ばれる激闘は、幕を閉じた。

その後、空と白改め

国王と女王の戴冠式が始まった。

長いので要約しよう。

人類は弱い。

愚かだ。

臆病だ。

だが……

いや、だからこそその誰にも負けない知恵がある！

我らは弱者だ！

強者であることにあぐらをかいた者の喉元を食いちぎってきた、誇り高き弱者だ！

さあ、ゲームを始めよう！

反撃の狼煙をあげろ！

我らの国境線、返してもらおうぞ！

つまり、全世界へ宣戦布告したのだ。

え？楽しすぎだつて？

なんのこともかさっぱりだなあ。汗

エルキア城、大議堂

今ここには、数人の大臣、ステフ、二人の王

そして

その親友、中田 佑馬がいた。

「なんで貴方がここにいるんですのおおおおお！」
最近王二人にコキ使われていたステフに、

余裕と言うものはない。

「え、空と白がここにいてもいいよーって」

な？つと空と白を見る佑馬

「ああ、なんの問題もないだろ」

ステフの胃痛が酷くなったのは言うまでもない。

「そんなことより、始めるぞ。」

おもむろに空が口を開く

「皆も知つての通り、今の人類種は窮地にたたさされている。攻勢に打って出る以上、背後を気にしている余裕はない。ここで後願の憂いを断つため、ジャンケンを行う。」

広げた手をかざす。

「賭けるのは」以後、一切の虚偽報告、また、情報の選択的・恣意的伝達も嘘とみなしこ

の一切を禁止する」旨。”盟約に誓って”ゲームをわざと行いわざと負けて貰う”
つまり、八百長だ。

「では、皆の者。我々の双肩に人類種の命運がかかっていることを肝に銘じ、ジャンケンを行う。俺はチョキ、全員はパーを出し、わざと負けて忠誠の証とせよ。なお、我々兄妹の観察力、記憶力を侮って、八百長を受け入れず契約を拒否するものは、今のうちに退出を勧める。」

間近で見ると、やっぱりすごいものだと思馬は思う。

この短時間にしては穴のない徹底されたルール。
だが、しかし。

「それではいっく「ちよつと待ってくれ」どうした思馬」
「そのルールに、「このジャンケンを受けてないものから」盟約に誓って”ゲームをして
も、その権利を剥奪することはできない」を追加しろ。」
なるほど、つと考える空。

そう、未来予知（原作知識）がある佑馬には

獣人種のとときにこの盟約が仇となることを知っているのだ。

それ故のこのルール。

「なるほど、助かった。今佑馬から聞いた通り、そのルールも適用させてもらう。それではいくぞ。」盟約に誓って」

「「「「」」盟約に誓って」「「「「」」

「では、まずは農業大臣から報告を」

「はい、わが国の食r」

4時間の会議が終わるころ、

大臣をして、「人類史最高の賢王」

と囁かれるほどにまでなった。

「にしても、よくさっきのあのルール思い付いたな」
不意に声をかけてきた空。

その声には感心したといった感情があつた。

「ルールは徹底的に、だからな。」

そう不敵にわらう佑馬

その部屋に・・・

「ソラ・・・じゃない、陛下・・・お客さまですわ。」

「おまえ、その格好で接客したのか。勇者だな。」

「・・・ステフ、すごい」

はだけたメイド服をきたステフがいた……………

(実際みると、涙を誘う光景だな。)

心のなかで手を合わせる佑馬と、走り去る少女がいたそうなの。

ソレハソレトシテ

閑話休題

「あははは、中々楽しいことになってるみたいだね」

空と白、ステフ、佑馬、そして、大臣が揃った大議堂に、コツコツと歩いてくる少年。

空と白、佑馬は見覚えのある少年がいた。

「よお、自称神様じゃん。どったの?」

そっか、空と白はまだ知らないんだっけ

「自称じゃなく、紛れもなく神様なんだけど。」

と頭をかく少年。

頭のなかであの爺さんと重なったことは気のせいだろう。

「そういえば、まだ君たちには名乗ってなかったね。」

そして……

「テト」それが僕の名前さ。よろしくね」「さん？」
空気が一気に変わった。

空と白、佑馬を除く全員の毛穴から汗がぶわつと溢れ出す。
ステフにいたっては、泣き出しそうだった。

そんなことはお構い無しにテトは言う。

「どうかな、僕の世界。気に入ってくれたかな？」

「ああ、中々いいセンスしてるよ。」

「……くくく」

「ほんと、こいつらといると飽きないしな」

軽口を叩く空と白、佑馬

って…

「佑馬こいつ知ってるの？」

と、空から疑問の聲が上がる。

まあ、当然だろ。

「まあ、ちよつとね。」

「あはは、それより、とりあえず人類種の存亡危機は回避したようだね」

「ああ、望み通りな」

「俺は寝過ぎしたかな。」

皆が空の言葉に、え？つとなる。

佑馬は軽くスルーされたようだ。

「たまたま一番近くにあった街が、たまたま人類の最後の国で、たまたま国王決定戦をしていた……なんて野暮なこと、言わないよね？」

「あはは……でも、勘違いしないで。僕は基本傍観主義だよ
ん、今こうやって聞くとなんかツンデレっぽいな」

「僕はツンデレじゃない！」

あ、声に出してたのか、めんごめんご。

「まあ、いいや、それより」「さんは気づいたかな？」全てがゲームで決まる世界
そして”十六種族”

「なるほど、「唯一神」の座もゲームできまるわけか」

「うん、そのための”十六種族”なのにさあ。」

あはは、と笑うテトに、

「なあ、神様、笑ってていいの？」

不適に空が言い出した。

「お前、一度俺らに負けてんの忘れてね？」

そのとき、佑馬以外（気がついたら蚊帳の外）の傍観者が耳を疑った。

神が、負けた？

ここにいて、ただの人間に？

「ふふ、十分理解しているようだけど、この世界における”ゲーム”は、君たちの世界のネットチエスとは次元が違うよ？僕は確かに”普通のチエス”には負けた。だからこそ、君たちをここへ呼んだ。次は勝つためにね。」

そして、そこで兄妹と佑馬が笑っていた。

「神様さ・・・」

「テトでいいよ、なあに？」

「じゃあ、テト。おまえさ、負けたことなかっただろ。」

「遊戯の神が、初めて負けた。それが悔しくて、俺らをこっちに呼んだってわけか。」

「その通りだよ。やっぱり君たちは面白いね。」 「さん。」

そう楽しそうに笑うテト。

そして

「そして君もね？中田 佑馬君。」

そこにはいびきをかいて寝ている青年がいた。

いつの間に寝たんだ。。。

「本当に面白いね、君も。」

そう、神が人間に負けたと知っても驚くことがなかった。

それほどゲームの腕があるのかと思ったテトは満足げに、

「やっぱり君たちを呼んで正解だったよー！」

そう言い残し、姿を消した。

驚かなかったのは、未来予知（原作知識）で知っていたからだということも露知らず。

そのあと、空と白が質問攻めにあつたのは
言うまでもない。

「ケーキおいしいー。」

ちなみに一人、ケーキを食べてる夢を見ている青年が、その場にいたらしいが、誰も
が存在を忘れていたのだった。

天翼種編

ステフの1日 前編

首都エルキア、その王城の廊下におぼつかない足取りで歩く一人の赤毛の少女
ステファニー・ドーラ

先王の孫にあたる由緒正しき家柄の高貴な少女。

・・・なのだが・・・

眼下のクマに重い足取りが示す色濃い疲労。

そのおかげで気品などどこにも感じず、トランプを手に持ち、フラフラしながら「王」
の寝室へと向かう姿は正に幽鬼となっていた。

ステフ side

「ふふふ・・・今日こそ天罰のときですわ」

昇った朝日に徹夜明けの意識を刈り取られそうになりながら、不穩に笑った。「ソラ、起きてますわよねっ！もう朝ですわよっ！」

ドゴンドゴン

と、トランプを持つ手の代わりに、扉を足でノックもとい、キックして「王」を呼び捨てにするステフ。

だが、

ガチャ

「おー、おはようステフ。あいつらならまだ寝てるぞー？」

出てきたのは佑馬だった。

「あら、佑馬。おはようございますわ。」

彼から名前で呼び捨てで呼んでくれと言われたのでそう呼ぶステフ。

彼がこの城の何処にしようと思える人は気がついたらいなくなふるほど、自然に溶け込んでしまっている。

コミュニケーションなら私も自信はあるが、

彼のこれは異常だと思う。

閑話休題

「なら、入らせてもらいますわよ？」

どうぞどうぞ、と

腹を抱えて笑いを堪えるのに必死な様子の佑馬。

「？」

何かと思いながらもとりあえずソラを起こしに行く。

そこには寝ているソラがいた。

．．．．

ソラだけが。

「ソラ、起きなさい！朝ですわよ！」

そう言いながら足で軽く蹴る。

「う、うーん。」

そういいながら手探りで何かを探すソラ。

そして数秒は経っただろうか．．．．

ガバツ！

と、いきなり起きてあたりを不審者よろしくなほど見回す。

そして、私の姿を見つけた瞬間・・・

「すみませんでした許してください蹴らないでください本当にごめんなさい」

と、頭を抱えて全力で謝るソラがいた。
その哀れさたるや、涙を誘うに足る様で、プルプルと震えていた。
だが、この光景には実は見覚えがある。

次期国王選出戦に負けた日

そのとき、ゲームで負けたり、そのまま変態二人に襲われたりした。

そのときに起きた下半身の生理現象、そして、そこを妹にながされるまま捲ろうとするソラ。

当然

「ひつきやあああああああああ！」

ソラを全力で蹴飛ばした。

「うわっ」と！

スカートを捲るために膝たちだったソラ。

なんとか倒れまいと堪えるも、そのままバランスを崩して

ゴッ

と、鈍い音が頭と扉からなる。

そしてそのまま倒れて扉が開き、廊下まで倒れたときに

キィィィ

と戻るソラ。

そこで我に返った。

自分の一突きがソラを宿の廊下まで突き飛ばしたことに。

胸をしめつけられるような感覚と、強い不安感を抱きながら、慌ててドアをあけて廊下に出た……が、

そこにソラはいなかった。

よく見てみると、廊下の隅で頭を抱えて震えていた。

「なっ！」

白に説明を求めようと部屋を覗くと・・・

プルプルプルプルプルプルプルプルプルプルプルプルプルプルプル
ベッドの上で震える白がいた。

現在

周りを見渡すステフ。

そこであることに気がつく。

「ソラ、一人ですの?」

「はい独りですロンリーです生きる意味を失いましたきつと生まれてきたのが間違いだっただんですすみませんご退出頂いた後静かに首をト・・・にい、うるさい」

息継ぎもなくまくしたてる「王」空に、無気力な非難が上がる。

その正体のため息ひとつ。

「なんだ、シロもいるじゃないですの。なにをしているんですの?」

「・・・え?」

その指摘に、ハッ!とシロの方を向く空。

そこには、ベット脇からむくりと起き上がるシロがいた。

side out

佑馬 side

ぶぶぶぶぶぶぶぶぶぶぶぶぶぶぶ

廊下で腹を抱えながらなんとか笑いを堪えている佑馬。

「あの、震えかた、面白すぎ、ぶっ!w」

今回のこの騒動の主犯、中田 佑馬。

このことを何故知っていたのか、言うまでもないだろう。

部屋では、白と空が二人仲良く泣きながら抱き合っていた。

「さて、そろそろかな」

そういいながら、部屋に戻った佑馬。

誰も彼が仕掛けた悪戯だと気づくはずもなかった。

その後、王の寝室は木の小屋になったというのは別の話。

ステフの1日 後編

ステフ side

皆さんこんにちは、ステフ・・・じゃなくてステファニー・ドーラですわ。

私は今ソラ、シロ、佑馬と街を歩いていたんですの。

そう、歩いていたはずなのだが・・・

今私は柱にリードをくくりつけられて、一人放置されていた。

何故こうなったか、

まず、犬になった理由から。

朝ブラックジャックで負けて、「おまえ、今日一日犬な」という超適当な要求をされたのだ。

え、そんな描写なんてなかった……？

そうだったっけな……汗

「とぼけても無駄ですわああああ！現にこうやって犬になったじゃないですよ！」
な……人間の感知能力を凌駕しただと……！

「そんなことどうでもいいですわ！早くあの暴君とあの鬼畜を探しに行かないと、何をやらかすかわかりませんわ！」

ステフがそういうのも無理はない。

それは、先程していた会話にあった。

side out

三人称side

今のエルキアは、農業改革、工業改革、金融改革などとしてきてなんとか持つてはいるが、所詮は一時凌ぎ。

領土を返して貰う以外にないのだ。

ただ、何処を攻めたのがいいものかがわからない。

そのとき、ステフは回りの視線に耐えかねていた。

「ソ、ソラ。し、視線が痛いんですのよ。」

そう抗議するステフに、空は違和感を覚える。

「・・・ん？なんか皆の視線、おかしくないか？」

「こんなカツコさせてたら当然ですわよ!？」

「いや、そうじゃなくて・・・なんか、怯えた眼してないか？」

そう、その微妙な違和感とは、コスプレしているステフを笑うような目ではなく、どちらかといえば、空たちを奇異の目のことだ。

「エルキアの王が獣人種のカツコをさせた人を連れてたら当然ですわよ。」

・・・なに？

「待て、今、なんつった？」

「エルキアの王が、こんなことさせたら誰だって「違う!そこじゃない!」・・・。」

「そこじゃなくてな、犬耳としっぽをつけているステフの姿が・・・獣人種・・・だと？」

「十六種族」位階序列・十四位 「獣人種」

世界第三位の大国「東部連合」を最大の領土とする種族であるが、情報が少なく、極めて優れた身体性能と五感を持っていて、心さえ読むという第六感と呼ばれる感覚を有

すると言われているが……

「ステフ、可及的速やかに回答を求む。」

「は？な、なんですかの？」

「獣人種つてのは、今のステフみたいに、獣耳としっぽのある女の子がいるのか」

「何故女の子と限定するかは理解しかねますわね、でも」

いる……というか、とステフ。

「獣人種の女性体は、ほぼ全員そうですわよ？」

「つまり……なんだ、「東部連合」という国は……」ゴクリ

「人間のおにやのことほぼ変わらない容姿で、獣耳と尻尾、あと肉球とヒゲくらいまではある、そんなアルティメツツにプリティなアニメーで女性人口が埋め尽くされた、楽園（エデン）のような国がこの世界にはあるというのか！」

「筋肉マツチヨの爺もいるけどな……ボソツ」

今のはきかなかったことにした。

「よし、それだその楽園は俺のもんだ獣耳つ子達を征服しにいく！今！なう！」

いきなり世界第三位の大国に喧嘩を売ると言い出した”乱心の王”

「ちよ、何を言い出しているんですの！まだ国内もあな」「ええい、黙りたまえ！国土と獣耳つ子が手にはいるんだ！個人的欲望と国家の利益にガツチリ噛み合った神の計画

（パーフェクトプラン）に難癖つけて我が波動を阻むとは何様かねキミイツ!?」・・・はあ、もうダメですね・・・」

「東部連合ってどっちだ！あっちか！直接乗り込むぞ馬車を呼べ！」

一人暴走する空。

その暴走は・・・

「情報」

シロと佑馬の一言により、自称・神の計画（笑）とともに容易く瓦解した。

「やっぱり、手にいれるしかないか……」
そう呟く空。

「え、何をですの?」

「何って、天翼種（フリーユージェル）だけど。場所がわからないんだよな。」

「それなら、近場にいたはずだぞ。」

佑馬の言葉に、なに!と反応する空。

「エルキア図書館だ。先代の王がその天翼種を対価に賭けて負けたときから住み着いてるらしいぞ。」

その一言に意識が遠退きそうになる空。

「何知識賭けてんだよ…… 唯一の武器だぞ……!」

「なら、取り返しにかね?」

「そうだな、そうするか。こちらにも餌はあるしな。」

「……賛成。」

「よし、思い立ったが吉日!今いくぞ!」

「おー!」

いつの間にかおいてけぼりのステフ

なんとか話の内容を掴んだ時には、脱兎の如く二人は消えていた。

「ちよつ、待ちなさあああああい！」

お気づきだろうか、

まだ一人いることに。

「つて、何してるんですの？」

そして見てみると、自分の首についている首輪のリードを、柱に巻きながら口を吊り上げている佑馬がいた……。

「貴方は貴方で何しているんですのおおおおおおおお！」

「何つて、飼いなに逃げられたら困るからくりつけてる。」

「鬼畜！鬼畜がここにいますわああああ！」

さらばっ！といつの間にか消えている佑馬。

クスクスと笑い声が聞こえるなか、ヒューッと冷たい風が吹き抜けた。

そして、現在にいたる。

「今のこの状態で天翼種に挑んだりしたら、国は崩壊してしまいますわ！」

そう言いながら、全速力で図書館へ走るステフ。

ここはエルキア大図書館入り口。

そこには空、白、佑馬の姿があった。

着いたとき、空の口から出たのは一言。

「・・・でつか・・・」

第一印象は、ワシントンDCのアメリカ議会図書館。

蔵書1億冊を誇る空達の元の世界最大の図書館だが、

外観は優るとも劣らない。

エルキア城に匹敵する優美かつ、豪華な外観だ。

人類種を再評価したくなる程度には、素晴らしい図書館。

しかし、

「これが、人類種のものそのままだったらだがな・・・」

そう頭をかきながら言う空。

「まあ、とりあえず入りますかあ。」

そういつて入ろうとする三人に

「やっど追いつきましたわあああああああああ！」

と登場するバカ面のステフ（犬）

「誰がバカ面ですよ！」

こいつ・・・地の文を読むのか・・・

「あ、ステフ」

「・・・ぷっ！」

「あ、ってなんですかの！あ、って！まさか素で忘れていたんですの！？そして、その鬼畜！何笑っているんですの！？」

「いや、かなり間抜けた顔してたから・・・ぷっ！」

「だあああああああつ！」

しばらく茶番が続いたのは言うまでもない。

side out

空side

巨大な扉を開けて、図書館に踏み込む一同。

そこには壁のみならず、重力に逆らって天井すら本棚にうめつくされた空間。

無数の淡い光が空气中に漂い、数十メートルはあるだろう本棚と、それらで構成された迷宮のような幻想的とも呼べるそれに、

「すげ・・・すまん、ちよつと謝る。この世界の人類やるじゃん。」

「・・・うん・・・」

ここに存在する蔵書数を考えるだけでめまいを覚える。

白さえ感動していた。

これだけの本を集めるのは並大抵ではない。

元の世界ですら、これほどの蔵書数を抱えた図書館はそうそうないだろう。

「いや、これは天翼種のдаро。取られた後にでも増えたんじゃないか？」

「そ、そうですね。その・・・学生時代に来た時は、この百分の一も本棚はなかったですもの。」

「一瞬でも見直して損したよ」

だが、考えたら当たり前のことだ。

重力に逆らい天井に立つ本棚を、人類種が作れるはずもない。

「さあて、お目当ての天使様は何処かしら？」

と、図書館を歩いていると・・・

突如、光がさした。

その光を辿って動かし視線が・・・凍りついた。

それは「天使」だった。

直視することすら躊躇う、圧倒的な存在感をまとい、頭上には、幾何学的な模様を描き廻る光輪と。

空力的に人を浮かすには小さすぎる、淡く輝く羽を腰から生やした、少女。

長く流れるような髪は、風のない屋内にありながらもなびき、その都度プリズムのように光を乱反射させ、虹のように見えた。

その瞳が薄く開かれた瞬間。

空はこの世界に降り立ちはじめ、**「死」**を感じた。

視線に込められた、質量を帯びたような殺気が。

神々しいまでに美しい少女の、一撫でで絶命すると確信させ、逃げようが命乞いをしようが、その一切が無意味と告げていた。

(これが、天翼種？これが、序列六位？)

神に創られた、神を殲滅、滅ぼしつくすための、兵器。

感情の乏しい白でさえ、身をすくめて空の腕を掴む。

ステフに至っては、床に座り込み歯を震わせ、なんとか泣き出すのを堪えていた。

佑馬はというと・・・

「ぐう・・・zzz」

入り口付近で立って寝ていた・・・

「[[[[・・・]]]]」

空、白、ステフ、天使の少女の間に微妙な空気が流れる。

こいつもこいつで異常だなど結論付ける空。

言葉を失う一同に、天翼種の少女は咳払いひとつ。

緩慢に、琥珀色の瞳を開いて、言った。

「エクスキューズ？そこなパーソンな方、ミーのライブラリーにワットご用で？」

その一言に、

「oh、台無し。」

隣でステフが気絶したのを横目に、脱力をした空は辛うじて、そう口にした・・・。

後ろの入り口付近で何かが倒れる音とともに、

「いでっー！」

と聞こえたのは気のせいだろう・・・

神殺しとは

佑馬 side

青空が広がる暖かい日だ。

絶好の昼寝日和だ。

野原の一角にある木に体を預けているが、本格的に横になりたいという欲望が出てくる。

そのまま横になろうと体を倒したとき。

体に有無を言わさない浮遊感が訪れて・・・

「さっしー」

現実に戻ってきたのだった。

「ふああああああ……」

欠伸ひとつ、目を擦って開けると……

「ジュー……」

目の前で「天使」がこちらを見ていた。

とりあえず立ち上がって状況を確認。

目の前で天使を好奇の目でこちらを見ている。

殺気を出しながら……

後ろの方で空と白はジブリールを見て、驚いている。

以上。

「ん？君はどちらさん？」

知ってはいるが、社交辞令として聞いてみる。

「人類種がこんな殺気を出しても怖じけないなんて、なんとも興味深い存在でございませぬ。あ、私はジブリールと申します。」

そう自己紹介しながら目をキラキラさせて見てくる。

「ただ鈍いっていう答えにたどり着かなかったのか？まあ、いいや。俺の名前は中田佑馬。佑馬と呼んでくれていいぜ」

「鈍いで済むほど軽い殺気ではございませんでしたが……まあいいでしょう。佑馬様で（？）ございますね？」

「いや、佑馬でいいよ。そちらの三人の自己紹介はもう終わった感じ？」

「あ、いや、まだでございますが、その必要はございません。」

（そういえば知ってるんだっけ）

原作知識から、ジブリーはステフ以外の二人をしつかりと把握していた。

ステフも一応認知はされていただろうが、ただの人類種として括られたのだろう。

問題は俺というイレギュラーな存在。

情報も出しておらず、ただ森精種を倒した王の友達で、殺気を出しているのに平然にしているというその肝の強さ、そういった部分から自分に興味を持ったのだろうととりあえず勝手に納得しておいた。

「まず、その二人。エルキアのニューキング&クイーン、空様と白様、でございますね。」

「ほう、話が早いな。ところで、さっきのはなんだ？瞬間移動したように見えたのだが……」

「普通の身体能力か、テレポートだと思うぞ。」

「ほう。中々するどいですね。今のは空間転移（シフト）と呼ばれるものです。ちなみに、

こちらは人類種のニュースペーパーも、リードしておりますので。御戴冠おめ・・・あ、コングラッチュレーションでございます。」

「・・・言い、直した・・・」

そうつつこみを入れる白だが、

今なお、空の腕を握りこんで離さないところをみると、まだジブリールの殺気に怖じ気づいているのだろう。

「なあ、さつき佑馬と話してたのが地なんだろう？それに戻してくれないか。」

「そうでございますか。滅多に人がこないので知識を披露する機会だったので。仕方ありませんね。」

落ち込んでいるのは気のせいではないだろう。

幻想的な本棚が織り成す、芸術のような図書館の一角。

お茶とお茶菓子が出され、テーブルを囲む空と白、佑馬、そして天翼種のジブリール。ステフは未だに気絶から立ち直れないらしく、ほったらかしにされている。

仕切り直して、おほんと咳払いひとつ。

「それでは、天翼語はもちろんのこと、十六種族全ての言語を操り、異世界語や古語まで七百以上の言語とその知識に通ずる私、ジブリアルに、人類種の王とその御友人が、どのような御用でしょう。」

「率直にいこう、この図書館をくれ。」

一瞬の沈黙

そして、少女はティーカップを持ち上げ、

「それは、人の身で私にゲームを挑まれる、と?」

「ああ、その通りだ。」

そして、まさに女神を思わせる温和な瞳が。

「そうですか……ですが、この図書館は私が集めた本で埋め尽くされております。知識を尊ぶ我々天翼種として……」

(あ、これ長くなるな。)

その瞬間、睡眠をとった佑馬。

なんか、また殺気が流れていたが、気にしないことにした。

「よお、久しぶりじゃのお。」

「ん、なんだ、神かよ。」

「なんだとはなんだとは。少し敬いが足りぬのではないか？」

「だって、あんたに殺されたんだし。」

「そのことまだ引きずっておるのか… まあ、本当に悪かったのお。」

「それより、なんの用だ？」

そう、ここにいるということはそれなりの理由があるはずだ。

「おお、そうじゃったな。お主の特典についてじゃ。」

「特典がどうかしたのか？まさか使えなくなつたとかふざけたことは言わないよな？」

そうなると、無双する夢がなくなる。

それだけは避けないとな。

「いや、その逆とつてもよいな。」

つまり、それは…

「まあ、強化されるということじゃなあ。」

マジかよ！やつたぜマジ神だな！この神！

「敬いが足りない気がするが、まあいいじやろ。そして、その説明じゃな。」

「お、おう。よろしく頼む。」

「うむ。写輪眼と一方通行じゃが、写輪眼の状態で精霊をみれば、それを一方通行の能力と合わせることで、完璧に解析して模倣することができるのじゃ。」

それって、つまり…

「擬似的な精霊回廊というわけになるのお。」

まさかの魔法使用可能イベントきたこれえ！

「まあ、普段は使えないがの。そして、解析できるといふことは反射もできるといふわけじゃ。」

「なるほど。それ、この世界ならもうバグじゃね？」

「既にバグだからいいじゃろ。」

「それもそうだな！あははは！」

「まあ、そういうことじゃ、それじゃあそろそろ目が覚めることじゃろ。」

「いろいろありがとうな。またな、神。」

「うむ。いつでも念話を使ってもいいのじゃぞ。・・・暇だしのお・・・ボソツ」

(意外と女々しいなこの神)

そう思った瞬間、意識が暗転した。

「ふああああああ……おはよう。」

「よお、佑馬。また居眠りとはさすがだな。」

「この天気が悪い。以上。で、今なにやってるんだ？」

「俺たちが異世界人と言ったら、証明するために性感帯を触らせるとか言ってきたから白の情操教育のためにも断ってるんだよ。」

「なるほどな。でもさ、それ、空の乳首で済む話じゃね？」

「あ、なるほど……ってなるか！やだよそんなの！」

「やっぱりか。ならここは一つ。」

（代わりにそちらも性感帯触らせろって言えばいいじゃん。）

（その手があつたか！ナイスだ佑馬！）

よし、こういうこと言ったら意外とちよろいな。

「よし、乳首ならいいだろう！だが、こちらも触らせるんだ！そっちの性感帯も触らせろ

！」

「はい、よろしゅうございますよ。」

「え、いいんですのっ!？」

ステフ、いつの間に起きてた。

side out

side

.....

.....さわさわさわわ.....

「なあ.....」

「はい、さわり心地のご加減、宜しくないですか？」

「いや、うん。さわり心地はいいよ。うん、びつくりするくらい。」

「けど、なんだろう、この裏切られた感、得心ゆかぬ.....」

ふと、佑馬を見てみると。

「.....ニヤニヤニヤニヤ」

すごいにやついていた。

(こいつ・・・知ってて言ったな!?)

つまり、こういうことだろう。

にしても、この俺を嵌めるとは中々面白い奴だ。

・・・さわさわさわ・・・

「・・・ん、そんな的確に触らないで下さい、変な声が出てしまいますので。」

「・・・ふむ。」

ちらりと白に目配せする。

「妹よ、俺は羽を触ってるだけだ。そうだな？」

「・・・ん、ちよー、健全・・・」

空がきくよりも早くカメラを構える白。

阿吽の呼吸とは、まさにこのことだろう。

「じゃあ、せっかくだし、タッチ系エロゲを極めた手腕を見せるとしよう。」

言って、付け根から。つつつと、指を滑らす空。

その軌道の中で一瞬、羽がぴくりと跳ねる。

その一点を中心に、両手で、複数の場所を力加減を試す空に。

「ひあつ！あつ・・・ん・・・申し訳・・・つ、ごさいませんが、その、集中、でき・・・つ

ませんので、もう少し．．．あうっ．．．加減して頂．．．っ．．．けると．．．」

「あー．．．まあ、悪くないな、これも。」

「．．．にいい、角度．．．顔アップ、欲しい」

「あ、了解です監督。よいしょ、っと」

「付け根の近くにもうひとついい場所があるぞ！」

「おお、ほんとだ！ありがとうございます馬！」

「あんっ．．．っ！」

「天翼種になんですの．．．この人達は．．．。」

神殺しの兵器さえ、この三人にかかればセクハラの対象になるのかと。

いつそ尊敬の念すら芽生えるステフが、呆れて呟く。

かくして、その作業は。

ジブリールがへたり込むまで続いた．．．。

具象化しりとり

三人称 side

「おほん、ではまず」

服装をただして椅子に戻り、赤くなっていた顔を取り繕うジブリール。

「勝手に程度の低い人類種と見下していたことを謝罪いたします。申し訳ございませんでした。」

「なあ、ステフ。」

「あ、はい。なんですか?」

「この世界さ、人類種の地位、いったいどんだけ低いわけ?」

「控えめにいって、最低ですわね。」

「と申しますか、『言葉を喋る特技がある猿』程度の認識でございますね♪」

容赦のない、いい笑顔で言うジブリール。

「あ、それと、普通の人類種には興味ありません。調べ尽くしましたし、文献も飽きるほど読みましたので。えつと・・・そちら・・・ツエペフさん、と呼ばれてましたっけ?」

「ステフですわよ! って違う、ステファニー・ドーラですわ!」

「別称・ドラちゃん」

「初めて呼ばれましたわ！そんな呼び方！」

「まあ、何でも宜しいですので、ドラちゃんと呼ばせて頂きますが。」

「佑馬！貴方が余計なこと言うからですわよ！」

「そんなことない。どちらにしろそう呼ぶつもりだっただろ？ジブリール」

「はい♪よくわかりましたね。ますます興味深くなってきました・・えへ、えへへっ」

「興味持つてくれるのはありがたいが、涎拭いてくれ。それと、俺たちはこの世界の人間じゃないってことでいいんだよな？」

「・・はっ！大変申し訳ありませんでした！はい、貴方様はこの世界では、生物としても認識されない存在です。」

「ふむ、精霊か。」

お、とここで少しびっくりするジブリール。

「よくわかりましたね。その通りです。」

「じゃあ、俺たちはなんなんだ？」

そう聞く空。

(ここはジブリールに合わせてみるか)

予想通り目がキラキラしているジブリール。

「」未知」でございます！」

「嗚呼、この世界において、」未知」ほど崇高なものがあるでしょうか（あるだろうか）・・・」

「二つ言わせてくれ。一つ目、佑馬は何してるんだ？」

「ん、なんかジブルールがそんなこと考えてたから乗ってみた。」

まあ佑馬だからいつかと納得する空。

「もうひとつ、賭けるものは結局あれでいいのか？」

「あ、はい！もちろんでございます！」

「賭けるものって、俺たちの世界の本4万冊とか？」

「そうだ、よくわかったな。」

「まあ、知識を欲する天翼種なら飛び付くし、確実にゲームを挑めるからな。ところでジブルール、何を賭けるんだ？」

空に目で「何も言うなよ」といいながらジブルールにきく。

「あれ、なんでございましたっけ。」

「おまえ、忘れたのか？」

「申し訳ありません！くれるものがあまりに大きかったもので・・・」

「・・・ジブルール」

「申し訳ありません！賭けるものは『私の全て』でどうでしょうか!？」
「はいっ!？」

空も内心「えっマジで？」と思うが、横で佑馬がこちらを見ながら口を吊り上げて笑っているところをみて、これがこいつのやりたいことだと理解し、思わず称賛してしまった。
「そうか、それでいいこう。こちらが求めるのは、『ジブリール一人の全権』だ。」

「え・・・そ、そんなものでよろしいのですか!？」

飛び付くように目を輝かせるジブリール

「勿論お受けさせて頂きます！あ、私が勝利したら、一つだけ、追加宜しいでしょうか?」
「うん?」

「時々でいいので、お茶しに来ていただけますか?もつと三人のことを知りたいのです。
その・・・それこそ隅々まで・・・うえへ、へへへ・・・」

にっこり微笑みながら、徐々にエロ親父顔になっていくジブリール。正直、携帯に録画しておくべきだったと思わなくもないが。

「まるで、もう勝ったような言い分だな。」

「はい、申し訳ありませんが、私が勝ちますので。」

空、笑って応じる。

「そ、じゃ、俺らが勝ったら、こつちも追加要求するが、いいな?」

「はい♪どうせ無理でございますが、なんなりと、ご所望ください」
刹那、ジブリール、空、白、ステフに悪寒が走る

「ほう、ならこちらにも本気でいかせてもらうか。」

悪寒の先、そこには恐ろしいほど凶悪な殺気を出している佑馬がいた。

s i d e o u t

佑馬 s i d e

さて、ここから空たちに力をみせるか。

「さあ、ゲームを始めるか。」

「は、はい。ゲームはしりとりでお願いします。」

ジブリールですら、この殺気には驚いたようだ。

「ああ、具象化しりとりな。」

「そ、そうでお願いします。」

こいつの驚いた顔を見るのいいな。

少しsに目覚めそうになる佑馬であった。

「具象化しりとりって、具象化はそのままの意味なのか？」

空が聞いてきた。

もう平然を取り戻すとはさすがだな。

「ああ、その通りだ。まずルールからだだが、普通のしりとりとほぼ同じだが、違うところが点がある。」

「できるだけ詳しく教えてくれないか？」

「当然だ。言葉は何語でもいいが、存在しないもの、架空のもの、イメージできないものは具象化できない。データラメな言葉や現象を口にしても、”無効回答”になるからな。

あと、『既出の言葉を口にする』『三十秒答えない』『継続不能』のいずれかで負けだ。『既

出の言葉を口にする』は普通のしりとりと同じだな。『三十秒答えない』はしりとりに時間制度ができたようなものだ。『継続不能』は具象化ということを考えれば、二人ならわかるよな？」

「な、なるほど。『継続不能』についても少し知りたいたいが、いいか？」

「ああ、具象化だから、『その場になれば消え』『無ければ出現』する。ゴリラといえばゴリラが出たりな。ただ、現実には干渉しないであくまでもゲーム。つまり、ゲーム内で死んでも、勝敗が決まれば元通り、ってことだ。」

「質問だ、女と言えはどうなるんだ？」

「ゲームに関与してないステフが消えることになるな。」

「ちよ、なんで白は消えないんですの!？」

いきなり消える宣言されたステフが反論する。

「だって、空と白は二人で一人じゃん。」

「なるほど。でも、それd「そこは気にしなくていい」・・・信じていいんですのね？」

「ああ、任せろ」

(・・・その言葉でその笑顔は反則ですわ／／)

あ、なんか顔が赤くなっていくステフ

まあいつか。

「それにな、プレイヤーに直接干渉して続行不能にすることは不可能だ。ただ、間接的には可能だ。どうだ、ジブリアル。これであつてるだろ？」

「はい。なんでそんなにご存じなのか気になると思いますが……」

「ん？ 忘れたか？ 本気出すつったろ。これくらいで気にしてたらこれからがもたないぜ？」

少し含みの言い方をしたが、気づいてくれただろうか。

「じゃあ、始めようか。」

「そうでございませぬ。本気というのが期待はずれでないことを願って、先攻をお譲りします。お好きな言葉をどうぞ♪」

ここであることを思い付いて、空だけに聞こえる声で話しかける。

side out

空 side

「空」

いきなり小声で話しかけられた。

「ん、なんだ？」

「俺が合図するまでしりとりをしていてくれないか。合図したら変わって欲しい。」

ふむ。こちらもある程度考えはついていたが、勝率はきびしいものがある。

「別にいいが、勝算はあるのか？」

「問題ない100%だ。」

その言葉に少なからず驚いてしまった。

100%? そんなものがあるのだろうか。

しかし、さっきの行動といい、信用するには十分な重みがあった。

「わかった、頼んだぞ。」

「ああ、頼まれた。ところで、あと8秒で30秒だからな」

そういえば、『三十秒答えない』なら失格だったな。

「わかった。」

ジブリアルに向き直す。

「作戦会議は終わりましたか？」

「ああ、問題ない、時間もないし、いくぞ。」

side out

三人称side

「それでは、どうぞ」

具象化しりどりのゲーム盤で出てきた水晶に手を乗せて口にする。

「じゃあ、手始めに『水爆』」

と、口にした瞬間、

一同の頭上に、実に“27トン”に達する鉄塊が具現する。

見上げたそれを、ジブリーも、もちろんステフも、何かを知るすべはない。

まして知ったところで、ここでその名を口にする意味が理解できたはずもない。

なんせそれは、空達の世界の人類が生み出した、最大、そして最悪の過ちとも言える。

まがうことなき、大量殺人兵器なのだから。

ジブリーが呆然と、それを見上げた時。

既に高度信管によって、核分裂反応による一次点火は、起爆。

発生した核熱が、搭載された重水素化リチウムを融合させ、光を放っていた。

それが何かをジブリーは知らない。

だが、神に創られ、神殺しとして創られた、天翼種の本能がつけていた。

”全てを焼き尽くす光の嵐がくる” っと。

「つ!!!」

二次爆発が起こるまでの、百ミリ秒未満の葛藤。

ジブリーが水晶に手を乗せて叫ぶように、言葉を紡ぐ。

「久遠第四加護（クー・リ・アンセ）！」

その瞬間、佑馬の眼が赤く光る。

そして、第二の太陽の出現により、

図書館から半径一キロメートルが焼け野はらとなっていた。

天変地異によってクレーターとなった図書館跡地に、

無傷に佇むジブリールと

「満足でございますか？私を殺すことは不可能でございます。」

ジブリールが呆れて、見つめる先。

不適に笑う空、何事もなかったような白、無言で佇む佑馬、そして口を開けて呆けるステフ。

同じく無傷の4人。

「初手で自爆ですか。私の”善意”なければ、ゲームはここで終わってございました。まさか、それが先程の作戦でございますか？だとしたら、かなり期待外れでございませぬ..。」

「善意？おいおいやめようぜ、そういうの。」

「俺らの知識が手にはいるとしても、たった一手でこのゲームを終わらせるなんて、最悪

「つまんねーことをおまえは認めないだろっつー」常識的判断に賭けたんだが？それに、さっきのは作戦でもなんでもない。『続行不能』ができるのかどうかを確認しただけだ。まあ、無理だと結論づけたがな。」

「ご理解頂いて何よりです。」

「まあ、別の条件で勝つとしよう。」

「ふふ、面白いかたですね。」

仕切り直すように、言い直す。

「それでは、どうか私を飽きさせないでくださいませ？」

その言葉の、言外の意味を組むのは、ステフにも簡単だった。

そう、自分達は、いつでもジブリールによって、『続行不能』にさせられるのだ。

これが『序列の差』

絶望的なまでの、種族の性能差という、天よりなお高い、壁。

「まあ、安心しろ、飽きさせはしないさ。『精霊回廊』」

「これはまた、いきなりですね。」

「天翼種が魔法で心を読めないとは限らないからな。」

「そろそろこんな殺風景はいやですねえ『ビーチ』」

その瞬間、燦々と太陽が照らすリゾートビーチのような場所へと、景色が変わる。空達の元の世界のどんな観光地も色あせる、美しいビーチが広がる。

だが、空は日差しが白に差し込まないようにかばうようにして覆い被さる。

「んあーっ、確かにきれいなところだが、引きこもりにこの日差しはきつっ！『乳首』」
「それならそちらの木陰に移動して頂いて構いませんよ。そして、さりげなくまたですか。何をするのか楽しそうなのでお付き合いしましょう♪『ビキニ』」

瞬間、具象化した言葉に、女性陣にビキニがつけられる、つけられるが、空が突然叫ぶ。

「ジブリール！おまえは何もわかってはいn・・・」
まだまだ茶番はつづくようだ。

side out

佐馬side

ジブリールと空が遊びを繰り広げるなか、佐馬は一人、その時をまっていた。

「それでは、『ナス』でどうでしょうか？」

(きたっ！)

「空、交代だ。」

「ん、わかった。」

潔く変わる空。どうやら空も何をやるのか少なからず興味があるようだ。

「さて、ジブリール。覚悟はいいか？」

「はい、何をやるかわかりませんが、期待していますよ？」

「んじゃあ、空、白、ステフ、できるだけ近づいてくれ。」

「わかった。」

「え、なんですか？」

一人理解してないステフ。

「説明はあとだ、早くしろステフ。」

「わ、わかりましたわ。」

さあて、準備は整った。

「それじゃあ、いくぜ？」

写輪眼！

その瞬間、ジブリールが少し反応した。

そして、一方通行の反射膜を空、白、ステフを覆うように張る。

そして一言。

『真典・星殺し（ステイル・マーター）』

その言葉を聞いた瞬間、ジブリールは固まった。

そう、これはかつて古の大戦を終わらせたときされるものだ。星を砕く、最強の一撃。星を砕くイメージができたからこそ、具象化ができた。その力がジブリールに襲いかかろうとしていた。

side out

ジブリール side

（こ、これは： 何故異世界の人類種がこの言葉を知っているのですか!?!）

内心そう叫ばずにはいられない。

ただ、この力を喰らえば向こうも無事ではない。

おそらく、一緒に蒸発するだろう。

（引き分け狙いでしようか：：）

それなら納得がいく。

さすが未知の存在。

人類種でありながら、天翼種を勝てないまでも引き分けに追い込むなんて。ふと、佐馬を見てみる。その瞬間。

口を吊り上げ、こちらを見下す佐馬がいた。

(っ！)

そして、口を開く。

「なあ、俺は本気を見せるといったよな？」

ふと、先程の言葉を思い出した。

『こちらにも本気でいかせてもらおうか。』

だが、これからどうするのだろうか。

「俺が未知の存在だというのを忘れてないか？俺はこの攻撃を防ぐ力があるんだよ。」

「なっ！どうやって!!」

「何、簡単なことさ。この眼で精霊を解析、そしてベクトルを操作して反射するようにしただけだ。もちろん反射の向きはジブリアル、おまえのところに設定してある。」

その一言に今度こそ絶句する。

（人類種が、星を砕く一撃を防ぐ？）

ありえないと思うが、佐馬の姿を見る限り、確信があるようにも思えた。

「それじゃあ、俺らの勝ちだな。どうだ、不可能とか言った」継続不能でやられる気分はよ。」

そう口を吊り上げながらいつてきた。

「なるほど、精霊回廊もない。あなたの言っていることが本当なら、確かに敗けでございませぬ。だが、私はまだ諦めません！」

そこで、ジブリアルの体が光り始めた。

しりとりの効果ではなく、自分自身を分解して作った精霊で防壁をつくる。

「これで貴方の言っていることが嘘なら、私の勝ちです。」

そこには、幼児化したジブリアルがいた。

その瞬間。

星を砕く一撃が辺りを襲った。

「まあ、嘘じゃないから当然俺らの勝ちだよな。」
勝ったのは空、白、ステフ、佑馬であった。

我がマスター

三人称 side

「まさか本当に防ぐとは思っておりませんでした。完敗でございます。」

そう言つて、ペこりと頭を下げるのは、さつきの星を砕く一撃を受けたとは思えない、ゲーム開始と同じ図書館の中央で、一息つくようにお茶をすするジブリール。

「いくつか質問して宜しいでしょうか？」

「うん？」

「まず、どうやって防いだのでしょうか？」

「さつきも言つたように、この眼で精霊を解析して、膜を張る。その膜に触れた精霊のベクトルの向きをジブリールに設定しただけだ。まあ、ジブリールが死んだあと膜を壊されて俺たちも死んだけどな。」

「そこでございます。何故そのようなことができたのでございましょうか。」

「んー、人間の未知なる可能性というやつかな？そこにいる白みたいに天才的な頭脳の持ち主が生まれたり、空みたいに努力を重ねてある一点で他を圧倒したりするように、人にはいろんな可能性がある。その可能性の一つに、俺は当てはまるっただけだ。」

「だとしても……」

「なあ、ジブリール。大戦中、どの種族すら認知しなかった存在、不自然なほど情報がでなかった種族はどいつらだ？大戦終了時、一番力を持っていた種族はどいつらだ？そして……」

「大戦を終わらしたのは、どいつらだ？」

「……っ！」

そう、その時を生きていたジブリールならわかる。

不自然なほどに認知されず、大戦終了時には一番の勢力をもっていた。

そして、大戦中の不可解な現象の数々。

「なるほど。そういうことでございませうか。納得はできませんが、完璧に不可能という

わけではありませんね。」

そうだろ、と笑う佑馬。

（（そんなわけないだろ！こんな人間いたらこえーよ！））

内心そう吠える人類種の人たち。

それよりも…

「おい、ちよつとまで、古の大戦を終わらせたのって、人類種なのか!？」

先程の会話をきいていた空は驚きを隠せずに言った。

「ああ、そうだ。」

「確かにそれなら納得はできます。しかし、まだ気になるところがあります。」

「ん、なんだ?」

「何故、あなたがこんなことを知っているのでしょうか。恐らく、このことを知っているの

は、この世界でも一握りでしょう。」

そう、その時代を生き、天翼種の中でも特に情報を持っているジブリールですら、そのことを知らなかった。

「おいおい、さつき言ったこと忘れたのか?それくらいのこと気にしたら先が持たな

いぜ。」

しかし、誤魔化されてしまう。

まあ、原作知識なんて言えるはずもないし。

「そんなこと気にしてたらって、まだあるのか？」

「まあな。後々見せてやるよ。」

（（まだあるのか「のですか」「んですの」））

四人が全員同じ事を思った。

「最後の質問です。私に勝つ手段は、いくつぐらいありましたか？」

「一応俺たちは20個くらい浮かんでいたぞ。」

そう空が、

「俺は100%勝てるゲームだったな。」

そして佑馬が言った。

「正気ではございませぬね。」

序列が10も離れている種族相手に、片方は勝てる手段が20個、もう片方は100%勝てるといったのだ。その言葉には、敬意すら籠っている。

だが、その台詞に苦笑混じりに答える空と佑馬。

生を受けて六千年待ち焦がれた。

”その言葉”に、ジブルールは目を見開き息を呑んだ。

「”神様”に挑むんだ。正気でやれるか？」

それは副音のようにジブリールの耳に届き、脳を痺れさせた。神に挑む。

唯一神に弓引くと。

ジブリール、決して否定されたくはないと願いながら。

だが、確認する必要があると、意を決して、問う。

「本気・・・なのでございますか。」

「本気も本気、つか俺らがどうやってこの世界に来たか、不思議だったろ？」

ネタバレするように、ようやくその真実を語る。

「答えから言おう。俺らがこの世界に呼んだのは、テトだ。」

「まあ、俺は違うがな。」

ジブリールが言葉を失う。

「アイツにゲームで勝ったら大人げなくこの世界に引き込んだ。こっちのルールで勝つてみせろってさ。アイツが仕掛けたゲームだ、あいつを倒す以外の選択肢、ないっしょ」

それだけのことだと。

唯一神の座を奪うことが。

ただ、それだけの、自妙だと。

「まあ、俺はただあいつのルールで完膚なきまでに倒しにきただけだから、今はその過程を楽しんでる感じかな。」

この男もまた、ただ楽しんでるだけ。

唯一神の座を奪うのが遊びだと。

「と、言うわけでジブリール、盟約に従い今日から、お前の全ては俺たちのm「ちよつと待ってくれないか、空。」ん、どうした佑馬。」

いきなりストップがかかる。

「ジブリールは俺に任せてくれないか？命令権は俺たちで構わないから。」

「どうしてだ？また何か考えでもあるのか？」

先程のゲームのこともあって、また何かあるのかと聞いてしまう空。

「いや、その・・・まあ、そんなところだ。」

少し言い淀む佑馬に気になるところはあるが、あえて突っ込まないようにする。先程のことも考慮して、良い方向へ持つていつてくれると考えたのだろう。

「ああ、勝てたのは佑馬のおかげだし、命令権を共有できるなら、まあいいだろう。」

「ありがとう、空。」

「というわけだ、ジブリール。いいか？」

「・・・」コクッ

その言葉に無言で頷くジブリール。

ジブリールはただ、この二人を眩しそうに眺めるしか出来なかった。

「神様を倒すにもまずやることは多いが、人類種が置かれてる状況じゃそれも限られる。一つでも多く、力と知識と、賭けられるチップが必要だ。お前の知識、存在は役に立つ。」

神のお告げを授かったマリアさながらに。

「あ、それから俺のタイプCに入ってる書籍な、アレただの餌だったんで、全部自由に見ていいぞ。異世界出身の俺らが世界を獲るのに必要なのは、”識者”だ。ジブリールの知識の更なる足しになるなら、好きなだけ読んで、存分に活用してくれ。」

陶醉したように眼を潤ませるジブリールに、さらに空。

「あとこの図書館。今まで通り書庫として使っていていいぞ。ただ人類種にも必要だから本来のアカデミーにも使用させてくれ。本はジブリールの徹底管理。それでいいかな？」

その一連の言葉に。

ついにジブリールは、空に膝をつき、跪いた。

一滴の涙をこぼし、手を合わせ祈るように。

いや、事実祈って頭を垂れる。

「嗚呼、亡き主よ。我らを創造（つくり）たもうた、今はなきアルトシュよ・・・ついに私は、我らが仕え、我らを従えるに相応しき、新たなる”マスター”を見つける、悲願

を果たせました……」

「えー、そういう反応するんですの……?」

その反応に、げんなりとステフが方を落として呟く。

「い、言っておきますけど、この兄妹変態ですわよっ!?!はしたない格好させますし、犬にさせますし、口は悪くて鬼畜で人格破綻の、ろくでもない兄妹ですわよっ!?!さらに佑馬は佑馬で人を柱に括りつけるような鬼畜ですわよ!」

「……ステフ……ちんちん……」

「ほ、ほらあつ!こんなことするんですのよっ!?!」

「よーし、そろそろ何処かに逃げないようにリードを巻いておかないとな?」

「こんなに鬼畜なんですよっ!?!」

しかし、完全にトリップした様子のジブリールが、虚ろに答える。

「……それが、何か問題なのでしょうか?」

「え……?」

「不戦勝ただけで唯一神の座についたテトを下し、異世界から膨大な知識を持ち込み、人類種でありながら、森精種を、そして私を下し、それでも本気を出していない、如何なる既知をも覆す者。」

羽をたたみ、光輪を後頭部に移動させ頭を垂れる。

それは、天翼種が唯一、主のみに見せる絶対忠誠の姿勢。

「マイマスター、マイロード、我が主達よ。」

「ほいほい」

「おう」

「十六種族」位階序列第六位天翼種、十八翼議会が一对、ジブリール。」

神前に近いを立てるように、肅々とかしずき。

「我が全ては主達のもの。我が思考、我が権利、我が身体の一片までも主達のものでござ
いますれば、どうか最大限活用し利用し、その意思の礎として下されば、至上の悦びに
ございます。」

「おう、任せとけ。なあ白？」

「・・・ん、まかせろ・・・」

「おう、任されたぞ。」

そう頷く三人。

これにて、人類種の反撃が始まる。

「納得いきませんわっ！あと私はいつまで犬の真似していればいいんですのよっ!!」
「今日一日中やっどこ？」

「鬼畜！やっぱりあなたは鬼畜ですわっ!!」

最後に出された命令、『ちんちん』の格好のまま。

ステフの絶叫と佐馬の笑い声が図書館内に反響して響き渡った。

楽園の誓い

かっぽーん。

等と音がするわけでもないのだが。

空達はお風呂タイムである。

実は白はこの世界にきて、まだ2度目の風呂だったりもする。しかし、ここに佑馬とジブリールの姿はなかった。

—— エルキア城、佑馬の部屋 ——
佑馬 side

俺は今、自室でジブリールと大戦や自分の能力について話している。え？なんで俺の部屋があるかって？

余ってる部屋貰ったのさ！（元ステフの部屋）

まあ、それはそれとして。

「なあ、ジブリール、一つお願いしてもいいか？」

「はい、なんなりと、マスター。」

「マスターではなく名前で呼んでくれないか？」

「そんな、恐れ多いk「頼む。」わかりました。 佑馬様。これでよろしいでしょうか？」

「呼び捨てで頼む。俺はジブリールと対等の立場でありたい。」

「わかりました、佑馬。ところで、こちらも一つ宜しいでしょうか？」

「ん？」

「まず、どうして私の所有権を貰ったのでしょうか？」

「そうだな..」

「これは、言いにくいことを聞いてきたな。

なんて言おうか。

「あの、答えられない事情ならば、答えられない、で宜しいですよ。」

俺も男だ、腹を括ろう。

「いや、問題ない。真剣にきいてくれないか？」

ジブリールが頷くのをみて、話始める。

「まず、俺がこの世界の人類ではないのとは知ってるよな？」

「はい。」

「そして、俺は実は、」

「ここで少し間を置く。」

短い葛藤。

そして

「俺は、一回死んだ人間だ。」

「それは・・・誠でございましょうか？」

「信じられないか？」

「・・・はい。この世界に蘇生させる魔法はありませんし、佑馬たちの世界の知識でも、蘇生は不可能ですから・・・」

「まあ、そりやそうだな。じゃあ、論より証拠だ。」

「え？」

(なあ、爺さん)

(ん、久しぶりじゃの、どうした?)

(俺たちを一時的にそちらの世界に飛ばすことはできるか?)

(可能じゃぞい)

(そうか、頼んでもいいか?)

(ちよつと待っておれ。準備できたらまた話しかけるぞい)

「少しだけ待ってくれ。」

「は、はい。わかりました。でも、何故いきなりそのようなことを言い出したのでござい

ましようか?」

「ああ、それはな、(準備できたぞい。) あ、これはまた後で頼む。今から証拠を見せるから。」

(どうすればいい?)

(その子に自分の体に触れるよう頼むのじゃ。)

「ジブリール、俺の身体に触れてくれ。」

「・・・? こうでございますか?」

(やったぞ。)

(それじゃあ、飛ばすぞい)

その瞬間、あたりが真っ白になった。

神の家

「こうやって会うのは本当に久しぶりじゃの。」

「ん、ああ、爺さんか。」

「……っ！ここは……一体。」

いきなり景色が変わったことに驚愕するジブリール。

「これが証拠だ。ここにいるのは俺を転生してくれた神様だ。」

「唯一神……ではないようですね……しかし、確かにとてつもない力を感じます。」

「わしは『全知全能神 ゼウス』じゃよ。」

「佑馬たちの世界のギリシア神話の最高神でございませるか!？」

お、なんか目が輝いてきてる。

「おお、この方が佑馬たちの世界の最高神！なんと素晴らしい力を持っているのでしよう！確かにこれならば佑馬があんなに力を持っているのも納得でございませう！」

「まあ、俺はこの爺さんに転生させてもらって、ディスプレイの世界、つまり、ジブリールたちの世界へ来たのさ。」

「なるほど。そういうことでございませるか。」

「さて、爺さん。ジブリールを先に戻してくれないか？少しだけ話したいことがある。ジブリールもいいいな？」

「ん、よかろう。」

「了解でございませう。」

その瞬間、ジブリールが光に包まれて、消えた。

「完了したぞい。さて、なんの用かの？」

「用と言うか事頼み事なんだが・・・」

「できることならやらせてもらうぞい」

「この世界で」「」が唯一神を倒したらさ、また別の世界へ転生することはできるか？」

「うむ。そなたは輪廻の輪を外れてしまったからの。こうやってそなたが飽きるまで転生させることしかできんが、それでいいかの？」

「俺はそれでいい、ただ、もう一つ。」

そう、これが本当にききたいこと。

「この世界の人も一緒に連れていけるか？」

「それは、厳しいものがあるのお。少なくとも”生物”は無理じゃ。」

「なら、あの世界でいう、”生命”ならどうだ。」

「お主、ジブリールを連れていこうとしているのか？」

「ああ、そうだ。」

「どうしてじゃ？」

「それは・・・」

そう、俺は空に所有権をくれと言ったとき、理由をきかれて言い淀んでしまった。

その理由は、そう。

ジブリールを一目見たときから、

彼女に恋をしてしまったから。

一目惚れだった。

今日、昼寝から起きたときにいた目の前の少女に。

お茶菓子、お茶はともおいしかった。

何にしても、ジブリールが好きになつてしまったのだ。

「好きになつちやつたから・・・じゃ、ダメか？」

「本人の了承があれば、できないこともないぞ。彼女の魂は不定形だからのお。」

「わかった、いろいろとありがとうな。」

「まあ、がんばるのじゃぞ」

そして、また視界が真っ白になった。

「おかえりなさいませ、佑馬。」

「おう、ただいま。」

「何を話していたのですか？」

「それは、そうだな・・・風呂でも入りながら説明するか。」

「そ、それは構いませんが・・・その・・・」

もじもじと可愛い。

しかし、ふと違和感を覚える。

ん、確か天翼種って・・・

「なあ、天翼種って羞恥心とかなかったんじやなかったか？」

そう、原作ではそんなことなかったはずだ。

「えーと、その、佑馬たちの世界の文献に、『恥らいは大切』と書いてありましたので。」
なるほど、ナイスだ文献。

「そうか、まあいい、いくぞ。」

「はい♪」

ちよつとにやけ顔が気になるな。

というわけで、

かつぼーん。

等と音がするわけでもないのだが。

またまた風呂である。

にしても、今日は密度の濃い一日だった。

「ん、シャンプーキれてるな。」

「でしたら、こちらのシャンプーなど如何でしょうか。」

言つて取り出すジブリール。

「天翼種御用達、精霊水配合のシャンプー。髪の毛の艶を保ち、傷ませず、いつもよりしつかり決まる、ふんわりまとまること、上質な仕上がりになること請け合ひでございます♪」

「おおー」

ともはず拍手してしまった。

「ここまで見事な説明をするセールスマンはそうそういないだろう。」

「よし、それ頂こう！」

「毎度♪」

そして振り向いて、固まった。

そう、ジブリールは・・・裸なのだ。

俺も裸ではないというわけではないのだが、タオルは巻いてある。

しかし、その芸術品のような、抜群のプロポーション、濡れた髪、とにかく美しくかった。

「ありがとう・・・」

恥ずかしくてつい目を背けてしまう。

「佑馬、顔が赤いですが、大丈夫ですか？」

グイッと顔を覗かせるジブリール。

これは・・・理性がやばい

「そ、そうだジブルール！背中を流してくれ！」

「はい♪わかりました！」

「ところで佑馬。さきほどの続きですが。」

「ん、なんだ？」

「なんで、私の所有権をもらったのでしょうか。それに、何故私にだけあのようなことを教えてくれたのですか？」

「そうだな・・・」

「やっぱり伝えるべきなのだろうか・・・」

「少しの間の葛藤。」

「実はなジブルール」

言うことにした。俺も男だ。

「俺は、初めて会ったときから、一目惚れしてしまったんだ。天翼種に主従愛はあれど、普通に愛するという感情はないことを知っている。でも、だからと言って諦められない！なら、その感情をしっかりと理解させるだけだ！呼び捨てを頼んだり、対等な立場を要求したのも、俺の過去を話したのも、全部そのためだ。だから・・・」

一気に言った。

ジブルールから言葉はない。

もうここまで言ったんだ、後戻りは出来ない。

「だからジブリール、俺と付き合ってくれないか？」

長い沈黙……

断られたらどうしようと、内心不安が渦巻く。

「私でよければ、喜んで……。」

「バツ！とジブリールの方をみる。

すると……。」

ジブリールの目から、涙が出ていた。

「確かに私達天翼種には、恋愛感情はありません。でも、今ここで大切にされている、そして、愛されているという感情はしっかりと読み取れました。佑馬は既知をも覆す人。そんな人と対等に一緒にいられる。これほど嬉しいことはございません！」

「ありがとう、ジブリール！これから宜しくな！俺は、お前を一生かけても守る！」

「はいー宜しくお願いします！佑馬！私も、全霊をとして守り続けます！」
そして、口づけをする。

その時間はとても長く感じた……。

「さて、俺もジブリールの背中流してやるよ。」

「お、宜しく願います。」

そして、ジブリールの背中を見る。

美しいボデイライン。

そして、濡れた髪はとても美しく輝いていた……

今、とても幸せだ。

獸耳っ子

— エルキア図書館 —

三人称 s i d e

ジブリールから取り戻した図書館のキッチンに、ステフはいた。

だが、その顔は疲労困憊、まともに寝てない様子が見てとれる。

「これじゃあ、王の寝室にこもってくれたほうがマシでしたわ・・・。」

図書館を取り戻したあと、今度は王の寝室（小屋）でなく、図書館に引きこもった空達。

内政をしながら、報告に遙々図書館に来て、しかもお茶入れまでやらされている。

「何故私がここまでやらなきやいけないんですの・・・お茶くみじゃないんですよ?というか、どれが何処にあるのかわかりませんし、言語も読めm「おやドラちゃん。お勤めご苦労様です」ひゃっ?!いつからいたんですの!?!」

唐突に声をかけられて思わず悲鳴をあげるステフ。

「ていうか、ドラちゃんって言わないで貰えます!?!」

「マスターからの伝言です。」

「はい？あの、質問に・・・」

「えー『ジブリールのキッチン、砂糖とかバターとか色々あるらしいぞなんでも俺たちのものらしいから、まあ、自由に使っていていいぞ、好きにしろ』以上でございます。」

「・・・え？」

砂糖とバターが使える？

な、なら、作れるお菓子の種類も大幅に増え・・・

「つて、それ間接的に美味しいお菓子作れつて命令じゃないのですのっ！どこまで私をこき使えば気が済むんですよのっ！！それより休んでいいよの一言が欲しいですわっ！！」

ガンガンガン。

「額を鍛えてらっしやるところ、失礼しますが」

と、メモを取り出して、ジブリール

「私の蔵書のレシピ本に、マスターが興味があるというお菓子のメモが・・・」
「あ、是非いただきますわ♥ありが・・・はっ」

面白いものを見る目のジブリールに、バタバタと赤い顔で手を振るステフ。

「ちがっ・・・これは・・・」

「話は伺っております。なんでも、マスターに”惚れる”と命じられたとか。」

「そ、そうですの！しかもイカサマ同然の詐欺で!?信じられないですわよね!?!」

そう、国王次期選出のとき、「」と初めて会った日に行われたジャンケン。それで負けたステフ。

そのときに惚れろと命じられたのだ。

自分の行動を正当化する言い訳に飛びついてまくしたてるステフ。

だが、こういう言葉があるのだ。

騙される方が悪いと。

「それは空にも言われたましましたわ!? 詐欺師の言い訳にじゃないですよ!!」

だからなんでああなたは地の文が読めるんですか。

「どうでもいいから黙ってなさい!」

作者「すみません。」

その一方で、なおも興味深そうにジブリール。

「なるほど、そういうのを恋愛感情と言うのでしょうか。我々天翼種にはないものでございませぬ。」

「え、そ、そうですの?」

「はい。我々には必要がない限り繁殖をしない種族です。私自身も主に対する愛があれば十分だと考えていました。人類種の恋愛感情という、今のところ心の機微は伝え聞く程度でしか理解できません。」

さらりと主。つまり、空と佑馬に対して。

『愛』とキツパリ言いきったジブルール。

何かひっかかることはあるのだが……

「え、あ……えつと、愛つて……主従愛、ですわよ、ね？」

「その区別は、私にはうまくつけられませんが。通常の愛とはどのようなもので？」

「そ、そうですわね……こう、他の人と仲良くしていると胸が苦しかったり、一緒にいないと不安になったりとか、そういう……あれ？」

ふと、自分の初恋は、強制的に惚れさせられた空だと気づき。

つまり、今語った全ては、空に向くものだど気づき。

ニコニコとそれを眺めるジブルールには、全ては筒抜けだとも気づき。

トマトより赤い顔で、慌てて、

「いい、いいい、一般論ですわよ一般論！わ、私はそういう経験は……」

と、全く説得力のない言葉で取り繕うが、ジブルールはただ微笑する。

「そうですか。あ、最後に、1つ。佑馬から伝言です。」

「あ、はい、なんですの？」

「『このキッチン、俺も少し使わせて貰うからよろしく』とのことです。」

「佑馬が……？　いったい何するんですの？」

「私のために料理を振る舞ってくれるそうです♪それでは、伝言はお伝えしましたので、これで。」

「あ、ええ……ご苦労様で、あれ？」

「いない、目を逸らした一瞬で、何処に？」

（にしても、佑馬に料理を作ってもらえると言ったとき、若干楽しそうにしてたのは気のせいですか？）

まあ、さつき本人が言ってたとおりなら、気のせいだろう、というわけで。

「……………ちらっ」

机の上に置かれた、空の気になったお菓子のレシピとやらをみるステフ。

「まあ、砂糖が使えるなら私も食べてみたいお菓子がありますし？一人分も全員分も作る手間は変わらないですわね。ええ、うんそうですわ。ついでですわ、ついで。」

そう、ガサゴソと、ジブリーのキッチンをあさり始めるステフ。

「えっと、そういうえば何処に何があるのか聞くのを忘れていましたわ……。」

「それはですね」

「ひいやっ!？」

再び、音もなくぬつと背後から現れるジブリー。

「必要な調理器具はあちらの棚にございます。食器はあちら。材料や調味料は上の棚

に。ティーセットはこちらでございます。オーブンはアヴァント・ハイム製ですので、使い方は人類語でこちらにまとめておきました。それでは、ご自由に。」

「え、あ、はい・・・至れり尽くせり、どうも、ですわ」

ヒキ気味にステフが言う。

「いえ、全ては主と佑馬のためでございます、では」

またふつと消える。

「私の！ためですわ!! うん、では、自分でもびつくりするくらい美味しいお菓子を作つてやろうじゃないですか!!」

脳裏に過ぎるのは、空のいい笑顔と

『良く出来てるなステフ。さんきゅ』

「だ、か、ら、っ!」

がっ、とテーブルに手を当てて。

「違うと言ってるんですのよおおっ!」

と、ガンガンとテーブルに頭を打ち付けるステフを。

それを、扉の外でジブリール。

”俺に惚れる”とは、流石はマスター、面白い要求をされますね」

しかし、それ以上に面白いものを見る様子で。

人類種の感情には疎いジブリールだが、知識としての恋愛感情の性質は知っていた。「惚れるのも一瞬なら冷めるのも一瞬。」惚れ続ける」と命じられてないドラちゃんには、はて、なぜ恒久的影響が出ているのか。ふふ、興味はつきのうございますね。」
そう、小さく笑って、

「にしても、恋愛感情ですか……対等と言われたときのなんとも言えない気持ちも、佑馬のことを考えたら少しだけ気分がよくなるのも、恋愛感情というものでしょうか……わかりませんね……」

そう呟き、再び虚空に溶け込むように消えた。

「へ、赤……ひゃああああ血ですわあああッ!? ひうん……」

自分の血で気絶するステフのお菓子は、もう少し完成に時間を要しそうだった。

side out

佑馬 side

俺たちは今、図書室にいる。

そこには、空、白、俺、ジブリール、

そして、扉の奥から気配を感じる……ステフだろう。

そして今、

「では、ジブリール君」

これ以上はないほどシリアスな顔で、ジブリールを問いただしている空。

「俺に征服される獣耳少女達の国、”東部連合”について、聞かせて貰おうか？」
いつもの空だった。

「かしこまりました、東部連合は、複雑な事情を抱える国でございます。」

東部連合、位階序列十四位『獣人種』の国。

獣人種と一言で言っても、その身体的特徴の差異から、無数の部族が存在し。

そのため長年、内戦と不可侵を繰り返していた、統一性のない小国の島々だったが。

それが突如”巫女”と呼ばれる者によって、わずか半世紀で平定、併合されていき。

いまや世界第三位の大国とまでなった、巨大な海洋国家である。

「身体的特徴の差異って・・・猫耳とか狐耳がいるってことか」

真顔でそこに反応する空に、ジブリール。

「はい。ですが見た目以上に、性能面も大きいです。獣人種という名からケモノじみた身体性能、と思わないよう。部族や個体によつては物理的限界に迫る性能をもち、思考さえ読むのは常軌を逸したその性能故。また『血壊』と呼ばれる個体は、それすら・・・」
「ふむ、まあいい、だいたいわかった、で。」

「獣耳っ子達は俺のもんだ。さあ、どう東部連合を攻め滅ぼそう！」

ぶれないな、と思わず苦笑。

「残念ながらマスター、おそらくそれは不可能でございます。」

水をさしたのは、意外にも空を主と呼び、従うと口にしたジブリアル。

「な、ジブリアル、何のためにおまえを識者として迎え入れたとっ!?! 個人的欲望と国家と利益を満たす神の計画、即ち、獣耳少女をもふる為なのに、どういうことだっ!」

さすががしいまてまの私利私欲と公私混同に、しかしジブリアル。

「申し訳ございません。ですが、いくらマスター達でも、東部連合には勝てないかと。」
その言葉に、空と、隣で本を読んでいた白までもが。

眼を細め、ジブリアルを睨む。

今のは俺も見過ごせない。

「ほう……それは」 「が、負けると言いたいのか?」

「いえ、語弊がありました。ご期待に添えられない、という意味でございます。」

ああ、と思いつ出す佑馬。

そういえばジブリアルは……

「私も、一度東部連合に挑み、負けております。」

空達の目が驚愕の事実により見開いた。

俺も知らなければ驚いてただろうな。

「……マジ? え、しりとりで?」

「いいえ、仕掛けたのはこちらですので、おそらく、相手の指定したゲームと思われるます。」

おそらくといった瞬間空の頭から？が見えた気がした

「付け加えますと、森精達、エルヴン・ガルドも、東部連合に対し過去五十年で四回、公式に『対国家戦』を仕掛け挑んでおりますが、そのいずれも、敗北しています。」

認めたくはない、だが認めざるをえない事実を口にするように、ジブリール。

だが、それより、と。

空はなにかに気づいたようだ。

「・・・まさかとは思うが」

「東部連合は・・・『ゲーム内容の記憶消失』を対価として要求するのか？」

そう、現状、これなら勝つことは不可能であることを意味する。

・・・

俺以外は

恭しく頭を垂れてジブリールが言う。

「さすがはマスター、その為、ゲーム内容の一切が不明でございませう。」

話が終わるまで待とうと思ったが、さっきのことが気になって仕方がない。

「なあ、さっきのマスター」達、というのは俺も入ってるのか？」

「はい…いくら佑馬でも、厳しいかと。」

「なら、一つ面白いことを言ってみようか？」

「「？」」

みんな何を言うのかわからないっぽいな。

「俺さ、ゲーム内容、知ってるんだよね。」

・・・一瞬の沈黙

「な、佑馬、冗談ですよね？」

先に言ってきたのはジブリアルだ。

自分でも記憶がないのに、何故か気になるんだろう。

「いや、本当に知ってるぞ。それに前も同じこといったよな。これくらい気にしてたら

これからはもたないぞ？」

「じゃあ、教えてくれますか!？」

「ああ、だが、空と白には言わない。」

「当たり前だ。ヒントを貰うなんていう屈辱的なことはされたくないからな。」

「というと思ってたよ。ジブリアル、おまえにはちよつと手を貸してほしいこともあるから教えるんだ。他のやつらには内緒だぞ？」

「はい、わかりました。」

そんなじゃあ、

(それはな、電子ゲームだ。)

耳打ちした。

「ひゃあ!／＼／＼」

いきなり顔を赤くして声をあげるジブルールにカメラを構えている空と白。

いつの間に……

(あの、電子ゲームというのは……?)

(そうだな、それは俺たちの世界の文献に書いてあるとおもうぞ。)

(なるほど、それで何をすればいいのでしょうか?)

(それは日を追って連絡する)

さあて、楽しみが増えたぞ!

これから起こることにニヤリと口を吊り上げる。

さて、どう調理しようか。

獣人種編

空間転移

空 side

俺は今、空を飛んでいる。頭を抱えながら。

周りには素晴らしく広大な獣人種の土地。

聞くとここによると、本当に信じがたいのだが、

今までに合計8回挑んで敗けてとられた、元人類種の土地だそうだ。

しかも、その中に王宮まであるという。

これで頭を抱えられずにいられるのだろうか。

そして、隣では佑馬が

血を吐いていた。

その様子をジブリールがとても心配そうな声色で背中を擦りながら声をかけていた。
なんか、羨ましいな。

s i d e o u t

佑馬 s i d e

俺は今、血を吐いている。

それは何故か。

それはここに来る前にある。

数刻前

東部連合のゲーム内容を空が考えていた。

そこで、半世紀で急拡大した国が専守防衛はおかしい、という結論に至る。

だが、ここ十年は東部連合に対して、ある一か国を除き、国家戦を仕掛けていなかった。

ジブリールが直接ご覧になったほうがいいってことで、扉の後ろにいたステフも連れて空間転移した。

俺はそのときに写輪眼を発動し、この空間転移をコピーしようとしたのだが・・・空間転移した瞬間、脳をおもいつきし殴られたような感覚に襲われた。

耳は一時的にだったが、聞こえなくなった。

そう、五感が獣人種並みで一方通行の能力でより精密に観測でき、さらに写輪眼を使ったのだ。

当然、空間転移の瞬間の空間に穴があいたときの“極超高周波”が襲う。

それにより、血を吐いたのだった。

「佑馬、大丈夫ですか？今すぐ図書館へ戻りましょうか？」

ジブリールが背中を擦りながら心配してくれる。

素直に嬉しいし、何よりも安心できた。

とりあえず、解析は終わり、使うこともできそうな感じだが、あの極超高周波は反射するように設定しないと、使用中に襲ってきたら空間転移どころじゃなくなってしまう。

とりあえず、極超高周波は『反射』に設定した。

「ありがとう、ジブリール。」

「なあ、ジブリール、佑馬はなんで血を吐いたんだ？」

「恐らくですが、空間に穴をあけたときの極超高周波が聞こえたのではないかと。」

「それが聞こえないくらい鈍感さでよかったよ。」

空、なんで俺をみながらひいてるんだよ。

「事情はわかった。とりあえず図書館に戻してくれ。頭を抱える場所が欲しい。」

「わかりました。今度は佑馬に聞こえないようにしますね。」

ジブリールのその心使いに涙出そうだ。

「ああ、助かる」

図書館に戻ってきた。

反射に設定したとはいえ、その膜に反応はなかった。本当に聞こえないように配慮してくれたようだ。

閑話休題

テーブルの上で空があぐらをかいて頭を抱えている。

「はああああああ………」

先程からため息ばかりだ。

その膝の上という定位置で白が心配そうに覗き込んでいる。

「にい……だいじよう、ぶ……？」

「ああ、ごめんな白、ちよつと絶望してるだけだ。」

大丈夫ではなかったようだ。

さて、まあここからステフとの多少の衝突があったはずだが、それより確認したいことがある。

「ジブリール」

「どうしました？」

「ちよつと見てほしいものがあるから、少し席はずそう」

「・・・？わかりました」

「というわけで空、おれらは席外すな」

「ああ…… はあ……」

「どんだけ絶望してんだよ。」

「まあいいや、とにかく早く使ってみたいし。」

side out

エルキア図書館前

三人称 side

「ということで、外に出てきた佑馬とジブリール。」

「それで、一体何をするのでしょうか？」

「まあ、見とけて。」

佑馬はとりあえずジブリールの手を繋いだ。

……………。

ジブリールが少し微笑んだように見えたのは気のせいだろうか。
気を取り直して、写輪眼と一方通行を発動。

さっきの脳を精霊回廊の代役として使い、先程の精霊の動きを真似る。
その瞬間、空間に穴が空き、そこには・・・

さつきまでいた上空へと転移してた。

「・・・っ！これは、まさかっ！」

ジブリールから驚愕の声が上がる。

「そう、さつき見て真似てみた。」

「いや、どうやって……まず、人類種には精霊回廊はないはず……。それに、佑馬やマスター達には精霊すら感知できなかったのに……。」

「ああ、それはまずこの眼で空間転移の瞬間の精霊の動きを観察して、解析、その推論から精霊回廊の代役、つまり、脳を精霊回廊の代用品として使ったってわけ。俺の脳は特別製だしな。そのおかげでひどい目にあっただけど……。」

「……。」

驚愕で言葉も出ないジブリール。

人類種には魔法が使えないという既知をあつという間に覆ってしまった。

しかも、それを出来て当たり前のように話している。

まさしく未知を体現している存在。

「まあ、見せたかったのは、これだが、どうだ？ジブリール。成功でいいか？」

「は、はい。成功どころか、全く同じでございました。まさかですが、一度見れば全ての魔法が使えるようになったりするのでございますか？」

「うん？そっただけど？」

その答えにまた驚愕するジブリール。

つまりは、一度見れば全て使えるようになるということ。

（人類種とはかけはなれた力を持つているとはいえ、これほどまでとは思つてもいませんでした。確かに佑馬にマスター達が加われれば、あるいは神すら・・・）

「よし、じゃあ戻るか」

そう言つた瞬間、景色がガラツと変わり、エルキア図書館前にいた。

エルキア図書館

部屋に戻つてみると、そこには本を読み耽つている空と白がいた。

「あれ、ステフは？」

だが、ステフはここからいなくなつてつた。

「にい・・・怒らせた・・・」

「あ、そういうこと。」

「それでよく納得したな!?間違いではないけども！」

いつの間にか元通りの空。

「いや、だって、ねえ?ジブリール」

「はい、マスターなら納得できます。」

二人から辛口の評価を受ける空。

「俺って、どのように思われてるんだ?」

「鬼畜」

「まさかのドストレート!?てかまって!佑馬にだけは言われたくないぞ!」

「ん?俺は鬼畜だけど?」

「あ、もういいです。すみませんでした。」

そういつて再び本に視線を戻す空。

「ジブリール、俺はちよつと行くところがあるから、二人から要望があつたら聞いてやつてくれ。」

コクン、と頷くジブリール。

そうして、佑馬は虚空へと消えた。

「なあ、ジブリール。」

いきなり空が声をあげる。

「なんでございませうか、マスター？」

「佑馬とジブリールってさ、どういう関係なの？」

空が気にするのも無理はない。

先程、一緒にお風呂から出てきたり、そのときに手を繋いでいたり、まるで恋人みただったのだ。

「あ、私と佑馬は恋人関係にあります。」

「ああ、そうか。．．．ごめん、もう一回言ってくれないか。」

思わず耳を疑う空。

え？ 本当に付き合ってたの??

「ですから、私と佑馬は恋人関係にあります。」

聞き間違いではなかった。

そこで空と白は思い出す。

具象化しりとりするとき、佑馬が言った言葉を。

『ジブルールは俺に任せてくれないか?』

そして、何故かきいたとき、口ごもっていた。

つまりはそういうこと。

そしてここには、

(今回はなんかの作戦ではなく、自分の純粋な思いつて訳か。一本とられたな。)

(佑馬・・・いいな。白、も・・・にいに・・・素直に言える、かなあ・・・?)

全く別の事を考えている兄妹と、

(佑馬は今頃、何しているのでしょうか)

なんだかんだで佑馬を気にしているジブリールがいた。

side out

—— 少し遡って ——

ステフ side

ステフは今、自分の寝室にあるキングサイズのベッドに埋もれて、ボソボソと呟いてた。

「嘘つき・・・お祖父様は正しかったって証明するって言ったじゃないですよ・・・っ」

そう、先程、ステフの祖父を「アルコール中毒者」と言ったのだ。

「お祖父様は愚王なんかじゃ、ないですわっ!」

「その通りだな。」

「ひやああああああっ!?!」

いきなりぬつと虚空から現れ枕元を覗きこんでくる佑馬。

「佑馬!?! 一体どうやって入ってきたんですの!?!」

「空間転移。」

「え、あ、はい、もうあなたが何やろうと驚きませんわ。」

なんでこう、いつもこんなに規格外なのだろうか。

「そう? 実は俺ステフのパンツを持ってきているんだが。」

「なっ!?! なにしてるんですのよっ!?!」

「嘘だ。」

ケタケタと笑う佑馬。

だが、今そんなことに付き合う暇はないステフは、

「からかいにきたのなら、帰ってくれませんか?」

そう冷たく言い放つ。

「ああ、じゃあ、真面目な話をしよう。」

そういつて、いきなり真面目な口調になる佑馬。

「まず、お前は空について誤解している」

「私が空について何を誤解しているというんですの。」

「空のあの時の様子を考えてみる、いつもよりネガティブな思想を持っていたらだろ。たぶん、それが原因でそんなこと言ったんだろ。」

「だとしても、言っていることと悪いことがありますわ。」

「それは空も知っている。今、一生懸命前国王の迷惑を見つけようと頑張っているんだ。」

「・・・っ!?!」

その言葉に、少なからず驚くステフ。

「なあ、ステフ。空は、確かに不器用で、人類種のことなんか思っていないように見えるが、実際のところは違うぞ。よく考えてみる、いままで空がしてきたことを。」

そう言つて考えてみる。

まず。イカサマで惚れさせられた。

森精種を破り、国王になった。

効率の良い、画期的な内政を行った。

犬にされた。

ジブリールを所有し、エルキア図書館を取り返した。

「・・・あつ。」

「気づいたか？」

そう、ステフだけが絡む出来事以外は、ちゃんとまともにやっている。

少なくとも、人類種を存続させられるレベルまでは。

「そして、今から前国王を賢王とするのは、おまえが持っているその鍵が必要だ。」

「な、なんでこの鍵の事を。それにこの鍵は人類を託せると思えた人じゃないと・・・」

「つまり、おまえの空に対する評価はそれぐらいのレベルでしかないということだな。」

その言葉が、ステフに深く突き刺さる。

「もう少し、信用してみたらどうだ。」

そう言つて、佑馬は消えた。

「やっぱり信じてみるべきですわね・・・。」

その言葉を聞いて、口を吊り上げて笑う人が一人いたそうなの。

愚王と理解者と異端者

三人称 side

「人選を間違えましたわ。」

ステフは後悔していた。鍵を渡したことに。

空は嬉しそうにその鍵を遊ぶ。

ステフはその隣で笑っている佑馬を睨む。

何故こうなったのか。

その理由は数分ほど前にある。

信用できないのかと佑馬に言われて信用してみようと空がいる部屋の扉の前まできたステフ。

そこで、空は前国王の行為の理由を考えていた。

そして、空は1つの答えにたどり着く。

最後の王宮以外は人類種にとって価値のない土地だったということだ。

そして、そのことからさらに1つ気づく。

何故8回も挑んだのではなく、何故8回で止めたのか。

1つの仮説が浮かぶ。

もし、もしも、ゲームの記憶を失ってないとしたら。

そこまで考えたときに口を出したのはジブリアル。

人類種がみんなマスターみたいに思慮深く行動しているとは限らないと。

だが、それを空は否定する。

している奴もいると。

そして、そういうやつは大抵の場合理解されないと。

ジブリアルは何故そんなに人類種を信用できるのか、そう疑問を持ったときに言った空の一言。

人類なんて信じていない。

人類は途方もない低俗でバカな生き物。

例え、世界が変わったとしても。

その言葉をきいたステフはやはり信用できないと立ち去ろうとしたが、その足を止めた。

空の一言に。

その可能性は信じている、と。

根拠として提示するのは白。

そこで俺もだといってスルーされた佐馬がいたのはご愛嬌。

人の可能性を、希望を、幻想を、その身にやどした『天才』

だから、信じることにしたと。

俺もその『天才』にたどり着けないまでも、近づけるといふ人類の可能性に。人類は信じない。

だが、その可能性は信じていると。

そう、プラスにもマイナスにも無限に。

限界まで愚かであれば、限界まで賢い妹に、追い付けるかもしれない。

その可能性に。

そして決定打となる一言。

『「まずは信じなきや」始まらないんだよ。先王も、さ』

そして、その言葉をきっかけに、扉をあけて意を決して言った。

「ソラ、渡したいものが、ありますわ。」

それを貰った空は

「間違いない、エロ本だ。」

そして、現在に至る。

side out

佑馬side

原作で流れを知っていたため、普通にこの状況を楽しんでいたが、そろそろ時間であ

ることに気がつく。

「空、俺は少し外すわ」

そういつて図書館のベランダへと出た。

そして、

エルキア大使館にいた獣人種に今からいくことを手振りで伝えた。

無言で行くわけには行かないので、置き手紙に一言。

『エルキア大使館に用があるから行ってくる。すぐ戻る。』

そして、エルキア大使館へと向かった。

エルキア大使館前

「うーん、無駄にでかいなあ。」

思わず呟いてしまった。

すると、中から気配がしてきた。

足音は消しているようだが、バレバレである。

扉が開き、獣人種の爺さんが出てきた。

「よくぞいらつしやいました。あなた様はどちら様でしょうか？」

「ふむ、まあ人類種の異端者とも言うておくよ」

会話は軽いが、向こうがこちらを探ってるのがよくわかる。

「とりあえず、中へ」ここでいいよ。要件言うだけだから」わかりました。要件とは？」

「明日、人類種の王がこちらにくることを伝えにきた。さつきあそこからアポを取った

のは、どうせ書欄を受け取ってくれないだろうとわかってたからだ。」

「なるほど、わかりました。が、しかし。書欄を受け取ってくれないというのはどういう意味でしょうか？」

「そのままの意味だよ。何度もアポを取ろうとしたのに返事もないから直接きたつてこ
とだ。」

当然だが、佑馬は実際出しているところをきいたわけでも見たわけではない、ただ知っているだけだ。

「なるほど、確かに書欄を出しておられる。恐らく下の方で勝手に処理されていたので
しょう。論外の対応です。」

やっぱり心は読めないのか、っと再確認した佑馬。

「まあ、そのことはいいよ。とりあえず伝えたからな。」

「わかりました。明日また、お待ちしております。」

そうしてお辞儀をする獣人種。

「なるほど、格下とはいえ外交としての礼儀は弁えているってことか。」

「ええ、外交は話し合いの場ですのよ。」

「なら、こちらも一つ。爺さん、バレてるよ?」

「・・・なんのことでしょうか?」

「ここで思いっきり口をつり上げて言う。」

「心が読める、という嘘だよ。」

「なっ・・・」

「外交は話し合いの場なんだから、そういう部分はいつも以上に気を付けないとね。それじゃあ、また明日。」

そして、今度こそ去る。

後ろから射殺すような視線が送られていた。

——エルキア城、ステフの部屋——

大使館からかえってきたとき、原作知識からステフの部屋へときていた。そこには案の定、皆揃っていた。

「ただいまあー」

「おかえり、佑馬。何してきたんだ？」

手には本があることから、前国王が賢王であることは証明されたのだろう。「明日、大使館に玉がくることを伝えておいた。」

そこでステフが口を出す。

「なっ！勝手になににしてるんですのよっ!？」

「うるさいぞステフ。ありがとうな佑馬。ちやうどアポをどうやって取ろうか考えていたところだ。」

「おう、それじゃあ俺は寝る。ジブリアルは少しきてくれ」

「わかりました。」

そういつてステフの部屋を後にした。

—— 佑馬の部屋 ——

「さて、前いったことを覚えてるよな？」

「私に協力してほしいことですよね？」

「そう、今から伝えるからそれを明日やってね。」

「わかりました。なんでございましょうか。」

ちよいちよい、と手招きをする

そして耳打ちした。

「と、そういうことだ。恐らくゲームに勝つためには必要なことだからな。」
「わかりました。任せてください。」

「それでは、俺は寝るから。おやすみ」
そうしてベッドにつくが、

「どうした。」

ジブリールがベッドに入ってきたのだ。

「いえ、その・・・一緒に寝ようかと思いましたが・・・／＼／＼」
それはなんとも嬉しいことだ。

天翼種は寝なくてもいいはずだが、今はその好意に甘えようと思う。

「そうか、ありがとうな。」

そうして抱き寄せる。

暖かい温もりと柔らかい感触が身体を伝う。

それはとても安心できるものだった。

そしてそのまま口と口を重ねる。

なんだかんだで恥ずかしい。

「おやすみ、ジブリール／＼／」

「あつ．．．おやすみなさい．．．佑馬／＼」

そこに顔を赤くした天使が居たことは誰も知らなかった。

宣戦布告

三人称 side

「・・・首、痛い・・・」

「つたく、無駄にデカいな・・・つかこんな建築技術人類種にはねえよな？」

エルキア大使館を見上げてそれぞれに呟く空と白。

「当然。奪われた後、東部連合が改築に改築を重ねた結果でございます。」

「序列が自分より下の種族に意地になるなんて、なんだかんだで獣人種も間抜けだよな。」

空の問いに答えるジブリールと、獣人種の下らない見栄に苦笑する佑馬。

「ん？下の種族に意地になるってどういうことだ？」

唯一その言葉の意味を理解できなかった空。

「その・・・大使館が城より立派じゃ国の威信に関わると、エルキアは新たに城を建てましたの。」

「ふむ、今の城だな。」

「それを受けて、東部連合が当て付けのように大規模な改築を重ねて・・・」ああ、もう

いい、わかった。」そういうわけですよ。」

思わず苦笑してしまった空。

確かに下らない見栄だ。

その苦笑に答えるようにジブリール。

「ただでさえ、序列十四位の獣人種は、十六位の人類種を過剰に見下す風潮がありますので。」

「あー、俺の苦手なめんどくさい系イベントだ・・・」

と、そこへ一人近づいてきた。

「ここは大使館前。話し合いをしにきた相手をバカにするなど、愚行にもほどがありません、と猿には難しいですか？」

「本当のこと言われたからってそうキレんなよ、大人げないぞ?」

その佐馬の言葉に青筋を浮かべる獣人種の老人。

「わかりました・・・とりあえず中へどうぞ。」

—— エルキア大使館 ——

中に入り、エントランスを抜け、エレベーターに乗り込む。

八十まであるボタンのうち、六十を押して、エレベーターが上昇しだす。

「へっ!?なんですかこれ、床が動いているんですのっ!?」

驚いているステフ一人を無視して、いのが言う。

「そういえば、まだ名乗っておりませんでした。在エルキア次席大使、初瀬いのです。行程の続きですが、先の件からエルキアには過剰に敵対する者が多くおりますので、あのようなことはせめて聞こえないところで言うようにしてください。」

そう、いのが注意するが、

「ああ、悪かったよ。じゃあ、聞こえないように言うわ。」

そういつて、

(なあ、ジブルール)

(なんでございましょうか?)

(こいつ、先の件が自分達のせいってことわかってないよな?)

(それを駄犬に求めるのは厳しいことです。)

(にしても、見下しすぎだよな。たかが十四位が。)

「お二方、ちよつとよろしいかな!？」

ボソボソと耳打ちで悪態をつく佑馬とジブルールに、

いのが待ったをかける。

「ん?どうした爺さん、なんか問題でもあつた?」

「せめて聞こえないように、と言ったのが聞こえませんでしたかな?」

「うん、だから、爺さん以外には聞こえないだろ。さっきの言葉通りなら、過剰に敵対してない者の前では言ってもいいってことだ。あんたは敵対視してることを肯定してないから言ってるんだよ。理解したか？」

また青筋を浮かべる獣人種の老人

・・・煽り耐性皆無だな。

「ハゲザルが。自分達の立場を弁えては？外交をしにきているならなおさら「え、俺に外交上の立場なんてないけど」・・・は？」

「俺がいつ外交官と名乗ったよ。俺はこう言っただけ。『人類種の異端者』と。」

そのまま黙るいの。

そう、つまりは、なんの立場もない。

空と白は王として。

ジブリアル、ステフはその付き人。

だが、佑馬はただ暇だからいるだけ。

空や白の付き人でなければ、なんの地位もない。

そして、そこでやっと到着した六十階。

佑馬たちは客間に通され、ソファーに座った。

空は周囲をただ見回し、ジブリアルは涎を垂らしている。

「では、初瀬いづなをお呼びしますので、少々お待ちください。」
初瀬いづな、在エルキア東部連合大使だ。

一礼して奥へ去っていくのを見送って。

キヨロキヨロしていた空に倣って、ステフも部屋を見渡す。

「それにしても、豪華ですわね。文明力の格差を痛感しますわ。」

大理石や、一目で希少資源とわかるもので作られた部屋。

革のソファーにスプリングまで。

だが、空が探していたのは、そんなものではない。

「……に、アレ」

「ああ、わかつている。」

「お、どうやら謎はしっかりと解いたようだな。」

「まあな、仮説の状態ではあったが、今確証がとれたよ。」

そう話す空、白、佑馬。

そこへジブリール。

「佑馬、あれをご存知なのですか？」

ジブリールが指したのは。

テレビ。

「そう、それがゲームで使われるものだ。」

「なるほど。」

これが電子ゲームの核と理解したジブリール。

「お待たせしました。」

と、いのがドアをガチャリと開けて戻ってくる。

「東部連合・在エルキア大使、初瀬いづな、でございます。」

そう紹介され、扉をくぐって現れたのは。

黒目黒髪のポブヘアーに、フェネットクのように大きく長い獣耳と尻尾。

そして、大きなリボンを腰につけた和服の、どう見ても年齢一桁台の少女がいた。

「か……」

立場を忘れて、可愛いと思わずステフがこぼすより早く。

「「キング・クリムゾン!!」」

「うふふ獣耳の麗しき幼女おにいさんと遊ぼうかなあに怪しい人じゃないのですこと

よ。」

「……ぷにぷに……ふわふわ……さわさわ……ふふふふふふふ……」

「これが本物!?!すげえ可愛いじゃん!!」

いつ移動したのか。

ジブリールの目をもってしても認識できなかった空、白、佑馬。

三人はとづくに少女の頭、尻尾、耳を的確に撫で回していた。

そんな三人に、獣人種の少女、いづなが。

コロコロと、かわいらしい声で、応じた。

「なに気安くさわってやがる、です。」

.....

「.....え?」

「.....かわいい、さ.....まいなす.....五十、ポイント。」

と呟く空と白。

「あはは!確かにこれは違和感満載だな!」

いづなの言葉遣いを実際に聞いてあまりの違和感さに爆笑しながら撫で回すのをや

めない佑馬がいた。

その光景を羨ましそうに見ている天使がいたとかいなかったとか。

閑話休題

「そこのハゲザル二人、勝手にやめんな、です。」

「え.....と、はい?」

「はやく、続けろや、です。」

今は佐馬に尻尾を撫でられているので、首を差し出しながら言ういづな。

「えーと、あー、よろしいのデ？」

「いきなり触りやがったの、驚いただけだろ、です。イヤって言うてねえ、です。」

言葉と表情の不一致に、だが早々に理解した様子の子の空。

「……あー。語尾に『です』ってつけければ丁寧語になるわけじゃねえですよ？」

「……っ!?そーなのか、です!?!」

と、ここで気づいた空。

この世界では人の嫌がることはできないことに。

つまり、撫でることが出来た時点で、それはいづなが許可していたということ。

「……お気になさらず。孫はエルキアに来て一年、まだ人類語が苦手です。」

それと、と表情を変えて。

「おいゴラ、ハゲザル。こつちが礼儀正しくしてりやチョーシくれてんじやねえぞクソ

が。なにカワイイ孫を薄汚ねえ手でペタクリさわってくれてんだよ死なすゾ」

と、再び礼儀正しい笑顔に戻って。

「と、言われるような行動は、お控え願いますでしょうか。」

それに半眼で空がこぼす。

「ジジイ、人類語どうこうじゃねえ、テメーの影響だよ。」

「はて、何のことか理解しかねますな。」

と、そこでまた佑馬とジブリールがコソコソと話始める。

(ジブリール、今のきいたか?)

(はい、全くもってありえませんが。)

(だよなー。自分のせいなのを時間の、もつと広げれば孫のせいにしてるんだぜ?)

(情操教育という言葉をご存知ないようですね。)

(しかも、こつちが礼儀正しくだつてさ。俺エレベーターでハゲザルって言われたんだ

けど。これは外交上礼儀としてはダメだよね。)

(そこを駄犬に求めるのはいかなものかと。)

(てかさ、それ以前に撫でたことで盟約からも本人からも許可とれてんのに、何様のつ

もりかね。)

「おいゴラ、バツチリ聞こえてんゾ！」

「バカかよ。聞こえるように言ってるんだよ。」

いこの顔に青筋がビキビキと浮かび上がる。

「いいか? いづな。こんな人のせいばかりする大人には絶対になるなよ? あ、俺佑馬

な。」

「俺は空だ。こつちは妹の白。よろしくな。」

ソファーに座り、恍惚の表情で天井を眺めるいづなと、こめかみをひきつらせるいの。机を挟んだ対面に、空をはじめ、五人が座り、向かい合う。

「では、そろそろクソザルどものご用件、伺っても宜しいですか？」

「思考読めてんだろ、言うまでもないっしょ。」

「おい、爺さんのその言葉、よく覚えておけよ。」

「ここは外交の場です、口頭や書面を交わす場だと、サルには難しすぎますかな？それと、佐馬殿。別に間違ったことは言っていないのですが。」

「孫の扱いで負けたからってキレんなよ爺さん。大人気ねえな。」

「空もやっぱりそう思うよな！」

いのの笑顔にヒビが入っていくなか、更にジブリールのとびきりの笑顔で。

「マスター、佐馬、獣人種のコンプレックスの塊の如き精神は、ガラス細工のように傷つきやすく脆いのでございます。あまり刺激しないであげて頂けませんか。哀れでございます。」

いい加減、笑顔を保つのも限界ないの。

何もかも爽やかに忘れ、こいらを叩きだそう、そう決め考え空の目を覗き込んだ。

瞬間。不覚にも背筋に悪寒が走るのを、いのは感じた。

そこに、一瞬前までのふざけた、おちやらけた男はいなかった。

そこにいたのは、傲慢不遜なまでの自信に満ち、途方もない打算を行っている。紛れもない『一族の王』だった。

「単刀直入に言おう。」

「俺達人類種は『大陸にあるてめえらの全て』を要求する。じゃあ、あとは佑馬頼んだ。」
「おっけーい。」

そして慣れた手つきでエレベーターを操作して降りていく空たち。

今ここにいるのは佑馬、ジブリール、いづな、いのの四人だ。

「それで、そちらが賭けるものはなんでしょうか？」

そこで佑馬が答える。

「はあ？なんも賭けねーよ。」

「まさかクソザルもここまで頭が「バカかてめえは。」そろそろこちらもキレますが。」

そう青筋を浮かべるいの。

「てめえらに元々、逃げ道はねーんだよ。」

「どういうことですか？」

「じゃあ、こう言ったらどうだ。『てめえらがこのゲームを受けなければ、電子ゲームというゲームとその内容、また嘘は見破れるが心は読めないことをディスプレイボード中に言いふらす』これでどうだ？」

そこでジブリアルに目で合図を送る。

その瞬間、

ジブリールから佑馬に向かって質量を帯びた濃い殺気が放たれた。

それを見たときに一気に飛び退く獣人種二人。

全身から冷や汗がダラダラと流れ出て、目の前の存在からは逃げられないことを本能がつける。

「あれれー？クソザルがこの殺気程度で動じないのに、十四位様（笑）がなんでそんなに焦ってるのー？俺に向けられた殺気だよー？」

そう、これは佑馬に向けられた殺気。

その余波でしかない。

「・・・っ！」

あまりの状況の悪さに悪態付くいの。

「どうだよ、てめえがクソザルとか言ってみ下していた相手に遊ばれる気持ちはよもつと遊んでやろうか？例えば、そうだなあ。」

そして、口元をニヤリと吊り上げて。

「この殺気を直に受けてみたりするか？」

ケタケタと笑う佑馬に青ざめていくいの。

「嘘だよ、他の国に情報流すだけにするよ。」

「・・・っ！」

何も言い返せない。

圧倒的圧力の中、佑馬だけが淡々と喋っている。

いづなは足をガクガクさせ、泣きそうになりながら辛うじて立っている状態だ。

「なんだよ、怖くてなんも言えねーのか、つまんねえ。」

と、心底つまらないものをみるようにしていのといづなを見下す佑馬。

「まあ、いいや。賭けるものは伝言で聞いている。それはだな。」

少し間をあけて、

「『人類種の『種の駒』だ!』」

「?!?!」

「さて、用件は終わりだ。ジブリールご苦労さん。」

「いえいえ、駄犬が怖がっているところはなかなか面白いものでしたので。」

「今度一つだけ言うこときいてあげるよ」

「ほ、本当でございますか!?!」

と、普通に会話しているジブリールと佑馬

そこで思い出したように、

「あ、ゲームの内容知ってるかどうかの信憑性だけど、『精神没入電子ゲーム』とだけ、それでわかるだろ？日時はそつちで決めてくれ。決まり次第連絡よろしくー」

「あ、最後にひとつ。クソザルどものご用件、どうだった？後、君たちにもチャンスあげるよ。ゲームを受けてくれたら、俺達はその内容を口にすることはできないという文言も追加していいよ」

と言って、ジブリアルと手を繋ぎながら帰っていった。

いのといづなは、その姿を震えながら後ろから見ていた。

勝利への1ピース

三人称 side

「ただいまあーつと。」

「お、おかえり、どうやら上手くやったようだな。」

「当たり前だろ？俺、なめられてんのかなあ？」

「冗談だつて。まあ、お疲れ。」

そう軽口を叩き会う空と佑馬。

「あの・・・ちよつといくつかいいのですの？」

「ん？どうした？」

「まず、一つめ、これはどういうことですか？」

つと言つて出したのは、『種の駒』

「あー、それね。東部連合とのゲームのチップとして使っただけだ。安心しろ。」

「あー、なら安心ですね♪つてなると思つているんですの!?何勝手にかけているんですの!?せめて審議くらいは「安心しろつて言っただろ。」でも・・・」

「まずな、俺らが負けるなんて確率、1%もねーんだよ。逆に考えなよ、『種の駒』をか

けられるほど自信があるってさ。」

「・・・わかりましたわ。でも、なんで佑馬が『種の駒』をかけられたんですの?」

そう、王、『全権代理者』でない佑馬が、何故それをかけられたのか。

「ああ、”盟約に誓って”ゲームしたんだよ。俺が負けたら『種の駒』の所持権を持つことになったんだ。期限は今日が終わるまでだけどね。」

「あ、なるほどですわ。」

佑馬が何故負けなければならなかったのかは、言うまでもないだろう。

それを知ってるが故に、佑馬も承諾したのだから。

「それじゃあ、最後に、ある意味これが一番気になってましたわ。」

『種の駒』よりも気になること・・・?」

つと全員ハテナを浮かべたが

「なんで佑馬とジブリールは腕を組んでいるんですの!?!」

そう、佑馬とジブリールは腕を組んでいたのだ。

手からグレードアップしたのである。

「「「あ・・・」」」

全員が察した。

こいつ、まだ知らなかった、と。

「あー、なんでかって、付き合ってるからだ、腕組みくらい普通だろ、な？ジブリール」
「当たり前のことと、私も記憶しておりますよ♪」

「え、付き合ってたんですの……いや……でも種を越えての恋愛は歴史上前例がありませんわ……」

そう、前例がない。

”残っている史実には”という文がつくが。

「前例は覆すためにある！俺や空、白はどういう存在だったのか、教えたまえよジブリール君！」

「はい♪マスターや佑馬は既知をも覆す未知な存在でございます♪」

「ということだ、ステフ。問題ない。」

「はあ、もういいですわよ……」

そういつてガツクリと肩を落とすステフ。

ジブリールが若干嬉しそうにしてるのは気のせいではないだろう。

「んじゃあ、通達がくるまでゆっくりと休んでいますかあ。」

そういつて、空と白がくつろぎ始めるが、

「白、少し話がある、空が見える距離までいいから、来てくれないか？ジブリールはここで待っていてくれ。」

と言つて歩き出す佑馬。

「早く戻つてきてくださいいね？」

「……？」

こくん、と首を傾げながらも佑馬についていく。

「こくらへんが限界かな？」

「……う、ん……。」

ちよつと震えている白。

「まず、一つ白に言つておきたいことがあるんだ。」

「……ん、」

「白は確かに空とずっと一緒だ。ただ、近いうちに少しだけ離れるときがある。その時、白は絶望に陥るはずだ。そうなったとき、俺に頼つてこい。絶対その謎を解く鍵になることを約束するよ。」

こくん、と首を傾げる白。

何を言っているのかわからないようだ。

「まあ、わからないよな。一応頭の片隅に残しておきな。あと、このことは他の人には内緒な。」

「……わかった……。」

「そんじゃあ、待ちますかね。」

と言いなながらジブリールの元へもどっていった。

東部連合に宣戦布告してから一週間。

・

空が『人類種の駒』を賭けたという噂がどこからか広まった。

国王選定戦の際、空が森精種の間者を破り。

天翼種も表向きは空が破ったことになっていないため、「空こそが他国の間者ではないか」という気運が高まり。

ただでさえ空に対して反感を持っていた貴族達が扇動、デモが発生。

エルキア城は人垣に包囲され、連日罵倒の言葉を浴びさせられていた。

「ソラ・・・もう抑えておくことは出来ませんわよ・・・」

と、疲れて足取りでステフがこぼす。

空達に対する疑念は、大臣たちの間にすら広まっていた。

中には今、あのデモの中に参加している大臣すらいる始末である。

「こつちについていた貴族達も、今回の件はさすがに擁護出来ないと・・・大臣達もボイコットし出しましたし、エルキアは今、事実上の無政府状態にありますわ・・・」

空への不信感は、ステフとて同じだろう。

それでも必死で収めようと奔走していたらしきステフ。

手を打ち尽くしたのか、へたつと床に座り込んで報告する。

「おつかれステフ。けど、東部連合とのゲームが終われば、全て解決する。」

相変わらず王座に座り、白とゲームしてるだけの空。

ステフをねぎらうが、同時に、苦笑して言う。

「俺らが他国の間者だあ？おせえよ。森精種を破った時点で疑つとけよ。」

といって、国民を嘲るように笑う空に、やはりステフの不信感は、拭えない。

「・・・どうする気ですか？外はデモまで起こってますわよ。」

「別に、好きにやらせとけ。」

デモなんてしても、この世界では無意味だ。

空達の決定に不服があるなら、全権代理者の権限を奪うしかない。

だが、誰も挑みに来ない。

つまりは、みんなその程度の覚悟ということだ。

「・・・で、ソラはこの一週間、何をしてるか、聞いても宜しいのですか？」

それは半分皮肉で、半分は本音から説明を求めていた質問だったが、返ってきた言葉

は簡潔。

「待ってる」

「・・・東部連合が、受けるという返答を、ですの？」

「んー、いや、それはまだ困るなあ、もうちよつと待ってほしい。」

「あ、その件ならたぶん大丈夫だぞ。いろいろかまかけていたから、恐らくあと5日は返事はこないよ。」

と、近くにいた佐馬が答えた。

かまかけたというのは勿論嘘なのだが。

「そうか、助かるわ。東部連合の前に、”ピース”があるんだよ。つか、おせーな。」

そう誰へかわからない不平をこぼす空に。

ふと、佐馬の近くにいたジブリールが、反応する。

「マスター、これは・・・」

だが、ジブリールが何か言う前に、それを遮って空が言う。

「ああ、やつときてくれたか。待たせすぎじゃね？」

そう、言う空の視線の先を辿る一同。

しかし、その視線の先に、誰もいない。

佐馬はその先をみて口を吊り上げて笑っている。

ジブリールは、何かの気配だけは感じているらしい。

だが、ステフにも、そして。

白にすら、見えていないものと、空が会話する。

「ああ、用件はわかってる。当然、いつでもいいぜ。」

そう言つて、膝上の白をすつと持ち上げ、立たせる。

そして自身も立ち上がり、周囲を見回す。

白、ステフ、佑馬、ジブリール、そして。

空と佑馬は見えている『ソレ』を不敵に睨んで。

空は深く息を吐いて、白に向かって、言う。

「白、よく聞いてくれ。」

「……うん？」

「俺は、お前を信じてる。」

「……白も、信じてる。」

即答で応じる白に、だが笑顔だけを返して。

「白、俺らは、いつも二人で一人だ。」

「白、俺らは、約束で結ばれている。」

「白、俺らは、少年漫画の主人公じゃない。」

「白、俺らは、常にゲームをはじめの前に勝つてる。」

淡々と、意味の汲み取れない言葉を連ねてく空に、

「……にい……?」

何か、とてつもなく、嫌な予感が込み上げて。

不安げに白が、兄を呼ぶ。

その声に応えるように、微笑んで、妹の頭を撫でる空が言う。

「東部連合を飲み込む為の、最後のピースを手に入れて来ようぜ。」

そして、ソレに向かって、笑って言った。

「さあ、ゲームを始めようか？」

白side

窓から差し込む日差しが、まぶたを貫く。

「……ん……うう……。」

だが、覚醒することを拒み、なおもまどろむ意識。

もつと寝ていたいという欲望に忠実に、寝返りをうって二度寝に戻る。

いつものように、兄の腕をつかんで、もう一度眠りに

と、目を閉じたままさぐる手が、そこにあるべきものをつかめず、ただ空振りする。

「……う……?」

また、ベッドから落ちたとだろうか。

だが、寝ぼけた頭で、もう王の寝室のベッドでは寝ていないことを思い出す。

嫌々、兄の姿を確認してつかもうと、まどろんだ目を開くが、

そこに、いつもいるべき者の姿はなかった。

s i d e o u t

ステフ s i d e

「ふ、ふふふ．．．今日こそ天罰の時ですわ。」

エルキア城の廊下を、おぼつかない足取りで歩き、今度こそ勝つべく王の寝室へと向

かう。

昇ったばかりの日が、徹夜明けの意識を刈り取りそうになる中、不穩に笑いながら「シロ、起きていますわよねっ！もう朝ですわよっ！」

ドゴンドゴン、と。

トランプでふさがった手の代わりに、扉をノック（キック）して、王を呼び捨てにする。

だが、そもそも扉がちやんと閉まってなかったのか、そのノックだけで扉は自然と開き、

「あ、あれ．．．ひよつとして起きているんですの．．．？」

と、王の寢室を覗いたが、そこにいたのは．．．

side out

三人称 side

ステフが王の寢室を覗いて見た光景は

「にい．．．にい、どこお．．．しろ、が．．．わるかった．．．からあ．．．もう．．．、ベッド．．．おちない、からあ．．．でて、きて．．．ひうつ．．．」。

膝を抱え、ただ震えて大粒の涙を流す白。

「ちよ、え、ど、どうしたんですのシロツ!?」

先程まで、天罰などと息巻いていたステフだが、あまりの様相に、トランプを床に捨てて慌てて白に駆け寄る。

「ど、どうしたんですの!?! 具合でも悪いんですのっ!?!」

だが、ステフの声が聞こえていないように、白はただ泣きながら呟き続ける。

「にい……にい……でて、きてえ……しろ、ひとりには、しない……でえ……」
その呟きに、本気で心配した様子で、ステフが言う。

「あ、あの……にいつて誰のことですか? そ、その人を連れて来ればいいんですの?」
と。

白の耳にようやくステフの言葉が届く。

ステフは、何を言っているのだろう、と。

自分の兄など、一人しかいないだろう、と。

ケータイを手にとって、アドレス帳を開く、が。

「……うそ……」

そんなわけ、ない。

白のケータイに登録されている番号なんて兄一人だ。

なのに。

どうして。

「どうして携帯に『登録者 0』と表示されるのか。

「・・・そんな、はずない・・・うそ・・・うそ・・・うそ・・・」

ただでさえ白い肌から、更に血の気が引いていく様子に。

ステフはただならぬものを感じて、必死で声をかける。

「し、シロ、ねえ、大丈夫ですよっ!? どうしたんですのよっ!!」

だが、ステフの存在すらもう認識してないかのように。

白は猛然とケータイの、メール履歴、ゲームのアカウントからアドレスまで。

画像フォルダの内部フォルダまで開いていくが、ない。

一切、兄の形跡がない。

「……うそ……こんな……ぜったいに、うそ……」

慌ててケータイで、日付を確認する白。

21日。

兄が自分と王座でゲームしていたのは、19日。

白が、瞬時に映像記憶で遡って、携帯ゲーム機、タブPC、ケータイで見た複数の端末の表示が全て、19を指していたことを確認する。間違いなく、19日だった。

だが、ならば20日。

つまり昨日、自分は何をした？

ない。

記憶が一切、ない。

五年前読んだ本を、記憶だけで逆から読める白の記憶が。

まるで、丸一日を寝て過ごしたように、一切が途切れている。

兄が、隣にいない。

ケータイのアドレス帳にも入っていない。

メールも履歴も形跡の一切が残っていない。

兄を証明する根拠が、なにもない。

状況を整理した白。

ここから導き出される可能性は、三つだけだった。

可能性1

なんらかの力が兄の”存在”をこの世から消したか。

可能性2

自分が、ついに”狂った”か。

可能性3

あるいははじめから狂っていて”今正気に戻った”か。

だが、その可能性のどれが正解であろうと、白にとつて、目の前が暗くなっていくのを堪えるに値する答えではない。

予想される、だが、決して聞きたくない故に。

ここまで、口にせずにいた名前を。

最後の希望を込めて、ステフに、問う。

「ステ、フ……にい……『空』、は……どこ……?」

だが、かくして返された答えは、予想通り。

決して聞きたくなかった、答えだった。

「ソラ?名前、ですわよね。誰ですの?」

ああ、願わくば、これが、たちの悪い夢でありますように。

眼を覚ましたら、いつも通り隣で兄が寝ていて、ただ一言、『おはよう』と言ってくれるように。

ただ、それだけを願いながら。

目の前が暗くなる感覚に身をゆだね、白は意識を手放した。

「どう、ですの?」

王の寝室の扉の前で、ステフがジブリールに尋ねる。

だが、ジブリールもまた、タメ息をついて頭を振る。

「なにも。私の入室も拒まれ、取り付く島もない状態でございますね。」

「相変わらず、”ソラ”って言い続けているだけ、ですの?」

「ええ、そちらは如何で？」

「城内スタツフに手当たり次第聞いてみましたわ。みな答えは同じ「ソラなる人物は知らない、エルキアの王はマスター一人、でございますか。」ええ、どういふことですかの？」

「順当に考えれば、マスターの記憶が書き換えられたことになるのでございすが」

「それって・・・」

「はい、マスターが、負けたことを意味します。」

酷い違和感があった。

突然、『ソラ』なる正体不明の人物を呼び続け、茫然自失になった白。

状況そのものがまるで意味不明ではあったが、それ以上の違和感に、二人は閉口する。

その会話が聞こえていたのか。

扉の下からすーっと、薄い板が差し出される。

「・・・？これ、例の・・・」

「マスターの、タブPC、でございますね。」

床からそれを拾い上げるジブリールとステフ、ふたりして画面を見る。

「えっと、なんて書いてあるんですの？」

「マスターの元の世界の言語でございます。『質問』と書かれてございます。」

ぼこつ、と音。新しいメッセージが表示される。

「なるほど。筆談ならぬ”チャット会話”がお望み、でございましたか。」

主が持ち込んだ異世界の膨大な知識。

その全てを把握するにはさすがに至っていないジブリール、だがその意図は汲む。

「今度はなんて書いてあるんですの？」

「『1、ステフに惚れろと要求した人物は?』と」

「シロ、じゃないのですの?」

「さようですね。これは、返信はどうすれば・・・」

操作方法がわからないでいるジブリールに、だがすぐ、ぽこつという音が届く。

「なるほど、回答は口頭でよいと。『2、十一歳の同性が、惚れろと要求した?』と書かれています。」

「え、ええ・・・だ、だから変態だ鬼畜だつて散々言ってるじゃないのです・・・。」

口を引きつらせながら答えるのと、更なるメッセージが届くのは同時。

「『3、どうやって負けたか、詳細に』だそうでございます。」

白の状態を考え、安易な答えは出来ないステフ。

出来るだけ詳細に思い出そうと、額に指を当てて必死に思い出す。

「えーつと、ジャンケンでしたわ。私を挑発して、心理戦で、あいこ狙いの。でも重要だったのは”要求内容”のほうで、具体性のない条件をあいこで求められましたわ。そ

れでペテン師呼ばわりした私に。でも問答無用で『惚れる』と言われましたわ。」
ステフが言い終わると同時、次のメッセージが届く。

『4、自分のものになれ、ではなく何故“惚れる”と要求されたか』と。

「貢がせるためですわ。あとでミスだったと気づいて悶えてましたわ。シロが。」

そして、またすぐにメッセージが届く。

『5、ジブリールと対戦した人物の名は?』と。

「えーっと、シロと佑馬ですわね。」

「それは、私も同じように記憶してございますね。」

そこで、メッセージが止まる。

「そういうえば、佑馬はどうしているんですの?」

静寂が流れるなか、まだここにいない佑馬が何をしているのかステフが聞く。

「ええ、確か『まずはおまえらがなんとかしてみろ、それでもダメなら呼べ』って言うて……ございました……。」

その時は首を傾げたジブリールだが、今ならその言葉の意味が理解できた。

「それって……っ!!」

ステフもその意味に気づく。

「マスター、佑馬を連れてきます!少し時間を下さい!」

すぐにぼこつと音がなった。

『頼んだ』と。

side out

佑馬side

俺は今、自分の部屋にいる。

どうやってここに来たかは分からないが、何故ここにいるかはすぐに理解できた。

即ち、空が消えたのだと。

「つたく、すげえモヤモヤするな。いるってわかるのに、その記憶がないとか……。」

とりあえずジブリール達に任せしたが、確実に呼びに来るだろう。

そう思った矢先

「佑馬!今すぐマスターの元へきてください!」

ジブリールが空間転移（シフト）してきた。
「ああ、わかった。」

そう言つて、王の寝室へとシフトした。

side out

白side

ジブリールにメッセージを送った後、希望の光が少しずつ出てきた。

佑馬はこの状況を今日ではなく、数日も前から予測していた。

『白は確かに空とずっと一緒だ。ただ、近いうちに少しだけ離れるときがある。その時、白は絶望に陥るはずだ。そうなったとき、俺に頼つてこい。絶対にその謎を解く鍵になることを約束するよ』

前に言つていたこの言葉。

ここにかんがりのヒントが含まれている。

まず、近いうちに少しだけ離れる。

つまり、少しだけ離れるが、また戻る、

”空はいる”ことを示唆している。

そして、それを解く鍵は佑馬にあると言っている。

それは、自分を絶望から救い上げるには充分すぎるものだった。

side out

三人称 side

王の寝室の扉の前に佑馬とジブルールが現れる。

「ふむ、やはりお前らじゃ白を迷わせるだけだったか。」

自分が呼ばれた状況から、そう言う佑馬。

「申し訳ないですの。私たちではどうしようもなく。」

「申し訳ございません。私ではどうすることもできませんでした・・・」

ステフと佑馬が申し訳なさそうに頭を垂れながら言う。

「まあ、いい。白、そこにいるな?」

『うん』と、メッセージが届く。

「まず、答えから言う。俺はお前の兄『空』を知っている。」

「っ!!」

その言葉にステフとジブルールは驚愕する。

この場にいなかった佑馬が、白がずっと言っていた『空』の名前を出したのだから。

「だから、まず扉を開けて出てきな。」

そう佑馬が言うのと、ガチャ、つと扉が開いた。

そこには目を真つ赤にした白がいた。

「よし、まず言うことがある。これは少なくとも空と白、「」の問題だ。俺は鍵になるだけで、白がちゃんと解け。いいな？」

こく、と頷く白。

「まず白、今の状況を整理して、言ってみろ。」

「ん、まず起きたとき……にいが、いなかった……。ケータイ……。の、アドレスにも……。メール、も……。履歴も……。にいの……。形跡が、なかった……」

と言った白に。

「そうか。ならもう一回全部整理してみな。起きたときから、全部の記憶を。」

と言う白。

無言で今言われた通り整理する。

朝、兄がいない王の寝室のベッドで起きた。

そして、寝室にステフが……

王の寝室???

「気づいたか？」

そう口を吊り上げながら言う佑馬。

そう、この部屋はステフの部屋のはず。

何故、そこに自分が寝ているのか。

「そこに気づいたら、空に言われた言葉をよく思いだしな。俺からはここまでだ。」
そう言われて、考える。

「白、俺らは、いつも二人で一人だ。」

「白、俺らは、約束で結ばれている。」

「白、俺らは、少年漫画の主人公じゃない。」

「白、俺らは、常にゲームをはじめめる前に勝っている。」

そのときは意味がわからなかった言葉。

だが、今ならわかる。

白、俺らは、いつも二人で一人だ。

兄は自分を一人にしない。

つまり、兄はこの部屋にいるということになる。

二人で一人、ならば自分もゲームに参加していた、否、参加している。

兄は言った

常にゲームをはじめめる前に勝っている、と。

ならこの状況は全て想定通り、わざと行っていたものだということになる。

兄は言った

俺らは、少年漫画の主人公じゃない、と。

少年漫画の主人公、それは成長するもの。

この場合、白が成長するフラグ。

空抜きでもやれるようになるが、兄はそれをハッキリと否定した。

兄は言った。

俺らは、約束で、結ばれている、と、

自分達は、二人で一人。二人で、完成品だと。

兄は言った

最後のピースを手に入れて来ようぜ、と。

つまり、東部連合との勝負を有利にするもの。

なら、敵は東部連合ではない。

なら誰だ。

そう考え込む白に、佑馬は微笑みを浮かべながら、見ていた。

side out

しばらくして

「国王選定戦で・・・戦つ、た・・・人・・・」

そう白が口にした。

「ご名答。よく頑張ったね。ご褒美は兄に貰いな。」

その言葉を聞いて、白は意識を無くした。

「シロツ!? (マスターっ!?)」

いきなり倒れた白に近寄るステフとジブリール。

「考えすぎたんだろう。少し寝かせてやれ。」

そう言って、今までの経緯を考える。

自分は原作知識があり、当事者ではないので、そこまで気持ちに変化はない。

だが、もし立場が同じで、この状況に陥ったとき、自分は同じように相手を信じて、答えを出せたか。

(やっぱり、すげえよ。空も白も)

結果は否だ。

そして苦笑を浮かべていると、ステフとジブリールが不思議そうに見てきた。

side out

White

どれくらいだったのか

どうやら自分は気絶してしまっただけらしい。

「シロ、大丈夫ですか？」

心配そうに呼ぶステフの声が聞こえ、意識が再浮上する。

「……っ！」

状況を確認しようと動かしだした視界に兄がいないことに、咄嗟に飛ばしそうになるのを。

だが、辛うじて思考がとどめた。

兄はこの部屋にいる。

ならば、もう何もおびえることはない、と。

「……だい、じょうぶ……」

痛む頭を抱えて、汗に濡れた身を起こそうとするが、ステフに押し留められる。

「もう少しゆっくり休んでいるんですの。」

「……ん……」

今はその通りにしておく。

「……ジブリール……」

「なんででしょう、マスター。」

「ジブリール……つく、れる？記憶を、消す、ゲーム……」

問われて、ジブリールは考え込んだ。

「具象化しりとりのような仮想世界ならば……ですが、ここは現実でございます故。」

「……森精種と、合作……なら？」

「が、合作っ!?!あの森の田舎者どもとでございますかっ!?!」

心底嫌そうな声上がる。

彼女にとっては想像もしなかった話だったのだろう。

「ジブリール、真面目に考えてみてくれ。」

そう佑馬に言われて、真剣に考えるジブリール。

「森精種の術者次第でございますが……不可能ではない、かもしれない。」

「……それ、に……不正が、仕込まれ……ない、保証。でき、る？」

「出来ませぬ」

「ぜ、つたい？」

「はい、これ程の事象変動を起こす術式なら、ゲームを起動させるのは私でしょう。術式に不正があれば、そこで発覚します。」

ということとは、やはりこの部屋にゲームの基盤があるということになる。

だが、何処を見回してもそれらしいものはない。

なら、

「……ジブリール……この部屋……魔法の、反応……ある、はず……」

その問いに、

「それなら、ステフ。そこらへん歩いてみ」

佑馬が部屋の一角をさして言う。

「この辺ですの？何かあるんですの？」

言われた通り床に視線を落としながら歩くが、突然、何かに足を取られたように躓いて盛大に転んだ。

「……ドラちゃん、何もないとところで転ぶとは、これ以上のキャラ付けは不要かと。」

だが、立ち上がりながらこちらに向ける視線は、きよとんと。

「……え？転んだ？私がですの？」

その言葉に、ハツとなる。

「認識は出来ずともそこにある。触れることも、自覚が持てないだけということですか？」
ジブリールの言葉に頷いて、歩きだす。

認識できなくても、そこにある。

ふと、ステフが転んだ辺りに何かあるのを見つけた。

小さな箱にはいった、漢数字の刻まれた、表と裏で白と黒の、コマ。

一方別の箱には、エルフ数字が刻まれた、同じようなコマ。

そのコマの正体を暴くのは、極めた簡単だった。

「・・・オセロ・・・の、コマ。」

「どういうことでございましょう。これが、ゲームのコマでございしますか？」

何故ゲーム盤は見えないのに、コマは見えるのか、という意味だろう。

だが、それなら理由はわかつている。

「・・・まだ、使われてない・・・か、ら」

使われてない、認識出来るコマ。

記憶が奪われ、認識からも外されるゲーム、まだ終わってないゲーム。

その全てが今、一本に繋がった。

ルールはおそらく、

「・・・記憶、か・・・存在を・・・コマに分割、して・・・奪い、合う・・・ゲーム。」

その眩きに反応したのはジブリール、ステフ、そして佑馬。

「お、お言葉ですがマスター……」

「そんなルール、しよ、正気ですのっ!？」

「ご名答、ここまでこれば後は自力で行けるな。いや、ここまでもほぼ自力だったか。でも、ここからは完璧に」「」の舞台だな。」

その佑馬の言葉にまた反応するジブリール。

「佑馬はここまでわかっていたのですか?」

「ああ、この事件が起こった瞬間からわかっていた。」

その言葉に、ステフとジブリールは絶句していた。

白はこの時思ってしまった。

もし、佑馬が敵となるときがきたときに、「」の過去最大の敵になるだろうことを。

side out

佑馬 side

「ああ、この事件が起きたときからわかっていた。」

もちろん、嘘だ。

いや、嘘ではないが、実際わかるかと言ったら微妙だ。

これは、原作知識から引つ張つてきたものだ。

もし、何も知らなかったら、白よりも早く答えは出なかったかもしれない。

写輪眼を使つても無駄だろう。

一方通行を使つても、答えはわかるとしても、こんなに早くはわからないだろう。

いつか来るであろう」「との闘い。

ゲームの難易度で言えば、エキストラやマスターでは収まらないだろう。

そのとき、何処まで自分が闘えるのか。

とても楽しみだ。

side out

三人称 side

白が、『参』と刻まれた裏表、白黒のコマを手に、何も無い空間を、いや、見えていないだけでそこにある盤を、睨む。

コレはおそらく、存在ないし記憶を三十二個に分割した奪い合いオセロ。

どちらも残っているコマは数字が小さい。

つまり、重要度が高いのだろう。

取られれば一手で終わる可能性があるコマということ、だからこそ残っている。

だが、このルールを設定したのは、挑まれた側、即ち、兄だ。

このゲームを行い、そして消えることまで意味があつたということになる。

そこで、白は目を閉じる。

兄は何故自分を一人にしたのか、疑問だつた。

だが、今ならわかる。

つまり、相手にわざと記憶を託し、一度は負け込むことを意図し、さらにそこから勝

つことを意図している。

白か黒か、それは愚問だろう。

最後の手を”白”に託したのだから。

兄がわざと負け、白に勝たせよう打つただろう手。

それを受けた相手が兄の策にまんまとはまって、打たされただろう手。

それを全て読みきり、たつた三手で逆転する。

それだけは、白にしかできないこと。

確信とともに白が手を振り落とし、カチリ、と聞こえない音が三人の耳を打つた。

直後。

「い、つつ．．．」

「いたっ・・・な、なんですよっ!」

白も、ジブリーもステフも佑馬も、襲ってきた頭痛に頭を押さえる。

白が振り下ろした一手に呼応するように、頭の中をノイズが走る。

そして、

「思い出しました。いくらゲームのルールとはいえ、マスターを忘れるなんて。」

仕方がないこととはいえ、自分の不甲斐なさに頭を垂れる。

「で、でもなんでソラは消えたんですの、わざとだったんですよね!」

同じく大半の記憶を取り戻したステフが、声を張り上げる。

「ステフ、その記憶はな、最初からないんだよ。」

そう佑馬がそう言う。

「な、なんでですよ!」

「言ったら、相手に真意が伝わるだろ。だからだよ。」

それで納得するステフ。

そこで虚空から何かが勝手に、黒いコマを置く。

躊躇うように、迷うように・・・

何故パスしないのか。

それは、空がパスできないように設定したからだ。

重要度の高いコマを無為に置かされることになる。

躊躇するのは当然のこと。

そして『弐』と書かれたコマを手に取る。

白はもうわかっていた。

自分が手にしている、『弐』と記されているコマが司る「概念」も、兄の真意も。

故に、敵に対して、同情すら覚えて、言う。

「……こんな、の……佑馬以外は、読め、ないよ……にい……すごい……」

これを完璧に読みきったであろう佑馬に敬意を込めながら、そう笑って指した白の二手目によって。

さらに裏返ったコマが盤面の、過半近くを一気に染め上げる。

ぼんやりと対戦相手、

クラミーと兄の姿が見え始めたことに、ジブルールよステフも目を見開き。

白は溢れそうになるものに必死に堪え、佑馬は盤面をずっと見ている。

残されていた三つのコマの意味は

『参』 ゲームに勝つ方法

『弐』 白に対する絶対的信頼。

そして『壹』が

「……しろ、個人の全、て……」

これが今現在の空の自分自身の存在以上の要素。
立場が逆なら白もそうだったも言いきれから。

黒いコマが、ゆらゆらと、不安そうに、置かれる。

「……さあ、にい……」

そして、それを待っていたように

「……帰って、来てっ！」

『壱』のコマを盤面に叩きつける。

僅か四コマ差で勝った盤面から『勝者 空』の音声が響いた。

味方と敵と

佑馬 side

勝者 空 の声が響くなか、佑馬はさっきの三手と盤面から、空がどういう風に置いていったかを一方通行を使って逆算をしていた。

白の打つ手と盤面から数十通りまでには絞れてきたが、まだ核心に迫ってはいない。白が空の手を読みきり、見えない盤面からどうやれば勝てるかを計算して打ったさっきの手。

自分にはどうやっても思い付かない。

思わず口を吊り上げてしまう。

(ふっ、これだと、「」の足元にも及ばないな。ジブルールと二人がかりでも、この二人に勝てるように、見れるものは見て盗まないとな。)

しかし、と。

目の前で抱き合ってる空と白を、そして、抜け 殻のように倒れている少女と森精種を見て、

(今は後ろから見守っておくか。)

そう一步後ろに下がりに、見守ることを決めた。

side out

三人称 side

白が空に謝罪の言葉を言っている部屋で、一つの声上がる。

「クラミーッ！ねえクラミーッ！聞こえないのですッ!？」

皆が声の上がつた方に視線を向けると、そこには。

必死の形相で少女、クラミーに呼びかけ続ける森精種の少女、そして。

ステフが思わず口元を押さえて息を呑んだ。

抜け殻、いや、ハッキリと死体のように、力なく椅子に崩れているクラミーの姿に。

空がどうやって勝ったのか、ステフはわからない。

だが、目の前で起きていることは、空が提案したこのゲームに負けた場合の結末。

そこには、クラミーと呼べる人物は、人格は、もはや存在していない。

「さて、俺ら」の勝ちだな。第一要求といこうか。」

このゲームの賭けの内容、それは

一つ、ゲーム結果の恒久的確定

つまり、相互譲渡された存在の痕跡を、抹消・交換・保有することの確定。

二つ、それとは別にもう一つ要求できる

要求は決勝後、変更してもいい
というものだ。

空の言葉に、森精種の少女が悲鳴のように懇願する。

「待つ、どんなことでもするのですっ！クラミーを、こんにするのだけはッ!!」

だが、空は一切の温度を無くした瞳でそれを見返す。

「俺が負けて、白が同じことを願ったら、お前らはそれを飲んだのか？」

空の言うとおりに、彼女が同じ立場なら歯牙にもかけなかったはずだ。

だが、

「む、虫が良すぎるのはわかっているのですっ！で、でも要求内容は変更可能に設定したのはそっちだったのですよっ！わ、わたしをどうにでも好きにしてくださいのです！クラミーを、こんな・・・こんなにするのだけはっ！」

その言葉に、空は悪魔のような嗜虐的な笑みで、死刑執行人の鉈を振り下ろすように、「だくめ♪予定通りの要求をさせて貰う。というわけで。」

「や、やめてええええええええええっ!!」

「要求一、互いの奪い合った全ての記憶の定着と、奪い合った全ての返還。」

「...え...?」

白、ステフ、ジブリール、森精種の少女から、その言葉に同じ音を溢し。

「かはっ！はっ……はぁ……」

同時、クラミーが呼吸を思い出したように意識を取り戻す。

だが、目が覚めても虚空を見つめ続けるクラミーに、少女が駆け寄る。

「クラミー！クラミー！大丈夫なのです！？自分がわかるのです！？」

必死な少女の声に、だが、クラミーは呆然と虚ろな目を続ける。

それから、何度も身体を揺さぶられ、ようやく気がついたように、

「ええ……うん、私は、大丈夫……むしろ……」

とクラミーは震える自分の肩を抱きしめ、悪夢のように空を見た。

「あの男が、空が大丈夫な理由が、理解できないで、上の空だっただけ。」

瞬間、盟約の実行に、ジブルールと森精種が作ったゲーム盤が爆音をあげる。

その様子に、もつとも冷や汗を流したのは、意外にも、空だった。

「あ、危ねえ……ジブルールのは核があつてさえ、この要求はギリだったか……」
原理的不可能性を有する契約は順守出来ない。

空の要求は、あのゲーム盤の全魔力量でも足りるか怪しかったわけだ。

そのとき、ジブルールが前に出ようとしますが、佑馬に腕も取られ、止まる。

（ジブルール、言いたいことはわかるが、やめておけ。）

（どうしてでございませうか？）

(人の身で神に挑むんだ。これくらい橋、渡れるだけマシだろう?)

(そ、そうでございませうが・・・)

そこで、佑馬がまわりをみて、

「まあ、これはさすがにやりすぎだわな。」

そう呟いた。

その言葉に反応したのは二人。

「そうだな、手段はもうちよつと選ぶようにするよ。」

「こんなものやりすぎなんてレベルじゃないわよ。」

自分の胸にうずめて泣いている白の頭を撫でながら空が。

そしてクラミーが。

そのクラミーは空達の“過去”に触れて、恐怖に顔をひきつらせている。

「なんで、“こんな経験”をしてまともでいられるのあなた!？」

クラミーが何をもって、そう叫ぶのか。

ゲーム中の空の心境すら最後には奪われていたなら、見たはずだろう。

そのことかもしれないし、もしかしたら、

白さえ知らないことかもしれない。

だが、唯一その全てに心当たりがある空も、意外そうに一同に問う。

「えっ、俺ってマトモに見える?」

いいえ、とその場の全員が首を降り、

「引きこもり、ニート、童貞、コミュ症……」

「そこツ!!なんで俺の精神を攻撃してるんだ!」

空のステータスを呟いて、別の意味でマトモではないことを言っている佑馬がいた。

その翌日、エルキア城の小さな会議室にて。

そこに空と白、佑馬とジブリアル、ステフ、クラミーと森種類の少女がいた。

空は皮肉な笑みを浮かべ、白はいつもの半眼、そしてクラミーは落ち着いた目で。

あれから子供のように泣きじやくっていたので、僅かに目は赤いが、本来の調子を取り戻している。

「……それで、なんでここに集められてるんですの、私達。」

誰が先に言うか窺っていた様子の質問を、ステフが引き受け口になる。

同じく待っていたように、空が答える。

「俺はクラミーの記憶である程度意思疎通してるが、共闘するんだ。自己紹介が必要だろ。」

クラミーは、黒目黒髪の、知性を湛えた鋭い瞳を覗かせ、端的に言った。
「クラミー・ツエルよ。よろしく。」

.....

それ以上言うことはない、という様子に、仕方なく空が続ける。

「えー、俺と同じ年の十八歳、身長は158cm、スリーサイズは上からあ「あ、あんたっ!?卑怯よそれっ!」あとブラはパッドが入ってて実際は「わ、わかったわっ!わかったからやめてちゃんとするからあっ!」仕方ないなあ。」

微妙に半泣きになっているクラミーに、さらに佑馬が追い討ちをかける。

「それといつもはクールを装っているけど、窮地になるとても子供っぽくなったり「なんであんたがそんなこと知ってるのよっ!」え?勘だけど、当たってた?」

そうニヤニヤする佑馬に

「こいつもこいつで一体なんなのよッ!!」

そう叫ぶクラミーだった。

「わかったから、紹介はよ。」

そう煽る佑馬に、

「くっ・・・わ、わかったわ。でもその前に、”フイー”を紹介しなきゃ説明出来ないわね・・・」

と、クラミーがちらりと目配せして、フィーと呼ばれた森精種の少女が口を開く。
「はあい、フィール・ニルヴァレンなのですよ。」

柔らかそうなふわふわのカールが掛かった金髪から、森精種の象徴でもある長い耳を覗かせる、見た目十代中盤程の少女が、気の抜けるような声で自己紹介する。

「その悪魔以外はあ、気楽にフィーって呼んで欲しいのですよ〜」

お日様のような笑顔とはこのことか。ふわふわした柔らかい雰囲気の方に、しかし、悪魔呼ばわりされたジブリールがはて、と首を傾げて言う。

「はて、随分と嫌われたものですね。何故でしょう不思議でございます。」

その言葉に意外にも、佑馬が答える。

「ジブリール、お前大戦のとき、首都に『天撃』ぶっぱなしただろ。そのこと言ってるんだよ。」

「え、でもその件は森精種の方にも非は「二対八くらいでお前が悪い」そ、そんなあく……」
天翼種が人類種に責められただけで落ち込む様子にクラミーとフィールが少し驚いた様子を見せるが、空がフィールに言う。

「えーと、じゃ、フィーと呼んでも？」

「はいなのですよ〜？」

「共闘するにあたって、わだかまりはなくしたい。どうすりゃジブリールを許してくれ

る。」

と端的に切り出す空に、フィーは気の抜けた声で頬に指を当てて考える。

「ん、それはとつても難しいのですよお」

だが、クラミーも目を閉じ、腕を組んだまま言う。

「・・・フィー、空の計画に、彼女の力は必要よ。私からもお願い。」

うう・・・と、仕方なさそうにため息をついて、フィーが提案をする。

「じゃ、足を舐めて『許して下さいフィール様』って言えば許すのですよ」

「おやおやく天の彼方までつけあがりましたね耳が長いだけの森の雑種さんが」

「ここにっこと黒い笑顔で笑い合う二人に、佑馬が一言言う。

「ジブリアル、俺は目を瞑ってるから、やれ。」

その言葉にジブリアルは絶望の色を見せながら、

「ええええ、ま、まさか本当にこんな動物の足を舐めろとおっしゃるので「今度なんかプレゼントしてやるから」わかりました。それならやらせていただきます。」

そしてジブリアルがフィーの足元に這いつくばり、ペロペロと舐めながら「ドーズ、オウルシクダサイフィールサマ（棒）」と言ったのを見た一同は

(((((いつ、佑馬に対してチョロすぎる！))))

と、おもったのであった。

そしてフィールはというと、

「はあい、許したのですよ〜」

あつさりど、本当に許したらしい顔で、手を合わせて微笑む。

「よし、よく頑張ったなジブリール。」

そしてジブリールの頭を撫でる佑馬に

「佑馬からのプレゼントが貰えるのなら、これくらいどつてことないのでございます」と、気持ち良さそうに目を瞑るジブリール。

「お、嬉しいこと言ってくれるじゃないか。なら、今から出掛けるか!」

「はい♪是非行かせてもらいます♪」

と、いきなり出掛ける話が出てきて、

「それじゃあ、後よろしく」

っと言つて出ていこうとしたところを

「・・・ちよつと、待ちなさい!」

クラミーが止めた。

「なんだよ」

そう不機嫌そうに答える佑馬。

「まだ、あなたの自己紹介がまだだわ。あなたは一体、何者なの」

その問いに、口を吊り上げながら

「俺は唯の人類種さ」

と言って出ていった。

.....

「空、あいつは一体何者なの。」

と、クラミーが問うが、

「俺もよくわからん。ただ、今わかっているのは最強の味方つてことかな。」

と苦笑しながら空。

「.....そう、いえば.....昨日、の.....ゲーム.....全、て.....理解、してた、よ？」

と言った白に

「マジかよ。いつからだ？」

空も驚きの表情を隠せないでいる。

「.....最初、から.....」

その言葉に、その場にいたステフ以外の全員が絶句する。

あのゲームを最初から全て理解していた？

(おいおい、マジかよ。味方としては最高に心強いが、敵となったとき.....)

と、
内心空は冷や汗を流していた。

二人の時間

佑馬 side

エルキア城前

「さて、何処行くーか。」

出てきたはいいが、何処に行こうか決まっていな。

完璧無計画なのだ。

「そうでございませぬえ．．．」

こうなったらジブリーの行きたいところに行かせるに限るのだが。

「ほとんど行ったことがございませぬから何処と言われても．．．」

(ですよねー。)

原作などから、ほぼ行ったことがないところは無いはずなのだ。

「んーむ、どうしたものか．．．」

「．．．あつー！」

いきなりジブリーが声をあげた。

「ん？何処か行きたいところでもあつたか？」

「いえ、その・・・前に一つ言うことを聞いてくれるって言いましたよね？」
「ああ、言ったな。」

確か獣人種にコマ賭けたときだな。

「その・・・プレゼント交換っていうのをやってみたいのでございますが・・・
なんかモジモジしているジブリール可愛い。」

「ああ、いいぞ。いつ集合にする？」

思わず笑ってしまった。

「・・・ッ！では、18時にここでッ！」

「了解」

そう返事すると一礼して空間転移していった。

「なんか、原作のジブリールとかなり変わってきてるな。可愛いからいいけど。」
さて、プレゼント何にしよう。

side out

ジブリールside

「はあ・・・恥ずかしかったでございませうねえ・・・」

少し言い淀んでいるところを見られ、笑われてしまったのだ。
かなり恥ずかしかった。

「プレゼント交換と言ったものの、何にしましょうか・・・」

佑馬はどういうものが欲しいのか見当もつかない。

「はぁ・・・聞いておけばよかったです・・・」

と、悩むジブリー。

『羞恥』『恋愛』という天翼種にはないはずの感情が出てきているのも知らずに。

side out

佑馬side

「んー、王道的に宝石とか・・・かなあ・・・」

ジブリーが欲しいそうなものか。

.....。

天翼種と言えば本。

「本かあ。この世界の本あげてもなあ。」

知っている本をあげても喜ばないだろう。

「.....どうしようマジで。」

18時までで間に合うか心配になってきたな。

side out

ジブリールside

「・・・何かいいものないでしょうか・・・」

未だに悩んでいるジブリール。

「佑馬といえればあの眼が特徴的でございますよねえ・・・ッ！」

（あの眼を隠せば今後のゲームの戦略の幅が広がること間違いありません！これしかないです！）

そして、何かを思い出したように何処かに空間転移していった。

side out

佑馬side

「本かあ・・・」

自分は元の世界の知識すら持ち込んでないので、異世界の知識は渡せない。

「元の世界かあ・・・なんか持ってこれるように頼めばよかったなあ。」

あの爺さんならなんとかしてくれ．．．たかも．．．！

(なあ、爺さん！)

(久しぶりじやの、どうかしたかの?)

(おう、本当に久しぶりだな。久しぶりついでに一つ頼まれてくれないか?)

(うむ。なんじゃ?)

本当に良い性格してるよな、この爺さん。

文字どおり良い意味で。

(俺らの世界の本を数冊頼めるか? 出来ればこちらのゲームの知識に役に立つやつ。)

(ふむ。わかった。とりあえずこちらに来てくれるかの?)

(ああ、いいぜ。)

その瞬間、辺りが光に包まれた。

「いやあ、ここも久しぶりだな。」

「そうじゃのお。あ、本はそこにあるぞい。」

「マジかよ。仕事早すぎるだろ。」

しかも、包装までしてあるし。

「まあ、神じゃからのお。」

こうやって他愛のない話をするのも本当に久しぶりだ。

あ、そういえば、

「そういえば、ありがとうな、爺さん。」

「ん？わしはなにもした覚えはないがの。」

「それもそうだな。まあ、一応礼は言っておくよ。今回のことも兼ねて。」

「そうか。まあ、今日はゆっくりしていくのじゃ。」

「ん、そうさせてもらうよ。」

ジブリールの反応が楽しみだ。

「さて、時間になったな。」

「そ．．．．．そうでございませぬ．．．」

なんか、緊張してるな。

俺が嬉しくなさそうな反応したときのこと考えているのかな？

正直、ジブリールから貰ったものはなんでも嬉しいんだけど．．．

「それじゃあ、同時に交換して同時に開けようか。」

「わかりました！」

まずは俺のプレゼントから渡す。

包装してくれたのは本当に感謝してる。

そして、ジブリールから小包を受けとる。

(天翼種からのプレゼントか。なんかいろいろと楽しみだな。)

「じゃあ、せーので開けようか．．．．．せーの！」

小包を開ける．．．

(．．．．．っ！これは！)

黒色のカラーコンタクトだった。

side out

ジブリールside

少し大きめの包みを開けた。

(これは・・・本・・・いや、佑馬達の世界の本!!)

しかもタブPCとかではなく、本物の本だった。

「佑馬・・・ありがとうございます！異世界の本・・・うえへ・・・えへへ・・・」

「おう！それと、ジブリール、これむっちゃ欲しかったんだよ！ありがとうな！」
今、とても幸せな気持ちだ。

佑馬から佑馬達の世界の本を貰い、自分のあげたものが喜ばれた。

こんな嬉しいことがあるだろうか。

「にしても、よくカラーコンタクトなんてあったな。前に街探してもなかったのに。」
「そのことならドラちゃんに頼みました。」

そういうえば、その時驚いていたようですが、何故でしょうか。

「ステフ・・・あいつもあいつですごいな。」

「ドラちゃんも意外と興味をそそられる存在でございますよね。」

「まあ、今日は遅くなつたし、帰るか？」

「そうでございますね！早くこの本も読みたいですし！」

side out

佑馬side

「そうでございますね！早くこの本も読みたいですし！」

「おお、そこまで喜んでくれるとは嬉しい限りだ。」

この反応は予想以上だ。

まさかここまで喜んでくれるとは。

「それじゃあ、戻りますか。」

「あ、佑馬。少し待ってください！」

「ん？」

と振り向いた瞬間。

「……ん……むっ……ッはあ……」

唇を奪われた。

「その……今日はありがとうございました……」

「お、おう、こちらこそありがとうな……さっそくつけさせてもらおうよ……」

やべえ、何この天使！マジで可愛すぎだろ！

「さあ、今度こそ行くか！」

「は、はい！」

そういつて腕に抱きついてきた。

(このカラーコンタクトさえあれば獣人種のゲームは完璧に貫ったも同然だな。)

思わず口を吊り上げてしまった。

頭を撫でると気持ち良さそうに目を閉じる。

「ジブリール、次の獣人種のゲーム。絶対勝とうな！」

「はい♪」

そういつて、エルキア城へと戻っていった。

開戦、v s 獣人種

佑馬 side

今エルキア城に入ったところ。

そこで気になることが出てきた。

「なあ、ジブリアル。」

「なんででしょうか?」

「ちよつと今から写輪眼で試したいことあるからいいか?」

「はい、いいですよ。」

というわけで発動。

「どうだ? 変化はわかるか?」

「そうでございますねえ。霧囲気は若干違う感じがしますが、眼の方は黒いままです。霧囲気だけか? なんか眼から力を感じるとか、嫌な感じがするってのはないのか?」

フルフルとジブリアル

「いえ、眼からはなんも感じませんよ。」

「そうか。」

ふむ、これはかなり強力なものを貰ったな。

「ジブリール、改めて言わせてくれ。こんな素晴らしいプレゼントをありがとう！」

本当に感謝だな・・・

「こちらこそ、喜んでくれて何よりです！」

つと話しているうちに、自分の部屋についた。

「ふうー。とりあえず風呂入りてえー。」

「なら、入りましょうか！」

「おう、いいけど、その手にある本は持ち込むなよ？」

「はっ！私としたことが、本があまりにも楽しみすぎて、つい・・・」

「まあ出たらゆつくりと読みな。それじゃあ行こう。」

ジブリールが本を読んでいる間、何してようか。

そういうえばジブリールに料理をする約束してたな。

ステフにこの世界の料理について教えてもらおうか。

(後、写輪眼がどれくらい持続するのも確かめないと。それに、この状態でも幻術とかかけられるかも確かめないとけないし。それに・・・後で良いか。)

考えてもきりが無い。

とりあえず、風呂場に向かった。

ジブリールと風呂場に行く途中、空達が前に歩いているのを見かけた。

「よおー、おまえらも風呂?」

「おう、そうだぞ。おまえらもか?」

「うん、そのつもりだったけど、出るまで待つておくわ。」

「別に一緒に入ってもいいですよお?」

と、フィールから声があがる。

「え?マジで?」

「みんなが入った方が楽しいですよおー。」

「私たちに拒否権はないのですのね・・・」

「どうやらそのようね・・・」

ステフとクラミーの諦めたような声がある。

ドンマイ。

と、またみんなが歩きだす。

そこで、後ろの方にいたフィールに小声で声をかける。

「本当の目的はなんだ？ 品定めか？」

その質問に、ふふつ、と笑いながら応えるフィール。

「やっぱりあなたは油断できませんねえ。そうです、裸になってくれればあ、みなさんの体内精霊活動から多少は人格を解析出来るのですよお。寝首をかかれる可能性を把握しておけば、対処するのも楽なのですよおー。」

「ほう、で、俺は今のところどうなんだ？」

「不自然なほど精霊は感じられません。ただ、前あつた時より雰囲気が変わってますねえ。」

その言葉に口を吊り上げながら、

「はは、まあ良いところまで行ってるな。で、評価はどうなんだ？」

そこでフィールも笑いながら。

正確には目以外だが。

「この中で一番信用出来ない存在ですねえ。先のゲームの件といい、あなたは一体何者なんですかあ？」

「安心しな。唯の人間だよ。」

風呂場

女子達が先に浴場に行くのを待ってから脱衣をする。

(ふむ、目を閉じてても写輪眼と気配でなんとか空間把握は出来るな。)

ははー、人間やめてるな俺。

いや、死んでたわ。

これ以上は悲しくなるので、考えるのをやめてタオルを巻き、風呂場に入る。

「あっつー！」

むわん、とした感覚が襲う。

常人よりも五感が鋭いから、一層暑く感じる。

「ん、空は着衣か。」

「そうだ。正直振り向きたいが・・・って、お前はおもいつきし入るつもりなんだな。妹の体を見たらどうなるかわかってんだろうな。」

「安心しろ、目を閉じてても空間把握はできる。」

「お前もお前で大概だよな・・・。」

そんなことわかってるよ。さつき悲しくなったところだからな。

「佑馬さん。」

「なんだ？」

フィールから声があがる。

「さつきあなたはなんて言ったか覚えていますかー？」

さつき？・なんか言ったつけ？

「さつきって？」

「私があなただは何者かあつて聞いたときですよ。」

あつ・・・(察し)

「・・・唯の人間だよ？」

「「「嘘つきー！」「」」」

その場全員から声があがる・・・って！

「おいジブリール！お前まで言うか!？」

「佑馬が人類種やめてるのは周知の事実でございます

」。

え、俺そんなに常識離れたことやったっけ。

空間転移使えて、写輪眼使えて、一方通行使えて、現在感覚だけで空間把握をしてい
る。

結論、人間じゃない、

「ごめん、俺も人間やめてるような気がしてきた。」

「「「「今ごろ!?!」「」」」」

なんでそんなに意気があつてんの？

打ち合わせでもしてたの？

とりあえず、湯船に浸かる。

「ふうー、疲れたあー。」

そう脱力していると、空から声があがる。

「フィー・・・あ、いや、フィール様？」

「あらあ？どうしたのですかーかしこまってえ。」

「クラミーのおっぱい偽装してる魔法、あれは幻惑？それとも変質させてる？」

「変質させてるのですよお、それより・・・」

確かに、クラミーの胸あたりに変な違和感を感じるけど・・・

「クラミー、バレてるし、やっぱり裸の付き合いで偽装は失礼だと思うのですよお。」

瓶のコルクが抜けるような音があった。

クラミーの胸から違和感がとれる。

一応合掌しておこう。

「さらつと認めないでよフイーツ！これなら何もしないほうがマシだったじゃないッ！それと佑馬！貴方何手を合わせてるのよッ！」

あれえー、なんか標的にされてる。

「いや、なんかステフみたいだなあーって。」

「そういうこと思うまえに、行動で示して欲しいですわ……」

「そんな酷いことやってないぞ？」

「もういいですわ……」

なんか諦められた。なんでだろうか。

「それで、どのような魔法をご所望なのですかあ？」

「うむ、話が早くて助かる。」

空が大きく頷き、言った。

「俺を”女性化”出来ないですかねっ!？」

おい、なんか湯気が揺れてるんだけど。

「そーすりゃ俺は背後に広がる楽園を見ることが出来るのです！同性なら誰がどう見て

も完璧な健全！それが十八禁なら銭湯も温泉と十八禁！完璧に無敵に健全なのですっ
！」

「内心に渦巻く欲望が変わらなければあ、本質は変わらないと思うのですよー？」

「内心を立証できる物理的根拠はないッ！」

「……」

「素晴らしいですマスターッ！暴論を躊躇なく言い切られるとは感激でございますッ
！！」

「やばい、ちょっと頭痛がしてきたかも。」

「出来るのですよお？」

「マジですかッ！」

「あ、でも確かさ……」

「ただし、元には戻せませんがあ、いいですかー？」

「え？」

「性別を決めるのは二つの魔力要素ですう。同じ要素が二つなら」

「なんかxy染色体の説明が行われている。」

「おい、頼むぜファンタジー……」

「よし、助け舟でも出してやろう。」

「なあ、空、もう一つ方法が有るぞ。」

「うん、なんかわかった気がするけど、一応きいておく。」

「感覚でわかるようになれば「予想通りだわ！出来るか！」いや、出来るだろ。俺が出来るんだから。」

「目を閉じてたら意味がねーだろうが！」

「それなら安心しろ。空間把握してることとはちゃんとスタイルもわかるということだ。」

「それは・・・つまり・・・！」

「ああ、目を閉じてても開けた時と同じようにわk「変態ツー！」おい、桶投げんな！」

「黙りなさい！それって結局見えてるのと変わらないじゃないのですの!!」

「いや、形がわかるだけだから問題ない。服の上からみてるような感覚だから大丈夫だ。さすがにそこまで正確にはわかるほど感覚は鋭くないからな。」

その時この場にいる全員が思った。

(((((十分鋭いわ！))))))

なんか心外なこと言われた気がする。

——エルキア城調理場——

風呂から上がり、ステフの部屋に向かった。

「おーい、ステフ。ちよつといいかー?」

「はい、なんですの?」

「ちよつと料理教えて貰いたいんだけど。」

「ああ、そういえばジブリアルが言っていましたわね。いいですけど、ここの調理場は図書館のより劣りますわよ?」

「いや、図書館に行く。」

「今からですの!?!こんな時間から図書館まで歩くなんてさすがに嫌ですわよ!?!」

「安心しろ。空間転移でいく。」

「はあ、もういいですわよ・・・」

なんか諦められた。

ちなみにジブリアルは本に没頭している。

「それじゃあ行こうか。俺に触れてくれ。」

——エルキア図書館調理場——

「こうして見るとやっぱり思いますわすわすには居られませんわね……貴方本当に何者ですの……」

「まあ、最近俺も人間やめてんじやないかってことぐらいは自覚し始めたよ。」

本当に人間じゃねえよな。

「と、それはいいとして、とりあえず器材の使い方から教えてくれ。元の世界と同じなら大丈夫だが、そうとも限らないしな。」

「はい、わかましたわ。まずあのオープン」

結局、器材は20世紀のものに魔力が宿っているようなもので、材料に大差はなかった。

「よし、出来た。とりあえずこれ食べてみてくれ。」

作ったのは魚の煮付けだ。

「美味しそうですね。頂きますわ。」

上品に箸を使って食べ始めるステフ。

やっぱりお嬢様なんだな……。

「……ッ！美味しい！これ私のより美味しいんじゃないのですの!?!」

「ほう、そこまでいってもらえるとは嬉しいねえ。」

ふむ、器材の使い勝手はこっちの方がいいな。

「本当に美味しいですわ！美味しいんですけど……なんか悔しいですわ……」

なんか自信をなくしていつてるな。

一応フォローはしておくか。

「それはたまたまステフの好みにあつてたつてだけで、客観的に見ればステフの方が上手いと思うぞ。」

「そういう気遣いできるんですのね。」

「気遣いじゃないんだけどな。」

「まあいいですわ。とても美味しかったです。御馳走様。」

「お粗末様。それじゃあ、ジブリールの分作って帰りますか。」

ちなみに、ジブリールも美味しいと言ってくれた。
嘘でも泣きそうなくらい嬉しかった。

(喜んでもらえてよかったなあー)

ベッドに寝転がりながら、ジブリールの言葉を思い出す。

(んー、やばい。そろそろ眼が限界だな。)

そう、さつきから上手く使えなくなってきた。

そして、解除した瞬間。

一気に疲れが押し寄せてきた。

(…なるほど…空間転移に空間把握のときに使って、さらに5時間使ったからな…
一応実戦だと3時間ってところか…せめて一日は使えるようにならないとな…ふ
わあ。)

そうして、意識が落ちていった。

side out

それから三日後。

三人称 side

「ソラー・東部連合から手紙が届きましたわ！」

そう言いながらステフが走る。

「おう、やつときたか・・・ふむ、明後日だな。」

原作ならさらに二日後、つまり明後日に届いてドタバタするのだが、ちゃんとその芽は摘んである。

「ま、それまでゆつくりしてますかあ。」

「ゆつくりしてる場合じゃないですよ!!しっかりと準備をして欲しいですよ！」

「俺らいつでも準備万端だから。」

ステフは胃痛がするのを感じた。

さらに二日後の朝

「よし、じゃあそろそろいきますかあ。」

そう空が言う。

「わかりしました。ではマスター方、佑馬、ドラちゃん、私に掴まってくださいませ。大使館まで」

「あ、ジブリールそれ却下」

ジブリールの最速の移動手段を断って、ステフに向き直る空。

「ステフ、城の正面に馬車を用意させろ。ド正門から、堂々とする。」

その言葉にジブリールは意図を把握しかね、ステフは絶句するが、佑馬はしっかりと意図を把握する。

「なっ・・・暴動の最中ですわよっ!?!」

「だからこそだよ。な?空。」

「ああ、なんのために暴動を起こさせたと思ってんだ。」

エルキア城前

罵詈雑言が飛び交う、デモ隊で埋め尽くされたエルキア城前大広場。

その正面の巨大かエルキア城正門が、轟音を立ててゆつくりと開いていく。

誰が姿を現そうが罵倒の限りをぶつけるつもりでいたデモ隊が。

歩み出てきた五つの人影に、水を打ったように静まり返る。

五人の歩みに、静寂に包まれた広場の人だかりが割れて、道を作っていく。

中央を歩くのは、夜のように深く冷たい黒髪黒瞳の『王』、空。

その右に、かつてないほどに妖しく赤い紅玉の瞳の『女王』、白。

その後ろを一步引いて歩くのは、静かに輝く琥珀の瞳の『従者』、ジブリールと口を吊

り上げながら嗤う『王』と『女王』の親友、佑馬。

その四人の光る目が湛える、ただならぬ覚悟。

そして、絶対的なまでの”自信”が。

民衆に、言葉を紡ぐのを許さなかった。

・・・というわけもなく。

主にジブリールの眼差しと穏やかな微笑、そして佑馬の嘲笑うかのような笑顔とその迫力が、ただ一言を語っていた。

『我が耳が届くところで、主や佑馬（空や白やジブリール）に罵声を浴びせるなら、命と引き換えにどうぞ』と。

その呼吸すら止めさせる威圧的な空気が、全ての言葉を大衆から奪い、そのずっと後ろをアクアマリンの瞳のステフがおどおどと小走りで追いかける。

結局、空達の歩みは、ただ一つの罵倒すら許さなかった。

それからステフが暴動を起こした理由とか聞いていたが、そこは割愛しよう。

s i d e o u t

佑馬 side

在エルキア東部連合大使館

馬車から降りたところを、袴のような服を着た初老の、白い毛並みの獣人種が出迎えた。

東部連合、在エルキア次席大使、初瀬いの。

「お待ちしておりました。」

「待たされたのはこっちだったの。さあ、はじめようぜ?」

全くだ。すごい待ったわ。

「では、こちらへ」

先導されて、大使館の中を歩くなか、佑馬はずっと考え事をしていた。

(今現時点で、写輪眼は約半日は実戦で使えるようになったとは思う。だが、身体能力がどこまでなのかわからない。軽く木は越えられる高さだが、それが血壊を使った獣人種に通用するかどうか。さらに一方通行の能力が適用されるかどうか。ここがやつぱり気になるな。それと、一方通行の能力。これもあまり使っていないからどのくらいまでいけるのかわからない。もしかしたら黒い翼を出せるかもしれないし、あるいは反射とこの脳のスペックだけかもしれない。不確定要素が多いが、それはゲームの中でどうにかするしかないな。)

そう考えているうちに、先日と同じ広間についた。

「では、ゲーム開始時刻まで今しばらく、ここでお待ちを。」

「あいよ。観客もちゃんと通しといてくれよ?」

いのが無言のまま一礼して立ち去る。

とりあえずソファアークに寝転がる。

「俺は寝る。時間になったら起こしてくれ。」

「わかりました。おやすみなさい、佑馬。」

その後空たちがなんか話していたが、あまり覚えていない。

ゲーム開始数分前

「佑馬、そろそろ起きろ。もう移動だぞ。」

「……ん、ふわぁ……ん……、もう移動か。」

そう言いながら伸びをする。

体調はよさそうだ。

その後すぐ来たいのに案内され、一同が通されたのは大使館の中のワンフロア。

巨大なビルの一階を丸ごと使ったのでは、と思わせるほど広大な四角い広間。壁を埋めるような巨大なスクリーン一枚、それが四面に張られたフロアだ。

そこには、人類の命運を決めるゲームを観戦にきた観客、千人はいるだろうそれは、疑惑の眼差しで舞台に向けている。

正面スクリーン前の舞台には、黒い箱、そして六つの椅子が据えられていた。

「.....」

無言で、その椅子の一つに正座して待つのは、対戦相手の少女、初瀬いづな。

「皆様、こちらにお座りください。」

いのに促され、いづなの隣に座る空。

その隣に右へ白、ジブリアル、佑馬、ステフと続く。

そこで佑馬は精神統一と現段階の状況を考える。

(さつき寝たが、写輪眼は普通に使える。身体の倦怠感はない、むしろ良好。)

「では、これより、”盟約内容のかく”」

いのがなにか言っているが聞こえない。

(血壊。ジブリアルですら歯が立たないほどの身体能力を生み出す力。あの爺さんは限界を突破するほどと言っていたが、どれくらいかはわからない。一応最初は力を隠しているが、まずはNPCで馴れながらってところかな。)

作戦が決まったとき、いのの声が響く。

「では、同意したとみなし、盟約の宣言を願います。」

同意？ まあ空がなんとかしてくれただろう。

「「「」盟約に誓って」「」」

”盟約に誓って”、です。」

そこで、ジブリールの方をみる。

ジブリールはその視線に気づいたようで、こちらを見返してきた。

「どうかしましたか？」

「いや、なんだ、その・・・」

どうしよう。手を繋ぎたいなんて恥ずかしくて言えない。

その時、ジブリールが顔を若干赤くしながら言った。

「あの、手を・・・繋いでいただけませんか？／＼」

なんか、へたれでごめんね。

そしてその顔は反則だね。

「ああ、こちらこそ頼む。」

「では、始めます。」

いのの声が聞こえた瞬間、意識が無くなった。

ラブ・オア・ラベツド2 前編

佑馬 side

ロードが終わり、目を開く。

そこは・・・

（なるほど、確かに元の世界の東京と似ている。だが、よく見るとやっぱり違うな。景色も雰囲気も。）

そう、東京だった。

だが、点在する看板の文字は明らかに日本語ではないし、あちこちに鳥居が建てられ
気持ち自然が多いなど、よくよく見ると東京とは微妙に違うのだ。

だが・・・

「すまん、ステフ、ジブリール、佑馬。」

「え、はい？」

「わかつてるけど、何？」

「俺達もうダメだ。すまん、人類種は終わりだ。」

「ガクガクブルブル」

やっぱりか。

ちなみにジブリールは涎を垂らしながらこの景色を見ている。

「は・・・どう言うことですか?!? あんな啖阿切つておいて・・・」

「ごめんなさいごめんなさいまさか東京が舞台なんて予想してないです僕達にここは無理ですホームはアウエーですもう僕達は役にたたないので申し訳ないですが自力でなるとか。」

「ガクガクブルブル」

よく息続いたな空。

ある意味感心したけど、とりあえず元に戻すか。

「空、まわりをよく見てみる。東京とは似て非なるものだぞ」

「・・・え?」

キヨロキヨロとあたりを見回して、ホッと一息ついた空。

その瞬間

「脅かすんじゃないやねええええええええええええええええ!!」

空渾身の絶叫がゲーム内の東京（偽）に響き渡った。

「あああクソツツ！トラウマが幾つかフラツシユバツクしたじゃねえかツ！思わず動脈掻き切ろうかと思ったよ紛らわしいもんを作ってんじゃないやねえぞジジイツ！」

「お前何したんだよ……」

原作でも語られない空の過去。

壮絶としかわからないが、それほどひどいものなのだろう。

「ガクガクブルブル」

未だに白は震えている。

トラウマに触れすぎてるなありや……

「白、落ち着け。ここは東京じゃない。似てるだけで、連中が作った場所だ。」

「……ひぐつ……え？」

空の声でやっと我に帰る白。

「ゲームつての忘れるくらい酷いのか……」

「まあ、いろいろあつてな……」

これ以上はやめておこう、うん。

でも、これは使えるかもな……

『えー、そろそろゲームを始めてよろしいですか？』

「おし。もう大丈夫だ。待たせたな。」

『・・・おほん、それではまず、オープニングムービーを』

ああ、終わってるってやつな。

「はい？何ですのそれ。」

「必要、でございませうかそれは。」

訝しげなステフとジブリアル。

「オープニングを飛ばすなんてゲームマー失格だ。襟を正して刮目して正座で見たまえ。」

「・・・くくく。」

いつの間にか正座してるし・・・

とりあえず全員正座したとき、上空に巨大なスクリーンが映し出される。

『あなたは・・・モテモテだった。』

空が何かに耐えてるな。

『世界中の女の子にモテにモテ・・・』

結論、終わっていた。

ちなみに、どうやらこのゲーム、

”ラブ・オア・ラベッド2”

という名前らしい。

「……じ、爺さん、ちよつといいか。」

空が頭を抱えながら聞こうとするが、

『……何も言わないで頂けますかな。いづなが血生臭いのは嫌と作らせたゲームで。』

……いい子に育ったな、いづなたん……

『それより皆さま、足下の箱をご覧下さい。』

言われて見てみると、いつの間にか小さな箱が置かれている。

開けてみると、

「なんだこれ、銃か？」

「……変、な……形。」

「でも、銃だな。」

「マスター達の文献に登場する『銃』とは、また随分形が異なつて御座いますね。」

毎日読んでいるだけあって、すごいな、ジブリール。

「なんですのこれ。どこを持つんですの？」

うん、ステフはいいや。

『では、ルールを説明させて頂きます。』

説明書を読み上げるような棒読みで言ういの。

『そちらの銃で、迫ってくるNPCを撃っていただきます。』

「撃つのかよっ!？」

『時に撃ち、時に爆破し、メロメロにさせていただきます。』

「ぎやる☆がなかよっ!!」

『メロメロにされた女の子は、皆様の愛の強さに気づき、愛の力を託して消えます。』

「・・・あ、はい。」

あ、とうとうツツコミを諦めた。

『“めろめろガン”から放たれるのは「らぶパワー」、つまり皆様の「愛の力」です。』

うん、知ってたけど実際聞くとひどいな。

「これ、『めろめろガン』って名前なのか。」

「・・・ださい。」

「安直な名前でございますね。幼稚なセンスがひしひしと伝わってきます。」

「ねえねえ、『じゅー』ってなんですか?」

「ああ、肉の焼けるときの音のことだよ。」

「ああ、そうですね・・・ってなると思っているんです?!騙されませんわよ!？」

「1+9の答えは?」

「『じゅー』ってそれも違いますわよねえ!？」

「お前が今持つてるもの。」

「もう騙されませんわよ!?!・・・・・ってあれ?」

え、これに騙されるって中々じゃね?

それとも……

「ステフよ、さっきの会話からそれが銃だって理解できなかったのか。」

「……うぐつ」

え、まさかの理解してない方かよ。

「佑馬、ドラちゃんには既に手遅れですので放っておきましょう。」

「手遅れとか言わないで貰えます!?!」

「そうだな、どうしようもない。」

「……もうどうにでもなれですわ……」

あ、落ち込んだじゃったよ。

さて、そろそろ向こうの会話に戻るか。

「……まあいい、ルールを確認したい。いくつか質問するぞ爺さん。」

何がいいのか知らないが、まあ問題ないだろう。

『なんでもご質問ください。』

一、『銃』や『爆弾』を撃つと、『らぶパワー』を消費する。

二、『NPC』を撃ち撃破することで『らぶパワー』を回復する。

三、『NPC』は『らぶパワー』に惹かれ襲い、触れられると『らぶパワー』が減る。

四、『らぶパワー』が尽きると『NPC』は寄つてこない、事実上の戦闘不能になる。

五、いづなに撃たれると、いづなの『味方』になり操作不能、『敵』になる。

六、いづなに撃たれ『敵』化した味方は、味方に撃つて貰うことで元に戻せる。

七、また、六の手段で『らぶパワー』切れも、回復することが出来る。

八、ステータスは、魔法が使えないだけで全て現実での身体能力を反映している。

なるほど、今ので全部理解できた。

聞いてなかったらちよつと危なかったかもな。

「と、つまり、こういうことでもいいんだな？」

『飲み込みがはやく、助かりますな。』

ふむ。後はこの銃の性能か。

約400mくらい飛ぶんだつたつて。

「爺さん、この『めろガン』を味方に撃つと回復するつてのはどういう理屈だ。」

『簡単でございます。"らぶパワー"を発射するわけですので。』

「・・・いづなに撃たれたのと同じになる?」

『ええ、一時的にですが、撃った相手の「愛の奴隷」にな』

バーン!

いのが言い終わる前に白が躊躇なく空に引き鉄を引く。

飛翔したピンク色の弾は、音速で空の腕にあたり、無数の小さなハートを散らせた。

ふむ。

視えるし、かわせるな。

後は反射ができるかどうか。

と、その時。

「嗚呼、妹よ。我が妹よっ! こんな近くにこんな愛らしく愛おしい女性がいたと今の今まで気づかなかった己の両目を嗚呼っ! えぐりとってしまいたいッ!」

「・・・やあ・・・にい、ダメ・・・しろ達、兄妹・・・」

もじもじと、頬を赤く染めて白が芝居がかった様子で応える。

「おおッ! それがどうしたというのかっ! そうだとも世間は許しはしないだろう、だが俺達の世間は何処へ行った! ここはデイスボード、ここはゲームの中ッ! 全てがゲームで決まる世界、誰が文句など挟もうかいざ往かん! 倫理規定の彼方へとッ!」

「ちよっ、私が挟みますわよっ!! 国民が観戦してるの忘れてませんのっ!」

「それなら私も一つ。」

ふむ、ここで確かジブルールは『バーン』・・・え?

確かにジブリールは原作通り撃った。

だが、白にではなく、俺にだ。

しかも、反射は出来なかった。

「ジブリール！俺は君のような素晴らしい女性のお彼氏であることを誇りに思っている！
ジブリールさえよければ今すぐ！この場で！結婚式をしたいぐらいだ！」

やばい、俺何言ってるの？死ぬの？

「まあ佑馬・・・そんな大胆に・・・」

そんな反応しないでくれ・・・本気でしたくなる。

「これは俺の本当の気持ちだ、ジブリール！」

そこでジブリールに抱きつき、キスをする。

「ん・・・っはー！」

ここでやっと身体の自由が聞いた・・・が。

「「・・・」」

空、白、ステフが黙ってこちらを見ている。

「・・・」

だんだんさつきの言動が恥ずかしくなってきた、急に体温があがってきた・・・
恐らく、いや、確実に顔は真っ赤であろう。

「佑馬さえよければ私は……」

ジブリールはジブリールでなんか顔を赤くしながらブツブツ呟いてるし。
やばい、嫌われたかな……。

「あの、その……ごめんなジブリール。制御がまったく聞かなくて……その……。」
言い訳も思い付かず、言い淀んでしまう。

本当に俺はなんてことを……

「その、佑馬さえ良ければ、私はよろしゅうございますよ……?」

……なんだって?

「ジブリール、本当か?」

「はい、佑馬さえ宜しければ、是非宜しくお願いします……」

えーと、顔をつねってみる。

……痛い。

夢じゃない。

「……よかったあ……」

思わず泣きそうになった。

これはこの“めろガン”に感謝しないと。

仲介人が“めろガン”ってなんかやだな……

仲介人じゃなくて仲介物か。

「あのー、お二人さん、そろそろ宜しいですか？」

「……あつ……」

そういうえば、ゲーム中だった。

ということには外にはほぼ全国民がいるというわけで。

(うわー、恥ずかし。)

そのことがわかった瞬間また体温が上がるのを感じた。

ジブルールも微妙に顔が赤くなってる。

「あー、うん。悪い……もういいぞ。」

「たく、リア充め！」

「お前に言われたくないシスコン！」

「まあいい、とりあえずステフ。さっきのルール説明、理解できたか？」

「ふっ甘く見ないでほしいですわね、一切出来ませんでしてよッ！」

ドドゥーンと、清々しいまでに、誇らしげに胸を張るステフ。

「ふむ、じゃあまずその銃な、こういうふうに握るんだわ。」

「ん、こうですか？」

「そうそう。で、その穴に人差し指を入れる。」

「はいはい?」

「で、それを真下に向けて、人差し指を握り込もうとしてみ」

「こうですか?」

うわー、すげえ上手く誘導したな。

その瞬間、バーンと音がなり、床に当たり、そして跳弾した。

「……あ、ああ……なんて素敵なわ・た・

く・し、うふふもう放さないですわぁん。」

これが自分に酔いしれている人の最期の姿か……

「ふむ、やはり跳弾性能ありか。これが鍵だろうな、白。」

「……ん、わかって……る……任せ、て。」

(さつき、一方通行で反射が出来なかった。しかし、原作では服に当たると消えていた。つまり、物理的に存在しているものに着弾しなければ意味ないのか。反射は使えないな。)

「とりあえず、ゲームバランスを把握するまで隊列行動。ルール通りならジブルールと佑馬以外は論外な身体能力性能だろう。NPCが獣人種のステータスなら、撒くのも怪しくなってくる。ジブルールと佑馬は後ろ。追っ手を蹴散らしてくれ。」

「……いえっさー」

「りよーかい」

「了解でございますが、ドラちゃんはそのままでもよろしいので？」
言われて、うねうね動くステフを見る。

まだ続いていたのか・・・

「別に、いづなに撃たれても問題ないだろ。ステフなら。」

「さようでございますね。ドラちゃんなら。」

「まさしく”捨て符”だな。」

今の、中々上手くない？

「よし、行くぞ三人ともっ！人類の命運はこの一戦にありッ！」

「「おーっ！」」

「うふふ、なんて素敵なわ・た・く・し・・・あぁんどうして貴女は冷たいんですの？」

ガラスに張り付いてうねうねし続けるステフ。

こいつだけ異常に長くね？

そんなことは考えながら、他の三人とともに走り出した。

ラブ・オア・ラベツド2 中編

クラミー side

ゲームが始まった。

あまりのバガゲーっぷりに呆れる観衆の中、だが油断のない気配で、黒い瞳に黒いベールで影を落とす少女。

クラミーの姿があった。

(・・・フイー、見えてる?)

『はあい、感度良好、クラミーのお目々、ばっちり頂いているのですよお。』

クラミーの視覚を建物の外にいる森精種、フイーが同期、その上で思念会話。

エルヴン・ガルドで生まれたクラミーは身に染みていることだが・・・

(ホント、他の種族からしたらたまったもんじゃないわね、こんな魔法。)

side out

いの side

びくりと、いのの眉がっり上がる。

(これは・・・魔法の気配?)

人類種と同じく精霊回廊接続神経を持たないため、獣人種に魔法は使えない。だがその常軌を逸した五感が捉える”気配”に、ちらりと視線を向ける。

(・・・クラミー・ツエル！何故ここにいるっ・・・！)

確か、国王選定戦に森精種が送り込んだ、エルヴン・ガルドの間者だったはず・・・「誘ったのか・・・」他種族の監視”を”

今回のゲームを開催する条件として、佑馬達がゲームの内容を他言出来なくなるようになる。

しかし、その”達”の範囲は何処まで及ぶのか、人類種全員かもしれないし、空と白、佑馬だけかもしれない。

それに、ここにいるクラミーが、魔法によって遠方の他種族、森精種に報告しているとしたら。

このゲーム全てが、エルヴン・ガルドに知られていることになる。バーチャル空間を立ち回る三人を見て、いのは思う。

(こいつら・・・どこまで用意周到なのだ・・・ッ！)

ふと、空の顔を見してみる。

その顔からは・・・

『わかりやすいチートしてみる。テメエらのゲームのイカサマまでバレるぞ。』

目を閉じる男の薄い笑みが、そう語っていた。

side out

クラミースide

『ふふ、気付かないふりしてえ．．．耳が魔法に反応してるのですよお。』

視線を向けず、だが明らかにこちらを意識しているのに、フィーが笑う。

これで空の望み通りの展開になっているはずだ。

(フィー、行われてる空が予想してた通り、“電脳空間”という、魔法では干渉できない虚構の世界。こつちから出来ることはなさそうだけど。)

『わかっているのですよお。わたしたちが見てる、っていう事実が重要なのですよお。』

さすがはフィー。

おそらく空の『フィーの記憶を改竄する権利を貰う』という要求を聞いた日から把握していたのだろう。

(これで東部連合は、あからさま過ぎる不正はできない．．．)

ゲーム内以上に、イカサマの正体までエルヴン・ガルドにバレたら、どうにでも対策は取られ、今度こそ東部連合は終わる。

その為、盟約の穴について、仮に負けても絶対に記憶が消えない”フィー”を監視につけた。

（まあ、それでも不正は見逃す気はないけどね。フィーも手伝って頂戴。）
『んーこの術式、維持するの大変なのですよお？でも
クラミーのために頑張るのです。』

改めて、空の記憶にあつたこのゲームの攻略法。

何度見返しても、あまりに綱渡りで、肝心の部分がぶつつけ本番になっている。

だが、それをもってしてもなお、空の記憶の中燦然と輝くのは“必勝”の二文字。
その確信を与えているもの、空に人の可能性を信じさせるもの。

このゲームで、自分も触れることが出来るだろうか。

「・・・見せて貰うわよ、空。」

そう言つて、画面の中を駆け抜ける空を見る。

その時、横で走っている佑馬が目にはいる。

「貴方の実力も、気になるところだしね。」

side out

佑馬side

群がつて追いかけてくるNPC達、獣人種という設定のため、足の速度も身体性能も
極めて高いが、

（動きは抱きくくという動作のみ。個体差もあるがこれぐらいなら余裕だ。）

射撃能力を確かめるために、頭、腕、腹、胸、と場所を指定ながら撃っていく。その傍らで空が言った。

「NPCが消えるのと、服が消えるのに、一瞬のラグがあった気がするッ！」

そう、ラグは確かにある。

だが、それはほんの一瞬。

（よくわかったな。さすが人類最強のゲーマーの片割れってところか。）

そう考えていると、発砲音が鳴る。

放たれた桃色の弾丸はNPCのスカートにかすり、NPCは消えずに、小さなハートを散らせてスカートだけが消し飛んだ。

「やはり、やはりそうかッ！これこそ、このゲームの醍醐味かッ！」

ふむ、俺もちよつとやってみるか。

「布の厚み、コットンパンツと仮定、平均1、5ミリ。」

そんなことがわかるのかよ。

俺でもわからんぞ。

「許される着弾誤差は1ミリ未満……だが、俺ならやれるッ！」

そう言っている空にNPCが抱きつきこうとする。

それを最低限の動作、たった二回のステップでNPCの背後をとる。

「ここだっ！」

発射された弾丸はパンツを削り、そして消える。

が、同時にNPCもピンクのハートを散らし、『らぶパワー』になって消滅した……ちよつと残念。

「ちくしよおおおおお！んだよノーパンに出来ないのかっ!?くそおおおっ!!」

「空！まだ諦めるんじゃない！」

まだ諦めてはいけない。

下がダメなら……上だ！

抱きつこうとするNPCの服を消しながら避ける。

そして、ブラを狙って撃つ！

消えるブラとともに腕が胸の前へ行き、手ブラになるNPC。

「ナイスだ佑馬！手ブラとかあのNPCもわかってるな！」

「よし、これで終わりな！とりあえず走るぞ！」

「おう！」

とりあえず、後ろにくるNPCを迎え撃ちながら進む。

「白、銃の性能報告。」

しばらく走ったあと、空が確認する。

「・・・全部、おおまか・・・単位は、メートル・・・で。」

と言いついてから深く息を吸う白。

「弾速毎秒300、射程約400、風重力影響無し、直進性、跳弾性能あり、限界跳弾回数は射程に比例して無限、跳弾角度は入射角度に比例で、単純。」

はあ、と息をはいて一言。

「・・・つか・・・れ、た・・・」

これは喋る方にだな。

「よしよし、上出来ださすが白！」

空がわしやわしやと白の頭を撫で、白は嬉しそうにしている。

「ジブリール、設定されてる身体能力はどんなもん？」

空達は説明通り、普段と変わらないだろう。

だが、ジブリールの制限がなんなのかがわからなかったようだ。

「魔法が使えない、というのがどうやら『私自身』の否定になってございます。なので、物理的限界数値に設定されているようです。全く、物理的肉体とはなんとも不便でございます。」

「獣人種の身体性能は、物理限界に迫ると言ったな。今のおまえと互角か？」

「甚だ不愉快なことに、そう考えて問題ないかと思われませう。ただ、以前お話ししたよう

に、獣人種には『血壊』を使うものがございます。もしそれがゲーム内に反映されているとすれば、瞬間的には私をも凌駕すると考えた方がよいかと。」

『血壊』 物理限界に届く性能を有する獣人種、その中でも更に一部の者だけが使える、物理限界をすら瞬間的には突破しうるといふ力。

「おまえといい獣人種といい・・・この世界の連中デタラメ過ぎだろ。」

はあ、と溜め息をつく空。

「それで、佑馬はどんな感じだ？」

「んー、わかんね。いつもと変わらんけど。」

「そうか。」

まあ、物理限界越えてるけども。

「とりあえず、敵は仮想空間内で魔法を禁じ、自分達の本来の得意分野である『身体性能』にものを言わせた戦闘』を行い、圧倒的に有利に立っている、と思い込んでいるわけだな?。」

血壊がどれくらいか、自分の身体能力がどれくらいかはわからないが、おくれを取るほど差は大きくないだろう。

「いいか、どんな複雑に見えるゲームでも、究極的に取れる行動は二つしかない。」

「と、仰いますと?。」

その問いに、意地悪い笑みを浮かべて空が応える。

「戦術的行動と、対処的行動。つまりは、動かすか動かされるかでしかない。」
なるほど、つまりは主導権をとったほうの勝ちというわけか。

「あいつらは気づいていない。これこそが人類が古代から最も得意なゲームだ。」
「なるほど、『狩り』だな。」

「その通り。白、用意はいいな。くれぐれも走るのは最低限に、な。」

「・・・了、解・・・」

「じゃー、そろそろ始めるか？」

そして、轟音と共にゲームは動き始めた。

side out

三人称 side

「っ!？」

轟音が鳴り響いたビルの八階にいづなはいた。

(居場所を特定された、です!?! そんなはずねえ、ですっ!)

だが、いつなの聴覚が、ビルを上がってくる足音を捉える。

(この足音は、佑馬、です。)

一定のペースで、少し力強く、ゆっくりと踏みしめる音。

いづなが、”危険ではないが人類種は要注意”と判断したプレイヤー。

だが、空も白もステフも佑馬も、人類種など戦力としてみなしてすらいない。

いづなが開始と同時に仕掛けなかったのは、天翼種であるジブリールを警戒してのと。

どんな卓越したゲームの腕があろうが、こちらのゲームが暴かれようが、人類種は自分に近づくことも、近づかれるのを察知することさえ不可能、反応が追いつくはずがない。

だが、ふと違和感を覚える。

このビル内にNPCがひしめいているのは、音で把握している。

その中を、一切乱れないペースで、しかも二つの銃声が同時に聞こえる・・・？

いづながバツと、和服を翻して、埃舞い立つ狭い部屋の扉に銃口を向ける。

いづなが身を潜める、その唯一の出入り口。

八階フロアまで近づいてきた足音は、ふつ、と、止まった。

(・・・?)

いづなが怪訝そうに耳を立て、様子を探ろうとした、その直後。

足音が一気に速度を上げた。

それは人類種にしては早すぎる速度で。

しかも、

(どうなってるん、ですッ!?)

外のフロア内を徘徊するNPC達が。

銃声一発ごとに一体ずつ、しかも、その銃声が三つ同時に聞こえるということに、寒気が走る。

正確無比な射撃、足音は一定のペースで一つなのに、三つの銃声。

(ここに来やがる、ですっ!?)

疑う余地もないその事実。

だがいづなは、獣人種の五感をフルに稼働させ、倉庫の外、視界外の佑馬に向かって、引き金を引く。

銃口から発射された弾丸は、正確無比に、僅かに開け放たれた扉の隙間を縫って飛翔、壁に当たった……

ろうとしたときに既に放たれていた銃弾が8回跳弾し、その壁に当たる直前で撃った弾を狙撃、その銃弾が同じ軌道で返ってくる。

「なっ!?!」

それを目視で避け、再び銃を向けようとした、が。

既に足音は扉のすぐそこまで迫っていた。

(逃げるしかねえ、ですっ!)

逃げるスキを作るため、いづなが扉の隙間から『ボム』を投げる。

だが、それが外に飛び出すよりも速く、外から侵入してきた弾丸によって、炸裂する。

(なっ!?!)

ゴオオオオウツ、と。

室内で轟いた爆風を、とっさに資材の後ろに隠れ、危うくやり過ぎ……そうとしたときに。

三発の弾が侵入、それぞれ跳弾を繰り返して、弾と弾がぶつかり、いづなの方へ跳ぶ。

それを目視で避け、さらにその扉の方へ銃を向けたところで、さらに別の弾と弾がぶつかり、今いづながいる場所へと跳弾する。

「っ!？」

それを下駄でガードしたとき、佑馬が扉を蹴飛ばして侵入、同時に手近な棚を倒したことにより、着地点が耳に届かない。

呼吸音を探るが、聞こえない。

(弾幕を張るしかねえ、ですっ)

別の資材の後ろに身を潜め、大まかに狙いをつけて乱射する。

無数に放たれる弾丸。

それが跳弾し、部屋の中を結界のような弾幕を作り出す。

だが、一瞬。

佑馬のふつと嗤う声と白のゆっくりと息を吐き出す音が聞こえ、ぞくりと背筋に悪寒が走る。

即座に飛んだ。

床が砕けるような力で蹴り、小さな窓を突き破って、ビルの外の宙空へ飛び出す。振り返りざま、いづなが感じ取ったのは、全ての弾幕が撃墜された音。

そして更に、跳ね返った弾丸が、いづなが隠れていた場所へ収束する音。

さらに数発こちらへと跳んでくる。

(一体、なにが起きやがった、ですっ!?)

迫りくる弾丸を撃ち落としながら、考えるが。

撃ち落としした弾丸の後ろに重なるように跳んでくる弾丸があった。

(デタラメじゃねえか、ですっ!!)

それをもう片方の下駄でガードするが、さらにそのいづなの目が見開かれる。

この一連の事態にはなく、頭上から迫る気配に。

「はーい、いらっしやいませえ♥」

(天翼種、ジブリールツ、です!?)

飛び出すのを知っていたとしか思えないタイミングでの、空中での待ち伏せ。

(いつの間に屋上まで移動したんだ、です!?)

天翼種といえど、物理的限界に縛られる。

魔法なんてインチキは使えない、飛行能力もないはずだ。

だが、二本の足で移動したなら、自分の耳が聞き逃すはず・・・がつ!?

まだ冷静だった感覚が、ジブリールの手から、『ボム』が落とされるのを察知する。

(目眩ましっ!です!)

即座に断じる。

ボムを狙撃しても、爆発に紛れて銃弾が襲ってくる。

ならば、ボムは無視。

ジブリールを先に撃ち、二発目で処理をする!

そうして、引き金を引く、が。

「狙いが甘うございますよ!」

いかに魔法を封じられても、天翼種の身体性能は獣人種のそれに肉薄する。

空中で、至近距離から放たれた弾丸を、体を捻り目視で避けるジブリール。

僅かに掠めた弾は、ジブリールの帯を掠め、ハートを散らして服を砕いて消える。

続いて狙撃されたボムが炸裂。

爆煙の先でジブリールがこちらに銃口を向けているが、その目が丸く見開かれる。

迫りくる三発目の弾丸によって。

いづなが放ったのは三発。

一発目はジブリールに回避運動をさせるため。

二発目はジブリールの投げた目眩まし用のボムを逆に目眩ましに利用するため。

そして、三発目こそ、本命。

「と・・・あれ？あ、飛べないんでしたあつ!？」

咄嗟に羽を打って避けようとしたジブリールだが、その羽は虚しく空を切るだけ。体勢は立て直せず、不可避の一撃がその額を撃ち抜く。

その直前。

ジブリールは確かに目撃した。

何の脈絡もなく、遙か彼方のビルに慌てて目を向けるいづなの姿を。

唐突に、いづなが体を捻って、可能な限り大きく回避行動を取った。

そのはためく振袖の袂を、彼方から飛来した弾丸が貫き、消し飛ばす。

間髪容れず、同じ方向から飛来した二発目の弾が、今度はいづなに撃たれたばかりのジブリールへ突き刺さった。

その事実には、ケモノじみた勘が働く。

撃たれたジブリールを、即座に取り返す、この一撃。

(「」までが計画通りだとしたら、です!?)

ばつと顔を上げれば。

いづなが突き破ったビルの窓から、佑馬と白が銃口を向けているのが見えた。だが、

(この体勢からじゃ、攻撃出来ねえ、ですッ！)

先程のジブリールと同様。

最初の狙撃で回避運動をさせられたいづなに、それを狙撃する術はない。

そうして佑馬と白から放たれる、合計7発の弾を見て、

「おもしろえ、ですっ!!」

気炎を吐く。

いづなは歯を剥き出しにして嗤った。

side out

佑馬side

いづなは『血壊』を使った。

違うところといえば、使うのが原作よりもだいぶ早いということだ。

そう考えているうちに、いづなは腕を振り下ろし、空気を掴んで身体を受け止め、蹴りにより跳ね上がった。

「まずっ!?!」

そのままこちらに銃口を向けて八発撃ち、逃げていった。

その弾はそのまま狙撃しても白に跳んでいくように計算されている。

だから、空へと身を投げ出し、そこから八弾を打ち落とす。

そのまま地面を徘徊しているNPCに一発当てる。

しかし、いづなが逃げた方向から一発飛翔しているのを見つけ、慌てて銃口を向ける。

だが、その一発撃とうとしたところで『らぶパワー』が切れた。

(・・・っ！チツ！ここで切れるか！下に予備で撃つてあるが、白は間に合わん！)

そしてそのまま白にいづなの弾が着弾。

アスファルトに着地した瞬間、上から弾が降り注いだ。

「甘い!!」

それを全て撃ち落とし、白へ銃口を向ける。

しかし、そこに白の姿はもうなかった。

「マスター・・・おお我が主様あん・・・どうかお側にいん♥」

と言っているジブリールと共に、空のもとへ向かった。

ラブ・オア・ラベツド2 後編

三人称 side

「くそ！俺が不甲斐ないばかりに……！」

正直言つて、なめていた。

原作知識、この特典さえあれば余裕だと。

使えば、既に終わっていたゲーム。

なのに使わず、この中で最も自分が勝てる確率の少ない白を敵にまわしてしまった。

しかも、今回は偽装など出来てないだろう。

確かに白は動揺していなかった。

しかしそれは、弾が見えなかっただけだろう。

(ここは、白は空とジブリアルに任せて、俺がいつなと一対一で早く決めるべきだな。) そう考えて、足を早めた。

「空、俺が不甲斐ないばかりに申し訳ない。」

開口一番、そう言った。

「なんのことだ？」

だが、空は頭に？マークを浮かべている。

わからない。

なんで余裕なのか。

「白を守れず、相手に渡してしまったことだ。」

「ああ、なら気にするな。すぐ取り返せばいい。」

「いや、だからすぐ終わらせる。俺がいつなと一対一でやるからその間に「その必要はな

い」でも、血壊を相手に出来るのはここだと俺だけだと・・・」

「ここまで言いかけたところで、口が閉じてしまった。」

「お前、俺らをなめてるのか？」

空のゲーマーとしての顔に。

「私は今なら貴方のことが好きです、と言えます。しかし、今の貴方は好きになれるどころか、軽蔑に値します。」

そして、ジブリールの見下すような顔に。

「お前さ、俺たちの作戦、知らないだろ？」

その声のトーンはとても低く、目は鋭く光り、

「・・・ああ。でも理解は」

「出来てないな。」

その言葉はさらに理解出来なくなる。

「・・・ツ!？」

いや、理解ならしている。

原作なら、さっきのところは決めるつもりで全力でいき、失敗したらそこから完璧なアドリブが入るが、最終的にステフで決めるという作戦だったはずだ。

今回は自分もいるから、確実にに行けると踏んでいた。そう結論付けたと同時に空。

「まさか、あそこで終わらせようと思っていた、なんて思っていないよな？」
「・・・ツ!？」

読まれている。

「なあ、佑馬。」

「・・・なんだ。」

今、確かに自分は恐怖している。

空の言葉に。

そのしぐさ一つ一つに。

「俺たちな、確かにお前は」「」が相手するに足る存在だと思っていたよ。でも、少し違和感があったんだ。それが今、確信に変わった。」

さらに眼光を鋭く光らせ。

「お前さ、ある程度の未来、予測出来てるつもりだっただろう。」

「・・・あ、ああ。」

原作知識という完璧とも言える未来予知がある。

「じゃあ聞くが、その未来にお前は実際にいるのか？」

「……っ!!」

そう、原作知識は原作知識でしかない。

それは、佑馬が存在していない世界。

つまりそれは、

「俺が存在している未来とは違ってくる……」

「当然そうなるよな。」

「恐らく今回は、白が敵になることを予測出来なかったんだろうな。でも、お前以外、ステフですらこうなることは知っていたぞ?」

ステフすら知っている?

どういうことだ。

自分が知らず、それ以外は知っている。

つまり、自分がいなくて、他の皆がいたときに話合われたこと。いつだ。

基本的にジブルールは俺といる。

それが一人になるタイミング……!

「そう、お前が寝ているときだよ。」

「……」まで読まれているのかよ……」

思わず口にしてしまった。

そしてさらに恐怖した。

「今回のこの作戦な、二つ意味があるんだよ。」

一つ目はわかる。

「二つ目は、いづなを倒しにくくため。」

そして二つ目を聞いて、目を見開いた。

「二つ目は、お前が本当に俺らの敵に値するかどうかを確かめるため。」

つまり、こういうことだ。

お前の今までの行動は不自然な点が多すぎるから試させてもらった。
そして結果は当然、

「今のお前は足元にも及ばない。」

そう言われ、思い返す。

今まで、俺は何をしていたのか。

ジブリール戦

原作知識で星を砕く力を使い、勝利。

存在記憶争奪オセロ

これも原作知識で答えを導きだして、勝利。

そして今日まで何をしていたのか。

写輪眼の強化をしていた。

つまり、今まで使っていたのは頭ではなく、記憶。

強化していたのはただの目。

何が人類の可能性だよ。

何をそんな強気になつていたんだよ。

どんな面下げてステフを説教したんだよ。

その自己嫌悪から導きだされる答えは一つ。

「はは・・・くだらねえ。」

そう、くだらない。

今回の意図はこういうことだろう。

俺以外の奴はあの時にいづなが血壊を使うことを知っていた。

あそこで白が取られる・・・いや、取られるフリをしていることも知っていた。

ただわからない奴、それ即ち、俺という存在をここで確かめたということ。

「うわ、本当にくだらねえ。ただのガキじゃん俺・・・」

これは苦笑するしかない。

ここまで素晴らしいガキがいるのだろうか、と。

「はは、マジでどうしようもないとこまで行きかけたわ・・・ありがとうな、空。」

「気にすんな。お前は俺たちに確かに届きうる存在だからな。ここで躓いて貰っても困る。」

「つまりそれって・・・」

「いい素質を持ったやつと遊べなくなるなんてつまらないクソゲーはやりたくないんでね。」

「・・・こんなエール貰つといて何も感じない奴はいなよなあ。」

最早ため息すら付きつつある。

「ジブリール、ごめん。いろいろ過信していたようだわ。迷惑かけたな。」

「えーと、はい？」

「・・・え？」

「なんのことでしょうか？」

頭に？を浮かべるジブリール。

「そのことはあとで。今は白のとこへ向かうぞ。いづなは血壊を少ししか使ってないからいく間も襲ってくるだろう。各自警戒は怠らないように。」

その言葉に頷き、白のいたビルへと向かう一同。

今度こそ踏み外すまいと決意しながら。

side out

いのside

ゲームの外。

いのは内心吠えていた。

(そんな、そんなはずはないッ！)

その事実には納得いかず、いのは内心で絶叫する。

（白やジブブールの鼓動から何かを企むような緊張感はなかった！白に至っては確実に撃たれたはずだっ！）

白の心音はいづなに撃たれたときから、そして今もなお。

心身ともにリラックスした、極めてフラットな鼓動を刻んでいる。

つまりそれは

（あれすらも予測していたというのかっ!!）

そこでビルに隠れているいづなを試してみる。

血壊の一時使用により、鼓動は早い。

しかし、少しずつだが落ち着きを戻している。

『いづな、相手はさっきのビルに向かってている。気を付けていけ。』

獣人種にしか聞こえない周波数。

これこそが獣人種の血壊に次ぐ二つ目のチート。

だが。

「なあ、初瀬いの。」

その声はゲーム内の佑馬から。

そして、その言葉を聞いて身の毛がよだついの。

「次それやったらお前らの負けな？」

side out

佑馬side

さっきのビルに戻る途中、また声が聞こえた。

『いづな、相手はさっきのビルに向かっている。気を付けていけ。』

「なあ、空、ジブリール。」

「どうした？」

「なんでございましょうか。」

どうしても気になることがあった。

「さつきから爺さんがなんか言ってるんだけど、あれは錯乱？」

さつきから聞こえるいのの声。

あれはわざと言つて錯乱しているのだろうか。

だが返つてきた答えは

「何も言つてないぞ（言つてませんよ）」

「え？マジで？つまり、これはチートか？」

二人とも聞こえなくて、自分は聞こえる。

そしていづなに話しかける声。

つまりこれはチートの正体、それだろう。

「佑馬は聞こえるのか？」

「ああ・・・耳障りだし、一応潰しておくか・・・」

「そうしてくれ。」

許可も出たので、少し声を張り上げる。

「おい、初瀬いの。」

たく、さつきから何するかわざと言つて錯乱しているかと思つたら、全部事実なのか

よ。

「次それやったらお前らの負けな？」

「なんだかんだで佑馬も大概だよな……。」

「そうでございますね……。」

今の二人の声は聞こえなかったことにする。

side out

三人称 side

ビルに到着した一同。

白は5階に隠れていた。

「さて、暇だ。」

白は床に物凄い勢いである式を書いている。

襲い来るNPCに紛れ、たまにいつなが仕掛けては来るが、簡単に捌ききつている。

原作とは違い、防衛とはいえかなり余裕のあるゲーム展開となったきた。

「白、もうすぐで出来そうか？」

「……ん、もう、すぐ……終わる……。」

「じゃあそれまで耐えきりますかあ。」

佑馬は少し思ってきてしまっている。

確かに大陸をかけてのゲームだが、本命はさつきのことを言いたかっただけではないのかと。

「……ん、終わった……佑馬……説明、する、ね……？」

どうやら終わったらしいが、何故ここで自分なのかわからない様子の佑馬。

「なんの？」

「……この、ゲームの……勝利法……」

そうして地面に書かれたそれを見たとき、口を吊り上げてニヤツと笑った。

瞬間、そのスキを狙ったかのように血壊を使っていたいづなが現れ、一斉に銃を撃った。

佑馬は近くにいた白を咄嗟に抱えて窓の外へ出るが、他の二人はそのまま撃ち抜かれた。
た。

空中に落下する佑馬と白に、追い討ちをかけるいづな。

佑馬と白から放たれる二つの弾丸を捌き、そのまま頭に向かって銃を放つ。

佑馬はそれに反応し二発撃つが、その後ろに隠されたもう二発の銃弾に跳弾し、進路を変えずに来る銃弾に目を丸くし、着弾。

佑馬と白は成す術なく墜落。

壊れた玩具のように地に投げ捨てられる。

続いていづなが四足獣のような姿勢で着地し、アスファルトに巨大な亀裂をいれた。
「フウウウウウウツ．．．フウウウウウウツ」

息荒く、闘争心を剥き出しにした、暴力の化身たる獣の形相。

血に塗れたその威容が、空気に触れて徐々に黒くなつていく。

「ハアツ！．．．ハアツ！．．．フウウウウウウツ．．．」

いづなには確実に仕留めたという確信があつた。

それは、力なく地に伏す二人の姿ではなく、「仕留めた」と断言する”勘”

「．．．勝つた、です．．．」

苦しげにこぼしながら、いづなは二足で立ち上がった。

倒れて動かない佑馬と白に視線を落とし、何か言おうと口を開け

．．．ばすつ、と。

あまりに呆気なく。

あまりに唐突に、いづなの腕に、弾が当たる。

「．．．え？」

いづなは元より。

観戦していた一同、いのもクラミーも、フィーすらも。

マヌケな声を上げて、いづなの視線が向けられた先。

たつた今、いづなが撃たれた方を、注視する。

そこには……

「ソ、ソラ、こ、これでいいんですの？もう眼を開けていいんですの？」

ステフがいた。

そして……

「おう、お疲れステフ。よくやった。」

ヒョイツと軽く立ち上がる佑馬。

「……いくら『第六感』なんてあろうが。」

ゲーム終了を知らせる『敗北』の文字が表示されるいづなの視界の中。

ジブリールに運ばれる空と立ち上がった白、佑馬が言う。

「佑馬がお前の弾を跳弾して狙ったのが、おまえですらなく。」

「……その、下……」

「NPCにしがみつき眼を閉じて運ばれる、ステフとは読めないだろ？」

ただ、つと。

「正直、あれは倒すつもりで行ったが、隠れ弾は見えなかったよ……」

そのことを心底悔しそうにする佑馬。

「ステフな、白が地面に書いた命令に従え。だがその記憶は失えってな、盟約で縛った。」
空が苦笑して言う。

「エネルギー切れ状態でNPCの背中に抱きつき、『らぶパワー補給がきた十秒後撃て』
としか言われていない。ステフがいづなを狙い撃てる式・・・白が苦戦するのも、当然
だな。」

そこで、ふと思いついたように佑馬。

「そういえば、あのときなんでジブリアルは記憶が無くなってたんだ？」

「ああ、それはな。あれをするにあたってジブリアルの方も必要だから、佑馬が寝ている
間にジャンケンでわざと負けて貰い、まあ、後はステフとほぼ同じだ。」

「なるほど。」

確かにあの顔は効いたなあ、と嫌な顔をする佑馬に、

「まあ、いい薬になっただろ。」

そう苦戦する空。

「まあな・・・近いうちに、しっかりと借りを返させて貰うぜ？」

「ああ、俺らも待つてる。」

「・・・かかって、くるの・・・。」

そう笑いながら言う空、白、佑馬。

この言葉が、エルキアの存亡をかけた戦いになることも知らずに・・・。

静かな一時

三人称 *side*

「疲れたから、俺先帰るわ・・・ジブリールは一応ここにいて。」

「了解でございます。」

終わって意識が戻った瞬間に、疲労により立つのがやつとの佐馬。

向こうで写輪眼が使える保証がないため、常に発動していたが、その分疲労が溜まっております、それが一気に襲いかかってきたのだ。

(まあ・・・いつか。)

今は歩く。

寝るために、そして

「 に勝つために。」

大使館を出たところで、上から声をかけられる。

「あれえ、何処行くのですかあ？」

まあゆったりとした口調、そしてこの声、間違えるはずもないだろう。

「やあ、フィー。そっちはいいのかい？」

「大丈夫ですよお。ちなみにい、今空さんたちが獣人種と一対一で戦おうとしているのですよお。」

「ふーん、まあ勝つだろ。」

「例の未来予知ですかあ？今後の私たちのためにも少し教えてくれれば助かるんですけどお。」

クラミーを通して見ていたフィーも、やはり聞いていたようだ。

「やーだね。俺とは違い、あんたたちはしつかりとしたゲーマーだ。クリアまでの道のりも含めて、楽しまなきや損だぜ？」

「貴方は何故違うのですかあ？」

「さっきの通りだよ。力を振りかざしただけの臆病者だ。まだそちらのゲーマーの世界には入れない。だが、次フィーとクラミーに会うときは、ちゃんとそっち側にいるからな。」

「ふふ．．．楽しみにしてますねえ。」

その言葉を聞いて、空間転移の魔法を組む。

「なっ．．．！」

「ああ、フィー達は知らないんだっけ。俺魔法使えるんだわ。」

「人類種は精霊回廊がないのに、なんでッ!?」

莫大な精霊を辺りが多い、なんとか意識が飛びそうになるのを耐えるフィー。

「さあ、それは教えないな。」

そう言つて空間に穴を開け、そのまま消えていった。

（どういうことなのです．．．。）

『フィー。』

（人類種が魔法を使えるわけなのです．．．。）

『ねえ、フィーつたら。』

（しかも森精種すら使えない空間転移を簡単に．．．。）

『フイー！無視しないでよ！』

『あ、はい！考え事してたのです！別に無視してたわけではないのですよお！』

『まあ、今回はいいわよ。それよりも、空に記憶を改竄して貰ったら、すぐに帰国するわよ。やることは多いわ。』

そう、これがあの存在意義を賭けたオセロの二つ目の要求。

『フイーの記憶を改竄する権利』

である。

『・・・クラミー。』

『ん、どうかした？』

『佑馬さんについてなのです。』

『ああ、まさか未来予知が出来たなんてね。確かにそれならあのオセロゲームをすぐ解いていたというのも納得出来るわ。』

『それだけじゃないのです。』

そう、確かに未来予知は驚異だ。

しかし、とフイール。

『佑馬さんは、魔法が使えるのですよお。』

『な・・・ッ!?それ本当なのフイーッ!?』

『本当ですよお。しかも、扱える量が天翼種の空間転移を出来るくらいにはあるのですよお。』

『それってつまり・・・ッ!!』

『そう、少なくとも、序列6位以上の力を持っているもいうことなのですよお。』

その言葉に、クラミーは絶句する。

(天翼種並みに魔法が使えるって・・・佑馬は本当人類種なの!?)

そして、しばらく沈黙が辺りを支配した。

side out

佑馬 side

微睡む意識の中、今の状況を考える。

まず、夜だ。

周りには誰もいないし、近くにも気配はない。

この状況、答えは一つだろう。

(巫女のところか!)

まあ、見たことがないから転移出来ないし、いく必要もないのでとりあえず風呂に入った。

実はすごく久しぶりの一人風呂だったりもする。
お風呂を出て、とりあえず広間に行ってみると

「・・・ん？亀裂？」

空間にだんだんと小さくなっていく亀裂があつた。

「空間つてことは、空間転移の痕か？」

大規模だったはずだから、それだけ空間に負担？がかかったのだろう、と結論付けて、

「・・・これ、直せば行けるんじゃない？」

一方通行と写輪眼で解析した結果

『修復可能、そのままその場所へ転移も可能』

ということだ。

「んー、とりあえずもつかい開ければどうにかなるか？」

百聞は一見にしかず、やるしかない。

空間の亀裂に魔法で空間を開けて・・・

「・・・見つけた！」

そのまま転移し、見回すと・・・

「・・・!？」

そこは誰もいない広間。

それはつまり、失敗を意味し、

「え、まって、じゃあ巫女に会えないってこと……？ いづながあんなに可愛かったから
巫女も期待してたのに……。」

その事実項垂れる佑馬。

「……寝るか。」

所謂、現実逃避であった。

s i d e o u t

三人称 side

「「・・・。」」

ステフ、いの、ジブリールは唾然としていた。

「・・・ぐう・・・zzz」

広間の真ん中で寝ている佑馬に。

「・・・なんとというか、こいつもこいつで自由なやつですな。」

「おやおや、地を這うしか能のない貴方が佑馬に向かって何を上から申ししているので御座いましょうか。」

「はてはて、ハゲザルをこいつ呼ばわりして何かいけないことでもございましたかな？」

「貴方はもつと穩便に出来ないんですの!？」

「・・・ん？なんだ？」

喧嘩を始めるいのとジブリール、突っ込みを入れるステフにその騒ぎで起きた佑馬。傍らから見れば、3種族が仲良く談笑している画。

しかしその実態は・・・

「うっせえなあ。寝れねーだろ。」

「申し訳ございません!!この駄犬が身の程を弁えず、佑馬のことを上から目線で評価し

てましたので、つい。」

「ハゲザルにそれ相応の評価をしたままでですが、何か問題でしたかな？」

「・・・私の言葉は誰も聞いてくれないんですね・・・ええ、知ってましたとも・・・。」

ただステフが可愛そうな画だった。

「で、お前らどつたの？」

佑馬が眠そうに眼を擦りながら聞く。

「ああ・・・ソラにいのさんとエルキアに強制的に戻らされたんですよ・・・国のことは任せたとだけ言い残して。」

「ふむ、で、空達は？」

「町にいる獣人種を愛でてますわ・・・。」

「ふーん、もう巫女に会えないのか。じゃあ俺もエルキアにいるわ。」

「ソラは何も言ってますませんでしたので、いいんじゃないのですの？」

つまり、任せる、ということだろう。

「ジブリールは空達についてやってくれ。」

「了解でございます。」

一通り話終えたところで、佑馬。

「ジブリール。」

「なんでございましょう。」

「空が叫んだとき、俺のところにきてくれ。基本的に広間か部屋にしかないからさ。」

「わかりました。それでは、そろそろ。」

「ん、いつてらっしやい。」

「行つて参ります。」

そうして空間転移で虚空に溶けるように消えるジブリール。

「さて、ステフ。」

そこで口を吊り上げ可愛そうなものを見る目で、

「今から、俺とゲームしよつか？拒否しようもんならステフが空の事を考えているとき
の表情を本にしてばらまくからな。」

「な、何をむちやくちやなこと言っているんですの!?!私がゲームをしたら内政の方
がダメになつちやうじやないですの!!」

「拒否するならそれでもいいんだぜ?ちなみにゲームの内容はお前が50敗するか一勝
すれば終わり。ゲームはそちらが選んで良い。拒否権はない。」

「くっ・・・もうこうなつたらヤケですわ!!なんでもきやがれですのよ!!」

その言葉にふっ、と笑つて佑馬。

ステフの特訓・・・もとい、調教が始まった。

神霊種連合結成編

神になりし者

佑馬 side

「お、後少しで負けちゃうー。」

「後少しですわ・・・！」

今やっているのはチエス、

「あー、引き分けかー、おいしいねー。」

「さつきから引き分けばかりじゃないのですの!! いい加減勝ってくださいいな！」

ステフが1勝するか、50敗するまで終わらないゲーム。

つまり、引き分けなら何回でもしていいわけ。

「安心しろ、後100回は引き分けるつもりだから。」

「あー、なら安心ですわ♪ っとなるとでも思っているんですの!?!」

ただいまの戦績は

49勝82分である。

「さて、もう一試合行こうか。」

さて、次はどのように引き分けようか。

「今度こそ負けてみせますわ!」

負ける宣言をするステフ、だが内心では勝とうとしているのが丸見えである。

(ここまでされて心が折れないのはさすがというべきか。)

少しだけステフの評価を改める。

と、その時

「佑馬、マスターの悲鳴が聞こえました!」

ジブリールが虚空から現れた。

「お、この時を待ってたぜ! 悪いなステフ、遊びはここまでだ。」

「はえ?」

引き分けでもつれているこの盤面を、たったの3手で完璧に優勢へ持っていく、

「はい、チェックメイト。それじゃあここにきた貴族達のゲーム俺がいつて言うまで

受け続けとけ!」

そう言い残して、ジブリールと転移していった。

行く前に、え、冗談ですわよねえ!? って聞こえたような気がするが、気がするだけだ

から気にしなくてもいいだろう。

転移してみた光景は

いづな、白、そして吸血鬼の少女にズボンを下ろす空。

「空……何か言い残すことは？」

「誤解だ！てか、この世界にプライバシーって概念はねえのかッ!! 侵害されすぎだろ俺ッ!?!」

そしてファスナーを上げて

「つーか誰だおまええ！人の賢者の行為覗きやがって！」

「お前、妹の前でよくやるな。」

「……にい……白、が……寝たふり……してる、ときに……よくやる……」

「あの、お兄ちゃん今すごいこと聞いちゃったんだけど!?! ずっと起きてたの!?!」

「空、ドンマイ！」

「穴があつたら入りたい……」

「こうして見ると、なんか本当に可愛そうに見えるてくるな。」

「あ、あのお……そろそろいいですかあ？」

「そこで、吸血鬼の少女が聞いてきた。」

「やだ、俺はもう用事済んだから寝る。」

「え、まさか今の会話が用事？」

「うん。」

だって、空が発狂するところ見たかったし。

まあいいもんは見れたし、もういいだろう。

とりあえず、吸血鬼の少女、否、少年に向かって口を吊り上げながら耳元で、

「まあ、頑張りなよ、僕？」

と囁いた。

その少年の眼には驚愕の眼差しがある。

これからどうするかを考えながら、とりあえずその場で寝転がって、まずは寝ることにした。

「佑馬、みんな巫社のとこに行きますが、どうしますか？」

その声で、意識が覚醒した。

「ん．．．ああ、巫女のところね。巫女．．．？行きたい！」

マジか！もう少し後になると思ってたんだけど、これはラッキーだった！
さて、本物はどんな感じかなー。

「分かりました。それではとびますね。」

「ん、ちなみに空達は？」

そういえばいなかった。

「今は確か、巫女と『鵼雀』というものをやっておりますよ？」

ああ、連邦を作るためのやつか。

「それでは、参ります。」

その瞬間空間に穴が空いて．．．

巫社に到着した。

そこには．．．

「空、白、夢叶って良かったね！」

大量の列をつくる獣耳っ子と、

「ああ、嬉しいっっちゃ嬉しいが……」

「……プラム……許す、マジ……」

それをもふる空と白、

「……なッ!?!」

こちらを見てビクビクしている巫女がいた。

ふむ、生はやっぱいいいな。

って、ビクビクから疑心の眼になってる……?

「ん、どうかした?」

「あなた、一体何者や……」

え、なんのこと?

「いや、あのー、言っている意味がわからないのですが……」

「質問変えたるか。」

そしてその質問に、俺は……いや、ここにいる全員が驚きを隠せずにはいられなかった。

「神霊種（オールドデウス）がこんなところに何の用やときいとるんや。」

「「「」・「」・「」・「」」

え、俺が神霊種？ どういうこと？

「あんたからは神霊種の力を感じるんよ。」

ああ、なるほど。巫女はたしか神霊種の力を持っていたっけ。

でもなんで俺が神霊種の力持っているんだ？

（その質問にはわしが答えてあげるわい。）

そこでいきなり念話がきた。

あの爺さんこと、神様からだ。

(そなたはわしから力を貰っておったのは当然知っているじやろう。その時に神の力も少し与えてしまっている、だから、神霊種と捉えられたのじや。)

(なるほどな、いい迷惑だぜ。)

(すまないの。)

じゃあ、質問に答えておきますか。

「巫女、確かに俺は神霊種だ。」

その言葉に空、白、ジブリール、プラムの顔がまた驚きの表情に変わる。

「今は人類種として楽しんでるだけ、つまり味方だから安心しなよ。」

「そうかいな・・・」

今は・・・ね。

「まあ、俺がいたらあれっぼいし、帰るわ。」

そう言つて帰ろうとするが、

「佑馬。」

空がそれを止めた。

「どうした？」

「……いや、やっぱり何もない。」

しかし、何かを踏みとどまったかのような表情をして、そう言った。その言葉を最後に、空間転移してエルキア城に戻った。

エルキア城前

(俺が神霊種か……)

巫女、そしてあの神が言うなら間違いないのだろう。

・・・。

「・・・おいテト、これはどういうことだ？」

「なんのことだい？」

何も無い虚空からテトが現れるが、間違ひなく隠れて見ていたよな。

「俺って、人類種って前きいたとき・・・なかったっけ。」

あれ、そういえば俺は人類種って確定できてたっけ。

獣人種のゲームでも自分のコマは出てこなかったし、なによりこいつも人類種である

ことを肯定してなかった。

「うん、なかったね。僕が楽しみにしているのは、神霊種の中にもゲームをクリア出来そ

うな人がきたからだよ。」

そういえば、神霊種は別の解釈していたんだっけ。

「・・・なら、テトの予想通り、面白くしてやるよ。」

「君ならそう言ってくれると信じてたよ。」

そう、最高に面白くしてやろうじゃないか。

まずは・・・そう。

神靈種の全権代理者を名乗って、アヴァントヘイムをこちらにつけよう。
エルキアに全面戦争を仕掛けるために。

アヴァント・ヘイム攻略 前編

ある日、世界にある一つの情報が駆け巡った。

神霊種の全権代理者の出現、及び、全世界への宣戦布告されたという。

佑馬 side

まず、確実に手に入れておきたいのはアヴァント・ヘイムとエルヴン・ガルドだろう。
その前に、

「ジブリール。」

「なんででしょうか？」

「俺とジャンケンして、負けてくれ。」

なんで未だに俺がジブリールの所有権を持っているのか、これは元を辿れば当然ジブリールのものだ。

「よろしいですが・・・内容は？」

「俺が勝つたら『ジブリールにジブリールの全権を戻す』、ジブリールが勝つたら『俺達から全権を取り戻す』っていう内容だ。」

「・・・それは、よろしいのでしょうか・・・？」

「おいおい、俺が最初にお前に望んだのは『対等な権利』だけ？なんで俺が所有権を持つてんだよ、あの時はジブリールを空達に渡したくなかったただだよ。」

「確かにそうでございましたね・・・まだ月日は浅いのに、かなり昔のような感じがします。」

「はは、それは同感。じゃあ、俺はグーだすからチョコキお願いするわ。」

「了解でございます。では、”盟約に誓って”」

”盟約に誓って”」

ほんと、八百長ジャンケンって便利。

「よし、じゃあ、行きますか！」

「えーつと、何処にでございますか？」

「アヴァント・ヘイム。」

「・・・！とうとうこの時が来たのでございますね!!」

まあ、エルヴン・ガルドはまだいいでしょ、フィール達させつせと空達の思惑通りに働いているだろうし。

「おー、じゃあ転移よろしく。」

「はい！では、参ります！」

——アヴァント・ヘイム——

転移した方がいいが、下は本当に何も無いじゃん・・・。

「着きました。」

ふむ、まあ、いい景色ではある。

いかにも天空の城って感じだな。

閑話休題

「ジブリール、試したいことあるから、適当な場所に下ろしてくれないか？」
「あ、了解でございます。」

キューブみたいなどころに下ろされて、どうやったら飛べるのか考える。

今ある能力

写輪眼、一方通行、転移ぐらいか……。

天翼種はあの羽根の精霊で飛んでいる、精霊は感知出来ても、構造が特殊すぎてコピーは出来ない。

一方通行も飛べるかどうか……まてよ。

(ん……？黒い翼って出せるのか？)

黒い翼なら行けるかもしれないが、出し方がわからないから保留で。

次に写輪眼。

(恐らく万華鏡も出来るだろう、けど、そこから須佐能乎を出せるかわからんし、出せたとしても、飛べるレベルまで操れるかどうか……あつ！)

もう一つあるじゃん！

(一方通行と写輪眼を合わせて魔法が使えるなら、万華鏡と一方通行を合わせてみたら……！)

今、常時写輪眼にしている。

馴れるためだ。

それを・・・

(万華鏡写輪眼!!)

・・・確認なかったけど、なんか出来たな。

あの爺さんの好意か？

(うむ、その通りじゃよ。)

「うわおい!!」

「!?どうしました!?!」

「あ、いや、なんでもない、悪い。」

(おい爺！何人の頭覗いてやがんだ！)

(ひどいのお、わしも暇なんじゃよ。)

神が暇でいいのか・・・。

(ただ、輪廻眼はまだ無理じゃよ。)

(あの眼は別にいいや・・・)

こっちの方がカッコいいし。

(そうかの、じゃあ頑張るのじゃよ。)

(おー、ありがとな。)

今思うと、この念話って便利だよな。
さて、一方通行を使ってみるか……。

……。

……分かる、これはいけるツ!!

一方通行を使った瞬間、黒い翼が顕現した。

「!?それは一体なんぞございますか!?!」

ジブルールから驚きの声上がる。

「これが今の俺の最善の状態かな。」

「すごい力を感じます……これならば……ッ!?!」

その時、真下から

「グオオオオオオオ……」

とてつもない咆哮と、

「この力は一体何事にや!？」

転移してきた天翼種が現れた。

「おや、アズリール先輩、お久しぶりでございます。」

サイツコーに嫌そうな顔をしながら言うジブリール。

何処まで嫌いやねん。

「ジブちゃんお久しぶりにや!!・・・っと抱きつきたいとこなんだけど、君はなんだにや?。」

「おー、佑馬だ。よろしくなアズリール。」

「人類種・・・かにや? いやでも・・・」

「今日は『全翼代理』である君、アズリールにちよつと頼みごとがあるのだ。」

「・・・なにかにや?。」

そう、これは本当に大事なこと。

絶対に失敗は避けられない。

「あなたの妹さんを俺にください!!!」

「・・・え？」

「これつきやないでしょ！」

「ジブリアルに親はいない、なら、『全翼代理』であるアズリアルならば!!」

「断るにや!!」

「そこをなんとか！」

「断るにや!!!」

「頼む！」

「これだけは譲れない!!」

「あの、佑馬？」

「無理と言ったら無理にや！」

「ならゲームで取るまでだあ!!!」

「あの、ちよつとよろしゅうございますか？」

「なんだ！（にやー）」

「・・・私の所有権は私にあり、先輩が持っているわけではありません。それに『全翼代理』なだけで、『全権代理者』ではありません。」

「・・・あー、ならいいや。お前に用はない。」

「ま、待つにや！」

「待たないね。」

「お願いだから待つにや！ジブちゃんを取らないでー！！」

「だが断る！！」

「・・・佑馬、ギャグはそれくらいにして、そろそろ本題に・・・。」

「いや、結構本気だったんだけど、まあ本題に入るか。」

正直言つて、すごい楽しかったです。はい。

「アズリール、いや、天翼種。お前達には俺と同盟を組んでもらう。」

「・・・それは、なんでかにや？」

「エルキアを倒すため。」

空達を倒すには、アヴァント・ヘイムの協力は不可欠。

引くわけにはいかない。

「あんな二足歩行している猿なんか、うち一人で十分にやー。」

「ここにいる俺も一応人間なんだが？」

人類種とは言わない、種族は違えどそこは同じだ！

たぶん。

「人類種がそんな力あるわけないにや。」

「だって、神霊種だし。」

「・・・なるほどにや、だからアヴ君が喜んでいるのかにや。」

さっきの叫び、アヴァント・ヘイムなのか。

「なら、ゲームをしよう。」

「・・・どんなにや?」

「それはそちらが決めていい。」

盟約その5

ゲーム内容は、挑まれたほうが決定権を有する。

「賭けるものは何かにや?」

「俺が勝ったら、俺たちと同盟を組む、お前達の生きる意味を与えるっでどうだ。」

「・・・こちらの事情は把握済みってことだにや。」

「そっちが勝ったら俺が持つてるジブリーの権利を全部やる。」

「のつたにや!」

おい、即決かよ。

「ゲーム内容はこちらから教えるにや!だからそこらへんで少しだけブラブラしてるにや!」

そう言い残して、消えていった。

・・・あれでもアヴァント・ヘイムの力を模倣しているんだよな。
てか、結局この力のこと聞かなかったな。

「・・・佑馬が持つてる私の権利って・・・何もないじゃないですか。」
「え、でも問題はないよ。」

そう、問題はない。

盟約その3

ゲームには、相互が対等と判断したものを賭けて行われる。

盟約その4

”3”に反しない限り、ゲーム内容、賭けるものは一切を問わない。

つまり、相互同意があれば、無いものを賭けてもいいわけだ。

「ノーリスクハイリターンってわけですか。」

「まあ、気にするな。それよりこの力ちよつと試してみるわ。」

そうして、口元を吊り上げて笑う。

本当に楽しみだ。

アヴァント・ヘイム攻略 中編

バリアフリーという言葉がない世界、アヴァント・ヘイム。

その空を飛び回る一人の少年とそれを見守る一人の天使がいた。

「うん、だいたい慣れてきた。」

空を飛び回る少年は言わずもがな、佑馬。

「さすがでございませう。」

もう一人の天使もまた言わずもがな、ジブリール。

「ていうか、正直受けてくれないと思うんだよね、あのゲーム。」

「それはどうしてでございませうか？あの方程度、佑馬なら簡単だと思えますが。」

軽くアズリールを貶すジブリールだが、佑馬はゲームという点において、アズリールを下になど見てはいなかった。

「なんというかさ、さすがにあいつも気づいていると思うんだよね。でもそれでも乗ったって、何か裏がありそうなんだけどな。」

受けても問題ない、と判断されたのか、

受けた方が何かしらの見返りが大きい、と判断したのか、

それとも本当にわかってないのか。

どれとも取れるそれは、答えによっては今後に大きく関わるものだ。

「まあ、何にしたってやるからには負けるつもりはないけど。」

そう言って、また飛び始めた。

その頃、ある広間に50人もの天翼種が集まっていた。

「君たちにはゲームに参加してもらうにや。」

「賭けるものはなんでしようか？」

アズリールとその精鋭達だ。

『神霊種と同盟を組む、こちらに生きる意味を与える』にや。」

「「ッ!」」

『こちらに生きる意味を与える』という言葉に驚きを示す天翼種達。

「なら、あちらが賭けるものはいったい・・・。」

『俺がもつジブちゃんの全権をあげる』にや。」

「こちらが勝てばジブリールの全権を取り戻せて、あちらが勝てば同盟と生きる意味を与えるってことですか・・・」

「そうにや。でも、向こうはジブちゃんの権利を持つてないみたいだにや。」

そう、アズリールはちゃんとあの会話を聞いていたのだ。

「それをわかつていて何故受けるのですか？」

「主様以外の神霊種に負けるつもりはないにや。ジブちゃんはちようど取り返そうって思ってた頃だったしにや。」

「それでも受ける理由にはなりません。」

アズリールは『全権代理』ではなく『全翼代理』だ。

勝手に天翼種全体に関わるゲームはできない。

「受ける代わりに、こちらが勝ったら『生きる意味を与える』を追加するにや。」

「なるほど。」ゲームに参加する対価として使うのですね。」

「そうにや。」

これを対価にしなければ受けない、と言えば向こうは受けざるを得ない。

受けなければこちらも受けないから。

「それで、ゲームは何をするのですか？『具象化しりとり』をするにしても数が多過ぎて手間がかかりますし。」

当然の質問が飛んてくる。

ゲームの内容はこちらに決定権があるからだ。

「今回しりとりはしないにや。」

「それでは、いったい何を？」

アズリールはゲーム内容を明かした。

別の広間に連れてこられた佑馬とジブリール。

そこには49人の天翼種とアズリール、合わせて50人が待っていた。

「ゲームの内容が決まったにや。」

「ほう、それでなんだ？」

「その前に、こちらがゲームを受けるための条件を提示するにや。」

条件という言葉にピクリと反応するジブリール。

佑馬は平然を保っている。

「こちらの勝利した時、『こちらに生きる意味を与える』を追加するにや。ジブちゃんの権利について黙認してるし、そちらも受けてもらうにや。」

その言葉に、ジブリールは驚き、佑馬は ほう、と軽く笑った。

「ジブリール、どうやらアズリールはお前が思ってるほど頭は悪くないみたいだぜ？あ、条件は受けるから内容を聞かせてくれ。」

「わかったにや。ゲーム内容は。」

そこで指をパチン！と鳴らして。

「『鬼ごっこ』にや。」

アヴァント・ヘイムの地形をゴツそりと変えた。

「これはまた、シンプルだな。」

「内容を言うにや。参加人数は51人で鬼は君にや。最初に10分逃げる時間を貰って、それが終わってから一時間が制限時間にや。魔法は全て使用可能。魔法で損傷したところはゲーム終了後に全て直るから気にしなくていいにや。それとジブちゃんは参加禁止にや、誰も逃げ切れないから。」

「ははは、やっぱりジブルールは天翼種公認チートだったか。」

「すみません、佑馬。出来るだけ力に成りたかったのですが・・・」

本場に申し訳なさそうに言うジブルールに、佑馬は頭をポンポンと軽く触りながら言った。

「あはは、気にすんなって。ジブルールがいなくても勝てるし、その気持ちだけで十分だよ。」

「・・・ありがとうございます。」

その言葉に少しだけ顔を赤くしながら言うジブルールに、

「それはそこまでにやあああああああ!」

その空気に耐えかねたアズルールは全力で止めに入った。

「悪い悪い。で、内容はそれだけか?」

「そうにや。10分後にジブちゃんに開始の合図をされたら開始にや。」

「面白い。乗った。」

全ての魔法の使用可能。

つまり、それだけ真似出来る魔法が増えることは、佑馬にとつても利益にしかならぬい。

「あ、でも一度捕まったやつはその場で待機、終了な。めんどくさいし。」
「わかつたにや。ではそろそろ、始めるのにや。」

「！！！！」 盟約に誓って！！！！！！

ジブリール以外の全員が手を上げてそう叫び、佑馬とジブリール以外の全員が虚空に消えていった。

「佑馬、どうか気を付けてください。」

ジブリールの心配そうな声に、はははっと笑いながら佑馬。

「おう、まあなんとかしてみよう。」

「先輩は頭はあれですが、力は確かです。」

「ここまで馬鹿にされるアズリールに少し同情したくなるが、そこは胸の内に抑えておく。」

「ああ、アヴァント・ヘイムの力は少々めんどそうだけど、なんとかするよ。」
「・・・はい。」

そして、時間がくるまでに翼を開いてその時を待った。

あの会話から10分後、開始の合図がジブリールから出された。

その時。

「ほう、面白い。」

全方向から約40もの天翼種が現れて、天撃を放った。

威力的に、約1割程度、様子見ってところだろう。

1割とはいえ、その威力は絶大。

それが、40あり、その全てが佑馬に向かって飛んでいった。

何もしない佑馬をみて、天翼種達はとった!と思うが。

当たる寸前でそれが全て跳ね返ってきた状況に、全員が目を開ける。

「これくらいでとったでも思われるとは心外だな。」

様々な避けかたで、誰一人として被弾することはなかったが、声の聞こえた方向を向

けて全員がその事実を恐怖する。

「君ら全員、アウトだ。」

あの短時間で40人全員捕まえたという事実だ。

「そんな、馬鹿なッ!?!」

「信じられないなら逃げてみればいいさ。盟約通りならそこから逃げられないから。」

そう言われて全員逃げようとするが、誰一人として動けない。

「あと10人、さあ、楽しませてくれよ?」

口を吊り上げ、黒い翼をはためかせながら飛んでいく姿はまさしく悪魔。

ここにいる40人は悟ってしまった。

勝てるわけがない、と。

アヴァント・ヘイム攻略 後編

黒い翼をはためかせながら残りの10人を探すためにアヴァント・ヘイムを飛び回る
佑馬。

「当然だけど、居ないよなあ。」

40人で攻めてきたということは、残りの10人は防衛、つまり隠れ通すことだろう。
「眼ではもう捕らえているんだけど、行くとときに逃げるだろうしなあー。試すついでに
やってみるか。」

気だるそうに言う佑馬。

その言葉に近くで隠れていた天翼種が警戒を強める。

そして佑馬が翼を開いた瞬間。

「君、アウトね。」

「!？」

その言葉にバツ！と後ろを見ると、

「・・・そんな・・・。」

いつの間にか後ろに笑みを浮かべながら肩に手をおく佑馬がいた。

「うんうん、これはすつこい楽だね。」

「一体何を……」

未だに何をされたのかわからないという天翼種に、

予想以上の収穫だと笑いながら佑馬。

「いや、簡単なことだよ。」

そして、驚愕の事実を告げた。

それこそ、天翼種の常識を覆すような。

即ち、

「俺の精霊をあたりにバラまいて反応を示したところに転移するだけ。な？ 簡単だろ？」

「な!？」

確かに言うだけなら簡単だが、実際は違う。

精霊を辺りに散らして反応を探すのは天翼種にもできる。

だが、相手に気づかれないようにバラまくのはどう考えても不可能だ。

それに、

「何故見たこともないところに転移出来るのでしょうか。一度行った場所、視界内、どちらも条件は満たされていません。」

そう、転移の条件すら揃っていないのだ。

だが、そんなこと気にする様子もなく、

「自分の精霊に触れたんだから、自分の精霊が、そこに行つたつていうことだろ？ 所謂マーキングつてやつだよ。」

つまり、佑馬の精霊がいただけでもそこに転移できるという事実には。

ただただ啞然とする天翼種。

「んじゃ、あと9人か。さつき反応したのが5人いたけど、逃げただろうなー。」

そう言い残して、転移していった。

少し遡り、翼を広げた瞬間に消えたのを見た天翼種達は、その後すぐに膨大な精霊を

感じ取り、

「ツ!?!」

すぐに転移した。

そして、転移したところで、天翼種にはない感情。

即ち、恐怖に身を震わせる。

佑馬の姿を見ていたのは確か。

しかし、見ていた場所は約5kmは離れている。

そこまで離れていたのにも関わらず、精霊が辺りを包んだのだ。

それも、佑馬が消えてからやっとな気づき、恐怖を受けるレベルの量を。

現在、生き残り9人 残り時間 58分30秒。

それから5分たち、残りはアズリールだけとなった。

「まあ、あいつはそうそう見つからないか。」

これは予め予測していたこと。

アヴァント・ヘイムの力を持っているアズリールは、放たれる精霊をすぐに察知して、一度も佑馬の精霊に触れることなく、逃げているのだ。

「よしよし、じゃあ次の段階行ってみるか。」

口を吊り上げてそう言う佑馬。

その瞬間、また精霊が辺りを覆うが、

「なッ!?!」

近くにいた天翼種は衝撃を受ける。

精霊が消えずに、ずっとその場に留まっているのだ。

「これで逃げ道はどんどん少なくなる。さあ、何処まで逃げ切れるかな?」

現在、生き残り1人 残り時間 52分

その頃、アズリールは必死に逃げていた。

「はあ．．．はあ．．．いくら神霊種といつても、あれはでらためすぎるにや．．．。」
いくら神霊種と言っても、人類種の姿をした神霊種。

対抗するどころか、押せるとも思っていたアズリールだが、実際は全く違った。

「あんな精霊の量はチートすぎるにや．．．主様にも負けてないにや．．．。」

そう、精霊の保持量がとてつもなく多いのだ。

少なくとも、現在確認しているだけで、ルーシア大陸を覆うほどの精霊はある。

「しかも天撃は効かない、魔法も効かないとききたにや．．．。」

最初の天撃の攻撃でわかつてはいたことだが、

淡い希望を持って捕捉魔法を使ったりした天翼種もいた。

しかし、それも見事に跳ね返されていたのだ。

もう残り50分、既に一人。

ここで勝てる確率が一番高い方法は

「・・・直接闘って倒す・・・にや。」

もうアヴァント・ヘイムのほとんどは佑馬の精霊が、蠢いている。

なら、あえて姿を見せて、闘うしか方法はない。

「負けるわけにはいかないにや・・・あの時の選択が正しかったと証明するためにも・・・！」

そして、近づいてきた佑馬に向かって天撃を打ち、このゲームの最後の戦いが始まった。

ジブリールは佑馬とアズリールの戦闘を見て驚愕していた。

「そんな・・・まさか。」

さつきまでの出来事から誰が予測出来ようか。
アズリールが佑馬を押し始めるといふ光景を。
それはアズリール本人も予想外だったらしく。

「これなら・・・行けるかもしれないにゃ!!」

光の剣を顕現させて突撃を繰り返すアズリール。

対面してすぐ、剣で斬りかかるが、それを反射させられ、その後長年の勘という奴で、
剣を引いてみたら見事佑馬に避けさせるという行動を成功させてから、ずっと押し続け
ているのだ。

事実佑馬を後退させているのだ。

「まさかここまでやるとはねー。楽しくなってきたな!」

そうは言いつつも兎に角拗き続け、避け続ける佑馬。

それが15分ほど続いている。

「はあ・・・はあ・・・あと少しにゃ・・・!!」

自分を鼓舞しながらなおも突撃を繰り返すアズリール。

そこで、ふとジブリールが気づく。

「・・・まだ一度も攻撃をしない理由は一体・・・。」

いくらなんでも、攻撃出来ないほど余裕がないようには見えない。

それはまた、アズリールも気づいていた。だからこそ、攻め続けているのだ。

わざと生かされている今のうちにケリをつけるために。

そして、残り時間 30分丁度となったとき、佑馬が一気に距離を取った。

「アズリール、頑張った君に褒美だ。ちゃんとした姿で相手をしよう。」

そう言っつて現れた姿に、アズリール、ジブリールまでもが愕然とした。

「さあ、今度は攻撃もありになるぜ？」

その姿は須佐之乎。

完成された赤黒い姿の、山ではないだろうかと見間違えるほどの巨大な須佐之乎に、それよりもさらに黒い、漆黒の翼が出ていた。

「ハハ・・・冗談だにや・・・こんな勝てるわけがないにや・・・。」

アヴァント・ヘイムの力を持っているアズリールすら、圧倒的な力を前に絶望する。なんのためにここまで頑張ったのか。

それがわからなくなるほど、いや、後悔するほどの力の差。

そして、諦めようとしたとき、佑馬から声がかかった。

「俺はな、この姿を『敵として認めた奴』にしか使わないことに決めたよ。アズリール、俺はお前を認めたんだ。なら、最後まで粘ってみろよ。」

認められた。

この佑馬に、敵として、認められた。

それは、アズリールに立つ気力を与えるに足るものだった。

「ジブちゃんのためにも・・・天翼種のためにも・・・諦めるわけにはいかないにや・・・

天翼種を舐めるなにやああああ！」

「さすがだ、アズリール。その目、俺は好きだぜ？」

そして、アズリールはまた突撃を開始した。

「はあ．．．はあ．．．」

「よく頑張ったな、アズリール。」

勝負は決した。

当然の結果だ。

剣は反射膜を通っても、須佐之乎の鎧を破壊することは出来なかった。

ゲーム開始からわかっていた。

「ゲーム終了だ。傷はちゃんと癒えるし、問題はない。」

そう言っつて、アズリールの肩に手を置き、

「楽しかったぜ。またやろうな。」

そして、広間へと転移した。

転移した広間には、ジブリールと49名の天翼種がいた。

「うん、全員いるな。」

周りを見渡して、全員がいることを確認する佑馬。

「よし、このゲームは俺の勝ちだ。同盟相手となつて貰うぞ？アズリール。」

「勿論、こちらからもお願いしたいくらいだよ。」

「そして、もうひとつだが・・・俺はもうお前達に与えている。」

「・・・え？」

「そうでございませぬ。」

なんのことがわからない天翼種一同に、ただ一人、理解している者がいた。

「・・・そういうことかによ・・・。」

「さっきの戦いからちゃんと言ったみたいだな。よかったよ。」

アズリールだった。

「あれから学べないほど抜けてないにや。」

その言葉に笑みを浮かべて、

「よし、じゃああと一つだ。」

「「??」」

「あと一つとは？」

その言葉はジブリールですら理解出来なかつた。

佑馬はアズリールの方に向き、

「ジブリールを俺に貰えないか？」

そう、頭を下げた。

「・・・仕方がないにや。二人のことを認めるにやあ・・・。」

ここまで来ると、認めざるを得なくなる。

そして、その言葉に跳ね上がって喜ぶ佑馬。

「よっしやあああああああ！きたあああああ！」

そう言ってジブリアルに抱きついた。

「えッ?!いきなり何をしているのですか!?!」

いきなりの行動に狼狽えるジブリアルに

「これで人目を気にせずイチャイチャできる!」

そう断言した佑馬。

「そうでございますが・・・さすがに恥ずかしいのでこういう時には控えてくださるとあ

りがたいです。」

顔を赤くしながら言うジブリアルだが、

「努力します。」

抱きつく力を強くしながら言う佑馬に、思わず笑ってしまった。

「さて、そろそろいいかにかにや?」

「今度は待ってくれたのか、ありがとな。」

まだ言うことがあるアズリールは、さつき認めるとは言ったが一旦止めることを選んだ。

「これから佑馬ちゃんはどーするにや?」

「んー、エルヴン・ガルドかな。」

ちゃん付けになつていたのは、問う必要もないだろう。

「なるほどにや・・・力を貸して欲しいときはいつでも来ていいからにや。待つてるから。」

「おう、じゃあ、とりあえず行くわ。」

そこでアズリール達に背を向けて。

「・・・アズリール、天翼種にはお前が必要だからな、あれは使うなよ?」

「・・・気づいていたのかにや? まあ、使う気はないし、ちゃんと皆には話すにや。」

その言葉に笑みを浮かべて、

「じゃあな。」

そう言つて、転移していき、

「よく頑張りましたね。さすが『全翼代理』です、『姉さん』。」

「・・・当たり前にな・・・うちはジブにゃんのお姉ちゃんだからにや・・・。」

『姉』という言葉にうつすらと涙を浮かべながら言うアズリール。

「それでは、失礼します。」
そう言って、ジブリールも転移していった。

エルヴン・ガルド攻略

漆黒の夜の中に、朱い月の光に照らされながら空を舞う二つの影があつた。

「クラミーお見事なですよおー。本当に、私の補助無しであの老害を破るのお、すごく心配したのですよおー？」

二人分の空を舞う術式を維持しながら、嬉しそうに語る耳の長い少女、フィール。

「・・・それよりフィー、大丈夫なの？」

黒いベールも被り空を舞う、クラミー。

「えへへえ、クラミーに心配されるのも悪くないです、成長しているのですねえー。あ、クラミー、情報が入ってきたのですよお。」

そう言つてフィールが、額の魂石（ジエム）に触れる。

まあ、他国の『精霊回廊情報伝達網』を傍受しているのだが。

その情報に、フィールは目を見開く。

「フィー、どうしたの？緊急事態？」

「はい、そうなのですよお。」

そして、その情報を半信半疑に語る。

「一人の神霊種が、アヴァント・ヘイムと同盟を組んだらしいのですよお。」
「・・・なんですって?」

これは空の計画にもなかつたこと。

つまり、イレギュラー。

「しかもその神霊種の姿が・・・」

「人類種でしたってか?」

その声にバツ!と後ろを向くクラミーとフィール。

そこにいたのは・・・

「・・・佑馬。」

「よお、クラミー。切り崩しご苦労さん。」

「マスター達のために、ご苦労様でございます。」

そして、ジブリアルだ。

「まさか、この神霊種って」

「そう、俺のこと。」

にわかには信じられないフィールとクラミーだが、この状況を見ては、信じるしかない。

なぜなら、佑馬が黒い翼を生やして飛んでいるからだ。

「あ、でも俺、本当に人類種なんだぜ?これはホント。魔法でも使って構わないからさ。」

その一言で、フィールは魔法を使う。
結果は当然、

「・・・本当に人類種なんですねえ・・・。」

「どういうことなの？」

「うーん、なんだろ。人類種でもあるし、神霊種でもあるのかな。」

実のところ、そこは佑馬も曖昧な部分である。

生物なのに、神霊種。

体の構造は人類種なのに、神霊種。

「正直、俺にもさっぱりだ。」

「で、そんなあなたがなんの用かしら？」

当然と言えば当然の疑問だ。

「あー、エルヴン・ガルドと同盟組もうかなーって思ってたさ、来ちゃったわけ。」

「佑馬さんも落ちましたねえ。あんな老害と組むことを考えるなんて」

と、フィールが言いかけて、

「え？俺、フィールを全権代理人にするつもりなんだけど。」

その一言にフィールとクラミーは絶句した。

「だってさ、あんなやつらより頭の回るフィールの方がよっぽど向いてるじゃん。なあ、

クラミー?」

「・・・そうね。」

実際それはクラミーも思っていたことだ。

あんな老害よりも、絶対にフィールの方が全権代理に向いている。

「わかったわ、ソラに一矢報いたいところだったし、やりましょう。」

「クラミーが言うならあ、私もやるのですよお。」

クラミーが了承し、それにフィールも賛同する。

「そうか、なら改めて自己紹介な。」

その言葉に二人は頭にハテナを浮かべるが。

「神霊種の『全権代理者』中田佑馬だ。」

その言葉に、目を見開いた。

「佑馬が・・・神霊種の『全権代理者』?」

「おう、クラミーならわかると思うが、これでソラの作戦も面白い方向に転ぶと思うぜ?」

「そうね・・・かなり面白くなってきたじゃない。」

クラミーは、子供のような無邪気な表情を浮かべていた。

「よし、まあ一時同盟を組んで、フィールを『全権代理者』にしてからもつかい詳しい話

をしよう。」

「わかったわ、それで、具体的に何をするのかしら？」

「俺が『人類種』として、ゲームを仕掛ける。」

「どういうこと？」

「つまりですね」

そこで、ジブリールがその全容を話した。

「なるほど・・・面白いじゃない。」

「だろ？お前らもこいよ、絶対に面白いの見れるから。」

「絶対に見に行くのですよお♪」

「あの森の老害達がどんな表情をするのか、見物でございますね♪」

「これから起こることを予想して、皆が笑みを浮かべていた。」

エルヴン・ガルドの都市の一角にある大きな城に、一人の少年と、三人の少女が入っていった。

「誰だ！貴様らー！」

「人類種の使者だ、全権代理者に話がある、通してもらおう。」

人類種、という言葉聞いて、少しだけ警戒するエルフの男性。

「・・・少し待っている。」

そう言って城の中へと入っていった。

「やっぱりバレないね。」

その一人の少年、佑馬が言うと、

「まあ、これだけ魔法を重ねていればね。」

一人の少女、クラミーと

「まあ、基本こんな程度ですよ。」

「森の雑種に佑馬の魔法を看破出来るわけがありません。」

残りの少女、フィールとジブルールがそう言った。

「でも、驚いたのですよお。『精霊回廊接続神経』がないのに、『八重術式』まで使えるなんてえ。」

「まあ、さすがに無理があるけどな。精霊量的には、二百術式くらい余裕でいけるけど。」

その言葉にもはや呆れる一同。

「・・・佑馬も佑馬で大概よね。」

「否定しないのですよお。」

「佑馬が規格外なのは、今に始まったことではないのでございます。」

三者三様に佑馬を人外認定したが、

「俺もそう思う。」

本人も自覚があつたようだ。

そこで、森番であろう、さっきのエルフの男性が戻ってきて、

「通れ。」

そう一言言った。

長い廊下を抜け、大きい会議室みたいな部屋に入った。

そこにいたのは・・・

「ふむ、あんたが『全権代理人』か？」

「その通りだ。用件はなんだ。」

白い髭を生やした初老の男だった。

「ゲームをしてもらう。」

「ほう、賭けるものは？」

「こちらが賭けるものは『ソラとシロに関する情報』だ。」

その言葉に、全権代理者の男は嘘かどうか調べ始めた。

「もういい?」

その精霊が引いたと同時に聞く佑馬に、少し眉が動くが、

「ああ、それで、こちらが賭けるものは?」

「『全権代理者の権利の剥奪』だ。でも、ゲームをするのは俺ただ一人だ。」

「わかった、ゲームを受けよう。」

「内容はこちらが決めてくれ。時間はいつでもいい。」

「なら、今からやろうか。」

そこで、数枚のカードを取り出す男。

「ゲームは、『オラクル・カード』だ。」

「わかった、始めよう。」

そう言った瞬間、勝ちを見たのであろうその男は、不敵に笑いだす。

「そこからノコノコと来てくれるとは思ってもみなかつたぞ。おかげでなんとか対策が立てられそうだ。」

「はは、そうかよ。じゃあ始めるか。」

「”盟約に誓って”」

「では、2カードセット。」

「2カードセット。」

その男に続いて、佑馬が言う。

同時に、それぞれの手札から、二枚のカードが消える。

そして、テーブルの上に、その二枚が出現する。

「では、これで勝負でいいかね？」

「ああ。」

「では、『オープンデイル』」

『『オープン・デイル』』

男に続いて、佑馬もそう言う。

男が出した札は、『力』と『戦車』

役名 『名誉とは勝利なり』』

そして、佑馬が出したカードは『吊るされた男』と『世界』

役名 『旅とは試練を与えるもの』』

男が呼んだのは、全身甲冑の騎士、たいして佑馬は、首に縄を付けて杖を携える老人。

全身甲冑の男に向かって杖を振るが、それを弾いて佑馬に突撃する騎士。

オラクル・カード。

タロットカードの大アルカナ、二十二枚を使った単純なゲーム。基本的に森精種同士で使うゲームだ。

その斬撃を喰らったのを確認した男は、「勝った」と呟くが、
「なんだ、こんな程度か。」

魔法を使わずに耐えた佑馬に、絶句する。

「貴様……一体何をした。」

「何って、ただ耐えたただけだけど？」

「そんなわけあるか！」

その事実を信じられないと叫ぶ男だが、

「このゲームでイカサマ出来ないのはあんたが一番よく知ってるだろ？」
不敵に笑う佑馬を見て、背筋に寒気が走ったのだ。

「2カードセット。早くしろ。」

と、言う佑馬に対面している初老の男は、既に満身創痕だ。

「くそ……！2カードセット!!」

手札から二枚のカードが消えて、テーブルの上に現れる。

佑馬の出した札は、『恋人』と『隠者』。

役名 『一方的な愛こそ崩壊の始まり』

男が出した札は、『皇帝』と『女皇』。

役名 『行動しないことこそ最大の防御』

男の役は、完璧に防御に徹するの役。

しかし、それは皇帝の不倫相手による密告により、女皇が怒って、男に攻撃する。

「ぐっ……」

「さあ、どうする？まだやるか？」

「当たり前だ……」

既に満身創痕だが、まだやろうとするあたり、全権代理者も伊達ではないようだが、「なら、俺もそろそろ魔法の防壁はろっかなー。」

「な、なにッ!？」

その一言により、だんだんと蒼白していく全権代理者の男。

「あとさ、もつと言えば、俺神霊種でもあるんだよね。」

「わかった、負けだ!負けを認めるから、これ以上はやめてくれ!」

実は、このゲーム。

最初の初撃も含め、全て佑馬が手札を読みきつて圧倒していた。

つまり、最初以外は一撃も与えられておらず、

「まあ、頑張った方じゃね?」

それに神霊種で魔法を使うと言われてしまつては、負けを認めるしかないだろう。

「じゃあ、盟約に従い、お前から全権代理者の権利を剥奪、フィール・ニルヴァアレンにその権利を渡すことにする。」

「・・・え?」

その言葉に、男は耳を疑った。

あのニルヴァアレンの恥を全権代理者にすることに。

「お前さ、フィール舐めてるだろ。こいつ、お前よりも圧倒的に上だからな?」

「な!そんなわけ・・・」

「だって、ここにフィールがいるのに、気づいていないだろう?」

「な・・・!？」

そして、一人の少女の輪郭が揺らめき、

「全権代理者がこれってえ、もうエルヴン・ガルドは終わってますよねえ。」

フィール・ニルヴァレン、本人が現れた。

「それじゃあ、ここに用はないし、今後について話し合うか。」

その一言とともに、男を残して四人は去っていった。

世界に情報が回った。

エルヴン・ガルドの全権代理者が変更、

例の神霊種と同盟を組んだと。

久しぶりの再開

エルヴン・ガルドの全権代理者となったフィールルの戴冠式やらなんやらがあつたので、暇を潰すために応接間で寝そべっていた。

ジブリールは涎を垂らしそうな顔であちこちを見回している。

クラミーは従者として戴冠式に参加しているため、ここにはいない。

「そういえば、これからはどうされるのでしょうか？」

一通り見終わったのか、ジブリールがこちらを見ながら聞いてくる。

「んー、そろそろ俺以外の奴が行動を起こしてくれるから、それを待つてる。」

その質問に、口を吊り上げながら答える佑馬。

「……そうでございませうか。」

誰を、と聞こうとしたが、なんとか思い留まるジブリール。

そこで静寂が部屋を訪れるが、それも長くは続かなかつた。

「ふう、疲れたのですよお……。」

「お疲れ様、フィー。」

「クラミーも、お疲れ様なのですよお。」

戴冠式が終わったのか、フィールとクラミーがお互いを労いながら帰ってきた。

「ははは、お疲れ様。フィールとクラミーはしばらく休んでいて良いよ。」

佑馬も二人を労うが、

「・・・フィーと私だけなのは何故かしら？」

佑馬とジブリーはまだ何かがある、とでも言いたげな様子の佑馬に、クラミーは疑問を持つ。

「それはな・・・もうすぐわかるよ。そうだな、例えば・・・今とかな。」

そこで、部屋の扉が勢い良く開かれて、

「大変です！エルキアからフィール様宛に手紙が送られてきました！」

と、告げた。

その言葉にクラミーは驚きを隠せず、

「ソラ達から・・・？」

手紙を受け取り、フィールと共に手紙を見て、

「よし、ジブリー、いくぞー。」

佑馬は用件が何かを知っているかのようにジブリーに声をかけるといふ様子に、また驚いた。

「えーと、どちらへ？」

だが、ジブリールも理解してはなく、

「空から協力要請だ。手紙にも書いてあるだろ。」

と、言われたので手紙を見てみる。

そこに書いてあったのは

『拝啓、佑馬殿

この度、神霊種の全権代理者就任、天翼種、森精種と同盟成立、心からお祝い申し上げます。

さて、今回このような手紙を送ったのは言うまでもなく、我が人類種も是非力を貸していただきたいと思つた次第です。

それなりの報酬も用意してありますので、是非とも、よろしくお願い致します。

エルキア王国二百五代国王 空ならび白より 敬具』

佑馬の言つた通り、協力要請だ。

「さあ、行くぞ。」

「了解です。ならばさつそくエルキア城へ……」

跳びます、と言おうとしたところで、

「そっじゃない。」

待ったがかかった。

「ならば何処へ？」

しかし、よく考えれば簡単なこと……

「東部連合、”巫社”だ。」

その頃、東部連合では、巫女、空、白でゲームをしていた。

「よーし、また俺らの勝ちなー。」

「またかいな……ホンマにどうなってんねん、あんたらの頭は。」

「どうって？それよりも、そろそろ来る頃だと思っただよなー。」

その言葉に巫女はハテナを浮かべるが、

「ツ!？」

すぐに神霊種の気配を感じ、警戒を高める……が、

(この力は……あのハゲザルに似た者か。)

五感では足音を感知しており、間違いない、と結論付けるが、何故ここにいるのか、と考える巫女。

その間にも足音はだんだんと近づいてきて、

「いきなり後ろからこんにちは——！」

「なっ!?!？」

いきなり後ろに現れた佐馬に、声を上げて驚く巫女。

「悪い悪い、驚かす気はあつたし悪気はあつたから反省はしてないけど悪いとは思って
る。」

「反省してないんかいな……。」

はあ……と溜め息を付く巫女だが、

「おー、やっときたか、久しぶりだな。」

「……おひさ。」

呼んだ本人である空と白は、待ってましたとばかりに立ち上がる。

「おー、久しぶりだな、空、白。」

と、佑馬が言った瞬間、

「さっきのすげえ力はなんだ、です!？」

いづながとてつもないスピードで飛んできた。

「おー、いづなか。久しぶり。」

「・・・佑馬と天翼種、です?」

すぐに力の正体を知ることになったいづな。

「さて、報酬は一体何かな?」

佑馬はいづなを一瞥しながら、空へ報酬の詳細を聞く。

「佑馬の要求を可能な限り一つだけ飲む、でどうだ。」

「のった。」

それは、佑馬にとっても大きい見返りだったために、即答する。

そこで空が切り出す。

「よし、ステフといのを迎えに行きますか!」

「あのおー、これから何をするんですかあー?」

プラムはプラムで目を避けるために箱に隠れている。

その質問に、

「何処って、『オーシエンド』に向かうんだよ。」

当たり前だろ？とでも言いたげな空だが、その言葉に対してプラムは、「それは迎えの舟があると・・・」

「待てない。」

迎えの舟で行こう、というプラムの案をバツサリと切り捨てる空に、

「と、言うと思つてたから。ほれ、いのとステフだ。後、水着一式もな。」

いつの間にかいのとステフを連れてきた佑馬。

水着はステフが空に頼まれて編んだらしい。

「・・・ツ！いきなり何するんですのよ！」

いきなり空間転移されたステフは、開口一番にそう言うが、

「あれ、これつてもしかしたら誘拐とかなら出来るんじゃないやね？」

勝手にステフといのを連れてきた佑馬は、その事実から誘拐なら出来るかも、と考え

ていたため、届くことはなかった。

ちなみに、いのは苦しそうに頭を抱えて床で悶えている。

「よし、人数も水着もあることだし、海へ行きますか！」

そして一同は、海に向かっていった。

海についた一同。

佑馬はついた瞬間寝ることをきめたが、今は女性陣が素晴らしい水着姿を見せているので、それを見ている。

「目の保養になるなあー。」

木陰で寝ながら言う佑馬に、

「佑馬、似合ってますか？」

ジブリールが横に転移してきて、そう訪ねた。

「うん、最高にいいけど・・・やばいね。」

確かに素晴らしい、素晴らしいのだが、これ以上はいろいろとやばかった。

特に、理性が。

だが、そんなことも露知らず、顔を覗き込んでくるジブリール。

その姿に顔を赤くしながら、

「ジブリール……これ以上はいろいろとヤバそうだし少しだけ休みたいから、向こうに行ってもらってもいいか？」

とりあえず、逃げることを選択した。

「わかりました。」

そして、その言葉に頷き、海へと向かうジブリール。

それを見ながら、中断していた睡眠をまた取り始める。

佑馬が起きたのは、夕暮れのととき。

伸びをしてから海の方を見てみると、ステフを除いた全員が浜へ上がったいた。空とプラムは何やら言い合いをしているらしく、巫女は白にモフられていた。

それを見ながら、一先ず立ち上がり、その集団へと向かう。

一応話は聞こえているので内容は掴めているのだが、簡単に言えば

舟早く来いよ

ということだった。

そして痺れを切らした空は一言。

「佑馬、どでかいの一発、ヤっちゃってくれるか？」

だが、その言葉にはあえてノーと答え、

「やるならジブリアルだ。」

と、言った。

その言葉にジブリアルは目を輝かしながら、

「本当によろしいのですか？」

と、うずうずしながら聞いてくるが、それを肯定で返すと、体をクネクネさせながら、「えへ、えへへへえー、何年ぶりでしょう。うえへへー楽しみですございますー・・・。」

と、溢した瞬間に、ジブリールの周囲が歪んだ。

「ほれ、全員下がりや！」

その瞬間、巫女が冷静な、だが、鋭い声を放つ。

その一言で、その場にいた全獣人種が大きく後ろへ跳ぶ。

「……え？なんですか？」

と、巫女の声で意識を取り戻したかのような反応をするステフ。

だが、気づいたときには既に遅かった。

ステフがジブリールの方を見ると、手が光っていた。

つまりそれは、人類種ですら可視出来るほど莫大な量の精霊が集められていることを

示しており、

「それでは、全力50%程度でまいります♥」

その言葉を置き去りにする速度で、腕が振り落とされ、

一瞬辺りが真っ白に包まれ、文字通りに海が割れていた。

「はぁ……♥力を出せるのはなんと素晴らしいことでしょう。いつか全力、100%を出す

機会に恵まれることを祈るばかりでございます♥」

スッキリしたような顔でそう言うジブリールに、佑馬以外の全員は冷や汗を浮かべ、

「まあ、近いうちにくると思うぞ？」

「本当でございますか!？」

佑馬は何事もなかったかのように、対応していた。

「ああ。それより、行くんだろ？オーシエンド。」

その佑馬の一言により、みんな我に返って、

「今度は俺が転移するよ、そこらへんにいる獣人種のお嬢さん方、しっかりとその木に捕まってなよ？」

巫女の従者であろう獣人種に声をかけてから、その場にある空気ごと転移をした。

瞬間、抜き取られた大気のゆり戻しで、爆発的な低気圧が発生し、

「「きやあああああ!!」」

その場には悲鳴が響き渡っていた。

オーシエンド攻略 前編

佑馬の空間転移によってオーシエンドへと行くことが出来た一同がまず最初に視界に入れたのは、

「まあ、こうなるんやねえ……。」

ジブリールの天撃によって割れた海が、海底の土砂や岩をミキサーのように巻き上げながら、荒れ狂っている光景。

その場の空間ごと転移して膜を張つてあるため、その中に水は侵入することなく、水族館のみたいな空間となつていた。

「へえ、こいつは凄いな。」

「……きれえ……。」

眼下に広がる珊瑚や真珠によって形成された、綺麗な水中都市が広がっていた。

「なんだよ、馬鹿だ馬鹿だ言われてる割に、大した都市じゃねえか。」

「……はは、ありがとうございますう……。」

空の眩きに答えたのは、諦観と自虐を含んだ苦笑のプラムだった。

「これ、作ったのも、管理してるのも吸血種ですからあ……あはは……。」

それにかける言葉が見つからず、空は視線を後ろに向ける。

物珍しそうに周囲を見回すジブリールといづなとステフ、落ち着いた様子の巫女といの、そして、

「……あいつは何やってるんだ？」

佑馬は膜の外で一人の海棲種と楽しそうに談話していて、周りには誰もが目を奪われるようなダンスを披露するその他の海棲種達。

「佑馬様と喋っている海棲種は、全権代理者の代理のアミラ様ですう……。」

「ほう、あれが海棲種か、よし、イメージ通りで何よりだ。」

クトウルフとかが出てきたらキレて佑馬とジブリールに亡き者にさせてやろうか考えていた空は安心したが、

「でも、あいつら何喋ってるんだ？」

さつきから何喋ってるのか聞こえない空達には、一体何をそんなに楽しそうに話しているのか理解できなかつた。

「さあ……あ、終わったようですねえ……。」

そして、佑馬は空気の膜に入り、一言。

「馬鹿の申し子と言って良いほどの大馬鹿だった。」

「……。」

豪速球で貶した。

「何をあんなに楽しそうに喋っていたんだ？」

「なんか、『あなたすごいイケメン！私と一緒に遊ばない!』とか言ってきたから、『遊ぶならあそこの獣人種が相手してくれるぞ。』と言ったら、『あんな汚い爺さんは嫌だー☆』なんて言うもんだから、ついいのについて語り合っただけ。」

「おい!!」

簡単に言えば、いのを貶しあっていただけという事実なのに、汚い爺さん呼ばわりされたためにかなりショックな表情を見せる。

「あ、女王のそこには案内するから膜壊して待つといてーだとさ。」

「なら、今から血を貰ってきてその力で皆さまに水中呼吸の魔法をかけますからあ、その後この空気の壁を解除して下さいねえ……。」

と言つて、膜を出すプラム。

戻ってきたプラムから呼吸魔法をかけてもらつて、アミラに女王の元へと案内されて貰った。

オーシエンドに入ると、海棲種から割れるような歓声に出迎えられたが、奥の方にいる吸血種の少女からは、『遙々ご苦労様です』という表情をしていた。

そこからしばらく歩き、ある扉の前でアミラが止まり、

「到~~~~~~~~ッ！着ううウウッ！」

いきなり甲高い声を出し始めた。

「お待たせ〜っ！ここが女王さまの間だよ〜♪」

とアミラが扉に手をかけ、ゆっくりと押し開け。

光が零れた。

女王の間はかなりの広さがあり、ピンク色の天幕と絨毯が使われていた。

壁には淡く光を放つ藻が装飾的に、規則的な藻養状に編まれ部屋を照らしていた。

高い天井はステンドグラスが詰め込まれ、海底まで届く陽光を部屋に取り込んでいた。

しかし、その真下にある玉座。

それらを不要に思わせる、眩いまでの存在感を放つ巨大な水晶。

いや、そう見えるほど美しく透明な・・・氷の塊があつた。

「.....」

それを目にした一同から、言葉が消える。

肅々と、少なくともそうしようと努めながら、アミラが告げた。

「ご紹介します。海棲種の女王さま・・・ライラ・ローレイ陛下でござ・・・です。」

氷の中には美女が眠っていた。

あまりの美しさに言葉を失つた一同の後ろで、プラムとアミラが何か話しをして、部屋を出ていったが、それを気づく様子もなく、女王が眠る氷を見つめていた。

「な、なんて綺麗な方ですの・・・」

ステフが同性であることを忘れたように、熱っぽい言葉をこぼす。

実際、その艶姿にはいのはもとより、巫女やいづなをしてさえ、ただ呆然と目を奪われるばかりだった。

「うーん・・・？そんな言うほど美人か、白？」

「・・・よく・・・わから、ない・・・」

「はあああつ!!」

首を傾げてこぼした空と白の二人に、一同が目を剥く。

「お、お二人とも正気ですのっ!!?こ、この方が美人じゃなきゃなんんですのよっ!!」

「落ち着けよステフ。うるせーぞ。」

「全くドラちゃんはこれだからオモシロオカシキヤラなのでございます。」

そして、ステフの剣幕に答えたのは、佑馬とジブリール。

「なるほどねえ。『水精』ってやつだっけ?」

「その通りでございます。見えるのですか?」

「ああ。まあ、いのとステフは無理だとして、巫女さんはそろそろ戻ってもいいんじゃないかな
い?。」

佑馬の一言で我に返った巫女は、やれやれ顔で頭をかいた。

(空と白はお互いがお互いに好きだから効かなかった。俺もジブリールが好きだから効
かなかったが、ジブリールが効かなかったとなれば・・・)

何故ジブリールが効かないのか。

それは・・・

「ジブリール、ありがとうな。」

「ん？いきなりどうされました？」

「何も無いよ。」

笑顔で、照れ臭そうに呟いた佑馬に、ジブリールは首を傾げるが、巫女は心臓の音でも聞き取ったのか、少しニヤつとしながらこちらを見ていた。

「おつ待ったせしましたあああゝゝゝっ！」

と、そこで騒がしく、アミラとプラムが戻ってくる。

「じゃ、今からプラムちゃんたちの魔法で、女王さまの夢に入つて貰うネエ。」

「あ、そういうえばそんなことあったな。」

なんで寝ているのか忘れていた佑馬は、今思い出す。

あるお伽噺を読んで、ある男が現れるまで寝ていることを。

そして、今から行うのはその眠りを解くゲーム。

「女王を起こす人はあ、”盟約に誓つて”全てを賭けて、水晶に触れてネエ。」

.....

「は？え、なにを言ってるんですの？」

沈黙を破つて、声を上げたのはステフ。

だがきよとん、とアミラが告げる。

「え、なにか問題？」

「問題に決まっていますわよ、何言ってるんですの!？」

「落ち着けステフ。勘違いしてるのはおまえだ。」

何故そんな必要があるのかわからないステフは抗議をするが、空によって止められる。

その言葉でステフは振り返ってみると、

空、白、巫女やジブリール、いのやいづなや佑馬まで、当然という顔をしていた。

「ステフ、気になることはわかるがとりあえず始めるぞ。」

その佑馬の言葉、ではなく顔を見て、

心配するな

というのを読み取ったステフは、渋々了承した。

「誰かが女王を惚れさせ、起こせば『勝ち』、フラれたら『負け』敗者は抜け、賭けた“全て”を支払う、と。以上を盟約で誓えばいいんだな？」

「は、はいいい……で、でも。」

「プラムの惚れ魔法がある、仮に負けてもアミラから取り返せるだろ。安心しろ。」

不敵に言う空に、何か引つ掛かりを覚えるステフ。

「このメンツ、条件で、負けることは万に一つもない、さっさとやってくれ。」

「はいいい……では空さま、シチュエーションを思い描いてください、そして、宣言を、

お願いしますうッ！」

”盟約に誓って”ッ！」

空、白、佑馬、ジブリール、巫女、いの、いづな、そしてプラム。
一斉に、全員がそう口にすると同時に、全員の意識が白く染まった。

オーシエンド攻略 中編

あたりが白く覆われ、直ぐに青に塗り変わる。

ぼやけた意識がだんだんと覚醒していき、そして。

「あばばばばばばば!」

……溺れていた。

大海原のど真ん中で、空、白、いの、いづな、巫女までもが、波に揉まれていた。そこに一筋の影が通って……

「おーい、みんな大丈夫か?」

佑馬の一言とともに、全員が海面に浮上した。

「佑馬……泳げたんだ……助かつ、た……。」

「まあな。」

中でも一番危なかった白にお礼を言われ、全員が辺りを見回し始めたその時。

『——始まりがあれば終わりがあるように、出会いもあればまた、別れも』

「悠長にオープンング流している場合か!」

直接脳内に送り込まれたオープンングに、空の鋭いツツコミが入る。

「何処の世界に溺れてスタートする『と〇メモ』があんだ！ときめけねえよ！」

「あ、す、すみませえん……空さまのイメージと、女王様のイメージを混合して、舞台シチュエーションを構築するのに手間取ってますう……もう少しお時間をお」

「必要ないな。」

「……え？」

空のイメージと女王のイメージの知識をすり合わせるために、かなりの時間を取っているプラムに、佑馬が否定の言葉をかける。

佑馬が手を上に翳し、

パチン！

と、指を鳴らすと

「……え？」

海の中の学園という世界が広がった。

「プラムの精霊の動きから、空と女王の知識を確認したからこれで間違っていないと思うぜ。」

「……あ、はい、これであってますう。」

一瞬の間が空いたあと、プラムがこれでいい、という言葉をかける。

既に構築も終わっており、オーシエント風の建築様式で建てられた海底の学校は、と

でも不思議な雰囲気醸し出していた。

そして、まず、視界に無数のアイコンが灯り、映し出された。

「……………なんですのこれ。」

視界に映るそれに触れようと、だが手を空振りさせるステフに空がいう。

「UI（ユーザーインターフェイス）…………『コマンド選択画面』だ。」

それは、まんま恋愛シミュレーションゲームのステータス画面。

「あ、設定は終わらせているけど、空、何か不満があるか？」

「いや、完璧だ…………一人を除くけど。さすがは佑馬。」

「ふむ、少々息苦しい服ですな。」

その姿に、佑馬は思わず苦笑。

原作知識でこの設定を組んだため、いのは結局学生服おなったのだ。

「こちらは…………佑馬たちの世界の服でしょうか？」

物珍しそうに制服を見ているジブリールが、佑馬に質問を投げ掛ける。

「まあ、似たようなもんだが…………いいね。」

「そうでございませうか？」

腰から出ている翼によって上衣が持ち上げられ、ヘソがチラ見えし、なんとも言えない素晴らしい光景を作っていた。

「ところで、一つ宜しいのですの？」

「ん、なんだ、ステフ。」

「なんで私だけ、ソラやいのさん、佑馬と同じ男性服なんですの？」

そう、白に、ジブリール、いづな、巫女。

女性全員がセーラー服だったが、ステフだけは、空たちと同じブレザーだった。

「あー、それね。ステフコミュ力高いから、情報収集宜しくってやつだったと思う。」

「その通り。好雄くんの情報力、交友力を期待していたんだが……」

そのステフに向き直って、ため息を一つ。

「……どっちかつつーと、伊集院になったな。」

「はい？よくわかりませんが……イジューイン？誰ですの？」

「はいはい、雑談はそこまで。オープニングもつかい流すよー。」

ステフの頭にハテナが浮かんでいるなか、佑馬がスクリーンにさつき脳内に流れたオープニングをそのまま流し始める。

「おい、佑馬。これをもつかい見ろっていうのか……。」

「え、だって俺がオープニング作るわけにもいかないし、正直めんどいし。」

「最後が本音だろ。」

「うん。」

はあ……とため息をつきつつ、退屈なオープニングを見る。

オープニングが終わると、いきなりポップな音楽が流れ出した。

そこで、ピンク色の背景とともに映像が変わり、女王が制服姿で赤珊瑚の下を泳いでいる姿が映される。

女王は何やら物憂げな眼差しで、何かに焦がれるように宙へ手を伸ばし、

「La——」

謡った。

その歌声を耳にした全員が、一斉に息を呑んだ。

「まあ……！」

「ほう、これはこれは……さすが、美人は歌まで違いますな。」

「ぐっ……さすがにこれは強烈だな……吐きそうだな。」

ステフやいのが感嘆の声を上げるなか、吐きそう、という理由で息を呑んだ佑馬。

「佑馬……気持ちちはわかる。とりあえずあれを攻略しなきゃいけないらしいが……やる気出ねえ……」

佑馬の気持ちを理解している空も、小さくため息を吐いた。

『一日目』

唐突に、一同の視界に『一日目』という表示が現れる。

空と白には見慣れたものだが、他の一同のためにプラムが説明をする。

「えっと、目の前にいくつかコマンドが表示されていると思いますが、それを使つてある程度の行動選択ができます」

「『デート』つと。」

プラムの説明の途中に、いきなりデートボタンを押し始める佑馬。

「よし、ジブリール！行こうぜ！」

「あ、わかりました！すぐ行きます！」

二人して校舎とは反対の方向に向かっていく姿を眺めながら、

「くそっ！リア充め！」

ソラと白は、悔しそうに叫んだ。

開始早々いきなりゲームを破棄して、デートし始める佑馬。

「いいんですか？」

ジブルールも確認というレベルだが、そう質問する。

「何も問題ない。時がくれば終わるさ。」

何か含みのある言い方に、ジブルールはハテナを浮かべるも、今はデートを楽しむことにした。

「よく考えたら、これまだ二回目か？」

「そうでございますね……デートと称したものはこれが二回目でございます。」

「久しぶりのデートだし……前はジブルールがしてくれたから、今日は俺がリードするよ。」

「なら、お願いします。」

そこで、手を繋ぎ始め、何処からどうみてもカップルな二人。

「さて、とりあえずここに載っているデートスポットは全部制覇してみるか！」

「おー！」

そこで、二人にとって二回目のデートが始まった。

「まずはここ！桜珊瑚の公園！」

「コマンドに『弁当作り』があるので、作って持参してきましょう！」

「よし、なら俺も作ってこよう。現地集合で！」

二人して『弁当作り』のコマンドを押す。

そして弁当を作り終えて、桜珊瑚の公園で待機している佑馬。

「申し訳ありません、遅くなりました！」

「いや、俺も今来たところだよ。」

定例文とも言える一言を言った後、二人で弁当のおかず交換を始める。

「そういえば、ジブリールの料理は久しぶりだな。」

「そういえばそうでございましたね。はい佑馬、あーん。」

「あーん……うん！すごい美味しい！」

その一言に、ホッと胸を撫で下ろすジブリール。

「なんだ、こんなに美味しいならこれからジブリールにご飯作って貰おうかな……。」

「私は佑馬のご飯を食べたいのですが……たまには私が作ることにしましょう。」

「そうしてくれると嬉しい。つと、ジブリール、あーん。」

「あーん……さすが佑馬ですね。いつもながらとても美味しいです。」

そして、弁当が無くなるまであーんを続けた二人。

明日はシヨツピングをすることにして、その日は解散した。

『二日目』

その日は弁当は作らず、デパートに出掛けた。

「うん、これは俺たちの世界のデパートだ。」

「これが佐馬たちの世界のお店ですか……大きいですね。」

目を輝かせながらデパートを見るジブリールを見て、顔を緩ませながら。

「じゃあ、行こうか。」

と言って、中へと入っていった。

「さてと……まずはここかなー！」

「ここは……宝石店でございませうか。」

まず向かったのは、宝石店。

「俺が自分達のやつ設定したから、お金には余裕があるんだよねー……これなんかどうかな？」

「綺麗です……ですが、これ夢の中だから結局は……」

「そこ突かれると痛いなあ……。」

そう、夢の中のため、プレゼントしても現実に戻ったらなくなるのだ。

だが、

「でも、その時その時に二人の思い出となるものを渡せば、例えそれが残らなくても、俺はそれでいいかな。気持ちさえ伝わっていれば。」

「佑馬の気持ちは十分いただいております！」

そのあと、デパートの飲食店でまたあーんをした佑馬とジブリーは、また明日会う約束をして解散した。

それからしばらくは、学校にも行かずとにかくデートスポットを制覇することにしていった。

遊園地、動物園という名の水族館、庭園。

とにかくいろいろなところを回り続け、ゲームを始めて三十日がたった頃。

「これでデートスポットは終わりだな。よし、俺らの用事は終わったから、あとは空達待ちだな。」

「そうでございませぬ……とても楽しかったです。」

「そう言ってくれると有り難いよ。」

そして、そのまま唇を合わせる二人。

暫く唇を合わせてから、今頃学校に行くのもっていうことで、引きこもり生活に突入する二人だった。

オーシエンド攻略 後編

引きこもり生活10日目、ゲームを始めて40日目。

空達に呼ばれて学校に向かった佑馬とジブリアル。

かなり久しぶりに着る学生服に身を包み、校門の前にいくと、空たちを含めて久しぶりに登校した一同に、息を飲ませる光景が広がった。

「……ま、まさか……爺さん、か？」

「す、すげえな……少し……いや、全面的にこの爺さんを見直すことにするわ。」

そこにいたのは、やつれ細りフジツボが張り、地と一体化した石像があった。

ゲーム開始からずっと土下座をしたままという、その男の中の男の名は、初瀬いの。

空はその姿を見て自分の小ささといのの恋愛に真っ直ぐなその姿勢に頭を項垂れて、

佑馬はその男の姿をしっかりと目に焼き付けていた。

「これが……男の中の男……か。」

そう呟いた佑馬に、一同はただ頷くばかり。

そして、その男の中の男のいのに、ある一人の女性が近づいていった。

その女性こそ……。

「……嘘や……まさか……？」

巫女がそう呟くのも無理はない。

その女性こそ、女王、ライラなのだから。

ライラはなおもいのに近づいていき、そつと、いのの両頬を手で包み込んだ。

その瞬間、生き物だったことを思い出したかのように、石像化したいのが動くことを思い出したかのように動き出す。

フジツボが、地が、こびりついていた全てが剥がれ落ち、顔を上げさせた女王の両手に導かれるように、いのが顔を上げる。

ライラはこの世のどんな財宝よりも美しい笑顔を浮かべ、言った。

「……ないわー。」

(ですよねー。)

その場の全員の心の声がハモった。

「……くっ！」

だが、このままでは終われない、といのは奥歯を噛んだ。

いのの本当の愛は見事に玉砕された……が。

佑馬達には知らされていない、だが、佑馬は知っている空達の作戦を実行に移す。

いのはコマンドを選択し、『+』のついたハートマーク。

即ち、プラムの用意した必勝の魔法、”惚れ魔法”のコマンドを選んだ。
そして、

「失礼します女王よっ！ふん・ぬううううううう！」

ライラのおっぱいを揉んだ。

プラムの術式を完成させるために。

「……えっ!?!」

その瞬間、ライラの周囲が赤く光り、

「あ……ぐっ……!」

プラムが眼に複雑な模様を浮かべ苦しそうに声を上げた。

「……あ、ああ……。」

ライラはいのちに胸を揉まれたまま、か細く声をあげ、顔がだんだんと朱色に染まっていった。

「や、やりました……これで……これで女王様はどんな感情を抱いても、それがいのさまに『惚れた』と認識されますう!」

そう、つまり、これでゲームは終了。

そして。

「いや、いやいや。惚れるにしても違うから。ないから。ごめんなさいっ!!」

ライラはきつぱりといのを振り、飛ぶように校舎に向かっていた。
……………。

初瀬いのは燃え尽きていた。

真つ白に。

佑馬は静かに、いのに近づく。

「あんたは……男だよ、初瀬いの。俺は本当の男というのを始めてみさせてもらった。」
頭を下げる佑馬から出たのは、尊敬の意。

滅多に、いや、始めて見せる、他者に対する完全なまでの敬意。

「……………あ、あれ?」

そして、その言葉はプラムから溢れる。

その言葉に対し、空と白、佑馬は笑みを浮かべた。

「それじゃあ茶番はおしまいな。」

指を再びパチン!とならずと、全員がゲーム開始する直前までいた女王の間に戻る。

「……………え?」

「……………え、えーと、アミラちゃんにはちよつと状況がわからないなーって☆えーと?」

そう反応したのは、この場で唯一作戦を聞かされていなかったアミラとプラム。

「俺らな、最初から本当に女王を起こす方法を知っていたんだよ。このゲームに参加し

たのは、ジブルールが知らないデート場所でデートをしてみたかっただけだ。」

そこから明かされたのは、佑馬のゲームの参加理由、そして、女王の起こし方を知っているという言葉。

「プラム、俺にゲームの製作を任せた時点で、このゲームは俺たちの勝ちなんだよ。」

「……………え？」

「惚れ魔法で女王が惚れてもプラムが総取り、失敗してもそれは使った人が責任を負う。そんなことを俺がさせるとおもうか？」

そして、衝撃の事実を突きつける。

「このゲームは最初から最後まで俺が全て作ったゲームだ。盟約に誓ったゲームはまだ行われてはいない。」

「な……………！」

「そして、盟約変更だ。」

佑馬は口を吊り上げて全員に向けて言った。

「さて、俺たちが楽しい時間はここまで。ここからは皆で楽しい時間を過ごそうぜ？」



「退屈だわ……………何か、楽しいことはないのっ!？」

誰もいない海の中、ライラは一人で嘆いていた。

ライラは全てを持っていく。

美味しい食べ物も、美も富も恋も、全てが女王のもの。

だからこそ、足りないもの。

それは、愛、真実の愛。

それをくれる王子様が現れなければ、私の心は空っぽのまま。

『盟約に誓って。』

その時、ふと声が響いて、ライラの意識が鮮明になっていく。

「また誰かきたわね……退屈だし少しだけ相手してあげるわ。」

どうせくだらない男だろう、とうんざりするライラ。

今回はうんと優しく、にこにここと笑って、思い切りメロメロにして、最後にこっぴど

く振って捨ててやる。

そうしよう、と心に決めた瞬間、ライラの視界は真っ白に塗りつぶされて……。

「……ッ!？」

何が起こったかはわからない。

ただ、わかったことが幾つか。

一つ目、さっきの白い閃光とともに、海は蒸発。

二つ目、空から人類種三人と天翼種が一人降りてくる。

三つ目、痛覚は遮断されている。

四つ目、母様に乳母に侍女に名前も覚えていない姉妹達が、一様に泣きわめいていると。

呼吸は出来ない、痛みもない、だが、海が無いために自由に動くこともできず、太陽の光にも突きつけられ容赦なく気力を蝕む。

空から降りてきた人類種の三人のうちの一人が声をあげる。

「さて、いきなりだが、ゲームを始めよう。”俺を惚れさせる”」

そう言つて、オーシエンドで一番高い塔、女王の間を指し、

「俺らはあそこにいる。そこに辿り着いて口説き落とせばゲーム終了だ。」

空には、人類種が三人と天翼種が一人。

その人類種の中の一人と天翼種が前に出て、

「……っ!!」

二人が腕を振り下ろした瞬間、目の前の全てが消え去り、時間とともに直つていった。

「見ての通り、おまえを含めて何もかもを消し飛ばしても数秒で戻る。」

「なお、シチュエーション指定のとき」

「……あなた、の……友人、知人……親族も、登場させ……た。」

人類種三人の言葉が耳に届くが、どれもこれもが理解の範疇を越えていた。だが、わかることは一つ。

ゲームをクリアするためには、あの人類種みたいな化け物と天翼種から逃げながらあの塔に向かわなければならぬということ。

「つまり、だ。」

人類種の男が、死刑宣告とも言える言葉を放つ。

『これからおまえはなんの手助けも受けず、ただひたすら死ぬだけだ。どこまでもがき苦しむか、見せてもらおう。』

その瞬間、世界が吹き飛ばされた。



佑馬とジブリアルは破壊の限りを尽くす。

天撃、粉塵爆発、巨大なプラズマ、須佐之乎による斬撃など、多種多様な強力な魔法が二人から次々と放たれる。

「ああ……これは楽しいな。」

佑馬の口は緩んでいた。

全てをとにかく壊し続ける。

下で逃げ惑う人は何度殺しても死なない、痛みもない。

前世では出来なかった、破壊の限りを尽くすという行為。

心の内側で少しずつ何か壊れるのを感じながらも、佑馬は破壊をとにかく楽しんだ。

そして、女王の親戚に近づき……腕をへし折った。



画面の外で見ていたアミラ、プラム、ステフ、いのは静かにその光景を見ていた。

いや、主に、佑馬を見ていた。

全員が不気味に思うほど口を吊り上げて嗤い、再生の間も与えずとにかく破壊する。

途中でライラの親族に近づき、腕をへし折り、傷ついた部分に手を当てて爆発させたりしていた。

誰もが、恐怖を覚えた。

ライラはなんとか塔に近づこうとするも、何度も何度も佑馬によって遠ざけられる。

ジブリーも再生の間も与えずとにかく天撃を打ちまくる。

まさに、悪魔のコンビ。

大戦の時ですら生ぬるいであろう光景は、佑馬とジブリーが飽きるまで続いた。

神霊種編

迫る決戦

人間、誰しも大なり小なりの感情がある。

感情豊かな人、乏しい人、いると思う。

また、同じように、衝動に駆られて動いてしまう人もいる。

そして、衝動とは怖いもので、一度やってしまえばその後は意識して同じ事を何度も出来てしまう。

例えば、嘘をつき続ければ、慣れてしまうように。

物を壊したり、人を壊したりもまたしかり。



ゲームは終了した。

ライラは塔になんとかたどり着き、空達を惚れさせようと甘い言葉、仕草で誘惑した。

ただ、空、白ともに全くの無反応、そして、空からは今までの鬱憤を晴らすような怒濤の悪態を浴びせられ、空達の勝利で終わった。

ただ、この場で勝ったことに対して喜ぶ人は誰一人としていない。

巫女、いの、いづな、ステフ、プラム、アミラまでもが沈黙する。彼等に植え付けられたのは、恐怖。

獣人種組は本能的に、オーシエンド組は喧嘩を売ったことに、ステフは人が殺されるのを見たこと、そして、一同が見たあの佑馬の笑みに。

そこで佑馬とジブリールが一足先に戻ってきた。

「はあー、楽しいうございまして……みんなに話したら嫉妬の嵐でございますね♥」

「ああ、本当に楽しかった。しかし……」

ジブリールは楽しげに、佑馬もまた楽しげに、ただ、場の雰囲気を感じて言い淀む。

「たぶん、これは俺たちではなく、俺のせいだな……悪かった。」

自分が恐怖の対象として見られていることを感じ取った佑馬は、腰を軽く曲げて謝罪をする。

「くつくくつつ、ここまでやれば確実にキレルだろ。これでいいんだよな白？」

「……ん、にい……さすが……えくさぐつじよぶ。」

その時、夢から帰ってきた空と白は満足げだったが、場の雰囲気が変なのに気がついた。

「あー……なんだ？この空気は。」

「……にい、が……うざすぎ、た……とか？」

「白さん、それ地味に傷つくからやめてもらえませんか!?」

『煽れ』と言われた手前、徹底的に煽つたのに今度はうざすぎたという理不尽な評価を受けた空は、若干傷心しながらも、場の空気をしつかりと呼んで、

「佑馬もジブリアルも、いい働きだったぞ。」

ただ一言、そう言った。

「……ああ、ありがとう。一応俺らの役目はここまでだ。それじゃあ要求の件はまた後日、伝えるからな。」

「それでは、失礼致します。またこういう事をするのでしたら、是非御呼びくださいませ。」

佑馬、ジブリアル共にお礼の言葉を言ってから、溶けるように消えていった。

「……そろそろかなあ。」

「……にいい……どう、思う?」

佑馬とジブリアルがいなくなつてから、意味深な言葉を交わす二人。

「どうって言われると、正直手強いな。ジブリアルを取られたのがここで響いてくるとはな……。」

「……あの、そろそろとか、手強いとか、一体何の話ですか?」

空と白の会話を聞いていたステフは、なんことかさっぱりわからず聞いてみたが。

「あれ、わからねえの？ 巫女さんやいづなは分かってるのに？」

「いや……その……はい。」

巫女といづなに比べられるステフも可哀想だが、今回は少し考えればわかることだった。

「つまりな、もうすぐなんよ。」

「佑馬達、神霊種連合軍との決戦が。」

「……ッ!!」

その時、女王の入っていた氷が割れた。



「おかえりなのですよおー。」

「あら、早かったじゃない佑馬。」

「まあな。」

一先ずエルヴン・ガルドに戻った佑馬とジブリールは、そこで待っていたフィールとクラミーに出迎えられた。

「それで、どうかしら？」

「ああ、そろそろやろうかと思ってる。」

目的語を使わず話すのが、この場でこの会話の意味を理解していないものはいない。

「そう……私たちがいつでも準備出来てるから、いつでも呼んでちょうだい。」
「おう、期待してるぞ。」

「お話は終わりましたか？では、ゲームを仕掛けさせてもらうのですよー。」

話が終わるタイミングまで待っていたのか、フィールが質問気味に聞いてきた。

チエス盤をもって。

「よし、俺らは97連勝無敗だったな。後903勝は軽くさせてもらうぞ。」

「そんな戯言は、今日で終わらせるのですよー。」

「こつちだつてただ暇を潰していたわけではないのよ？」

フィールが全権代理者になってからというもの、エルヴン・ガルドは改革が凄まじいスピードで進んだ。

治安は良好、物資の回りも良くなり、現在はそこまで政策に時間を取られることはなくなったため、クラミー、フィールペア対佑馬、ジブリールペアでゲームをするようになった。

「今日は早打ちチエスをやるのですよー。」

「オツケー。魔法、イカサマ、どんどん使ってこいよ。全て見破って使わせて貰うから。」

「フィール！絶対に勝つわよー！」

「はいなのですよー。」

「おやおや、もう少し実力の差を弁えた方がよろしいのでは？」

実のところ、佑馬に魔法、イカサマは効かない。

眼が良すぎるため、視えてしまうのだ。

魔法は何重にかけようと、全て解析されてしまう。

イカサマすると、それをいつの間にか使われている。

力に溺れることなく、その場で必要な力のみを存分に使うようになった佑馬。

「全て予想通りだな……」

「本当でございませぬ。」

当然、フィールやクラミーにそれを破る術はなく、あつという間に敗北を喫した。

「もう……佑馬って本当に存在がチートよね。」

「魔法もイカサマも何一つ効かないのですよー。」

「魔法やイカサマだけで佑馬に勝とうなど、愚かな考えでございませぬ。」

「……でも、「」に届くかはわからない。」

佑馬が目指す先には、「」がいる。

ここまでの力を貰っても、届くかどうかわからない、正に神の領域にいる二人。

「そして、俺たちはその二人を倒す。必ず。」

その言葉に、一同は頷く。

最終決戦の時は刻一刻と迫っている。



数日後、アヴァント・ヘイムの一角にて、五人の人影があった。

「さて、エルキアとの決戦に向けての作戦会議を開こうと思う。」

現在、神霊種連合になっている、主要人物。

「はいなのですよー。」

「わかったわ。」

エルヴン・ガルド組、フィールとクラミー。

「わかったにゃ。」

アヴァント・ヘイム組、アズリール。

そして、佑馬とジブリール。

「現在、エルキア連合はエルキア、東部連合、オーシエンドの三国四種族で出来ている。」

そこで佑馬が話始めたのは、現在のエルキアの状況。

「そして、こちらは神霊種の俺、アヴァント・ヘイム、エルヴン・ガルドの二国五種族。」

エルキアは人類種、獣人種、吸血種、海棲種の四種族。

佑馬達は神霊種、天翼種、人類種、森精種、幻想種の五種族。

「大戦を行うなら戦力的に最強だろうし、ゲームを行うにしてもまず劣ることはない。」

しかし、これが普通のゲームならだ。エルキアの全権代理者、「」がいることによつて、戦況は大きく変わる。この作戦会議も向こうの思う壺かもしれないな。」

現在の状況を分析しながら、話を進める佑馬。

「だからといって、作戦会議をしないというのは愚行だ。そして、こつちには完全な切り札がある。」

「切り札にや?」

切り札に反応したのは、アズリール。

「そう、切り札だ。言ってしまうと、近いうちにある一人の神霊種が現れる。」

「……っ!?!」

この言葉は、全員にとつてとても衝撃なことだった。

ついに、神霊種が動くのかと。

「そして、そいつはエルキアによつて、丸め込まれ、全権代理者として名乗りを挙げてくる。」

「しかし、佑馬が全権代理者なので、それは無理なのは……。」

「俺は名乗っているとはいえ、正式ではない。いや、神霊種の正式な全権代理者になるのは不可能に近い。」

ジブリーールの質問に困った表情で答える佑馬。

「そしてその神霊種と俺との全権代理を賭けたゲームが、そのままエルキアとの決戦の時になる。」

「ちよつといいかにや。」

今度はアズリール。

「エルキアが神霊種を狙っているのはいいとして、どうやって探し出すつもりなのかにや?」

「ああ、それなら探す必要もなく空達の近くにいる。」

「……ほんとかにや?」

「獣人種、巫女のを依り代としている神霊種が一人な。」

「……っ!?!」

アズリールの質問の返答は予想を超えるほどの衝撃を与えた。

獣人種の全権代理者に神霊種が取り憑いている。

驚かない方がおかしいだろう。

「そして、それももうすぐ顕現する。」

「いつぐらいか佑馬はわかりますか?」

「正直、そこまではわからんが、力は感じるはずだ。」

そこで沈黙が場を支配した。

「……………今日はこちらまでに……………ッ!？」

そして、ここままでにしようとしようとした瞬間、東部連合から膨大な力が発生、そして、佑馬の脳内にある言葉が浮かび上がった。

『神を名乗る神ならざる者よ、余の前にその姿を晒すがよい。』

「……………いくらなんでもタイミングが良すぎるな。」

素晴らしく良いタイミングで現れた神霊種に苦笑しながらも、その表情は楽しそうに、口はつり上がっていた。

佑馬の作戦

「——それじゃあ、作戦通りに……成功を祈る。」

世界に暴力的な力が渦巻くなか、佑馬達はそれぞれの役割のために動き始めた。

佑馬とジブリールは自分達の役割のために、巫社へと向かう。

「お、もう巫社の上に大地が出来上がってるな。」

「……ここと巫社は反対の位置にあるはずなのですが……なぜ大地が見えるのでしょうか。」

「それじゃあ、いくぞー。」

「……え？」



「あの……何か訳があつてだとは思いますが……。」

「ん？どうした？」

ジブリールは今自分達がしている行動に疑問を持たざるを得ない。

「何故転移で移動しないのでしょうか？」

そう、佑馬たちは空を飛んでいるのだ。

空間転移ならあつという間の距離を、わざわざゆつくりと飛んで。

「ああ、これは後のお楽しみ。たまにはゆつくり空中遊泳でもしようぜ？」

佐馬の悪戯っぽい笑みを見ながら、首を傾げ、とりあえずそのまま飛んで巫社へと向かう。



空達は現在、リアル双六ゲームをしていた。

ただ、このゲームの参加者はゲームが始まる二十四時間前の記憶をスタートチップとして払い、そして、『巫女』の命を払わされてこのゲームが始まった。

記憶がないため、ゲーム前に何故自分達が巫女の命を払うことを許したのかは、わからない。

そして、ルールは主催者の神霊種によって脳内に直接送り込まれた。

ルール

1：ゲーム参加者には、己が『質量存在時間』を割合分割した十の『賽』サイコロが与えられる。

2：賽保有者は、保有する全ての賽を振った出目の数だけマスを進むことができる。

3：賽は振った後にランダムに出目確定、その後使用された内から『一つ』失われる。

4：『同行』する場合は、宣言の後、同行者は代表者の出目の数だけ進める。

- 5：二名超の同行では、使用された賽から『総同行者数×随伴者』分の賽が失われる。
- 6：プレイヤーは、ゲーム開始時に各五十の『課題』を作成する権利を持つ。
- 7：『課題』はマスに止まった賽保有者に対し、如何なる指示も強制できる。
- 8：賽保有者は『課題』の達成、または七十二時間経過まで、マスを移動できない。
- 9：『課題』達成で、賽保有者は賽を一つ出題者から奪えるが、不達成で一つ奪われる。
- 10：各『課題』は立て札に記述され、順不同に盤上のマスに配置される。
- 11：『課題』はその内容によって、当該のマスの環境を変化させ得る。
- 12：ただし以下を含む『課題』は全て無効と見なされる。
 - 12a：『課題』の対象者を特定限定する文言。
 - 12b：出題者以外には達成不可能、またはどのプレイヤーにも不可能な指示。
 - 12c：賽保有者に対する、賽の出目に依らないマスの進退を指定する文言。
 - 12d：人類語以外の言語によって書かれた文言。
- 13：このゲームは外からの途中参加を認める。
- 14：途中参加の者もまた、そのゲーム開始前の二十四時間の記憶を徴収する。
- 15：途中参加の者が増えるにあたるマスの数の増加は、課題の数に依存する。

16：途中参加の者は最下位の人から二十マス離れたところとする。

17：途中参加者は課題を好きな位置に配置することが出来る代わり、賽が『一つ』失われる。

18：ゴールに到達した賽保有者を以て『勝者』とし、ゲーム終了とする。

19：当該神霊種は『勝者』に対し、その権利及び範囲の全ての要求履行の義務を負う。

20：全プレイヤーの賽喪失、或いは死亡を以て『続行不能』とし、ゲームを終了とする。

21：当該神霊種は『続行不能』時、先頭者を除く全参加者の全てを徴収する権利を有す。

0a：ゲーム盤は現実の構造だが、そこで起こる事象は死を含め全て現実である。

0b：——賽保有者の中に一名、記憶を徴収されていない『裏切り者』がいる。

以上がルールの全て。

途中参加者が誰なのか、それは空達はわかっていて、いや、考えればすぐわかる。

佑馬達だ、そしてこの条件は十中八九神霊種が入れたもの。

何故なら、今佑馬を呼んだところでデメリットしかない。

だが、それを承知の上で、空は了承したことになる。

そして……

「これは……お待たせってことかな、爺さん？」

「ああ、待つてたぞ、クソザル。」

空、白、ステフは初瀬いのと最後の対峙をする。



佑馬とジブリールは現在、東部連合に行く途中にある地精種ドワーフの首都、ハーデンフェルにいる。

「あ、やつときたにや……ちよつと遅すぎるんじゃないかにや？」

「まあまあ、これも作戦なんだから……それで、どうだ？」

「勿論成功にや。これで地精種はうちの傘下になったにや。」

「さすがというべきかな。天翼種の全翼代理は伊達じゃないね。」

「にや！これでもうちはジブリールの姉であると同時に君の義姉にや！なめないでほし

いこやー！」

「ああ、そうだったな……じゃあ、約束だ。」

「……仕方がありませんね。」

約束を果たすために、ジブリールはアズリールに近づく。

「にやあああああああ！触りたい放題にやあああああ！」

約束、それはジブリールをモフる権利。

東部連合につくのはもう少し先のようなのだ。



一方、東部連合。

ここでは現在、この世界では存在しない”幽霊”が確認されていた。

その姿は蛍光の筋肉マツチヨ……初瀬いのだった。

「——生きてンじゃねえかよおいしいiiiiiiiiiiiiiiiiッ!!」

ゲームのルールを見て、賽が無くなる＝死

と、考えていたのだったが、『質量存在時間』を割合分割、つまり、そこに質量のな

い『魂』は含まれていない。

というか、そもそも……

「——ルールの何処にも”サイコロ喪失で死亡”なんて書かれてねえええええじゃねえかああッ!!」

しばらく暴れまわったが、だんだん冷静になってきた頭で、ふと、疑問が浮上した。

O a : ゲーム盤は現実の構造だが、そこで起こる事象は死を含めて全て現実である。

このルールが偽りではなければ、サイコロ喪失以外の死は、すぐさま死ぬはずだ。

何故？

『サイコロ喪失で即座に死亡』で、神霊種になんの不都合があるといくのだろうか。つまり、『脱落』した場合のみ、霊体で動き回れる、奇妙なルールは。

こちら側の意図ではないのか。

「……………ふう、失礼。驚かせてしまったようですね……………」

そして、今いる東部連合の首都、かんながり巫鴈の一角にある鎮海探題府という『外交機関』の応接間にいたいのは、そこに立っている一人の女性に目を向けた。

「驚いたどころでは……………退職・異動願が殺到して——い、いえッ！初瀬外交長官こそ、ご無……………事——？……………よくわかりませんがとにかくにより、ですっ!!」

いのは、この女性を気に入った。

こういう理解出来ない状況で、『ま、いいか』と受け入れられる人は、強い。

「——貴官の姓名と所属は？」

「は、はい！鎮海探題府・かぐらかい霞樂海所属一等事務官、かなめ要江 ちとせであります！」

高い階級のわりには、若さと、有能さ、麗しさを兼ね備えている。

いのは、彼女を気に入った。

上記も大事なことだが、何より、背の低い栗鼠族リスの娘には胸も豊かであることがなによりも一番だろうか。

「……ことが落ち着いたら、私の秘書室で働く気はありますか？」

つまり、勧誘以外他にないのである。

……決戦の時は、着実と近づいていく。



それから少し遡り、ハーデンフェルを出た佐馬とジブリール。

アズリールは報酬を貰ったため、上機嫌なままアヴァントヘイムへと帰っていった。

「いやー、予想以上に長かったな。」

「そう思っていたのなら止めてくれても良かったのでございますよ……」

ジブリールは疲れた表情を隠さずに佐馬にそう言った。

「まあ面白かったしな……さて、そろそろ着くな。」

「そうでございますね……」

見えてきた島国、東部連合。

そこにはエルヴン・ガルドの船団が展開されていた。

「お、やってるね……ということは、もうクラミー達は中かな？」

「そうだと思いますが……本当にこれでよかったですでしょうか。」

そこで、ジブリールはまた疑問を投げ掛ける。

そして、これもまた当然な疑問。

「作戦では、私たちが先に行くことになってましたよね？」

そう、先の作戦では、佑馬達が先に行くことになっていたので。

「敵を騙すなら味方からつて言葉があるだろ？つまり、そういうことだ……さて、いくぞ？」

「……？了解でございます。」

隠蔽の魔法をかけながら移動する佑馬に首を傾げるも、何か策があるのだろうかと自己完結して付いていく。

そして、鎮海探題府についた佑馬たちはそこにいた獣人種に『援軍』と伝えて中に入り、いの、クラミー、フィール、そしてプラムがいる地下三十二階へと向かった。

そして、部屋の扉の前で立ち止まると、中から話し声が聞こえる。

「フィー、率直にきくわ。」アレ”を相手に——対策術式は使える？」

「クラミー知ってます？蚊は気づかれないよーに、麻酔を打って刺すのですよー……気づけばあ、ペチって叩き殺すための『娯楽用虫ケラ』に過ぎないのですよお♪」

クラミーの真面目な声色と、フィールのおっとりとした声、そして、

「あははあ……でしたら、”クアドドキヤスター四重術者のふり”なんて涙ぐましい努力でえ……気づいた

と勘違いされてるボクは、さしずめ娯楽にもならない害虫、ですかあ? ♡」

フィールの背後からずつと喋っているプラムがいた。

「ヘキサキヤスタ六重術者如きかボクに『術式数隠蔽』出来るなんて、夢はベッドで見えるものですう。」

中ではプラムによる空間の偽装が常に展開されており、フィール達のためにも、もうそろそろ行こうかとドアに手をかけた瞬間。

「それとお、その扉の奥にいる『神霊種もどき』さんと『天翼種』さんはいつまでそこにいるつもりですかあ?」

部屋の方から、プラムに声をかけられた。

ゲーム参加

呼び掛けられたため、魔法を解いて部屋の中に入る。

ジブリールは隠蔽魔法を破られたことに驚きを隠せなかったが、事情を知っている人からすれば納得も出来ることだろう。

……佑馬のことだが。

部屋に入つてすぐ、クラミーとフィールから目で何かを訴えられたが、今はプラムに注意を向けているため無視している。

「よお、プラム。それとさっきの訂正だけど、俺も正直なところ神霊種の実感はないんだよね。神霊種らしいんだけど」

「そうなんですかあ？でもお、それくらいの実力でしたら既に高が知れていますのでえ、例えそうだったとしても今のボクの相手ではないですなえ」

プラムはニコニコと少女みtainな笑顔をこちらに向けてくるが、絶えず魔法は発動していた。

その目を見ながら、佑馬は無言でプラムの話を聞く。

「少し前に一発でボクを男だと見抜いたその観察眼と、女王様の時に見せた力があつた

から警戒はしていましたが、その天翼種と同じくらいの実力でしたらその二人も合わせてのさんと余裕で勝てちゃいますねえ♪」

「おやおや、欠陥生物が何かでしゃばっていますね。これが猿山の大将つてやつでしょうか？」

プラムは「――」すら誘導しきるほどの知恵を持っている。

しかし、それは力が無かったからだ。

今現在、大戦時の全盛期の力を出せるプラムは、この世界的に見ても力を使って相手を支配する『強者』だろう。

だが、力を手に入れた『強者』になつてしまつたが故に、それに頼りきつてしまつてということが起きてしまう。

相手の力量を見誤るなんてことも起きてくる。

例えばそう、佑馬は天翼種よりも遥かに強いということ、そして、そもそも『空間偽装』程度の魔法など簡単に突破、利用出来てしまうこと。

「……つまりプラムは、俺たちを相手にしても余裕で勝てると言いたいのかな？」

「大変恐縮なことですが、勝てちゃいますねえ♪」

敢えて空間偽装の魔法を喰らっている佑馬は、ベッドに寝転ばされたり椅子に座らせられたり、されるがままにされているため、さらにプラムを慢心させる原因となる。

「別に敗色濃厚なら逃げてもいいですよ、つてことかな？まあ、逃げるつもりなんてさらさらないけど」

「元から逃がすつもりはありませんけどお、そうしてくれるならありがたいですねえ♪」
佑馬はプラムの余裕な顔を見て段々と腹が立つてきており、ジブリーも素で建物が壊れないように力を制限されながら術式を破ろうとしているが、中々破れないことにイライラしていた。

「ちよつと、佑馬！これはどういうことなのよ！」

そこで、ついに我慢できなくなったクラミーがこちらに喰いかかってくる。

「まず、なんで私たちの方が佑馬よりも早く着いたのよ！私たちは普通に飛んで佑馬たちの後に合流する手筈だったじゃない！」

「あー、クラミー。落ち着け？」

佑馬は思った。

——クラミーはやっぱり子供だ、と。

「その話は後で、また後程な。今はアイツだろ？」

そして、佑馬はプラムの方を指さす。

「ではあ、ゲームを始めさせて貰いますう。いの様対クラミー様で宜しいでしょうかあ？」

何が起きているか理解が追いつかないのと、若干涙目のクラミー、そして忌々しいものを見るような目でフィールがプラムを見るが、佑馬とジブリールはイライラしているだけで態度は変わってない。

「逆に聞くけど、いいの?」

「はい、全く問題ないですよ♪」

確かにクラミー対いのなら間違いないのに軍配が上がる。

そこにフィールが加わってもプラムがいる限りはこの勝利は揺るがないだろう。

だが、いい加減耐えるのも辛くなってきたため、プラムをドン底に突き落とすために佑馬は動き出す。

「あつそ。それじゃあカツコ悪く負けてくれるんだね。本当に助かるわ」

「はいいい?何のことでしょうかあ?」

「お前さ、前に空に言われなかったか?『弱者の戦法で弱者に勝とうなんて年季が違う』ってさ」

「あー、確かに言われましたねえ。それがどうかしましたかあ?」

「確かに、この状況にまで持ってきたお前の作戦は見事な『弱者の方法』だろうけど、その後は『強者の方法』にシフトするわけだ。だが、ここでも同じことが言えるんだよ」

そして、今まで溜まったものがようやくやく出せる、と最高の笑顔でプラムに言った。

「『強者の方法』で強者に勝とうなんて年季が違うんだよ」

そして佑馬が指をならした瞬間。

「……………え？」

プラムの自由だった世界が全て崩壊し、プラムは地面に這いつくばっていた。

「神霊種の力を使って大戦時の力を出そうって発想は素晴らしいと素直に称賛する。けど、幻惑を自分が一番上手く使えると思っていいたら、その後は成立しなくなる。少なくとも俺の前ではな」

今度は佑馬が景色を変えながらプラムにニコニコと笑顔を向ける。

「俺はここに来的时候に一番弱い偽装魔法で自分を隠しながら来て、そこから敢えて偽装魔法に気づかないふりをしてわざとその魔法にかかり、プラムの中で仮説して出ていたであろう俺の力がどこくらいなのか、を確定させ、今軽く魔法を破った、というのが今の流れだけど理解できた？」

「……………」

佑馬の問い掛けにただ目を細めて睨み付けるプラム。

「俺がゲームを受ける前にこれを言ったのは、お前に勝つてもこちらに利益がないから。クラミーとフィールを先に行かせたのは、プラムがある程度力を使えてるときに俺の偽装魔法に気づかせるため、魔法を喰らっているのはお前の仮定を確信づけるため。つ

まり、お前はこの場を支配しているように思っただけで、実は俺がずっと支配していた、という話だったんだけど、理解できた？」

敢えて同じ言い方にしておちよくったのだが、そこには気づいておらず、今言った言葉に、全員が驚いた。

ゲーム内容も知らないのに、プラムがこうなることを予期し、自分の魔法に気づかせるために敢えてクラミーとフィールを先に行かせて自分たちは扉の前で待機させ、そこからゲームをさせる流れまで持つていくその手腕は、正に本物のゲーマー。

「あと、『強者の方法』で強者に勝とうなんて年季が違う、と言ったけど、少し訂正させて貰うわ」

最早誰も意見するものはない。

いのはまだ状況を飲み込めず、クラミーとフィールは啞然と、ジブリールはニコニコと、プラムは悔しそうにこちらを見ている。

「『強者の得意分野』で強者に勝とうなんて、年季どころかお門違いもいいところだぜつてな」

佑馬には、眼がある。

その眼がある時点で、吸血種の偽装魔法程度に引つ掛かるはずもない。

「それとこれはプラムのためだが……神霊種に魂保護されてる時はいいけど、戻ったら

お前……瀕死だよ？」

「……あ……」

そして、佑馬からの言葉により、元々白いプラムの顔がさらに青ざめていった。

「ゲームをしなかったのはお前のためでもあったんだが、正直これだと同じだったな……」

「……何が同じなのですかあ？」

佑馬が苦笑しているのを不思議そうに、若干不機嫌になりながらもフィールが聞いてきた。

「いや、だってさ……今使ってるこの空間偽装、プラムがずっと使い続けているんだよ？」

「ッ!？」

その言葉に、ジブルールも含めた全員が驚いた。

佑馬に空間偽装の主導権が渡ったのかと全員が思っていたからだ。

「俺はこの部屋に俺がかけているように見えるよう偽装し、プラムには自分がかけているのを感じないようにしただけで、実際はずっとプラムが使ってる。これじゃあ、ゲームしてもしなくても……ねえ？」

まあ、つまり、プラムが使っていたのではなく、使わされていたのだが。

悔しそうな表情でこちらを睨むプラムを一瞥し、地上へと戻っていった。



『汝等、此のゲームに参加するものか』

地上へと行き、ゲーム盤の近くで途中参加の意思表示をしたら、脳内で音声 flowed。

「ああ、そうだ」

質問を肯定すると九つのサイコロ、そして、立て札が現れた。

佑馬とジブリールは課題を書いてそれを設置し、ゲームに参加した。

ゲーム盤の変形とともに、佑馬とジブリールの参加が参加者全員に告げられた。

記憶

佑馬とジブルールがゲーム盤に移動する途中、頭の中にノイズと共にゲームのルールが流れ込んできた。

1：ゲーム参加者には、己が『質量存在時間』を割合分割した十の『賽』サイコロが与えられる。

2：賽保有者は、保有する全ての賽を振った出目の数だけマスを進むことができる。

3：賽は振った後にランダムに出目確定、その後使用された内から『一つ』失われる。

4：『同行』する場合、宣言の後、同行者は代表者の出目の数だけ進める。

5：二名超の同行では、使用された賽から『総同行者数×随伴者』分の賽が失われる。

6：プレイヤーは、ゲーム開始時に各五十の『課題』を作成する権利を持つ。

7：『課題』はマスに止まった賽保有者に対し、如何なる指示も強制できる。

8：賽保有者は『課題』の達成、または七十二時間経過まで、マスを移動できない。

9：『課題』達成で、賽保有者は賽を一つ出題者から奪えるが、不達成で一つ奪われる。

10：各『課題』は立て札に記述され、順不同に盤上のマスに配置される。

11：『課題』はその内容によって、当該のマス環境を変化させ得る。

1 2 : ただし以下を含む『課題』は全て無効と見なされる。

1 2 a : 『課題』の対象者を特定限定する文言。

1 2 b : 出題者以外には達成不可能、またはどのプレイヤーにも不可能な指示。

1 2 c : 賽保有者に対する、賽の出目に依らないマスの進退を指定する文言。

1 2 d : 人類語以外の言語によって書かれた文言。

1 3 : このゲームは外からの途中参加を認める。

1 4 : 途中参加の者もまた、そのゲーム開始前の二十四時間の記憶を徴収する。

1 5 : 途中参加の者が増えるにあたるマスの数の増加は、課題の数に依存する。

1 6 : 途中参加の者は最下位の人から二十マス離れたところとする。

1 7 : 途中参加者は課題を好きな位置に配置することが出来る代わり、賽が『一つ』失われる。

1 8 : ゴールに到達した賽保有者を以て『勝者』とし、ゲーム終了とする。

1 9 : 当該神霊種は『勝者』に対し、その権利及び範囲の全ての要求履行の義務を負う。

2 0 : 全プレイヤーの賽喪失、或いは死亡を以て『続行不能』とし、ゲームを終了

とする。

21：当該神霊種は『続行不能』時、先頭者を除く全参加者の全てを徴収する権利を有す。

0a：ゲーム盤は現実の構造だが、そこで起こる事象は死を含め全て現実である。

0b：——賽保有者の中に一名、記憶を徴収されていない『裏切り者』がいる。

全て予想の範囲内、そのための対策もしてある。

最下位はいづなで「」とは三マスしか変わらない。

つまり、「」から二十三マス後ろからが、佑馬達のスタートラインとなる。

そして、追加百マスは佑馬達だけではなく、参加者全員に追加されなければいけないため、百マスの追加が出るのは、「」のいる場所以降となる。

さらに、完全クリアを目指す「」にとって、賽を残すという行為は有り得ないことだ。

「」の心理として、百マスも目の前で増やされたら、やる気を無くしたフリをして賽浪費目的で小さい数を出すのは明白。

そのため、そこから一带に『課題』をバラまいた。

ここまでは順調、ただ、危惧することもいくつかある。

しかし、それを今更どうこうすることも出来ないことで考えていても意味がない。

ゲーム盤の姿がだんだんと明白になってくる視界を意識に入れながら、気持ち切り替える。

そして、辺りが鮮明に浮かび上がった。

「……よし、着いたな。まずはジブリアルとの『同行』を宣言しとくか。さて、危惧していたことも含めてどんな感じかなーつと」

まずは周りを見渡す。

隣でジブリアルがこちらを見ていること以外は、草原が広がっているだけだ。

次いで、『賽』の数。

ルールの通り、『賽』の数は九個。

次は記憶の確認。

たしかに二十四時間前からの記憶はないが、問題ない。

この作戦は「」に勝つと決めた日からある程度考えていたものだから。

ある程度確認を終えた佑馬に、ジブリアルが話しかけてきた。

「大変申し訳ありませんが貴方様はどち」

「ストップ！それ以上言われたら傷つくから先にコレを受け取ってくださいジブリアルサン!!」

全力で叫びながら差し出したのは、賽。

訳も分からずそれを受け取ったジブリールは、瞬間。

「あ……」

失っていた記憶を、取り戻した。

1：ゲーム参加者には、己が『質量存在時間』を割合分割した十の『賽』が与えられる。

ジブリール、いや、天翼種は、生命だ。

今回のゲーム、『質量存在時間』十に分割、つまり、『魂』と『器』を分けて、『器』のみを賭け皿に乗せた。

生命と生物、違いは『器』と『魂』に明確な境界線がないこと。

それ即ち、

「よお、ジブリール。記憶戻ったか？」

「……お手数を、おかけして、申し訳ございません」

賽がゼロになれば、全ての記憶を初期化されるということに、ジブリールは今の一瞬で理解、そして、初めて実感した『恐怖』に、言葉を途切れ途切れに言うジブリール。

「……これが、恐怖というものでございますか……」

「俺との記憶を忘れたことに対して恐怖してくれるのは、それだけ大切にしてくれてるってことだから嬉しいけど……その……ごめん、本当に」

「佑馬が謝るのは、至極当然のこと。

何が悲しくて大切な彼女に恐怖を植え付けることが出来るのだろうか。

しかし、それをジブリールは、否定する。

「何故佑馬が謝るのでしようか。『恐怖』これも感情の一つ。その感情を教えてくれた佑馬にこちらから感謝はすれど、佑馬から謝られることではございません。何より、佑馬はこれ以降私に賽を使わせる気はないのでございませう?」

暗に、これも大切な記憶だと。

佑馬がくれたプレゼントだと言うジブリールに、最早佑馬から言うことも無く。

「……行こうか」

前に進むことにした。



佑馬とジブリールがマスを進めようとした頃、空と白、ステフは佑馬の目論み通り、佑馬が来てからマスを進めていなかった。

「くそ……佑馬め、ただ俺たちをいじめたいだけなんじゃないのか!」

「佑馬ならありえますね……」

「と、いうか……それが……本当、の……目的?」

現在、二百十六マス。

空が六個、白とステフが五個。

ゴールまで三十四マスのところ、百マスを追加された空たちにとって、それは正しく拷問だった。

「でも、進まなければ終わりませんわよ!？」

「えー……佑馬達に連れて行って貰ったり出来ないかな……」

「にいい……ないす……あいでいあ」

「明らかに敵ですわよねえ!？」

ステフの突っ込みと決まったところで、仕方ない、と空と白、ステフは賽を振る。

ぶつぶつと佑馬に悪態をつきながら。



空達が悪態をついている頃、佑馬とジブリールは転移でマスを移動する。

「さて、空達のペースを見ると、少し待たないといけないな」

佑馬達が参加したせいで、空達の進むスピードは著しく低下しているのはジブリールも承知の上だが、それよりも気になることがあった。

「そうでございませうが……一つ聞いてもよろしいでしょうか」

「どうした？」

「佑馬は何故、体が小さくなることも、記憶が無くなることもないのでございませうか

？」

そう、佑馬は賽を現在五個消費して三十の出目を出した。

普通なら、空達みたいに体が小さくなるなり、ジブリールみたいに記憶がなくなるなりするはずだ。

しかし、佑馬は前提として普通ではない。

「前にも言ったけど、俺は人類種でもある、そして、一度転生した身だ。つまり、一この世界の質量存在時間は数ヶ月で、現在人類種の俺はその数ヶ月分の成長分しか身長が減らないわけ」

そう、転生したということは、一度死んでいるということ。

つまり、その時点で『質量存在時間』はなくなっている。

この世界でまた一から始まった『質量存在時間』は、前世の年齢から再開される。

つまり、そこがゼロなのだ。

「つまり、記憶も失わず、体も小さくならないと……確かにそれなら、佑馬が賽を使い続けても問題ありませんね」

「だろ？これでジブリールが賽を使わずに済む。それよりも、早く先回りして空達を待つてやろうぜ」

それに頷きながら、転移を続け、空達を追い越す二人。

佑馬の後ろについていつているジブリールの顔は、何処か嬉しそうだった。



「お待ちしておりましたってか？」

「おう、大分待ったぜ」

佑馬とジブリールが参加してから数日後、空と佑馬が同じマスで会話をする。

「俺が参加したのは、「」に挑むためだけだ。マスが増えたのは俺らには関係ないな」

「ほう……」「」にゲームを挑むのか」

「では、看板をご覧に頂こう」

空、白、ステフは、その一言で佑馬の後ろにあつた看板に書かれていたのは、

『課題対象者以外の提示ゲームに、二人以上で直ちに盟約に誓い応じ、勝利せよ』

空達が最も警戒していた、このゲーム最高難易度の『課題』だった。

「さて、白、腹はくくくつてるよな……？」

「……ん……とつくに……くくくつて、ある……う？」

「本当なのですね……佑馬とジブリールさん相手にゲームつて……悪夢ですわ……」

空は頬に汗を伝わせ苦笑し、白は唇を舐め、ステフは天を仰いだ。

「では、早速ゲームの内容を伝えよう。何、空達も知っている大戦を模倣した簡単な戦略

シミュレーションゲームだ」

佑馬がそう言った瞬間、世界が再構築されていく。

そこは正しく、地獄だった。

「ゲームのルールを言わせていただきます」

1, このゲームは大戦を模倣した十六対十六で行うものである。

2, 双方使える種族は、現在その駒を持っているか、傘下にある、同盟してある種族に限る。

3, 使える種族同士は友好的であるが、それ以外の種族はどちらにも属さない、『中立勢力』である。

4, 使える種族にはそれぞれ二人、その種族の中心人物として選ぶことが出来る。

5, 使える種族の中心人物は、『神の視点』で参加し、自分自身の分身を含む駒を動かすことが出来る。

6, 他方にいる人物は、もう片方では存在することはできない。

7, どちらかがいなければ生きていけない、という場合は、その二組で一人と換算する。

8, 内応、裏切り行為は禁止とする。

9, 相手の首都を陥落させた方の勝ちとする。

10、五回行い、三勝した方をゲームの勝者とする。

11、ゲーム時間は現実時間で七時間とする。

12、敗者側の首都は崩壊する。

.....

「おい、12の敗者側の首都が崩壊するってどういうことだ!!」

あまりルールの意味がわからなかったが、10個目のルールを聞いてそう叫ばずには
いられない空。

それは、当然だ。

なぜなら、

「そのまんまの意味だけ?つまり、空達が負ければエルキアは消える」

エルキア国民全員の死を意味しているわけだから。

「なツ!?そんなことさせませんわよ!!」

「なら、勝てばいいだけのことだ。勝てるなら.....だけだな」

勝てばいい、確かにその通りだろう。

しかし、その勝率を考えると.....なるほど、鬼畜もいいところだろう。

『『棄権』も『敗北』と見なすからよろしく。では、ゲームを始めようか』

この時を持って、「」至上最強の敵と共に、『デイス・ボード盤上の世界』至上最大のゲームが始

まった。
た。

再開の強者達

空と白は焦っていた。

佑馬がゲームを挑んでくるのは知っていた。

過去最高難易度になることもだいたい予想がついていた。

しかし、最後の首都消滅は予想外だった。

空と白が負けたら、エルキアが消える。

だが、佑馬が負けたらどうなるのだろうか。

ジブリール達アヴァント・ヘイムの首都は『生命』である幻想種、アヴァント・ヘイムのため、破壊出来ない。

なら、佑馬の首都は何処だろうか。

この場合、その『種』の首都として扱われることになるが、神霊種に首都など存在しない。

つまり、人類種としての首都になるのだが、これもまた、エルキアになるのだ。

つまり、勝っても負けても引き分けても、消えるのはエルキアとなる。

「どうする白」

「……………どうし……………よっか」

「ソラ、ソラ！これも予定通りなのですわよね!?!勿論勝てるのですわよね!?!」

唯一分かってないステフに、少しイライラしながら空は説明する。

「勝つちやいけないんだよ。そして、負けてもいけない。勝つても負けても引き分けても、エルキアは消滅する」

「な……………それじゃあ、エルキアはこれで消えるってことですか?!?!でもそれは『盟約』で出来ないんじゃない?」

「確かに、『盟約』で出来るとは思わないが、『盟約』に誓って『ゲーム』の中のゲームで対象にしたものに、たまたま人がいた結果、死んだらというのは、俺達はまだ試したことがない。もし、佑馬がそれを知っててやってるのだとしたら、やばいな」

「え、なんでですか?知っていてやってるなら死なないと分かっているんじゃないんですの?」

確かに、普通なら死なないとわかってるからやっている、と思うだろう。

そう、普通なら。

「あいつが、人を殺すのに躊躇すると思うか?あのオーシエンドのことを見ても」

「それは……………その……………」

佑馬は既に普通ではない。

オーシェンドの時、人を殺すのに戸惑うどころか、『楽しい』とまで言ったのだ。これをどう見れば死なないと分かってやってると思えるのだろうか。

しかも、相手が「」なのに。

「俺達が相手なのに、絶対に助かるように仕向けるわけがないだろ？ あいつは本気だ」

「正直……」ここまで、とは……思ってたな、かった」

そこで、二人は顔を見合わせ、ニヤツと笑った。

「だからこそ、面白い!!」

そして、ダウンロードが終わったのか、とてつもなく広い、マス一面分のフィールドの対面側に佑馬達があり、フィールドは左右対称に出来ていた。

空は赤く、どう見ても地獄。

そこで、機械のような声が聞こえた。

『それでは、使える種族の中心人物となる二人をお選びください』

画面が出てきて、種族の選択画面が出てくる。

選択出来るのは、人類種、海棲種、獣人種、吸血種の四つ。

ふと、隣に映し出された相手側、佑馬が使える種族の数を見る。

「そ、そんな……」

「……おいおい、マジかよ」

そして、見た瞬間、ステフは絶望し、空と白は冷や汗を流す。

佑馬側が使える種族は、人類種、獣人種、海棲種、吸血種、妖精種、地精種、森精種、天翼種、神霊種。

なんと、九種族も使えるのだ。

「何も無しで挑むほど、俺もバカではない。いや、ここまでするのは最早バカか。まあ、どうでもいいけど」

こちらは下位四種族、相手は『生命』二種族に、『生物』の上位種族、さらに何故か獣人種に海棲種、吸血種までいるのだ。

最早鬼畜ゲーである。

大量の冷や汗を流しつつ、中心人物となる二人を決めていく空達。

人類種 「 」とステファニー・ドロー

海棲種 ライラとアミラ

獣人種 巫女と初瀬いの

吸血種 プラム・ストーカーと初瀬いづな

選択し終わると、その人物が空側の方に召喚されていく。

「あれ、ここはどこ——っ！ダーリンじゃない！」

「あれーなんでアミラちゃんはここにいるのかなー？」

「——ッ!? 巫女様! 御無事なのですか!？」

「初瀬いの……まだゲームは終わってないようやけど、これはどういうことやろな」

「なんで僕はまたここにいるのですかあ? さっきまで地下にいたはずなんですけどお」

「いつの間ここに移動した、です? 何のにおいもしなかった、です」

口々に思ったことを口にするなか、空が説明を始める。

「悪いな、いきなり呼び出して。今から佐馬達とゲームを行うのだが、そのためには君たちの協力が要だ。負けたらエルキアが消える」

その言葉に、嘘が分かるものは嘘ではないと断じ、バカな者は無条件で信じ、敵方に恨みがある者はそちらを睨みながら無言で肯定した。

「なんでいづなさんが吸血種なんですの?」

「その種族から出せとは言われてないからな。戦力要因としてもいづなの分身は役に立つ」

これでいくらかは対処できる、と対策を練ろうとした瞬間、それが心の中で簡単に崩れた気がした。

相手側の中心人物二人。

人類種 リク・ドーラとシユヴィ・ドーラ

獣人種 フィール・ニルヴァレンとクラミー・ツエル

地精種 ローニ・ドラウヴニルと現地精種全権代理者

森精種 シンク・ニルヴァレンとニーナ・クライヴ

天翼種 アズリールとラフィール

神霊種 佑馬とジブリール

海棲種、吸血種は大戦時のリーダー格らしき人物、妖精種は現全権代理者に大戦時でリーダー格であったのだろう人物。

「()はどこだ……——ッ!? シュヴィ!!」

「……リク……?」

「あらあく、なんで私はこんなところにいるのですかあ?」

「そんなの私にも分からないわよファイ。まあ佑馬の仕業だろうけどね」

『……なるほど、またこのゲーム世界か』

「あ、ニクナじゃないですかあく。久しぶりですねぇ」

「あ、あれ、拙はここで何を……ってシンク!」

「……ラ、ラフィールちゃん!」

「アズリールに、ジブリールか。ならここは、現実というわけか?」

「ラ、ラフィール姉様!」

それぞれが思い思いの言葉を言ってドンチャン騒ぎしているなか、佑馬は一人思っ

た。

「……何このカオス」

誰かが聞いたら『お前がいうな』と言いたくなるような台詞を言う佑馬は、とりあえず手を叩いた。

バーーン!!

とてつもない大きさで。

「久しぶり?」の再開や思いで話をしているところ悪いけど、少しだけ話を聞いてくれ。質問は後。まず、一度死んだものはこのゲームの期間だけ生きることが出来る。そして、今からやるゲームは大戦を模倣した戦略シミュレーションゲーム。敵は向こうにいる人たちだ。五戦して三勝した方の勝ち。勝利条件は相手の首都を全て陥落させること。味方の同士討ちや裏切りは禁止されている。種族のリーダーはその種族の駒を自由に扱うことができ、また自分の分身もそのフィールドに駒として動かせるようになっている。ざっとした説明だけど質問は?」

頭の回転が早いものは即理解し、拒否権はないことを悟り、嫌々、渋々など様々だが頷いた。

手を上げたのは地精種の現全権代理者、そして海棲種から。

——どうして自分らがこんなゲームに参加しなくてはいけないのか

——そんなことよりもやりたい。

言わずもがな、上が地精種で下が海棲種だ。

それに懇切丁寧に説明した佑馬だが、ローニ・ドラウヴニルが地精語で、『今の地精種は落ちたものだな』というのを見逃さなかった。

始まりは全員の準備が出来てからのため、こちらの準備が終わらなければ始まらない。

それを利用し、ジブリールと話していたラファイールに一礼し、ジブリールとともに一はずつ挨拶に回る。

「あんたらが元幽霊からリアル幽霊になったリク・ドーラにシュヴィ・ドーラか」

「もしや、貴女様はあの時の機凱種ではありませんか」

まず話しかけたのはリクとシュヴィ。

だが、ジブリールの一言により、緊張が走った。

「ほう……貴様がシュヴィを殺した本人か」

「……『番外個体』……」

シュヴィを殺した張本人に出会い、殺気を滲ませるリクと武装を展開して戦闘体勢に入るシュヴィ。

その瞬間、ジブリールは、腰を曲げた。

「大変申し訳ございません。今の私には『感情』があります故、貴女様方に向けた恐怖、悲しみ、憤怒を理解することが出来ず。そして、それらは許して貰えるものではございません。ですが、今回、この場に限り、佑馬に力を貸して頂けませんでしょうか」

その姿に、リクやシュヴィだけでなく、佑馬を含むその周りからは驚きを隠せない。あの『番外個体』が、謝罪しているなどと。

「……今更どうこう言ってもどうしようもねえよ。というか、ちよつと拍子抜けしたわ」「……本当、に……あの『番外個体』？」

「私にも大切な人が出来まして」

その言葉で、佑馬に視線が集まる。

驚愕の眼差しで。

「まあ、そういうことだ。今日はゲームだ。シュヴィとリク、あんたらが生み出したこの世界、楽しんでから逝きなよ」

佑馬はその言葉を残して、ジブルールとともに次の人に挨拶するためにその場を離れた。

「ああ……本当に、そういう世界が出来たんだ……シュヴィ、やっぱりやってみるもんだわ」

「……うん」

二人の嬉しそうな声を聞きながら。

大戦の英雄たち

リクのシュヴィイとの会話が終わった佑馬とジブリールは、次によく見た顔の二人の元へと向かった。

「佑馬さんつてえ、本当に未来でも見えているのですかあ？ここまで正確だとお、引くのですよお」

「全くだわ。しかも気がついたらここにいたし」

そう、フィールとクラミーだ。

「移動方法は俺も分からなかったから勘弁しろよ。その結果、これがフィールの質問の答えにもなるな」

「……納得はいかないのですがあ、嘘ではないようですねえ」

フィール、クラミーと佑馬、ジブリールは同盟関係にある。

だが、同盟しているだけで完全に信用しているわけではない。

それは、フィールが佑馬の言ったことの真偽を魔法で確かめたことによっても明らかだろう。

「さて、フィールとクラミーにはもう話してあるからそこまで長話する必要がないのだ

けど、なんかある?」

「私からはないわよ」

「……なら一つだけいいですかあ?」

佑馬の質問にたいし、クラミーは必要なことは理解したのか素っ気なく答えたが、フィールはある一点を見ながら質問の意志を示した。

「なんだ?」

「何故貴方が私たちの祖先……ニーナ・クライヴとシンク・ニルヴァレンが別人ということを知っているのかあ、答えていただけませんかあ?」

フィールの祖先。

それは、大戦中の全権代理者とも言える人物で、書物でも存在が曖昧になっている人物だ。

シンク・ニルヴァレンとニーナ・クライヴはある程度の大戦の知識がある人なら『同一人物』と答えるであろう、森精種が秘匿としていたほどの人物。

それを、何故佑馬が知っているのか。

何故、同一人物ではないと見破ったのか。

それが気になったのだ。

「あー、なんとなくだよ。まず、過去に森精種最高位の『八重術式』オクタ・キヤスターが出てきたのは同じ

時代なんだ。そして、シンク・ニルヴァレンが書物から消えたとき、その瞬間にニーナ・クライヴが現れた。そして、ニーナ・クライヴが消え、家系は残っておらず、今度は消えたはずのフィール達の家系、ニルヴァレン家が残った。これなら確かに、『同一人物』だって思われるし、俺もそう思う。でも、「」を見た俺はこうも考えるんだよな。それほどのやつが、下で真面目に働くのかってね」

「……それだけですかあ？」

「うん。それほどの天才が真面目に働くとは思えないし、それなら人使って裏から回せば自分は楽できるしな。これなら辻褃もあうだろう？この場合、シンク・ニルヴァレンがニーナ・クライヴをコキ使っていたのかな。そうすれば、ニーナ・クライヴの行動はシンク・ニルヴァレンの指示によるものって理由で説明出来るし、『八重術式』が二人も出たことも説明出来る。『八重術式』のやっていることをそのまま真似しているだけだな。でも、そうなるとある程度の実力はあるから『五重術式』以上はあると思うな。その二人の子供なら、フィールの実力も領ける」

佑馬の考察を聞きながら、矛盾点を探すも……ない。

確かに筋は全部通っている。

「つまり、全て仮説に過ぎないと言うのですかあ？」

「勿論。でも、ルールにあるだろ？」

6、他方にいる人物は、もう片方では存在することはできない。

つまり、此方で存在している人物がもう一人いてはいけないとは言っていないから、もし同一人物が二人来たとしても、フィール達を森精種のリーダーにして別の種族を任せればいいし、別人だったらその二人に森精種を任せればいい。それだけだよ」

「……嘘ではないようですねえ……理解したくないけどしたのですよお」

真偽を見るも、全て真。

フィールはまだいくつか聞きたいことはあるようだが、それを全て飲み込んで退いた。

佑馬もこれ以上話す必要はないと分かっていたため、そのままその場を後にする。

今度は先程から名前が出ていて、その会話を聞いていたのかこちらを凝視する森精種の元へ向かった。

「やあ、シンク・ニルヴァレンとニーナ・クライヴ。お待たせ」

「かなくくり、待たされましたねえ。さつき話していたのは私たちの子孫のようすけどお、実力の方はどうなんですかあ？」

「今の森精種ではトップクラスじゃないか？ 『六重術式』だよ」

「そうなのですかあ」

シンクは、質問をするときもずっと笑顔だった。

そう、ずっと笑顔のままだ。

不気味なほどに、隙がない笑顔のまま。

「……質問しながら魔法組むのはやめて欲しいんだが？」

「……これが気づかれるなんて思ってもいなかったのですよお」

「……ええ？」

いきなり佑馬が『魔法を組むな』と言つて、その魔法を解除したらしいシンクを見て、ニーナとジブリールは固まる。

二人とも一切魔法を感知出来てなかったのだ。

「悪いね。俺は人類種だけど、『八重術式』は確実に組めるし、魔法は全て見切ることが出来るんだよ」

「……またお猿さんですか……本当にいろいろやってくれますねえ」

「まあ、そう言うな。今回は大戦を模倣したゲームだ。相手は最強の人類種。森精種最高の天才の手腕、期待しているぜ？」

「そうなのですかあ？それじゃあニーナ、頑張るのですよお」

「……あ、は、はいな！……つて、それつて全部拙に丸投げじゃないですか!？」

「当たり前なのですよお。私が考えた作戦を、ニーナが実行する。これが私たちじゃないのですかあ♪」

「そ、そうでした……頑張ります」

正に恐妻家持ちの夫さながらの光景に、佑馬も若干涙を流しそうになるも、なんとか協力は上げたため良しとした。

と、いうか。

「……なあ、ニーナ。君って本当に男？」

ニーナの顔や声、体型をみて、思った。

「あ、貴方もそう思うのですかあ〜？私もですよ♪」

「し、失敬な!!拙は立派な男です!!」

こいつ、女じゃないのかと。

声は高いし、顔は完全な女性の顔。

胸は慎ましいという表現が似合うが、ウエストはくびれている。

「……シンクに性転換やられなかったのか？」

「そ、そこは触れないでください!!」

「ほらあ〜、やつぱりニーナは女の子がいいのですよお〜。今からゲームして女の子になるのですよお〜♪」

「い、嫌ですよ!?!せつかくゲームに勝ってなんとか男として生きていけたのに!!」

これ以上いるとニーナが不憫に思えて仕方がないので、次の人物へと向かった。

『待たせたね』

『地精語が分かるのか。確かに長かったな。まあゲームが出来るならいい』

佑馬が流暢な地精語で話しかけたのは、ローニ・ドラウヴニル。

こちらもまた、地精種最高の天才と言われている人物。

『……あんたって、実はかなりのゲーム好きか?』

『ああ、あの女とのゲームは特に楽しかったな』

あの女、と言って指差したのは、シンク。

だが、佑馬が気になったのはそこではない。

あの女とのゲームは楽しかった。

それがただのチェスとかであるはずがない。

つまり、大戦でのシンク達との交戦のこと。

ローニは、大戦をゲームと言い放ったのだ。

(やっぱりシンクも終戦を狙っていたのか。そして、このローニもまた……リクが終わらせなかったら、どう終わってたのか気になるところだが、終わっちゃったなら仕方ないな)

リクではなく、もしローニやシンクが大戦を終わらせていたらどうなったのか、という可能性のあった世界を想像しようとしてみるも、答えは出なかった。

いや、出るわけもなかった。

(もし、なんて言うのは考えてもきりが無いし、今が楽しいから別にいつか)

佑馬は自己簡潔をし、ローニと話す内容もないため会話を切り上げることにした。

『そうか、じゃあ今回のゲームでのあんたの手腕、期待してるぜ?』

『貴様もな』

その意図を組んだのか、ローニも一言そう言つてその場から離れていく。

そして、最後に向かうのはある意味最初に出会った天翼種に会いに行った。

「いやージブルールを連れていつて申し訳ない」

「佑馬くん遅いじゃ。いきなり訳も分からない呼び出しをしたり、話の途中でジブちゃ

んを連れていったり、そろそろお姉ちゃん怒るじゃ?」

「最後にじっくり話したかったからだつて。そう怒るなよ」

「……まあいいじゃ。紹介がまだだにや。『ラファイール四番個体』にや」

「ラファイールだ。ある程度のことにはアズルールから聞いた。私は可愛い末妹のために、

また、その恋人のために力を貸すでしょう」

紹介された天翼種、ラファイールは、他の天翼種から受ける『美少女』という印象より、

『美人』が似合う容姿をしており、光輪は欠落したかのように破綻し、片翼片目を失つていた。

「ラフィール姉様が手伝ってくださいれば、私たちにとつてとても心強いです」
「ジブリールがそこまで言うなら信頼でき……ん？ラフィール姉様？」

ジブリールは尊敬の眼差しをラフィールに向けてながら敬意をはらっているが、それを聞いた佑馬は耳を疑った。

全翼代理のアズリールすらも姉様と言うのに時間がかかっていたのに、ラフィールに限っては『姉様』と呼び、敬意を込めて接しているからだ。

「私がジブリールの姉で、ジブリールは私の妹。ここに何か可笑しいところでもあるのか？」

「いや……なるほど。確かにこれはラフィール姉様だわな」

かなり疑問が残っていたが、ラフィールの返事を聞いて理解した。

——この人は完全なお姉さんキャラだと。

「佑馬も理解してくれますか」

「勿論」

「にやああああ!!ラフィールちゃんにまたジブちゃんを取られるにやああああ!」

完全納得した佑馬だが、そこにアズリールが泣きながら割り込んでくる。

「うるさい」

「相変わらずのカリスマのなさだな、アズリール。この佑馬という人類種にもお前の力

リスマ性を見せてやれば少しは評価を改めるんじゃないか？」

「……無理だにや。前一度だけ本気で戦ったことがあるけど、ダメージすら与えられなかったにや」

「……ほう……伊達にジブリールの恋人ではないというわけか。でも、それは『アレ』を使つてなかつたのだろ？」

『アレ』という言葉に佑馬とジブリールは反応した。

ジブリールはそれに記憶にあるからだ。

佑馬は『アレ』が何か分からないが、ニュアンスとジブリールの反応からしてある程度予想はついていた。

「……実は忘れてたにや……」

「……は？」

「なんとというか、その時は佑馬ちゃんにジブちゃんが取られて頭が回つてなかつたにや……」

「……アズリール。やつぱりお前はカリスマゼロだな」

「にやあああああ！それは言わないで欲しいにやあああああ！結構気にしているにやあああああ！」

「……それで、『アレ』を使つたら俺に勝てたのか？アズリール」

アズリールが発狂し始めたので、佑馬はアズリール収めるついでに気になることを聞いてみた。

「どうかにやー。不意打ちなら確実に勝てるにや。でも、正面からなら……無理かなにや」

「アズリールが『アレ』を使っても正面からじゃ勝てないのか。なるほど……かなり興味深いな。少し調べさせてもらえないか？」

そして、この時、佑馬は思った。

——この人もやっぱり天翼種だ、と。

嵌められた「」

ゲームが始まってどれくらい経つたのだろうか。

数時間かもしれないし、数分、もしかしたら、数十秒かもしれない。

ただ、今の「」の思考スピードは時間が止まったと錯覚するほどにまで早かった。その思考をさらに加速させていく要因は、『焦り』。

戦略ゲームにおいて、『焦り』は間違つた采配をする原因に繋がるものだが、当然それを理解している「」ですらも、この状況でそれを避けることは出来なかった。

今いる部屋にの中央には、『指令箱』と書かれた目安箱みたいなものが置いてあり、その隣には『指令書』と書かれた紙が操作できる種族分、つまり、四つの山となつて置かれていた。

なるほど。

これはルールの説明にはなかったが、特に問題はないのだろう。

寧ろ、『指令書』があつて内心ホツとしてゐるぐらいだ。

では次にいこう。

部屋には空中に巨大なスクリーンが投影されており、そのスクリーンには『盤上の世

界』が左右対称に二つ繋がった形で広がっていた。

しかし、現在のエルキア、オーシエンド、東部連合以外の場所は真っ黒だ。

味方のいる場所がわかるだけでもありがたいし、これも予想の範囲内。

次にいこう。

スクリーンの下側に、その世界に存在している種族が表示されている。

そこに表示されている種族は、十三種類だ。

神霊種、幻想種、精霊種の名前がない。

つまり、その世界には存在していないこととなる。

6、他方にいる人物は、もう片方では存在することはできない。

これを守るなら、例えば天翼種の創造主である『アルトシュ』、天翼種の首都である『ヴァントヘイム』などの両方に必要な人物、存在の定義すらあやふやな精霊種は、存在しなくなる。

精霊種は厳密には存在しているのだろうが、種族として扱われていないようだ。

では、考えてみよう。

1、このゲームは大戦を模倣した十六対十六で行うものである。

この十六対十六とは一体なんなのか。

十六で種族の名前まで出されたのなら、普通は十六種族対十六種族だと思うだろう。

しかし、十三種類しかないため、これは違うということになる。では、どういう意味だろうか。

十六人对十六人なのか、十六隊対十六隊なのか。分かるわけがないのだ。

ただ十六対十六と言っているだけで、細かくは定義されていないのだから。そして、次。

9, 相手の『首都』を陥落させた方の勝ちとする。では、聞こう。

『首都』はどの種族の首都なのか。

大戦時代に『首都』という概念はあったらしいが、そもそも『首都』の位置を決められていない。

それに、『ゼロだった場合』、勝利条件はどうなるのだろうか。

意図的に『首都』を無くしたら負けるのか、それとも必勝の手になるのか。

「 」が焦っているのは、しっかりと決めてあるように見えたゲームのルールが、全て曖昧になっているということだ。

さらに、一秒につきマップの情勢がガラリと変わる。

白の計算によれば、一秒につき約八時間の時間が過ぎているらしい。

知らなかった方が悪い、仕方がないのだろう。

しかし、これはそもそもゲームなのだろうか。

不確定要素ばかりの時間の進みが二万八千八百倍となったりリアル戦略ゲーム。

それは、ゲームなのだろうか。

例えるならそう、『宇宙大戦時代にタイムスリップした縄文人のリアル戦略ゲーム』だ。

空は開始二秒で空陣営の機凱種を滅ぼし、こちらへと他種族を葬りながら迫る『天翼種^化森精種^物地精種^たと佐馬^ち』を見ながら、一筋の汗を流した。



佑馬陣営の話も終わったところで、ゲーム開始が出来る状態と見なされたのか、フィールドが次々と構築されていく。

佑馬陣営とは完全に隔離され、部屋に移動させられ、巨大なスクリーンが空中に投影された。

そこに書いてあるのは『開始まで残り二分』というものだった。

周囲を見渡せば、自分達と呼んできた助っ人達がこちらを見ている。

「さて……どうやら佑馬たちはマジモンの化け物ばかりみたいだが、ここであえて言う。」「」に負けはないと」

「(ハ)く(ハ)く……」

空が静かに言った言葉に、白は頷き、他のものは反応を示さずにジッと空を見ていた。「ゲームの内容から見て、向こうとこちら側に与えられている戦力は同じだ。そこに、俺たちの力が加わるわけだが、向こうには『天翼種^化森精種^物地精種^物佑馬ジブ^たルール』だが、こっちは獣人種と海棲種、人類種、吸血種だ。大戦を模倣しているゲームということとは、当然『力』を大いにふるってくるだろう。なら、我々は『知恵』で対抗しようではないか。隠れて、逃げて、ひっそりと、静かに、だが、確実に、準備を進めて最後に全てをかつさらって、勝つ」

これは、空が戴冠式でもいった言葉だ。

それこそが、『最弱』なのだから。

それだからこそ、『最弱^{さいききょう}』なのだから。

それぞれが指令書を山ごと運んで自分達の席に行き、残り二十秒となったスクリーンを眺める。

準備は出来ている。

後は全てを読み切り、勝つだけ。

このゲームは間接的に他種族を操れるため、「」としてはある意味やり易い部類のゲームとなる。

そう、そんなゲームだったのだ。

始まる前までは。

始まりの合図がしたと同時にある一ヶ所に天翼種と佑馬、ジブリールの駒が空陣営に侵入、空陣営の機凱種を滅ぼしたのだ。

開幕早々、攻守の要である機凱種を倒されたのだ。

そして、この瞬間決した。

これはただのリアル戦略ゲームだと。

あつという間に全滅した空陣営のスクリーンには、LOSEの文字が浮かび、結果が表示される。

佑馬側に☆が一つつき、再び開始までのカウントダウンが始まった。

「……初見殺しも大概にしないと、それは最早ゲームじゃなくなるぜ」

「に、にい……佑馬……前と、は……比べ物、に……ならないほど、強い」

「今のは向こうにとつて最善の策にして必勝の策だ……何か分かったか？ 白」

「……にい、と……変わらない」

「やっぱりそうだよな……クソ」

珍しく空が悪態をついた。

それほどまでに、このゲームは意味が分からないのだ。

さっきの佐馬の速攻で分かったのは、ゲームルールの十六対十六はフェイクだということ、勝利条件には『全滅』も入るということのみだ。

「にい……もう、始まつちやう……っ!!」

「クソツ！巫女さん！早急に今から言うことを『指示書』に書いて出してくれ！」

「仕方がないな。いつでもええよ」

「プラム！お前も頼んだぞ！」

「は、はいいいいい。佐馬様に勝つためにも頑張りますう」

そして、二回戦のゲーム開始まで、後三十秒。

いよいよ空陣営が動き始めた。



最初の奇襲は成功した。

しかし、ここからは完全な読み合いが始まる。

「さて、各々あの二人の罠には細心の注意を払いながら頼む。これからはあんなゴリ押しで行けるほど甘くはなくなるからな」

「もちろんなのですよ。貴女は誰に向かって言っているのですかあ？」

「そうだったら別にいいんだよ、シンク。ただ、手強いぞ？」

「久し振りに楽しめそうな相手ですよお♪さあ、ニーナ。ここに

ある全ての『指示書』を箱に出してくるのですよお」

「はいな……つてなんですかこれ!!? なんですかこれ!!? 拙が埋まるほどの枚数があるんですけども!?!」

ニーナとシンクがどうやらいつも通りなのであろうじやれあいをするなか、興味本意で佑馬は一つの指示書を手に取ってみた。

「……ほお」

その内容には、佑馬が感嘆の息を漏らすまでのものだった。

「これくらい、あの男やあそこにいるお猿さんもやつてのけると思うのですよお」
それを聞いてから、佑馬は元の位置にその一枚を置いた。

そして、第二回戦が今、始まる。

加速する策略

第二ゲームが始まった。

まず動き出したのは、「 」陣営。

獣人種数人ほど操作して、機凱種のところまで移動すると、機凱種一体が佑馬陣営と「 」陣営の間にある海の上で待機を始めた。

そこに向かってくるのは、空間転移している天翼種約五十体。

そして、その機凱種と天翼種が出会い、

……硬直した。

「さすがに気がついたか」

その光景に、さすがは「 」と領きながら言う佑馬。

このゲームのルールは実際に穴だらけだ。

しかし、穴ではない場合もある。

例えば十六対十六未満では、戦闘が発生することはない。

つまり、今回みたいに一体対十六隊では、戦闘が生じることはないのだ。

この選択を取られた場合、二つの選択肢が生まれる。

一つは、戦えないなら、戦わなければいいという選択肢。だが、これは一時的に凌いでいるだけにすぎない。

もう一つは、十六対十六に単位、範囲、場所の指定はないということ、それ即ち。

「まあ、まだ想定内だな」

瞬間、一体の機凱種とその下にいた海棲種が、天撃により消滅した。

二つ目は、範囲が決まっていなければ、勝手に決めてしまえばいいというものだ。

今回の場合、一体の機凱種と下にいた海棲種をまとめて、十六隊対十六隊に勝手にすればいい。

戦争でわざわざ相手にルールを決めさせるような真似をする者はいないのと同じことだ。

佑馬陣営では、先代の英雄たちが的確な指示により、各自の軍事力、防衛力、そして内政と着実にやっていくなか、「陣営から再び機凱種一体が境界の海へとやってきた。」

それにより、再び空間転移で移動してきた天翼種と対峙、天翼種はその機凱種を同じよう殲滅。

そこに間を置かず、機凱種一体を配置した「陣営。」

天翼種がまた同じように処理しようと天撃を構えた瞬間

「アズリール！今すぐ退却させろ！」

佑馬は天翼種を操作しているアズリールの手を止めるように指示した。

「にや!? どうしてにや!」

驚いたように声を上げるアズリールだが、応えはその隣から返ってくる。

「何度も言っていただろう、アズリール。機凱種、それも解析体だぞ? 何か意図があるに決まっているだろう」

「……あれ、解析体だったのにや!？」

応えたのは、ラフィールだ。

「どうやら最初から言っていたようだが、アズリールは無視していたらしい。」

「だから何度も言っていただろう……」

ラフィールは呆れ声でアズリールに言った。

解析体とは、機凱種の中で最も認識性能に特化した機体のことだ。

「うちのトラウマに触れて聞こえなかったにや……」

今回のアズリールは、どうやら本当に落ち込んでいるようだ。

「ラフィール、出来るだけフォローしてやってくれ……」

「ああ、すまない……」

その光景のため息をつきつつ、結局先程と同じように機凱種を処理したアズリールを

ラフィールに任せて、佑馬はジブリールの元へと戻った。

「またあの人ですか……」

疲れて戻ってきた佑馬を心配したジブリールは、同情の意味も込めて言うが、

「今回は仕方ないといえれば仕方ないんだ」

さすがにこれで責められるのは何かと不憫なので、一応アズリールを擁護しておき、ゲームに戻った。



「白、どうだ？」

「ん……いい、感じ」

「そうか……巫女さん、助かった」

「気にせんでええよ。東部連合としてもエルキアが滅ぶんはいろいろ不味いかなあ」

空たちは早急に立てた作戦が成功したことに一息つき、少しのびをした。

「あの……一つ聞いてもいいのですの？」

そこで、ステフが申し訳なきように空に質問した。

「何故機凱種をわざわざあんなどころに送ったんですの？」

「おっと……今回の意図、お前には分からなかったか」

「う………はい………」

空の指摘にさらに申し訳なきようにするステフに、空が応えた。

「今回の作戦の意図は大きくわけて二つある」

「ほうほう」

「まず、一つ目。このゲームのルールが本当に機能しているかどうか。これはしっかりと機能していることが確認出来た」

「なるほど?」

「二つ目は、こちらの戦力の増加だ」

「なるほ……はい?」

一つ目に納得し、二つ目も同じように納得しようとしたところで、ステフは首を傾げた。

「戦力の増加ってどういうことですか?」

数を減らしているのに、戦力は増加しているという矛盾。

ここには、疑問を持たざるを得なかったのだろう。

「まあ、普通なら弱体化になるわな。だけどき、機凱種、それも解析体ならどうだ?」

「……!!相手に攻撃させてその技を機凱種に使わせるということですかね!!」

空たちがやったのは、簡単なことだ。

3, 使える種族同士は友好的であるが、それ以外の種族はどちらにも属さない、『中立

勢力』である。

8、内応、裏切り行為は禁止とする。

つまり、自分達が使えない種族は中立と言っておきながら、陣営内は全員味方なのだ。よつて、自分達が最初から操作できる種族で一番足の速い獣人種で機凱種の元へ向かい、コンタクトを取つて解析体を境界線へと向かわせた。

それにより、攻撃してきた相手の技を解析し、連結体で繋がっている機凱種全機でその技を使えるようにする。

これにより、戦力増加が見込めるのだ。

「このゲームは機凱種がキー種族だからな」

これは、佑馬たちの一回戦目の攻め方からでも分かる。

佑馬たちは、こちらに攻め込んできたときに真っ先に機凱種を滅亡させた。

それは、機凱種が自分達の負ける可能性がもつとも高い種族だからだ。

「とは言つても、海棲種を合計四十五人犠牲にしてしまったがな」

「四十五……?」

ステフは、空の言葉を聞いて目を見開いた。

四十五人犠牲にしたということは、逆をいえば相手がすることを分かっていたから、解析体三体の一体につき十五人、計四十五人を使ったことになる。

つまり、そこまでは空の手の上だったということだ。

「そやけど、一体ずつ、三体でそんなに技を模倣出来るもんなのかえ？」

そこで、再び巫女が話に参加する。

だが、その質問に空と白がお互いを見ながら、笑いあう。

「三体？何のことだ？」

「解析体、全体……使ってるよ？」

そして、二人から出させた答えに、この場にいる全員が目を剥く。

どう見ても、境界線付近には解析体、それどころか機凱種すらないのだ。

「ど、どういうことですか？」

「それは秘密だなー。なあ、プラム？」

突如名指しされた人物に、全員の視線が集まる。

「はい……首尾よくやれましたあ」

ステフの質問に対する答えは、プラムだ。

プラム、つまり、吸血種が機凱種の姿を隠しているのだとステフは解釈する。

「つまり、解析体全機で技を解析しているわけやな？」

「そういうこと。しかし、まだ不安要素がいくつかあつてだな……やはりきたか……」

巫女の言葉に笑顔で頷くも、一転、一気に顔を曇らせた。

「プラム、すまないがまた頼むぞ？相手の森精種と地精種の艦隊が現れた」
「えええ……なんとかしてみますけどお、無理がありますよお……」

その瞬間、解析体と吸血種達がいた大地は灰と化した。



「はーい、いつちよ上がりなのですよお」

「見事だな、シンク」

「もつと褒めるのですよお♪ただあ、あの男も同じ事を考えていたことについてはあ、す
ごくく腹立たしいのですよお」

今回、機凱種を倒したのはシンクとローニだ。

だが、一緒になって倒したのは、本当に偶然。

『女、お前も気がついていたのか』

「当然なのですよお。貴方こそ、気づいていたのですねえ」

『当然だろ？』

会話を交わす度に火花を散らす二人に苦笑しながら、佑馬はスクリーンを見る。

当然、佑馬は気がついていた。

だが、シンクの指令書を見て自分が動くのをやめ、任せただのだ。

(……逃げられたな)

先程と灰と化した大地から、今度は相手のエルキアへと目を移す。

そこにいたのは、機凱種数体と吸血種数人とプラム、そして、エルキアから何かを持って飛び立った天翼種だ。

(……さすがはプラムと言ったところか……こりや一本取られたな)

「一本取られたのなら、取り返せばいいだけのことでございますよ」

急に背後から声をかけられて、一瞬体が硬直した佑馬。

振り返ると、そこにいたのは、ジブリールだった。

「ジブリールも気がついていたのか」

「はい♪ですので、あの二方の尻拭いをして参りました♪」

ニコニコと指差した場所は、相手の機凱種の主力がいた座標だ。

そこが、消し飛んでいた。

「佑馬がくれた佑馬たちの世界の戦争に関する本、生かさせて頂きました」

「……ジブリール。よくやったな!」

佑馬はジブリールの言葉に、自分のプレゼントがしっかりと活用されていることに、笑みを溢しながら嬉しそうにして、ジブリールを労った。

「佑馬のおかげでございます。吸血種と転移をを使って、完全な不意討ち、そして、確認もしつかりして来ましたので、現在生き残っている機凱種はエルキアにいるもののみで

「ぎいます」

機凱種の主力の全滅、それは、相手の詰みを意味する。

「よし、それじゃあ幕引きといこう」

そして再び、佑馬陣営の全勢力が「 「陣営に襲いかかった。」

吸血種の脅威

配置していたはずの機凱種全機が全滅させられたというのは、スクリーンに映し出されているマップですぐに分かった。

そして、一回戦目と同じように大軍勢を率いて「陣営に押し寄せてきた。多国籍軍ならぬ、多種族軍である。」

「ソラー・またきますわよ!?」ここで負けてしまつては後が……というか、勝つてもいけな
いんでしたわ!もうどうすればいいんですのー!!」

「少し落ち着け。大丈夫だ」

一回戦と同じ展開、機凱種が全滅させられ、力で押される。

それを再現するかのように、次々と倒されていく味方にステフの表情が絶望に染ま
つていく。

「やつぱり、無理だったのですわ……いくらソラーたちでも、あそこまで偉人達を揃えられ
ては……」

「今のは聞き捨てならんな。俺たちを誰だと思ってるんだ?」

「……」は……二人で、一人。「」に負け、は……ない……」

空と白は、目を細めてステフを見た。

「——」にとつて、さすがに見逃すことはできなかったのだろう。

だが、いくら空と白が断言しようとして、戦況が変わるわけではない。

既に、味方の七割がやられてしまっているのだ。

「……でも、さすがに潮時かな」

「……!!そんな……!では、やっぱりソラたちでも——」

「そろそろ隠す必要もなくなってきたな? プラム」

「はいいい!では、反撃といきましょう!」

「——え?」

ソラの『潮時』という単語を、二回戦も勝てないから抵抗をやめて諦める、という意味で受け取ったステフ。

だが、その次に聞こえてきたのは、なんと反撃宣言だった。

最早、ステフはこの状況に頭がついていけない。

「本当に首尾よくやってくれたな。それじゃ早速、全ての幻惑を解除してくれ」

「わかりました——!」

空の指示と共に、やたらとテンションが高いプラムは指令書に指示を書いてボックスに投函。

それと共に、ゲーム内のエルキアにいた空、白、ステフ以外の人類種を含む全種族の影とゲーム内の空の背後の影が揺れた。

そして、姿を現したのは、

「機凱種!?!」

いたのは、数人の人類種、プラム、いづな、巫女、いの、ライラ、アミラと数人の吸血種のはずだ。

それが、いつの間にか全員機凱種に変わったのだから、それはステフでなくても驚いてしまうだろう。

「これは一体どういうことですか……?」

「簡単なことだ。最初から機凱種は一機もやられてないってことだよ」

「でも、確かに解析体は地精種と森精種の艦隊に、本隊はジブリールによって壊滅したはずじゃ!」

「あー、つまりだな——」



「つまり、今まで倒していたと思っていた機凱種は全て、他種族だったことだ。プラムに幻惑を見せられていたということだな」

同じ頃、佑馬陣営でも同じような説明が行われていた。

「それは一体、どういうことなのでしょう。例えそうだとしても、佑馬が見逃すはずはないかと」

当然の沸き上がる疑問をジブリールが問う。

「今のプラムは吸血種の力を最大限に発揮できる状態にある。それだけならこの眼が誤魔化されることもないけど……例えば、そこで空の血を吸っていたのだとしたらどうなるか。想像は難しくないはず」

「それはつまり、ソラは自分の身体を犠牲にしてあんなことをしたって言いたいのかしら。だとしたら、それは間違いよ」

佑馬の説明した理論に、聞いていた者はほぼ納得した様子なのだが、ただ一人、文字通り空の全てを知っているクラミーだけが反論をした。

だが、その反論に苦笑する佑馬。

「確かに、吸血種に噛まれたら特殊な病気を発症するため、空自身はやろうとは思わないだろうし、白が絶対に許可しない。だけど、ゲーム内のアバター同士なら、どうだ？」

その言葉に、ハツとするクラミー。

どうやら、話の内容を掴めたようだ。

「アバターは、俺らと同じ力、知能などでできているクローンに近い存在だ。つまり、アバターの空の血をアバターのプラムが吸ったとするなら、現実の空に影響は出ることも

ている。

しかし、空と白の表情はさらに引き締まっていく。

「いや、まだだ。まだ二人……いや、俺達と同じ二人で一人の大戦を終わらせたご先祖様が残っている」

「(く)く……」

佑馬を含めた主戦力は作戦で上手く倒すことが出来たが、佑馬が完全に指示を委任した種族、人類種と機凱種が残っているのだ。

「さて、白。「」からすれば、ある意味ここからが本番だ。心の準備はいいか？」

「わくわく……」

空と白はとても良い笑顔をしていた。

何千年も続いたという大戦を、神霊種^化や幻想種^けや天翼種^物や森精種^どという人類種とは遙かに格上の彼らよりも早く、大戦を終わらせた張本人。

そんな彼らとゲームが出来るといえるのは、空と白にとって願ってもいないことだろう。

「白、死んでも負けられねえな」

「もち………に、となら………地獄、でも………怖く、ない」

それぐらいのつもりで、という意味で言ったのだが、白はそれを大きく上回る気概を

見せて大きく頷いた。

そんな頼りがいのある妹の頭を、空はくしゃくしゃと撫でる。

白も目を瞑って気持ち良さそうにそれを受け入れた。

今、味方陣営の戦力は、人類種と機凱種、少数の天翼種とプラム率いる少数の吸血種、いづな、巫女、いのだ。

対して佑馬陣営は、人類種と機凱種、妖精種と少しの天翼種のみ。

戦力としては、かなり拮抗している状態であるため、完全な采配の勝負となる。

采配によって大戦を終わらせた相手とその采配で勝負。

こんなにもワクワクするゲームは、そうそうあるはずがない。

「さあ、ゲームを始めよう」

人類最強のゲーマー達のゲームが、今始まりを告げた。

動き出す策略

形勢は、見た目では一気に逆転した。

操作しているものがアバターである以上、捨て駒を使える。

つまり、空と白は「 」とステフとプラムのアバター以外、いづな、巫女、いの、ライラ、アミラのアバターを全て捨て駒として使用したのだ。

そして、佑馬陣地の生存アバターはリクとシュヴィの二人のみ。

生存種族も、確認できる限りでは両陣地人類種と機凱種の二種類のみ。

さらには、人類種の数、機凱種の数まで全く同じなのだ。

状況を理解出来たものは、ここで一様に首を捻る。

「佑馬、これは一体どういうことでしょうか？」

「何が？」

「空様達の機凱種は、全攻撃を解析するために解析体ほぼ全機を使ったため、数が少なくなるのは分かります。ですが、何故こちらの機凱種も減っているのでしょうか？」

どう見ても、佑馬陣地の機凱種の数が減っているのだ。

ジブリーはその場の空気を代弁するように佑馬に問い掛け、答えを待っているかのように、その質問の理解者全員の視線が佑馬に集まる。

「もしや、流れ弾に当たったのでは——」

「当たったんじゃないよ。当たりに行ったんだ」

「——え？」

最悪の可能性を危惧したジブリーだったが、まさかの返答に間の抜けた顔になってしまっていた。

他の人も、間の抜けた顔とはいかずとも、理解には至っていない。

「俺も、リクとシュヴィがどうやってその人数を割り出したのか知らないが、空たちが使った解析体と全く同じ数の解析体を犠牲にして、俺たちを倒した魔法を解析、模倣できるようにしたんだと思う。正直なところ、俺も詳しいことは分からないからこれぐらしか言えないけどね」

その発言に、瞬間的に数を数える方法を持っているものはそれを行って状況の確認を始めた。

でてきた結果は、両陣地共に数が同じだと言うこと。

「まあ、一度はこの状況を作るつもりではいたから、手間が省けたとも言えるかもね」

佑馬が見つめる先に、一同もつられるように視線を移した。

そこにいるのは、今話している場所から少し離れた場所で、楽しそうに投函作業を行うリクとシユヴィ。

「この世界を一番願った二人なんだ。せつかくなんだからこの世界を楽しんでもらわな
いとね」

「まさか、佑馬はこうなることが分かって反射を使わなかったのをごさいますか？」

恐らく、機凱種の反撃のことを言っているであろうジブリールだが、その質問には佑馬も苦笑するしかなかった。

「いや、さすがにここまででは分かってないよ。ただ、反射を模倣されたら困るっていうだけだからね」

「そう言っている割にはあ、あまりにも理解が早すぎると思うんですけどお、予想外のことではなかったのですかあ？」

だが、シンの言うとおおり、確かに佑馬の理解速度は早すぎる。

「なんでそう思うんだ？」

「だってえ、私たちには命令してくるのにい、あの二人だけは完全に放置じゃないですかあ？それもお、人類種に機凱種なんか任せちゃってえ」

それが例え、能力が関係しているとしても、だ。

「予想外ではあっても、想定外ではないからね。もしもやられてしまったときの対策ぐ

らい、しつかりとしてある」



「……にいい……これ……どういう、こと?」

「ごめん、それは俺にも分からない」

「どうしたんですの?」

佑馬たちがそんな会話をしている中、「陣営には不可解な事が起きていた。

「なんでもかはわからないが、今までは人類種の伝言を忠実に守ってくれていたのに、いきなり一部の機凱種が動かなくなったんだ」

「それってどういう——」

「……機械、だから……起きる……現象?……命令無視……一部……内応や裏切り、は……禁止……相手の仕業、では……ない……ううん、違う」

ステフの言葉を遮るかのように単語を並べ始めた白。

そして、何かにハツとした。

「……これは、攻撃」

「白も気がついたか。まさかそんなことが出来るなんて知らなかったわ」

「だから、どういうことですか!」

二人で勝手に話を進められるという恒例の行事になりつつあるが、相変わらずの反応

を示すステフ。

そこでステフの背中から、一つの影がでてきた。

「はいはい！それは忙しい二人を代行して、ボクから説明させていただきますーす！」

「ひつぎやああああ?!いきなり後ろから出てこないでくださいな!!」

「……うるさい……しやらつぶ」

「不可抗力ですわああああ!!」

いきなり後ろからプラムに話しかけられたステフは、驚きのあまり大声で叫んでしま
い、白にジト目で注意された。

「では、説明させていただきますーす！」



「どうだ、シュヴィ」

「……ふい」

「さすがだ。よくやった」

作戦が上手くいったことでハイタッチを交わす二人。

二人の顔には、笑顔が浮かんでいた。

他の人には何が起きているのか、検討もついでいない。

だが、何かをして「陣営の『連結体』クラスタ一つを戦闘不能にさせたというのは確か

だ。

「シユヴィ、後二回か三回試してみても貰ってもいいか？」

「……ゲーム……でも……あま、り……やりたく……ない、けど……りよーかい……」

リクの指示で一気に指令書を書き上げていくシユヴィ。

それに合わせて、リクも指令書を次々と書き上げていく。

指令書は、すぐさま投函するもの、投函せずに残しておくものの二種類に分けられているが、何故か投函せずに残してあるものの方が多い。

「……あ……バレ、た……」

「いや、連結体を二つも戦闘不能に出来たのはかなり大きい。よくやってくれた、シユヴィ」

「……ん……もつと、褒める……」

リクの素直な褒め言葉に、顔を赤くしながらもさらに催促をするシユヴィ。

本場に機凱種なのか、と疑うほど、シユヴィの感情表現は豊かだ。

「そうしたいんだが、それはこのゲームに勝ってからだ。それよりも、その指令書全部入れとけよ」

「……むう」

結局追加の褒め言葉を貰えることができず、頬を膨らませて不服とばかりに抗議の眼

を向けるも、それも一瞬。

予め書いてあった指令書の山を投函して再び指令書を書く作業へと戻った。

そんな一連の流れを見て、少し離れた場所では再び議論が始まっていた。

「佑馬、何故空様達の機凱種は動かなくなったのでしょうか」

「機凱種の解析体であるシュヴィだからこそそのやり方だと思っただけ、一応仮説はある。ただ、自信はない」

「ジブリアル。あまり人を頼るのは感心しないな」

「も、申し訳ございません！ラフィール姉様！つい気になってしまいました……」

「まあ、私も皆目検討もついていないし、その仮説とやらも気になってはいるがな。良ければ私にも教えてくれないか？」

ジブリアルに注意をしつつも、ちゃっかり聞こうとしてるあたりラフィールも大概だろう。

「機凱種は連結体と呼ばれる群で行動するのは知っているとと思うけど、相手の連結体には解析体が一体もないんだ。そして、連結体内では全機が感覚を共有している。だから俺は、ウイルス感染じゃないかと思っっている」

「ウイルス感染？ウイルスって何だ？」

「まあ、簡単に言えば、大戦時代に降っていた精霊の死骸にして致死の毒性を持つ『黒灰』こくはい」

に類似したものだ。黒灰自体は機凱種にとつてなんともないが、機凱種の解析体であるシユヴィのことだ。恐らく、対機凱種用の病原体を生成したんだろうな。解析体のシユヴィはそれに対抗する手段を予め作ることが出来るし、連結体でその手段を共有すればこちら側の機凱種には何も害もなくなる毒だが、「側の機凱種からしたら、解析手段もなく、どうしようもない最強の毒となる」

「あのお、少しいいですかあ？」

「なんだ？」

佑馬が説明している途中で、再びシンクが割り込んでくる。

その表情は、納得いかない、といったものだ。

「その毒、どうやって渡すのですかあ？」

「相手側の連結体にその毒に汚染された機凱種を接続させることで渡すことができると思う」

「それえ、不可能ですよねえ」

「どうしてだ？」

「相手の『連合体』と繋がるということはあ、つまりい、一時的とはいえ『裏切り』行為ですよねえ」

シンクは、指令書を使っていろいろな可能性を模索していた。

その結果分かったことは――

8, 内応、裏切り行為は禁止とする。

――このルールは例外なく、絶対であるということ。

例えそれが、演技で一時的に裏切ることだとしてもだ。

「シンク。残念だが、可能なんだ」

「……どういふことですかあ？」

だが、佐馬はそれを否定する。

何事にも、例外は存在するものなのだ。

「今回の場合、『裏切り』ではなく、『攻撃』に部類されるだろう。スパイとは違い、連結体として迎え入れた瞬間に『感染』してしまうからね」

「……確証はあるのですかあ？」

「言っただろ？ 全て仮説に過ぎない。それに、これだと一つ説明がつかないことがある」

「なるほど。それだと、毒と一緒に對抗手段も共有されてしまうな」

「その通り」

ここまで説明してきた佐馬だが、それは全て仮説でしかなく、答えではない。

だが、連結体単位で「陣営の機凱種がやられているのもまた、事実。」

「でも、確実に言えることは――」



「——つまり、分かっているのは『連結体』という機凱種の特性を生かして攻撃を受けているということのみです。だから、空さんと白さんは指令書でこう書いたと思いますよお? 『機凱種へ、新規で連結体に参加しようとするものは入れてはならない』って♪」
「なるほど。分かりませんわ」

佑馬陣営で議論が行われているなか、プラムはステフにだいたいの現状を伝え終わっていた。

勿論、ステフにそれが理解できるはずもない。

「でも、とりあえずは大丈夫ですわよね?」

「恐らくですが、大丈夫だと思われますううう」

だから、空と白は全てを仮定の上で成り立たせなければいけないのだ。

不確定要素ばかりの、この状況を。

それがどれほど難しいことなのかは、考えなくても分かることであり、現に原因不明の事態に陥れられているのも事実。

それを踏まえなかったとしても、「」に、いや、リクとシュヴィ以外の全員が、今回の原因を起こしているものは、理解できないであろう。

何故なら、その毒は人類種から無意識に産み出された猛毒なのだから。

想い

『理屈なんか全部無視して——同じ道を歩いてくれないか。俺の妻として、さ』

今日の前に出された手に、どれほどの”モノ”を貰ったのだろうか。どれほどの可能性を、見出させたのだろうか。どれほどの『既知』を『未知』にさせられたのだろうか。

——エクスマキナ機凱種は、対応する種族。必要とあらば必要なように自己を作り替える。

いつから、そんな機能がついたのだろうか。

そんなことは、今はどうでもいい。

頬を伝った一筋の涙に、シユヴィはようやく理解することができた。

これが、今まで自分が解析しようとしていたもの。

だが、今なら分かる。

”これ”を解析することは『不可能』であったと。

『……リク』

『うん』

『……文字、通り……見た目、通りの……不束モノ——だけど』

『バカな俺には出来すぎた嫁だと思っけどなあ』

何故なら“これ”は理論そのものが通用しないもの。

シユヴィの言葉に苦笑するリクだが、まだ表現の仕方までは分からない“それ”にシユヴィは、うづくまり、濡れた声で——絞り出すように、答えた。

『……ずっと、ずっとずっと——側にいさせて、くだ、さい……』

即ち——『感情』と。



明確に、戦力差が出てしまった。

リクとシユヴィの策略により、「クラスタ」陣営の連結体二つが行動不能。未だに原因は分かっていない。

「まあ、そうなるわな……あの時もそうだったんだろ？」

「……そう」

この場でこれを理解出来ているのは、リクとシュヴィのみ。例え大戦のことを知っていたとしても、この原因不明の出来事を説明出来るほどまで理解することが出来るのは、リクとシュヴィ、原作を知っている佑馬のみだろう。

「こちらの機凱種に”それ”が対応出来たのが時間にして約五分。つまり、ゲーム内では約百日は必要だったってことか」

「……予想、以上」

「ああ。恐らく、”それ”だけ渡されて解析方法や使い道を実際に見せなかったから、それだけ時間が必要になったのかもな」

「……あの時……『番外個体^{サブリアル}』、と……戦って、いた……のも……ある、と……思う」

「なるほどな。まあ、シュヴィが何年も俺と一緒に居て手に入れたものだ。そう簡単に解析出来るわけが——そもそも、解析そのものが出来るわけがないからな」

そう、彼らが渡した猛毒。

それは、『感情』

リクとシュヴィは、開始早々動かなかったのではなく、動けなかったのだ。

シュヴィイがプレイヤーとして存在している以上、機凱種と繋がってしまうのは、必然。そこで開幕から味方の機凱種は、『エラー』を吐き続けた。

本来、こんな戦い方をするつもりなど毛頭なかったのだが、開幕で強制的に繋がってしまうのなら、どうしようもない。

後は、『ゲームだから』と括って『武器』として使うだけだ。一人知ろうが何千人知ろうが、ゲームでは同じことなのだから。

「さてシュヴィイ。連結体二つはここから約四分はまだ足止めされる。ここからが本番だぞ」

「……りよー、かい」



ゲームは正に、熾烈を極めていた。

機凱種の性質を未だによく把握出来てない上に先手を打たれた「陣営。対して、リクとシュヴィイも巧みな」「の指示により、攻めあぐねていた。

しかし、差は着実に開いていく。

「……にいい、次はこれ——！」
「分かった！じゃあ白はこれ頼む！」

指示語のみで行われるやり取りに、誰もが黙って見ることしか出来なかった。

機凱種同士と戦いは、正に泥沼と言つても良い。模倣した技を次々に放ち、さらにそれを模倣して——を繰り返すだけのもの。

そこに、進歩などあるはずもない。

なのに、何故か「陣営よりも、佑馬陣営の方の機凱種の方が毎回の損害が少ない。性能差がないのにも関わらず、だ。

時間で言えば、もう一時間は経つであろう時間。

ゲームないでは、三年以上の時間が経つことになる。

盤面は明らかに佑馬陣営が優勢。戦力差は四倍にまで広がろうとしていた。

だが、不思議なことも起きている。

リクとシュヴィによつて一時行動不能にさせられた二つの連結体は、何故かほぼ無傷に等しい損害しか出していないのだ。

というよりも、その二つしか『連合体』として機能しているものは残っていない。

それに比べて、相手側は八つの『連合体』を所持している。

模倣が模倣を呼ぶこの戦いにおいて、数は必要不可欠な勝利要因だ。即ち、「」の絶望的な状況を意味している。

「白、次の攻撃で恐らく最後だ。俺らに必要なあと一つの手札。ここで見つけられなければ勝ちはないぞ」

「……大丈夫……絶対、に……見つかる」

「白が言うなら、間違いなさそうだな」

「な、何か作戦でもあるのですわよね？大丈夫ですわよね？」

「……ああ」

最早不穏としか言い様が無い会話に、堪らずステフが入り込んでくる。だが、返ってきた返事は、今までに聞いたこと無いほど弱々しかった。

「さしあたって、まずはこれを投函しようか」

「……くくくく」

「えーっと、『全軍がむしやらに攻撃』……って、正気ですのおおおおお!!」

空が差し出した指令書に、ステフは絶叫、巫女やいの、いづな、プラムまでもが驚きながら空たちを見た。

「言っただろ？これは賭けだって」

「……狙う、なら……大穴♪」

ここに来て見せた二人の笑顔に、ステフの背筋に悪寒が走った。分かっていたとはいえ、この二人はこの世界を『ゲーム』と信じて止まない。

「さてさて、吉と出るか凶と出るか♪」

「唯一神、の……言う、通り♪」

このゲームを動かす一手が、今投函された。



「……諦めたのか？」

「……わから、ない……でも……それは、ない」

「だよな……面白いじゃねえか」

「……………」

空たちが指示書を投函してから数秒、異変を感じ取った二人は言葉少なげに確認する。

明らかに、攻撃が適当になった。

佑馬側の連結体にはほとんど攻撃が届いておらず、佑馬陣地の土地、挙げ句の果てには、自陣の土地すら攻撃しているのだから。

動きが読めない。

だからこそ、今まで通りに行くしかない。

狙いが分かるまでは、動けないのだ。

「後、何分だ？」

「……………二分、と……………十二秒、かな？」

「よし、それならこちらも行くとしようか」

「……………わかった」

この会話は、この二人にしか理解ができないもの。

彼らもまた、二人で一人なのだから。

「シユヴィ、”あれ”投函してくれ」

「……うん……した、よ」

「次は”あれ”だ」

「……分かった……三秒、後に……入れる——入れた」

指示語だけで次々と指令書を投函していく二人の顔は、とても笑顔だ。本当に心からゲームを楽しんでいる。

それは、離れてみてもハッキリと分かった。

分かってしまったからこそ、心を痛めている者もいる。

（私も、あの時に今のような『感情』があれば何か変わっていたのかもしれませんが……）

そう、ジブルールだ。

あんなに楽しそうにゲームをしている二人。

その二人を切り離したのは他でもなく、自分なのだから。

今だからこそ、分かってしまう。

本当は、もっと責められるのかと思っていた。

相手は人類種と機凱種。自分よりも格下だ。なのに、喋りかけるのが怖いと思っ
てしまっ
た。

大切な人を失う辛さ。

それを思うだけで、ジブリールに『恐怖』が襲いかかり、身体が震えてすらくる。
ただただ、怖いのだ。

「ジブリール」

「——ッ！」

そして、肩に手を置かれたことにより、ジブリールの思考は現実へと戻ってきた。

「あまり変なことを考えるんじゃないぞ。何かあったら、俺でいいなら力になるから」

「……はい。心配かけて申し訳ありません」

「そうじゃないだろ？」

「……有難う御座います」

「ああ、いつでも頼ってく……」
「……う？どうしました？」

佑馬は、いきなり言葉を切って一点をみていた。

よく見ると、離れてみていた全員の視線が、一斉にある一点を見ている。

何だろうか、とジブリーもその視線の先に目を追いかけていくと——突如佑馬側のエルキア上空に現れた、一体の天翼種から、一筋の光が、即ち、『天撃』がエルキアに撃たれようとしていたところだった。

過去の最強と今の最強

明らかに一瞬の時間。

ここににいる化け物達ですら、視認できた者は少ない。それこそ、できたとしても行動に起こせる者などいるはずもない。そんな一瞬の出来事。

このゲームはとにかく先を正確に読んだ者が制すると言っても過言ではない。だから優秀な人材は何人いても問題ない。それだけ一つのことに集中できるのだから。

だが、読めなければ優秀な人材もただの飾りだ。その壁を壊せるものこそ、「」に對抗するに足る戦力となる。例えば、ルールのおかげで一方的なスナイパーとをして天翼種が撃ち続ける天撃を全て受け流しているリクやシュヴィのように。

「……ジリ貧だな」

「……うん……でも……なんとか、間に合った……」

「でも次来るぞ。このままじゃ時間だけが過ぎていく」

天翼種を攻撃することはルールによりできず、相手はエルキアめがけて攻撃してきて

いるためルールに違反はしていない。「」にとつてはそこが首都なら儲けもの。そうでないにしても相手の意識そちらへ剥けることが出来れば上々。というよりも、既に一つ良い発見があつたため今回の奇襲は現時点でも大成功と言えるだろう。

「なるほど。別の目的を攻撃した結果近くにいた敵に攻撃が当たつた場合でも、ちゃんと攻撃は入るわけか。——これしかないな」

「……隙有りい♪」

遂に見つけた勝ち筋と言わんばかりのニヤツとした表情。流れ弾に偶然当たつた相手の機凱種数体が蒸発したことも大きい。解析体がない今、戦力をほぼ無意識に削つたということになる。しかも天翼種がいるのは何も無い空中。佑馬サイドがその機能を使つてもその天翼種を今は倒すことができない。

通常個体の天翼種のため撃つ回数は決まっているが、それでも天翼種。常識が通じるような威力をしていない。機械種を使って何とか受け流してはいるものの、それでも受け流しきれてはいない。佑馬サイドのエルキアは確実に破壊されていつている。一発撃つのに約二十秒。ゲームの時間に換算すると百六十時間。一週間弱に一度撃ち込んできている計算になる。

そして先ほどの五度目。六度目まではまた二十秒のインターバル。それを理解しているリクとシュヴィは二人して指令書を書き始めた。枚数にして約八枚。リクは持っている四枚をシュヴィに渡し、シュヴィは盤面を見ながら一枚ずつ、時に二枚投函していく。誰もが盤面や二人を注視するなか、ついに二十秒。天翼種の六度目の攻撃が始まる。他の者もそのインターバルに気がついているために視線を向けるが——何も起こらない。

盤面からそこに天翼種がいるのは分かる。だがいつの間にか、そこにもう一体追加されている表示があった。

「……機凱種か」

佑馬がポツリと溢す。天翼種の近くに表示されているのは一体の機凱種。対峙してから両者全く動こうとしない。十六対十六のルールにより戦闘にならないのだ。

リクとシュヴィがこれ一つに時間をかけた理由は簡単。エルキアにいる人類種及び少数の機凱種を離れさせるため。例えば吸血種を使って「サイドが十六以上になつたとしても戦闘にならないようにするための保険。

これでなんとか優勢に何も戻つたと思つた人はかなりいる。だが、流れはまだ「」

サイド。今のを止めたからといって、その流れはやはりというべきか、止まらなかった。

「さて白。何か分からんが連結体が戻ったようだ」

「……流れは……渡さ、ない」

シュヴィによって足止めされていた連合体が復活したのだ。これにより「サイドと佑馬サイドの機凱種の差が縮む。」

——それが何だというのだ。

「シュヴィ。これで向こうが機凱種で俺たちに勝つことは出来なくなったな？」

「……予定、通り」

案の定指示を出したのにあまり動いてくれない機凱種に戸惑う「」。それもそうだろう。渡されたのはシュヴィが培った『感情』だ。そんな機凱種がシュヴィ側を何も思わず攻撃できるだろうか。答えは簡単、否だ。

裏切りや内応は禁止。では攻撃した結果、内応に近いことになってしまったら、どうだろうか。指令書の言うことは聞く。しかし、直接的に指令を受けない機凱種は自分達

で判断して、それを否定することは可能。ルールで味方にすることはできなくても、戦力を削る、場合によっては一部を取り込むこともできるのだ。

「佑馬サイドの機凱種はシュヴィによってほぼ制圧状態にある。シュヴィのアバターに対して機凱種への指令を出せば、そのまま機凱種への指令となる。それらを知ってか知らずか、「」は今までのがむしやらかな攻撃を突如としてやめ、戦力を「」サイドのエルキアへ集中し始めた。

完全なまでのイモだ。

「さてシュヴィ。ここからが本番だ。行けるか？」

「……手強い……けど、リクとなら……いける」

今度はリクとシュヴィがニヤツとしながら盤面を見る。このゲームが終わるまで後六時間弱。佑馬からは「二時間までなら使ってもいい」と言われている。第二回戦も大詰め。幕引きは派手なほど興奮し、記憶に残るものとなる。ならば派手にいこうではないか。最後の思い出は、二人きりで――



「佑馬も洒落たことするのね」

「馬鹿言え。こういうことに限ってはこの世界の誰よりも気が利くぞ」

クラミーの微笑に心外だとばかりに反論する佑馬。他の者は目の前で行われている人類種の知恵の限りを尽くした戦いを注視する者、早くゲームをしたいとウズウズしている者、大戦の英雄に煙たがれるものなどいろいろなのだが、ふと気になった佑馬はアズリールの元へと向かった。

「あれかわすにや!? ひゃー、それすら対処するとはさすがにや〜」

「アズリール。ちよつといいか?」

「んにゃ? どうしたにや佑馬ちゃん」

一人で実況のような感嘆の声を漏らすアズリールは一応近づいてくる気配は分かっていたのか、特に驚いた様子もなく応対した。

「あそこにいる地精種のことなんだが——」

「そういえば、うちはあんな奴知らないにや」

「——ん？」

地精種と同盟を組むために送ったアズリールが知らない。本当に知らないのか、それとも嫌だからあんな奴知らないという感じの奴なのか。

「あ、本当に見たことないにや。誰にや？」

「……全権代理人じゃないのか？」

「なんか、全権代理人には次の召集ゲームには参加しないことを条件に同盟組んで貰ったにや」

見逃せない言葉だった。

アズリールにはこの事を言っていない。つまり向こうが知る余地は無いはずなのだ、それを分かっていたとしか見られない発言。最初のドラウヴニルの発言は第一印象からの失望の念だと分かるが、今の彼は意にも介さないと云ったところ。このゲーム内で一番あの地精霊と一緒にいた彼はとつくに気づいていたのだろう。すると気になるのは本物の全権代理人だ。このゲームを当てるほどのキレ者。八位という序列も

あつて同盟相手とはいえ敵となつた瞬間厄介極まりない。

「それで、その全権代理者はどんな奴なんだ？」

「……分からないにや。着いた瞬間「同盟は組んでやらあ。だが次の召集ゲームには参加しねえ。転生者は俺の仲間だ。力が欲しいときにまた来なあ……」とだけ言われたにや」

「……通りで同盟組んでくるのが早かつたわけだ」

「行くのに手間取つたにや」

「どうやら全権代理者はかなり聡明らしい。同盟を組むにしては弱すぎる条件。そこに効力はない。だが敵意も無いと。しかも異世界人ではなく転生者ときた。能力かそれとも例の発明とやらか。定かではないが敵でない方が有難い種族なのは理解できた。」

「今度会いに行くか」

「それはお任せするにや」

目まぐるしく変化する盤面。完全な防衛に徹した「」は確実に佑馬サイドの戦力

を削っているが、「」の被害も決して少なくない。
まだゲームは始まったばかりなのだから。

激闘の末に

あれからもう一時間以上は経つただろうか。もしかしたらもう約束の二時間にいつているかも知れない。それほど激戦が行われている。戦力差は全く変わらず、お互い数だけが減っていた。そう、戦力差は全く変わっていないのだ。二倍近くの差があったにも関わらず。

「 サイドの機凱種は残り連合体一つに対して佑馬サイドは四つ。同じ機凱種のはずなのに、「 サイドの機凱種が連合体一つで四つ分の働きをしているのだ。」

同能力の状況下において、あまりに不自然な働き。攻めより守りの方が有利とは言いが、ここまで戦力差を覆すのか佑馬ですら冷や汗ものだ。一秒を八時間に凝縮しているため、佑馬も全ての戦況を詳細に知ることは不可能。だが前戦が拮抗しているのは分かる。

しかしそれだけであのリクとシュヴィが負けるなら大戦は終わってなどいなかっただろう。ここで一つ何をしでかすのか、これなら大戦を終わらせられる訳だと他の奴等を納得させる一手。これを佑馬は期待している、いや、やってくれと信じている。その為の二時間なのだから。

しかし、当の本人たちはそんなこと微塵も考えていないだろう。目の前のゲームをただ楽しんでいただけだ。

ただ、こうなることは予想していたとはいえ、ここまで拮抗するのは予定外だった。これにはリクとシュヴィも舌を巻く。

「このまま押しきらせてはくれないか。やはりというべきか、さすがというべきか、とりあえず今の世界にも俺らみたいな奴がいるんだな」

「……リク……嬉しい、の？」

「……まあな。シュヴィは嬉しくないのか？」

「……嬉しい」

ゲームを開始してからずっと笑顔でプレイしている二人。そこには何処か、余裕すら感じさせる。あの「」に対してすら余裕を見せる。それだけでも大戦を終わらせたのは伊達では無いことが伺える。

「だがシュヴィ。そろそろ終わりだ。時間ももう無いしな」

「……後三分」

「じゃあこの指令書を全部投函だ。俺らには成し得なかったこと、魅せて貰おうぜ？」

「……りよー、かい」

リクから渡された指令書を全部投函するシユヴィ。その瞬間、戦況が一変した。

今まで前戦にいたのは機凱種。リクとシユヴィはそこになると、人類種を投入したのだ。

それも生半可な数ではなく、全員。

まさかの行動に誰もが目を剥き、その作戦の効力を知ってさらに目を剥くことになる。「」サイドの機凱種が人類種に被害がある攻撃を否定しているのだ。そのため人類種の近くにいる機凱種は攻撃されず、逆にスナイパーの如く「」サイドの機凱種を倒していく。

勿論人類種がついていない機凱種に対しては攻撃を仕掛けてはいるが、戦力差は再び広がり始めた。たった二つの連合体で八つの連合体相手に現実の時間で六年強。あまりにも長い戦い。それがついに、終止符が打たれようとしている。

「さあ、ここからどうする」

「……魅せて……みるの」

与えられた時間は残り二分。このまま行けばほぼジャストで相手の戦力を削りきれ。天翼種が一体いるため全滅のルールは適用されないが、「サイドを全て焼け野はらにすれば勝ち揺るがない。

残り一分。「サイドの連結体の大半が殲滅された。後退を余儀なくさせられ、さらに全機凱種に人類種がついたため攻撃もできない。既に戦闘状態にあるためエルキアを攻撃する名目で攻撃させることもできない。

後三十秒。機凱種が全滅した。人類種はほっておいてももう害はない。よって指令書に「サイドの全てを焼け野はらにするよう書いて投函しようとしたリクとシユヴィは、次の瞬間に起きた出来事に目を開いた。

——月が、落ちてきたのだ。



二回戦目、ゲーム終了。

月詠種が盤上のご真ん中に月を落としてきたのだ。それにより地上のもの全て破壊

され、左右対称にできている盤面で地上にいた全ての種族は全滅。月を落とした月詠種も全滅。首都破壊のルールは引き分け。つまりエルキアだと断定できた訳になるのだが、佑馬の目の前に表示されるのは「L o s e」の文字。つまり二回戦目は負けたのだ。

「なるほどな。俺らとは違うと言いたいのか」

「……良い、答え」

今回の手。自爆にも近い攻撃をどうやって行ったのか定かではないが、知っていてもリクとシュヴィは使わなかっただろう。彼らは今回、大戦と近いゲームができるように人類種を殺さず、それでいて使うように立ち回っていたのだ。それを全て壊す一撃。それが「」のリクとシュヴィに対する答えだ。

「すまん。負けてしまった」

「……ごめん、ね?」

「謝ってる割には顔が笑ってるな。良い笑顔だぜ」

ものすごく良い笑顔で謝る二人に、佑馬は苦笑。だが負けは負け。これでカウントは

振り出し。しかも残り三戦で残り五時間弱。「」も使い方をだんだんと理解し始めてきたため容易には勝てなくなる。画面には開始まで残り二十秒と表示されている。

「ジブルール」

「何でございますか?」

「今からはシンクとドラウヴニルの行動に気を付けろ。あの二人は今のゲームを見て何か刺激されたみたいだ。場合によっては二人がこの場で衝突することもある。俺は盤面把握をする必要があるから逐一見ていられない。頼めるか?」

「なるほど。お任せください」

リクとシュヴィの戦いを見てスイッチが入ってしまったのか、明らかに二人の目付きが、雰囲気が変わった。ただでさえ仲が悪い二人。特にドラウヴニルとニルヴァレンはその元凶と言えるほどだ。

口では考ええると言ったが、正直なところ絶対に起きると踏んでいる。犬猿の仲にして思考回路が似かよって二人。むしろ何故起こらないと思えるのか。

「アズルール」

「なんだにや？」

次に呼ぶのはアズリール。呼んだ瞬間に転移で目の前に顔を覗かせる彼女。ラフィールも数枚予め指令書を投函してから、転移は使わず指令書を書き込みながら歩いてこちらへと向かってきている。

「確認だ。アズリールの力はこのゲームに適用されているか？」

「……されてないにや。アヴ君がいらないからうちの中のアヴ君もいらしいにや」

「となると、残るのはただのポンコツか……」

「にや!? 聞き捨てならないにや! うちの何処がポンコツだつて言うのにや!」

「落ち着けアズリール。ポンコツではない証拠が今まで何処にあった。お前がポンコツではなくて、一体誰がポンコツだと言うんだ」

佑馬に貶され、ラフィールに止めを刺されたアズリールはガンとでも言いたげな表情で落ち込んでいる。しかも本人にとつても痛いところなのか、反論できていなかった。

「ラフィールちゃんまで酷いじゃ！ 分かったじゃ！ 次のゲームでポンコツじゃないところを証明するじゃ」

「おう。期待してるけど、この調子で証明できるのか？」

気合いは十分。しかし、彼女は一番大事なことを見逃している。

「ゲーム。もう始まつてるぜ？」

今までの会話は残り二十秒で行われるはずがない。当然ゲームはもう始まっている。ラフィールはもう十数枚という指令書を書き終えて時を待ちながらの会話という感じだ。佐馬は指令書を投函しながら、対してアズリールは、まだ何もしていない。

「……じゃ？ あー！ 本当にや！ なんで早く言わないじゃ!？」

「逆になんで早く気がつかないんだ」

「私がこんな指令書を書いている時点で時間の確認くらいはするべきだったな」

うにゃーと言いながら持ち場に走って戻っていくアズリール。今こそ転移を使うべ

きだと思ったのは佑馬だけではない。

やれやれ、という表情をしながら持ち場に戻るために佑馬に背を向けるラフィール。しかし、それは佑馬によって止められてしまった。

「ラフィール」

「ん？ どうした」

「お前さ。大戦のとき、アズリールに——」



「やった、やったですわ！ さすがソラとシロですわ！」

「うるさい。少し黙れ」

「……しゃ、らっぷ」

敗北を覚悟していたステフは、目の前に光る「Win」の文字を見て大はしゃぎ。空と白によってうるさいと言われるまで喜んでいた。そして、ステフを諫めながらも空と白もやりきったという表情でお互いを見つめあっている。

「これが俺たちの答えだ……あんたらとは違い、偉人様は俺らに任せて安心して成仏……いや、俺らに大人しく負けてくれ」

「……なむー」

画面には開始まで残り二十秒と表示されている。本当は一日単位で休憩が欲しいレベルの激戦だったが、ゲームがそうさせてくれない。まだ後二勝もしないといけない。しかも今度はリクとシユヴィに加え、大戦を生き抜いた偉人に佑馬、ジブリアル、アズリール、空の記憶を持ったクラミーにフィールときた。こんな難易度のゲームがでたら即クレームの嵐間違いなしの、「」至上最高難易度のゲーム。

「ほんま、やってくれんなああんたら。巻き込まれるこつちの身にもなってみや」

「ちよーきちくげー、です」

「巫女様を生き返らせてくれた少しはマシなハゲザルと思ってたが、こつちのハゲザルよりももつとクソじやねえかクソがッ！」

「いの方はもうちよつと語彙力というものを持った方がいいと思いますう。クソには同感ですけどお」

それぞれが思い思いの言葉を呟いて、なんだかんだ、次のゲームへと備える。ちなみにライラとアミラだが一心不乱に指令書を書いている。

内容は二人とも違つたようで、ほぼ同じ。

アミラの内容。

『ヤレヤレヤレヤレヤレヤレヤレヤレヤレヤレ』

ライラの内容

『ダーリンを襲え』

海から出られないため害はないが、これが大戦と同じで吸血種の力を借りていたとするなら厄介極まりない。気がついたら喰われてとかシヤレにならない。

そして、第三戦が開始。一斉に指令書を投函していく中、本当に開始の一瞬で、なんの脈柄も無く——元から空と白には見ることはできないが——いきなり赤い月が盤上へと降り注いだ。

天変地異

「おいまで。誰だ月壊したやつ」

開幕壊れた月に、佑馬が少し焦った様子で問いかける。佑馬には詳しい攻撃内容は分からなくとも、こちら側から攻撃があったことは分かっていたため、問いかける。

するとその手は、比較的低めの場所から上がった。

——例の地精種だ。

「地精種にはあの月を壊すことが可能デス。先程の負けがないよう、予め壊しておきマシタ」

「お、おう。そうか……」

この地精種。本格的にダメかもしれない。

ドラウヴニルはもう存在すら認識していないのか完全な無視を、森精種のニルヴァレシ一家は嘲笑を浮かべている。いやまさか、開幕から月を壊してくるとは思わないだろ

う。

月を壊したことによりその破片が隕石として一瞬で盤上全体へと降り注ぎ、対応する間もなく全種族へと甚大な被害を出していく。そこに例の地精種が含まれているのが、なんとも言えないところだろう。

天翼種や巨人種^{ギガント}などの生命ですら負傷は免れない代物。七位以下の生物にとつてこれは天変地異ともいふべき天災。「――」サイドの主要人物で言えばライラ、アミラが。佑馬サイドの主要人物で言えば月を壊すよう指示した地精種と海棲種、獣人種、吸血種の代表者二人だ。海は月の真下に位置していることもあり最大の隕石が落下。蒸発して海棲種は全滅と見て良い状況だった。

そして、異様な光景を見た。

森精種の被害ゼロ。地精種は先程の彼のみ。人類種にいたっては爆心地の近くにすらない。機凱種は数が減ってはいるが、人類種の近くに全連結体が集まっている状態だった。

更に「――」サイド。他の種類が甚大な被害を被っているのにも関わらず、人類種、獣人種、吸血種は完全な無傷。それぞれが隕石の落下地点二つの間に挟まるかのように固まっている。

佑馬はまたしても冷や汗をかくことになった。

佑馬サイドの人間があれを回避するのはまだ分かる。魔法や実際にリアルでの動きを観察しておけば、対処は出来るのだから。そして「」が月の破壊を察知することも理解はできる。だがどうやってその安置を割り出したのか。人類種を移動させるのは秒単位とはいえ時間がかかる。開始直後のそれを回避したということは、始まる前から移動させていたということになる。つまりこの出来事を察知したことに加え、恐らく白がどの位置にどの威力で攻撃し、どのように被害が及ぶのかを開始前に計算したということだ。

しかも三種族分。寸分違わず。

佑馬がこの二十秒でそれをやれと言われたところで、百パーセント出来ないと言われる。いくら白が天才で、それこそ佑馬より優れた頭脳を持つていようと、二十秒でその計算を行い指令書を書いて投函、移動させるまでの時間は絶対でない。

それを可能にしたということは、信じがたいことだが、こうなることを予め察知し、リクとシュヴィとのあの激闘を繰り広げながらも同時進行で計算していたということに——いや、もつと前からかもしれない。

佑馬は「」の本気をしつかりと見極めていたつもりだった。獣人種戦の時、それを確認したつもりだった。あの時の「」は間違いなく本気だった。だが最悪の可能性として、あの時のゲームの本気とこのゲームでの本気では、そもそのジャンルが違

うという点だ。

あのゲーム単体で「」の本気を推し測ったこと。それが今後どのような影響を与えるのか想像もつかない。

「いや、参ったねこれは」

思わず呟いてしまった。それくらいには誤算だったということだ。だが佑馬は今、一人ではない。一時的とは言え、信頼に足るとは到底言えない人物たちではあるが、「」を倒すという意志を持った仲間がいる。そしてこの中で最優先で信じられる、ジブルール。

「どうかしましたか、佑馬？」

「いや、「」の力読み違いちゃったなーってさ。ちよつと自分のアホな行動を思い返してたところ」

「……アホかどうかは分かりませんが、その時最善だと思つたのなら良いのではありませんか？ 本当の未来など誰も分かるものではありませんから——例の地精種もソラ様、シロ様、そして佑馬も。誰も例外無く、でございます」

の中でも約二名の視線が、佑馬へと強く突き刺さった。

現在前線を保っているのは森精種、地精種の二種族だ。巨人種や龍精種は通常ドラゴニアの個体しかいないらしく、まずコンタクトそのものが取れないため両者ともに盤上両端にて待機している。だが待機しているだけではなく、一応敵が近づいたら攻撃はしてくれるため実質正面突破しかないのが両者の現状だ。先程は機凱種が異常なまでの力を持ってしまったためにあまり役に立ってはなかったが、いざ拮抗してみると鉄壁の守りになる。

機凱種で彼等の魔法を模倣することも可能だが、それに使用していざという時になったら使えないと困る、という訳で「――」サイドは現在様子を窺っており、リクとシユヴィは常に何かをしているためにそちらに回す余裕はないのか、それともまたシユヴィの『感情』のインストールが終わってないのか、恐らく後者だろうが機凱種を動かそうとしない。

フィールは「動きが悪い犬ところですね」と呟いているあたり、獣人種の活用を見出だしていないようだ。クラミーも顎に手を当てて考え込んでいる。後特筆すべきは、先ほど強く視線を突き刺してきた二人――シンクとドラウヴニルの雰囲気と同時に変わったことだろうか。

例え「――」の本気を読み間違えたとしても、それはこの世界に来たときから付き合っ

ていた佐馬に限る話。大戦時の英雄達は過去に痛い目を見ていることから、過剰評価過剰警戒上等と言ったところだ。つまり、佐馬が何かやるよりも任せた方が良い。

佐馬が前線にいた理由は前線を保つこと以外に、もう一つ。こっちが最重要な理由だ。則ちシンクとドラウヴニルへの牽制である。彼等は佐馬の力を多少とはいえ見ているため、またあの天翼種を倒しているという情報から迂闊に行動出来ないと分かっている。佐馬もそれを分かっていたためにいたのだが、それが後ろへ引いた。二人の視線が、佐馬を捉えた。前線には森精種と地精種のみ。何が起こるかなど、明白だった。

次の瞬間、味方であるにも関わらず、佐馬サイドの森精種と地精種から全力の魔法が飛び交った。



「……………何やってんだあつちは」

「……………内戦？」

一方の「」サイドはいきなり始まった佐馬サイドの内戦に少なくない困惑を見せている。罨なのかそれとも本当に揉めているのか、少なくともルールの穴まで使つての

内戦に意図を探るのは必然だ。

「でも、本気でやってるようには見えないうな」

「……間違い、なく……本気」

全力の嘘か全力の内戦か。迷ってる暇はないが読み間違える余裕もない。あれが長引くのは「」サイドとしても不味いのだ。

さつきから流れ弾で結構やられている。

一応巫女達が指示して離れているとはいえ、その火力は冗談でも笑えない。罫として止めにいくのか、内戦として隙を突きにいくのか。行動は同じでも意味合い、今後に与える影響は全く違う。

「いづな、プラム、巫女さん。頼めるか？」

「気は進まねえ、です。でも勝つためなら、がってん、です」

「まあ、ゲームじゃなかったら首跳んでたことだけ承知しといてなあ？」

「仕方ないことですけどお、ソラさん僕の扱い酷くないですかあ？」

「それだけ優秀だってことだ。認めてるんだから喜んで働いてくれ」

「僕を顎で使ったことお、高くつきますからねえ？」

そして「」 サイドは、いづな、プラム、巫女という異色のコンビが、その内戦に足を踏み込もうとしていた。

交わる策略

何かを実行するとき、何かを制限するとき、何事においても限度というものが存在する。その限度を超えると起きるのは、崩壊、自滅、そして破滅。

しかし目の前の光景を見るに、その限度が無いのではないかと思ってしまう。シンク、ローニ共に投函の手を止めることは無く、寧ろ投函に魔法を行使してまでの正真正銘全力で潰しあっている。

「全力でやるのは良いけどちよつとは戦況を、特に「……」の動きも見ててくれよ」「はあい。戦況を見て考えたのですがあ、やっぱりあの男を始末するのが最優先だという結論に至ったわけなのですよお——あ、ニーナその指示書は少し待ってください」「は、はいな。では此方を入れますね」

少し語弊があった。

投函しているのはあくまでニーナであり、シンクは始めに座った場所から一切動くことはなく投函書を書いているだけ。これが二人のいつも通りだったのだろう。そこに

違和感は全くない——ニーナの男としての尊厳も全くないのはご愛嬌だろう。

シンクがこれならローニも全く同じ理由だろう。二人は信じたくないことだろうが、二人の思考回路は非常に似通っているのだ。

そして佑馬はこの争いを止める気はない。

この争いは全力ではやっているのだが、あくまでも誘い出しを目的としている。そして佑馬が止めるべきは、隙を晒して誘い出したと勘違いしてハメられる可能性。普通の獣人種や吸血種等が相手などであれば方が一にも遅れを取ることはない。

だが相手はあの「」であり、その下にいるのは大戦時代の獣人種以上の力を内包した巫女、同等の力を持っているであろういづな。未だに様々な分野で伸び代があるステフ。そして何よりシンクとローニはその三人——特に巫女といづな——の存在や可能性を知らないことは問題だ。

だがそんなことよりも危険視していることがある。全体的に見れば「」という脅威に次ぐ二番目の、局所的に見れば一番脅威になりうる存在。

「それにしても良く消えるよ。毎秒八時間というのは失敗だったな」

佑馬の目は恐らくこの中の誰よりも異常を察知できる。それほど使いこなせている

し、その自負もある。だが空の血を採取したプラムは、アヴァントヘイムの力を内包したアズリールをすら欺くことができる大戦時以上の力を発揮する。毎秒八時間が過ぎるその世界において、プラムの存在は脅威そのものだ。

その隠密能力は、指令書込みとはいえ佑馬が張り付かなければ見失うほど。これだけの隠密能力があれば、あえて作った隙が本物の隙となつて佑馬達を襲う。懐にまで入つてしまえば、獣人種に叶う生物はいないのだから。

加えてプラムも「」に劣らない実力を持つている。その両者が今は手を取り合つて挑んできているのだ。何度か見失いかけていたということは、佑馬の能力が遥かに高いというだけであり、采配勝負は佑馬が一步二歩遅れをとつていると言つても過言ではない。

「本当はこつちに構つている暇ないんだけどなあ……」

相手にとって一番の脅威となつてい存在は戦況を一気に変えることが出来る機凱種、ではなく間違ひなく佑馬だろう。佑馬という神出鬼没の個の勢力に対して抑止力となるのは機凱種のみ。機凱種はこのゲームのキーカードというのは共通認識のためそこでカードを使つているのはなんともやりにくい状態なのだ。

そして佐馬自身も抑止力という自負はある。あるからこそ、佐馬にしか対応できない状況を作り上げられたことに顔を歪ませている。

「ジブリール、悪いけどアズリールやラフィールと一緒に相手の機凱種を牽制して欲しい。天撃の一発ぐらいは模倣されたとしても仕方ないけど、転移だけは絶対にダメだ」

「了解しました」

そしてシンクとローニは絶賛潰し合いの中で、地精種は存在が概念である故に不活性化している神霊種の核となる存在、『神髓』を起爆させる秘密兵器、『アーカ・シ・アンセ髓爆』を。森精種は幻想種を自壊させ兵器にする霊壊術式、『虚空第零加護』を。お互いがお互いを完全に、いや他種族までも滅ぼすであろう兵器まで使おうとしている始末だ。

リクとシユビィはまだ何か企んでいるため下手に仕事は与えられない。そうなると抑止力として使えるのは天翼種のみ、というよりも天翼種が一番妥当だろう。

ジブリールは軽く頭を下げるとラフィールとアズリールのいる元へと向かい、その指示を伝える。天翼種は外部から確実に敵勢力を減らす役割を担っていたが、この際は仕方がない。

天翼種が一瞬で定位置に着いたのを確認し、絶対に見失わないように細心の注意を払いながらも戦況の確認を行う。

両者の戦力差、特に個人的な能力差は圧倒的に佐馬側に軍配が上がっている。ただそれだけだ。

個人的な能力など優秀な戦術、機凱種の存在により一網打尽にされる。勿論個人的な能力が高いに越したことはないが、それも使い方によるというだけだ。

特に前述の通り佐馬の能力は非常に強力で例え一人でも生命を含み何種族も相手に出来るものだが、機凱種に取られた場合敗色が濃厚となる。それに加えて機凱種という存在故に「――」側の戦力が低いことが逆にネックとなる。総合戦力でいえば個人的な能力差等簡単にひっくり返されてしまうのだ。

だから佐馬達は種の数で押すしかない。開幕総攻撃は「――」に対しての宣戦布告というだけでなく、そうしないと勝てないからなのだ。

恐らく、ここにいるほとんどの者がそれを感じている。だからそれを理解させられた三回戦目、お互いが奇策を使うようになるのは必然と言うべきだ。

こちらの奇策は恐らく本気九割の森精種と地精種の全面戦争。あちらの奇策は獣人種と吸血種のとった二種族で佐馬を抑え込む。

どちらも奇策として成り立っているが、両者完全に成功しているとはいえない。

「リク、シュビィ。上手く行けそうか？」

「完璧に、とは行かなそうだけどな」

「あのととき、よりは……上手く、行くよ？」

「ああ、そうだな。だから安心して追いかけてくれ」

「そいつは重畳だ」

主語はない。だが三者三様理解が及んでいることは明白だった。

森精種と地精種の戦争の被害は決して少なくはない。特に生物と定義される種族のほとんどは巻き込まれたら最後、再興不可能な程の甚大な被害を被ることとなる。

そして実際ほとんどの種族が被害を被っている中、未だ人類種の被害はゼロ。完全に雲隠れしており、可視化できる状態でなければ味方ですらその位置を把握するのは不可能だと言いきれるほどに死角という死角を突いている。相手からしたら厄介極まりない。

だが確実に崩れていく均衡状態。崩すなら自分のタイミングだ。

さらさらと何かを指令書に書き込んでいく佑馬。佑馬としても確証はない。だが吸血種、獣人種がやれる攪乱は一つしかない。となれば、やることは一つだろう。

非常に曖昧な指令書だが、与えられた能力自体はしっかりと評価している佐馬。その能力もゲームのNPCとなれば、もしかしたら自分よりも十全に扱ってくれるのかもしれない。

本当なら明確に指令書を書いた方が良い。NPCがどこまで設定されているのか、どこまで力を扱えるのかが明確化されていないため、この指令は運が絡んでくる。だが明確な指令を出すよりはまだ期待値は高い。

一旦静かに目を瞑る。

崩すのは自分のタイミングとは言ったものの、そのタイミングは現在「」が握っている。いや、握らせている。

均衡状態を崩す。佐馬が行動に移す前に「」が、「」が行動に移すよりも前にシンクとロー二が行動に移している。行動を移し成功している者が主導権を握るこの戦いは、次が最後の主導権争いだ。

ここで「」に勝てる未来が潰れる可能性だけである。

その緊張を押しつぶす為に行った、一つの深呼吸。他の人にバレないよう最低限に行った動作だったが、どうやらそうもいかなかったようだ。

隣にスッと近づくと気配に、佐馬は閉じていた目を開ける。

「私に佑馬の考えていることは恥ずかしながら理解できません。しかし、それが正しいと佑馬が信じたのなら、私はどのような結果になったとしてもそれを受け入れます」

「……ありがとう」

こういう時に隣に寄ってくれるのは非常に嬉しいし心強い。そういう人間臭いところが安心出来る。

ジブリールの掛けてくれた言葉をしっかりと受け取った佑馬は、森精種と地精種の争いに近づいていく吸血種と獣人種を見据える。

タイミングは一瞬。魔法を使えば誤差が生じていることは察知される。

点滅する二つの種族と争いを続ける二つの種族。お互いが混じった瞬間に投函された指令書。

その瞬間、盤面にはかつてない程の静寂が訪れた。